大正十三年二月出版

續羣書類從

第拾五輯下

東京

續群書類從完成會

續群書類從第拾五輯目次　下

和歌部

續群書類從卷第四百十六

總檢校保己一集
男源忠寶校

和歌部五十一

歌合

兵部少輔中原遠忠

一番

左　立春

春のくろ今朝の山かせ吹くもり雪も霞も〔と歟〕なれる空哉

雪もかすみとなれる詞つゝき。其心もをかしくみえ侍り。

右勝　初春

いとはやもふるの神杉雪消て霞木たかき春の色かな

これも下の句神妙。

左歌。春のしるしにけさふく山かせも。うちゝる雪も。やかて霞にたなひかれ侍らむ空のけしき。とはりかなひてきこえ侍も。第三の句こそ秀歌なとにはみなれぬこゝちし侍れ。右歌。すかた詞いひしりて下の句なと殊よろしと申へし。さいわひに自歌をつかはれ侍り。株をまもるへきにあらす。勝と申侍らむはいかゝ。

左勝　早春水

いつしかと音たて初てけさはゝや河浪さそふ水の春かせ

河波となくて。たゝなみをさそふ水の春かせとそあらまほしくおほえ候。

右　山早春

月にかけ花に色かも春は先かすむそなかめ四方の山のは

春宵一刻千金の語より霞のあはれを詠し出されたる景氣優美候。但なかめといふと。別にあるやうには不可詠之由先達申と歟。此なかめ猶思ふへくやと覺候如何。

左右ともに難なくけみえ侍るを。右の第二第三句のうつ

り。いさゝかおもひたきやうに見たまふれは。左を勝とすへし。

三番

左勝　山霞

春のくるしの杉のあさかすみ誰かはとはむ三輪の山本

首尾相應して見え候歟。

右　春歌の中に

ゆふつくひさすかに春の色なからまた雪ふかし岡のへの松

いひしりて見え候。

左のあさのかすみ。右の夕つくひ。とり〳〵にいひなかされて艷にきこえ侍を。たれかはとはむといへる。なを心こもりておほえ侍れは。あさかすみたちまさり侍らん歟。

四番

左持　朝鶯

さゝ竹のねくらやさむき朝霜の日かけにきえて鶯そ鳴

日かけにきえて鶯そなく。心はさそと推量候へとも。ねくらやさむきといふにをきては。日かけ待出てなと候は。うちむきてとはり聞え候へき歟。無下の非作者の申狀候歟如何。

右　夕鶯

雨すさむふしみの里のくれ竹にねくらさたむる鶯の聲

夕の躰見るやうにて其興候哉。

日かけにきえてといひ。ねくらさたむるといへる。いつれとなく心あるさまにみえ侍り。可爲持。

五番

左持　山霞

富士のねの煙も雪も春はたゝ霞にきゆるみほの松原

右　同

ふしのねも今朝はかすみのから衣すそのゝ雪に春かせそ吹

兩首富士。執々おもしろく候。

兩首。士峯の遠望。殘雪の風景。强無勝劣乎。

六番

左　餘寒

冴かへるあなしの川のあさ霧にひはらもくもる水の春かせ

下の句いひなかしてよくきこえ候哉。

右勝　梅

梅花難波のうらの蘆つゝの一重もあたのにほひならすや

ひとへの梅をよめるにや。おもひいれたる景色も侍り。

左。餘寒にやかてさえかへるとをけるや。つれの歌合例にとりては四四四とも申へき。右勝侍らむ歟。

七番

左　泊瀬山

むめ咲て月は色かにこもり江のはつせの外に春やなからむ

月は色かにこもり江のはつせの山のさま。貫之か花そむかしのと詠けん。古郷の春の色も思やられて興盛不淺候。

右勝 春曉月

春の夜のかすめる空もみるまゝにあかつき深くすめる月哉

これ又神妙々々。

左。月はいろかにこもり江のといひて。はつせの外に春やなからむと侍る。尤よろしくみえ侍るを。右。又終夜月をなかめあかせる景氣。あはれすてかたく侍れは。左の題の文し一みえ侍らぬをとかにて。右の勝とそさため侍る。

八番

左 柳

春風に岸の柳も水鳥のあしのいとなくなひくかけ哉

美麗歟。

右勝 尋花

咲花をそことをしへて尋行まほろしもかな春の山ふみ

源氏物語の歌の詞。此花のありかにおもひよそへられぬる。尤幽玄候。

左。たくみなる姿に見え侍を。第四句本歌に一字たかひてそのまゝいへるやうに聞えす。第五句にうつる處もすこしかしかましきやうにおほえ侍るはいかゝ。右。まことにいかなる幻術もあらまほしく。方士の功勞こひねかはれたるこゝろさも侍らむ。

九番

左 春の歌の中に

又やみむ春は有とも明ほのゝ花にかすめる山のはの月

此五もし。かたのゝみのゝさくらかり。無比類秀逸にて。其後はたゝ人不詠之様に候歟。但いひかなへん にをきては不能左右事也。是はその次に申出計。大かたは無子細候歟。

右 同

雉たつかた野のみのゝかり衣かすみにすれる花のそてかな

かすみにすれる花のそて。結構に見え候哉。

左。春の明ほのゝ感を花にそへていひたてられたるに。この初句ををかれ侍るに。しかも此番の歌にひかれて。花の雪ちるのおもかけふと思ひ出られて。猶掛酌有へきかとそ覺侍る。あひたかひに稽古のため。かやうのとまて申侍り。はゝかりおほくこそ。右は下句めつらしく。豪遊の有さまもみるこゝろし侍れは。勝とすへきにや。

十番

左 歸鴈

古郷にきつゝかへれと錦にもあらぬかすみのころもかりかね

かすみの衣かりかね。此ころあまりにおほくめなれ候哉
如何。

右勝　山里にて雨ふる日花を見て

つく／＼とひとりみ山の春の雨にさひしく匂ふ花の夕かけ

山居雨中の花の陰みる心ちし候。

右又優美に侍り。

十一番

左勝

わたの原八十島かけて咲花とみえしは雲か浪かあらぬか

長高躰にてことに其感候哉。

右　雲雀

夕ひはり立空みれは風の上にありかさためぬ塵の身やこれ

本歌をかしくとりなされ候。尤可然候。

右。古歌をおもひて一ふしいひかなへられて侍るを。猶俗にちかしとや申へからむ。左は結句なといひすてられたる字もおかしく見え侍り。勝とす。

十二番

左持　藤

咲かゝる藤の鳥居の立羽にもめくみをそたのむ行すゑの春

慶賀門の祝詞。神感無疑候。

右　暮春鶯

鶯のなく音やうき暮かたに春の日かすをうちかそへつゝ

春の日数をうちかそへつゝ。餘情無限候哉。

左。諸人渇仰の事なれは勝負を論るにをよはす。

十三番

左　首夏更衣

心なくかへつとみるもさくらあさの名はむつましき賤の衣手

さくらあさの衣手。あかて別し花の名なれはといへるも。おもひよそへられて。あはれに見え候。

右　郭公

思ひねに聞しはつ音をうつゝまてしたふ夢ちのさよ郭公

さ夜時鳥。さもこそなから。山郭公なといひならはしたるにはをとりてきこえ候歟。

左。其興ありてきこゆ。右。第五句さゝへてきこゆ。

十四番

左　郭公幽

むら雨のはれゆく末の一聲は月おちかゝるやまほとゝきす

景氣ありてみえ候哉。

右勝　菖蒲

道しあらはよもきか島のあやめをもけふこそからめ萬世の宿

五月之節。萬歳之家。對菖蒲憶蓬萊のこゝろたくみに覺候。

左。むらさめの餘波なく晴て。斜月の山のはをてらし侍らむほと。一聲山鳥曙雲外にきこえむは。たくひなくさたかにこそ侍らめ。閑なるかたへとりなされたるはおほつかなくや。又第四第五句のつゝきも。いかにそや聞え侍り。
右。今日の軒の菖蒲に仙宮の萬歳をかりもちゐて。祝詞をのへられたる心。宜しかるへくこそみ給ふれ。仍可爲勝。

十五番

左勝　五月雨

さらてたに暮かたき日を夏引のいとしも長き五月雨の空

心とはいひしりて。とはり叶候歟。

右　夏月

春秋のなかめ忘て松かけや夏の濱邊に住よしの月

この歌。第二句なかめ忘てと候。なかめ猶いかゝと存るところ候如何。

左歌。とゝこほる處なくいひくたされて。尤よろしと申へし。

十六番

左持　夕顔

夕かほの花の軒はのうす煙かすみにもれし月のかけ哉

是又めつらしき趣向候。

右　夏風

夏の日もうす雪しろし山颪のうら吹かへすそはの椎柴

見躰候。

右歌興ありて見ゆ。

十七番

左　松浦山

秋風を西にまつらの山かけてゆふ日涼しきおきつしら波

たけありて優美候。

右　初秋

うき身世の秋をしれとや夕露の草木にもあらぬ袖に置らん

うるはしくよろしく候。

左。納涼の遠景おもかけ侍り。右。心とはこまやかに侍るを。秋をしれとやといへるはかりにて。初の心今すこしかすかにや侍らむ。これはすへてのことに侍り。いかさま等閑にや。

十八番

左持　初秋曉露

我袖そあかつきふかき草の戸の明ぬに露や秋をつくらむ

この明ぬは草の戸の明ぬ心候歟。上下のおちつきところすこし患候。一分別せぬやうに僻案の疑候。

右　早秋露

風もまた吹あへぬ秋の夕よりむくらに深き宿のしら露

ことよろしく候。

左右とも歌いとよろしく。心詞又おなし程に侍り。

十九番

左　七夕

ほし合の數にしとらは天河眞砂もつきし久かたの空

つきしといへる。かやうにてもさもこそ候はめ。思存十分にも覺候はね眞砂もいかゝなとおほめかしくては。いかゝ候へき哉らむ。

右　秋歌の中に

さびしさを入あひのかねのうちそへて尾上の松に秋風そ吹

入逢のかね〔ろ缺〕のうちそへてと侍る。いとよろしくや。下句松はとありへくや。

廿番

左　萩露

宮城のゝ秋のけしきそしられける露ふかき庭の眞萩に

西行法師秋かせ立ぬ宮城のゝはらもおもひよそへられてをかしくて候。

右　鹿交萩

秋深くうつろふ露に鳴野への鹿の上毛も萩か花すり

下句作者の粉骨とみえ候哉。

左右さしたる淺深なき歟。

廿一番

左　野外虫

むさし野や音を鳴むしの數〳〵に秋の思ひのはてもしられす

右　古郷露

稲にたに露のふる道はらひきて誰かはとはむよもきふの宿

古郷の夜寒猶多端候。

又可爲持。

廿二番

左　初雁

ね覺つゝみれはあらしの行末にかりかねさむし嶺のよこ雲

右　同

月にきて我うらみこそ晴にけれ花を見すてし鴈のつらさも

雨音又珍重。

左。景氣はかりにて思ひ入たる所なきやうにみえ侍れは。右を勝とすへし。

廿三番

左　月前露

もらさすも秋の千くさの末の露もとめて月のかけそやとれる

共興候。

右　鹿

目覺する枕にとをきしかの音に心をさそふ庭の松かせ

こゝろふかく詞艶に候歟。
左歌。おかしくみえ侍を。するの露もとめてとは。此類あるやうに侍り。かやうのことはすこしのこともさるへきにや。右。心をさそふなと。おもへる處あるににたり。可爲勝。

廿四番

左　秋夕

ゆふされは萩のはそよく秋かせに露よりもろき我なみた哉

右勝　月前風

月さゆる山の秋かせ松ふけは雪にしくれのふるかとそ聞

風情離凡俗之境候歟。

右。下句めつらしきにや。爲勝。

廿五番

左　名所月

かくらくのはつせの山にすむ月に花も紅葉も誰かしのはん

右　同

しら雲のよそにもみえぬ秋かせに月のみかゝるかつらきの山

左。はつせの山にすむ月に花も紅葉もたれかしのはむといへる。おかしからさるにあらす。右。しら雲のよそにもみえぬといひて。月のみかゝるかつらきの山と侍る。餘情かきりなく。數々吟味し侍れは。もとより口にある秀歌なとのやうに侍るは。もし同類なとのあるにやとまてそおほえ侍る。いかさま勝へきにこそ。

廿六番

左　翫月

くまもなくなかめし人の心まてこよひ千里の月にみえつゝ

二千里外故人心なとを思へる歟。

右勝　月

なかめつゝ思ひつきせぬ秋の夜にひとりはれ行月のかけかな

右又きさると申へし。

廿七番

左持　月

詠るにこゝろのくまそなかりける憂身忘し秋のよの月

右　秋夕

身のうへにわきて思ひはなけれともなくてうき世の秋の夕暮

左は月に對して思ひをのへ。右は夕にむかへて浮世を觀念せり。同科と申へきにや。

廿八番

左　遠擣衣

あらし吹とを里をのゝ月かけも有明さむみ衣うつこゑ

右　秋歌の中に

秋されは夢ちはるかに成そ行月にねぬ夜のかすや積れる

五もし秋されとなくとも候歟。何とも猶優美の詞あるへく候。

右を勝とす。

廿九番

左　月の歌の中に

有明の月のかけふく山風に千里まてしく秋のしら雪

右　秋情

なれみても言のは草の露はかりいひしるへくもあらぬ月哉

なれみてもといへる。心ゆかぬにや。左を可爲勝。

卅番

左勝　秋夜

身の上を思ふに秋のなかきよも志らてふけぬる鐘の聲哉

うちむきてありくと。歌はかやうにこそあらまほしきことにて候へ。

右　暮秋虫

むしの音に霜はをかしを秋の野の草葉とゝもになと枯ぬらん

いひしりてよろしく候。

左。秋の夜はなかきをかこつたくひにのみよみならはし侍るに。身のうへ思ふにおほえすふけはてゝ。すてに曉鐘にいたりてきゝおとろき侍る心。あはれあさからすこそ。

卅一番

左　暮秋露

殘れ猶よもの木の葉は散ぬとも秋のかたみの袖の夕露

秋をしたへるこゝろ又あさからすこそ。

右　時雨

この比はくもりみはれみ世中に空も隙なくふる時雨かな

別のこともなくみえ候。

左。難なく見え侍れと耳なれたるとにや。右　空もいまなくといへる。誠にこの比世波をたやかならす。都鄙上下聴走したるありさまも思ひよそへられ侍り。勝へきにや。

卅二番

左勝　落葉

山姫のおちは衣を吹かへしすそ野に殘る木からしの風

木からし風はうちまかせては制するやうに候歟。但依事候哉。

右　冬月

冬の夜におき出てみれは草も木も霜かれわたる月のかけ哉

落葉衣。霜夜の月。ともに色なしとても。すてかたくや侍らん。

卅三番

左　寒夜月

山風に光さし入柴の戸を明かたにみる冬のよの月

寒夜の月の景氣。何も心ある人のさまやさしくみえ候。

右勝　住吉浦

からす鳴千木のかたそき雪寒て氷に落る住の江の月

神の社のさまさひて。見所おほき月にて候。

左右ともにおもへる所有。右。なを面かけうかふ心ちし侍

れは勝とす。

卌四番

左持　朝雪

さゝあかす伏見の里の朝戸出にけさ雪ふかしをはつせの山

當國の名所。眼前の風骨を心（取イ）得候哉。

右　暮山雪

なかめきてさひしさ積る山のはの夕の雲に雪はふりつゝ

下句又始艷候。

兩首朝夕の雪の眺望。いつれとわきかたく侍り。ともにす

かた言葉よろしくこそみ給ふれ。

卌五番

左　雪の歌の中に

あらし吹林にさはく鳥の音も雪にしつまるゆふくれの空

雪の夕の林のかけ見るやうに候。

右　氷

岩ほしく瀧のしら浪音絶て氷のうへにおつる山かせ

瀧の波をとたえて。山かせおつる氷のうへ。よくいひなさ

れ候。又持とす。

卌六番

左　河千鳥

ほともなく冬の日うつる河浪に夜寒やおもふ鳴千とり哉

夜寒といふは。秋のうちさむく成やうの比を。つねにはい

ひならはし候歟。此歌のしたてには。猶ふかく寒威もある

やうに詠たくやと愚存候。これは強たる申事候。

右　春戀

うつり行人の心の花の色をなきてとゝめようくひすのこゑ

古今集の人のかの花とちりなはといへるを思へる物か

ら。なきてとゝめよといひなされたる。ことに心有てみゆ。

左。夜さむや思なく千鳥かなといへる。下句よろしきに

や。右。なきてとゝめようくひすの聲と侍る。われ鶯にお

とらましやはといへる。古今の歌もおもひ出られて。まさ

ると申へし。

卌七番

左持　不逢戀

消したゝ生田の河のとり／＼にあはて沈める世かたりはうし

生田の池の。いひふりにたるとなから。とり／＼にをかれ

たる作者の所意めつらし〳〵そ。

右　見増戀

面かけは身に立そひてます鏡なみたなからもいくたひかみし

人のおもかけのたちそふにつきて。わか面かけをみる心にや。いくたの河のより〳〵にといへる詞の。よせあり一〔二字〕きこえ侍れは勝とす。

卅八番

左　戀の歌の中に

槇の戸に待出る月もいたつらになみたとよとふ有明の空

いひしはかりに長月のといへる。有明の面かけうかひて。尤殊勝。

右　同

恨みわひ詠むともいさしら雲のしらしなよそに思ひきえぬる

是又よくいひかなへてみえ侍り。

左。下句まさり侍らん歟。

卅九番

左　稀問戀

稀にあふうらみをしるや我涙かたらぬさきに先こほれつゝ

なみたのわか心をしれる趣有興者乎。

右　片戀

思ふをそ思ふとこそはおもひしにおもはぬ人をなと思ふらん

右歌、此たくひなへての歌合にはいたゝみたれぬやうに侍れと。是はよみをける歌を何となくとりあはせられ侍れはふなかたに■陣のとたにはまへきにあらすや。侍句おなしもしをかれたる。思ふ人おもはぬ人の思ふ人なと侍る歌もおもひよそへられ侍り。まれにはかやうの事も詠へきにこそ。左ことはりこまやかにきこえ侍り。かちとすへし。

四十番

左　後朝戀

朝露もまた消やらぬきぬ〳〵のなこりの袖にそふなみたかな

右　別戀

かへるさの道のしは草露はあれとけさの涙や置まさるらん

けさのなみたなこりの袖。何れもふかくこそ侍れ。左右涙を露によせられたり。さしたる勝劣なしや。

四十一番

左　寄枕戀

思ひねにみえし夢ちのゆくゑをも枕やしるといふもはかなし

ことはりかなひて心しかるへし。

右　寄車戀

人めもる心のうちは小車のわか身のほかにやるかたもなし

しのふる道の心つかひ。能いひのへられて聞え候。

左。わか心からみし夢をも枕にかこち侍るほと。あはれにきこゆ。右も一ふしいひなかされては侍れと。猶左の勝にや。

四十二番

左持　戀竹

をのつから靡く姿にふしわひてけになよ竹のよをふかしつる

おろへくもあらぬ心つよさに。よをふかしたるさま。いひしりてみえ候歟。

右　絶久戀

契つゝ待こしくれの久しさも絶てとしふる身こそつらけれ

此番持とすへし。

四十三番

左勝　名所松

いさといふ人もなのみやみちのくのあねはの松に殘るとのは

伊勢物語の心。神妙々々。

右　薄暮松

山里にとひくる人も松風を聞すてかたき夕ならすや

とふ人もくるれはかへるとのみいひならはしたる山さとに。聞すてかたく思ふらむ松かせは。ことに身にしみてこそ侍れ。

左。古歌をおもへり。勝とすへし。

四十四番

左持　浦鶴

わかの浦や及はぬ道にあしたつの翅みしかき音をのみそなく

述懷其興候。つはさみしかき。山谷か詩のことはもより来てをかしく候。

右　山家

世のうさをへたつるまてはしらねとも柴垣かこふ山の奥かな

左。身如病鶴翅翎短。心似亂絲頭緒多と云詩の心を思へるにや。右。又思ふ所なきにあらす。持とすへし。

四十五番

左持　山家月

古郷は思ひ絶たる柴の戸にみし世かへらぬ月もうらめし

右　同

松の戸にまてとゝはん古郷をめくりやきぬる山のはの月

雨宵故郷をおもへる心。深切あはれすくなからす。

左右同題にて歌もいたくかわれる所なき歟。但右旅の歌をみる心ちして。山家の心かすかにや。いふさま歌は同科に侍り。此題はすへて秋に入侍らん歟。

四十六番

左　竹翠

すなほなるすかたをみれは朝夕にわか友ならぬ窓のくれ竹

對竹省身〔の〕と意。尤可然候哉。

右　山家雲

さひしさも計かはとはん暮わたる槇の外山の雲の下庵

左。わか友ならぬといへるめつらしくや。なるとならぬとはおなし詞に侍らむ歟。しからは右を勝と申へきにや。

四十七番

左　旅

都思ふ草のまくらのよすかまて旅ね物うき露の秋かせ

よすかまてといへるやいかゝ。旅ね物うきこそ則草の枕のよすかにては侍れ。然者中の五字させる詮なく覺侍る如何。

右　山家人稀

山深くいとひしるのみおほけれと世をすてはつる人そ稀なる

右。林下何曾看一人といふ心にや。可爲勝。

四十八番

左　旅泊月

大よとのかへる浪にも思ひ出てみやこの月にまつ風のこゑ

松はつらくもといへる。浪の月かけに都の松かせも聞心ちし侍り。

右　述懷

我なからなそも心のとまるらむすみははてしと思ふうき世に

人に厭世の上味。更動老心候。

都の月に松かせの聲といへるよろしくや。

四十九番

左　寄道述懷

八雲たつ道はしられとあさか山あさきよりこそおくも尋め

千里は足下よりはしまる。なにはの道もしかなんあるへき。其心甚深。

右　懷舊

目に〔見〕みたひなかしの人の言葉を身にかへりみる心ともかな

備道之用心在之者乎。

左歌。かけまくもかしこき八雲のそのかみをいひいたせり。難波津のよしあし。をろかなることのはにて申のふへくもあらぬうへ、あさか山のおくまても、おもひのこされぬこゝろさし有かたくそ思給ふる。右歌。三省のことたとひ聖人の金言なりとも。我國の神語に比へきにあらす〔や〕侍らん。

五十番

左　神祇

この國にむまれくる身もみさか山世々の契やかけし神かき

此國の蒼生此神の擁衛にあらすといふとなし。誠に…
ひ達られ候。尊意無所疑。幸甚々々。

右　祝言

庭の松軒端の竹もうつしうへて千とせ萬代宿に契らん

松と竹とのするの世をいつれ久しといへる。ふるとも思ひそへられて。とにめてたく候。

左又神威おそれあり。勝と申へし。

右小册かちまけをつけ侍る事。不相應と申さむにも。たゝさるうへ。數奇深切のあまりに濱千鳥の跡もかさなりぬれは。今さらあらすともいかゝはにて。只知音の責を塞はかり也。君向瀟洓我向秦。一笑々々。

亨祿辛卯二月初吉　雀軽子

秋夕

ゆふされは荻のはそよく秋かせに露よりもろき我なみた哉

身のうへにわきて思ひはなけれともなへてうき世の秋の夕暮

さひしさを入逢のかねのうちそへておのへの松に秋かせそ吹

三首いつれもなたらかに風躰又よろしく候。

月

なかむるに心のくまそなかりけるうき身忘し秋のよの月

なかめつゝ思ひつきせぬ秋のよにひとりはれ行月のかけ哉

有明の月のかけふく山風に千さとまてしく秋のしら雪

三首の月とり〳〵爭清光らん。

名所月

かくらくのはつせの山にすむ月に花も紅葉もたれかしのはん

しら雲のよそにもみえぬ秋かせに月のみかゝるかつらきの山

秋情

なれみてもとの葉草の露はかりいひしるへくもあらぬ月哉

この月又とり〳〵の光輝候。

遠擣衣

あらし吹とを里の〻月かけも有明さむみ衣うつこゑ

野外虫

むさし野や音を鳴虫のかす〳〵に秋の思ひのはてもしられす

遠さと小野。むさし野。砧の音もむしの音も聞をおとろかし候。

絶久戀

契つゝ待こし暮のさひしさも絶て年ふる身こそつらけれ

片思

思ふをそおもふとこそは思ひしに思はぬ人をなと思ふらむ

兩首よのつねのとゝ見ゆ。

山家

世のうさをへたつるまてはしらねとも柴かきかこふ山の奥哉

山家雲

さひしさもたれかはとはむ暮わたるまきのとやまの雪の下庵

山家いつれも其心顯然可然歟、

山家人稀

山深くいとひくるのみ多けれと世をすてはつる人そゝまふる

雪案墨點卅二首

〔原本目錄云一五十番資直三位判幷逍遙院御合點御詞〕

續群書類從卷第四百十七

和歌部五十二

歌合

兵部少輔中原遠忠

一番

左　立春朝

なへて世の空ものとけし春立といふはかりにもいつる日の影

右　初春霞

かすみきて天のかく山明るよりとをちの里に春をしるかな

左歌。拾遺集巻頭の詞をとり用らる。其興あり。風躰もよろしくはみえ侍れと。右歌。十市の里萬歳の春をしれる心。尤祝詞にたれり。可爲勝。

二番

左　山早春

すみの江や神代の春ゝ波まよりかすみそむらんあはち島山

右

昨日こそ紅葉ふみわけなく鹿の立田の山に春風そ吹

左歌。第二第三句のうつり心ゆかさるやうには侍れとも。海中出現の心をもおもへるにや。右歌。猿丸太夫の古風春の初に出來りて。龍田の山に春かせそふくと。のひらかにいひなされたる程。早苗とりしかいつのまにといへる。稲葉の風よりもあらたにきこゆ。又右の勝とす。

三番

左　梅

もろこしや梅さく峯の春風も日のもとよりそ吹はしむらん

右

梅さけはわかまたしらぬ里までも匂ひを道のしるへにそとふ

右歌。第二句にしらぬと有て。すゑにしるへと侍る。難と

すへくや。左。春の風東より吹心。二十四番花信の風梅花にはしまるにとりて。もろこしもわか日のもとよりそ吹はしむらんといひなしたる。心もたくみに姿もおほきらかに侍り。仍以左爲勝。

四番

左　三輪法樂中に

色も香も春立しるしみつかきに梅咲ましるみわの神杉

右　梅をうへし亭にて

この宿に色かもつきし移し植て千世のはしめとさける梅かえ

雨樹の梅の色香無差異哉。

五番

左　梅風

春風にかすみふきとく明ほのゝむめ咲山は月ほそくして

右

梅かゝを夕くれふかくさそひきてあやめもわかぬそての下風

左。梅さく山の嶺の春風は。壬生二品のとなる月の秀逸に侍り。あたらしき趣向なく。春月に詠出んには片腹痛や侍ん。右。袖のした風と侍る。山の下風木のした風なといへるよりは。聞つかぬ心ちそし侍る。これらは誠吹毛の事なから愚意の所存を申侍り。此番しく〔しはらく歟〕爲持。

六番

左　春日野

春日野やを〔と歟〕ころの道も春雨にめくみある世のわかなをそつむ

右　春雨

はるさめに時雨ふりにしならの葉のわか草山そ先みとりなる

此春雨。野へのわかなよりも。山の若草やみとり深くみえ侍らん。

七番

左　松間〔ら歟〕鶯

玉のをもゆくはかりに鶯のはつ音の小松ひく手にそ聞

右　野鶯

すみれつむ野へならすとも鶯の聲にひかれて一夜ねぬへし

雨箇黄鸝。その聲を賞する心たかひにふかしといへとも。舊歌を採用るにつきて。山邊赤人いかてか滋賀の上人の下にはたゝむやとそ覺侍る。

八番

左　雪中鶯

春さむきそのふの竹をねくらにて雪にこもれる鶯のこゑ

右　隣家鶯

我かたにねくらさためよ哭竹のかきほへたつる鶯の聲

雨首共のつねめなれたるさまなり。可爲持。

九番

左　春鳥

山里の冬はかきねをつたひ來てこのめ春雨しとゝなくなり

右　歸鴈

契りきなかすむそなたに行鴈のとこよの花はいまかさくらし

木のめ春雨しとゝなくなり。興ある一躰に侍り。但とこよの花はいまかさくらし。正躰に叶へり。猶可爲勝。

十番

左　河柳

かすむ日はいとゆふはかり波の上に河そひ柳かけみたるなり

右　柳露

秋のみと何思ひけむゆふ露を〔と歟〕むすひをきぬる靑柳のいと

左は川そひ柳のかけをいふゆふにまかへ。右は秋の夕露を春のこすゑにおもへり。いつれをよしあしとも思ひみたれ侍るになん。

十一番

左　花

待わひぬさくへき日をも忘るやと枝にこもれる花にとはゝや

右

とふ人もあらしみやまの春の日にひとりや花をまつの戸の內

枝にこもれる花にとはゝや。一心詞よろし。勝なるへし。

十二番

左

けさみれはかすみ色つく立田山夜半にや咲し峯のはつ花

右

かけひたす立田の山の春風に花のにしきをあらふしら波

左。やすらかにいひなかしてよろしくみえ侍り。爲勝。

十三番

左

人しれぬ花とはたれかみわの山杉のこすゑにかゝるしら雲

右

みわの山つれなきすきも下おれを聞はかりなる花のしら雪

二の三輪山。左は人にしられぬ花やさくらむといへることをおもへる心さしあさからす侍るを。右歌。下句いひしりてきこゆ。まさると申へくや。

十四番

左

いとへたゝそをたにきかし春は猶花のうへには風の名もうし

右

思ひねの花になれぬる春のよはこてふににたる夢の曙

右歌。莊生曉夢迷胡蝶といへる唐の歌の面かけもかよひ來りて。いと優美に侍れは。左の風の名も耳にたゝす成ぬるにこそ。

十五番

左　遠花

はるかなる雲まの山の朝霞猶おくゆかしみよしのゝ花

右　静見花

吹風もえたをならさぬ春をへてしつかなる世にみよしのゝ花

右歌。治世相樂の風詞捨かたきは侍れと。

左歌。長高うるはしき躰。心詞相兼たりといひつへし。可爲勝。

十六番

左　春夕花勝

なかめつゝ霞にくるゝ木のまより花のかけそふ春のよの月

右　河邊花

しろたへにかたのゝ花のかけみえて春あらはるゝ天の川波

右歌。續拾遺集。はつせ川花のみなはのきえかてに春あらはるゝせゝのしら波と侍る。此第四句あたらしき詞に侍れは。いかゝあるへきにか。

左。となる難なきにつきて勝と定むへき歟。

十七番

左　花慰老勝

春にあひてふりぬる身をや忘ましなれも老木の花のしら雪

右　花漸散

うつろはぬほとゝみつゝも露はかりちるたにおしき花の下風

左。古木の花をみて身の老をわすれぬるさま。心ある躰に侍れは。勝とすへし。

十八番

左　春曙

なかめやるはつせのひはら花咲てくもりもやらぬ春の明ほの

右勝

月はおち花はかすめる峯の雲明るまおしき春の明ほの

左歌。檜原花咲てと侍る。つゝきさしつめたるやうにて餘情なくや。右は月と花との景氣まことに明るまおしかりぬへし。まされりとす。

十九番

左　紫藤勝

むらさきの雲ににほへる春の日を藤の鳥ゐにけさみつるかな

右　江藤

鳰ゐるみつのみとりも春ふかく藤江にかゝる花のしら波

藤江にかゝる花のしら波。をかしくみえ侍れとも。藤の鳥ゐの春のけしき。めにちかくみる心ちして。尤感深こそ。

二十番

左　岸欵冬勝

心ある河おさなれや山吹の花のかけ行きしのしは舟

右　籬欵冬

ゆく春もやとりとるかと夕くれのまかきにあまる山吹の花

　雨方の欵冬。いつれをゝとり。何をまさりともいはぬ色。

二十一番

左　旅首夏

故郷を思ひいつれはかすみたつ日かす物うきころもかへかな

右　新樹

夏山や木々の緑の玉すたれかけてすきまもみえぬはかりに

　左の衣かへ。心なきにあらされとも。右の新樹。めつらかにしたてられたるやうに見え侍り。如何。

二十二番

左　郭公持

またれつる山郭公有明の月を忘るゝ一こゑのそら

右

あかすのみ山郭公とひすてゝ雲ゐはるかのなこりをそ思ふ

　この山郭公。月を忘るゝ一聲も。雲ゐはるかのなこりも。ともに閣すてかたくてなん。

二十三番

左持

香をとめてしのふむかしの時鳥花たちはなに今もなく也

右

さみたれの雲ゐるみねの郭公聲はとやまの夕くれの空

　此番二美并者乎。

二十四番

左　曉郭公持

月のこる高野の山の郭公あかつき待て音をやなくらむ

右　雨中時鳥

山のはにむら雨はれて郭公月待ほとの音をやなくらん

　右歌。むら雨はれてと侍る。只晴すともほとなく過ぬへき一むら雨の中なから。月まつほとゝいはまほしく覺侍るは。しゐたる申詞にや。何さま歌のさまは兩方いくほとの勝劣なくや侍らん。

二十五番

左　雲外郭公

ほのかなる山時鳥一聲は雲のほかまてなをまたれつゝ

右勝

郭公やとりやいかにゆふは山すそのゝくもにかゝるひとこゑ

　右歌。やとりやいかにゆふは山なと。詞のつゝき艶に見え侍り。まさるへきにや。

二十六番

左　天香久山

聞わひし夕のうさをそよさらにねさめにおきのうは風そふく
　雨方の荻風。秋こそはしめはめつらかに聞え侍る歟。
三十八番
　左　閑庭薄持
さひしさはさそなを花の袖の上に露もへたてぬ庭のよもきふ
　右　路薄
行かへり誰かとふらむ秋かせになひくを花のそてのした道
　袖のした風〔道歟〕。さもこそあらめなから聞なれぬ心ちし侍る
　露もへたてぬ庭の蓬生。面かけさひて心もふかくこそ。
三十九番
　左　月持
秋の夜やもしほのけふり立空は月にいとはぬすまのうら風
　右
すまの浦やひとりめさます秋かせの波のまくらに殘る月かけ
　須磨のうら／＼。ともに心あるさまなるに。右は源氏物語
　の面かけみえて殊あはれふかし。しはらく輸贏をさため
　すもや侍らむ。
四十番
　左
かさしおるみわのひはらの秋風に月の桂のかけもくもらす
　右勝
くまなしや野山の秋の〔め歟〕けしきをも雲行月の面かけにして
　右歌。趣向かつらかなるにや。爲勝。
四十一番
　左持
われもさそなれて幾秋かすか野や月をみかさのさをしかの聲
　右
すむ月の空もみとりに雲消て猶光そふまつかせそふく
　右歌。空もみとりに雲きえてなと。たけたかくみえ侍れと
　も。三笠の月負へきにあらねは持と申へし。
四十二番
　左　惜月
なかき夜もかきりこそあれ明石かた波にもおしき月のかけ哉
　右勝
おしと思ふ心に月の光をはのこしてそみん有明のそら
　雨方の月をおしむ趣。心に殘してみんといへるは。なを思
　入たる所まされりとや申へき。
四十三番
　左　夕月持
秋かせのをともさやかに暮わたるいりあひの空の三か月の影
　右　關月
なかむれむ秋もうきよの關の戸をいてやといそく月のかけ哉

入逢の空の三日月となる光もなく。右の關の戸もさせる
ふしなし。同程にや。

四十四番

左　浦月持

心あらはあまのたくなはくり返し夜な〳〵あかし浪の上の月

右　江月

難波かた入江をとをみほの〳〵とふけゆく月をゝくる秋風

此番又等同歟。

四十五番

左　秋中月勝

あまを舟みえてすゝなき夕波のいりぬる磯に月はいてつゝ

右　海邊月

ところから折から月もみちのくの秋のこよひのしほかまの浦

右は八月十五夜の心にや。左はいますこし心あるさまに
侍れは爲勝。

四十六番

左　八月十五夜

たかき名も空にしられてみかさ山もろこしかけて出る月影

右　九月十三夜勝

名にたてる夜をかさねきて露しもに月の桂もそめやますらん

左は安倍仲麿か三かさの山に出し月かもといへるをおも
へるにや。其興なきにあらすといへとも。右又名にたてる
夜をかさねきてといへる。十三夜の心をかしくみえて。誠
月のかつらもそめましてや侍らん。

四十七番

左　山家月勝

山深きあるしをとへはしら樫のしらすいつくに月はすむらん

右　旅宿月

草枕とひくる月もかけさむみ旅ねわひしき露の手まくら

左。深山の幽居。主人もみえす寂寞たるさま。あはれふか
き月かけなるへし。

四十八番

左　月前虫勝

露霜の月のした草かけさむみ身をあきむしの聲にわひつゝ

右　月前鹿

月かけをさそふはかりやさを鹿の山のは近くたちならすらむ

右。山のはちかき鹿の音は。月をさそふはかりなる景氣を
かしく侍り。雖然左身を秋むしの聲にわひつゝは。とに感
思不淺。猶以左爲勝。

四十九番

左　月前雁

入かけをおしみてやゆく秋のよの月より西にわたるかりかね

右勝

雪とみてはらふつはさのかけなれや月にみたるゝ初霜のころ

右歌。心詞無比類。尤珍重々々。

五十番

左　更科里勝

さらしなやさらにそ聞し秋ふけてしくるゝ月に衣うつこゑ

右　擣衣

ころもうつ川かせさむみふくる夜に誰を待らん宇治の里人

しくるゝ月に衣うつこゑ。幽々玄々。可爲勝。

五十一番

左　虫勝

名もしらぬ虫の鳴音もさへて世の秋にはもれぬあはれとそ聞

右

夕暮の野へもまかきもひとつにてなみた露けき虫の聲〱

左歌。思かけぬ所に心をかける。誠以作者の得骨。凡慮不及。甚甘心。右に顧面するに不及者也。

五十二番

左　雨後虫勝

ふかき夜のまかきにかゝる秋の雨のうへふり出るすゝ虫の聲

右　紅葉

大かたの秋たにとひし津のくにの生田の森はもみちすらしも

左。又ふり出る鈴虫のこゑ。優美に聞え侍り。右歌。昨日たにとはんと思しと。清胤法師かよめるをもとゝして。生田の秋をは人々爭詠來れる歟。紅葉のかけの遊覽尤よしあるへきにや。但猶左はまされりとや申侍らむ。

五十三番

左勝

花にそめし心を秋の紅葉にもうつろふほとの山かせそふく

右

露しもの染つくしてし行衛とや嵐にもろくちる紅葉かな

兩方の紅葉。左は心をそむる所ふかきにとりて。まさると申へし。

五十四番

左　籬菊持

仙人のすみかやそこと雲きりのまかきに深き菊の下水

右　殘菊

せきてみんうつろひ殘る山かけの匂ひも深き菊のした水

此菊の下水淺深難辨知者也。

五十五番

左　時雨

いとはやもみなれぬ雲やしからきのと山しくるゝ冬を告らん

右勝

時雨つゝ入日も今は山のはの夕かけ草に宿やからまし

庭におふる夕かけ草とよめる歟。山のはすこし似あはぬやうにやとは覺侍れと。さもこそ侍らめ。山のはの夕かけといへる。つゝきもよろしく侍れは。外山の時雨よりは入日の夕かけ見所ありと申へくや。

五十六番

左　篠霜

さゆる夜の程もしられて出る日に霜こそのこれ道のさゝはら

右　落葉勝

吹つくす落葉の月のもりのかけに日ころうかりし木枯もなし

おち葉の月のもりの陰。こと葉のつゝきも。心のをもむきも尤感情ふかし。爲勝。

五十七番

左　雪

この比のあらしや空につもるらむをとはの山にはつ雪そふる

右勝

けさはまたうつもれやらて山の端のなかはは雲にみゆる白雪

なかはは雲にみゆるしら雪。見躰凡俗隔境者乎。

五十八番

左勝

とはゝやなみかきかはらのしら雪に故郷さそな冬こもるらむ

右

たれかさて問ひもとはれも雪の内に淺き情のみちはしるらん

左歌。やすらかにいひなかして心ふかし。中古の歌にさしならへても見つへくや。右のふかき情もすてかたくは侍れと。先以左爲勝。

五十九番

左　淺雪

咲そめし花ともしはしをはつせやらす雪かゝる嶺のときは木

右　深雪勝

ふるまゝに松のあらしのたえし夜を思へはけさの雪おれの聲

兩首の雪。淺よりは深はとに深くこそ侍れ。

六十番

左　山雪勝

雪の色にゆふへはよその高砂やおのへのかねの音につけても

右　河雪

いかはかりうちの河長はらひ侘ころもてしふく雪のしは舟

左は事もなくよろし。まさると申へし。

六十一番

左　浦雪

あま人のしほなれ衣きてみれは浦さひしくもつもる雪哉

右　竹雪勝

聞まゝに窓うつ雨のくれ竹も雪になる夜のをとのしつけさ
竹の雪。心詞よくいひかなへられて。興感甚深者乎。

六十二番

左　北野法樂の内社頭雪
黑かみの一夜にかはるかけなれやこの神かきのまつのはつ雪

右　閑中雪持
雪のうちに誰かはとはむ淋しさもふりにけらしな淺ちふの宿

左。松の初雪。新造の詞のやうにてすこし思たくそ侍る。
淺茅生のやと無殊事。まさるへきにや。

六十三番

左　千鳥持
興津かせいりしほたかく吹くれて波より下に千とりなく聲

右　濱千鳥
浪かせの立ゐにわかてさ夜千とり濱の眞砂の絶すなくらむ

なみよりしたにちとりなくこゑ。一おもひ入たる所興あり
といへとも。濱の眞砂のたえす鳴らむ。又すてかたし。可
爲持。

六十四番

左　旅泊千鳥
舟さして入ぬる礒の友ちとりこよひは明ぬあすもたのまむ

右　歳暮勝
年さむき松きるしつのたもとにも山ちの梅や匂そむらん

右の歳の暮。一首のしたて何となくめつらしくみえて。
方人せまほしくこそ侍れ。

六十五番

左　忍戀勝
思ひわひ色に出なはいかならむしのふにかゝる露よ時雨よ

右　祈戀
思ひかねあひみすはたゝ忘れと二みちかけていのる神かき

左は歌のさま艷ならむことを思ひ。
右はたゝ歌にいひてそのとはりを述たり。やまと歌の道
妖艷をもとゝする事近代の風俗なり。忍にかゝる露のと
葉は。いかにも當世とり用へくこそ覺侍れ。

六十六番

左　待戀
あすは又いかゝいはまし人とはゝこよひは月をまつと答へて

右勝
おりしもあれなにそは鴫の羽かきも待よつれなき曉の空

左。萬葉集。あし引の山より出る月待と人にはいひていも
待われをといへる心を。あたらしくとりなされて。心ある
に似たり。但右の鴫のはねかき。折しもあれなにそはた
と。待夜むなしき曉にかこちわひたる心。あはれかすそふ

にやとて爲勝。

六十七番

左　待空戀持

まつかせは夕の空に吹そめて有明のかけにのこるつれなさ

右　借名戀

憂身にはあらぬ名をさへ刈このいふかひなきに亂侘ひつゝ

松風。かり薦。いつれともいふかひなく思亂て侍り。

六十八番

左　逢戀勝

こよひ先おほつかなくも思ふといはてそたゝに新枕せん

右

かけて我たのむもあやな逢とのちょに一よは夢のうきはし

左。在五中將の心中の述懷。此戀の歌にとり出られたる寄特にこそ侍れ。千世に一よは夢の浮橋。うるはしき下句には侍れと。かゝる番にとりあつるや不幸ならむ。先まけて侍れかし。

六十九番

左　不逢戀勝

思ひあまりいつを限そとはかりにあはぬ月日をうち數へつゝ

右　夢逢戀

夢にさへ逢よほとなきね覺してつらき心をつけのを枕

右歌。あしからす侍れと。左歌。首尾克調て古質の風を存せり。尤神妙々々。

七十番

左　契戀持

いのり來てけふそ契りの三輪の山昨日はよそにすきし夕を

右　賴戀

人はいさ我心さへしらいとのあひ思ふともたのみかたしな

兩首無勝劣歟。

七十一番

左　別戀持

憂物といとひなはてそ別ちをあふにしかへん有明の空

右　變戀

消ねたゝかけし情は月草のあたにうつろふそての上露

同前。

七十二番

左　厭戀持

恨わひいとふもなとかにくからて猶こりすまにしたひきぬ覧

右　恨戀

思はすといふも中〳〵恨ある心を人のそれとたにとへ

兩方互に短慮おもひ得さる所あり。勝負を付かたし。

七十三番

左　寄山戀勝

なかめわひ雪も煙もふしのねは絶ぬ思ひの空に戀つゝ

右　寄道戀

思ふとはいふへきえをもしら堅のしらぬ戀ちをふみや迷はん

左歌はすこしたちまさり侍るにや。

七十四番

左　寄杜戀勝

くちねたゝあはての杜の秋かせに何そはつもるとの葉もうし

右　寄木戀

つれもなき人の心そ有明の月のかつらのおるへくもなし

右歌。めにはみて手にはとられぬといへる古ことをおもへるにや。結句のなしは第二句のそもしにかけあはすきこえ侍らむいかゝ。

左。無事なるに付て暫爲勝。

七十五番

左　寄松戀

思ひよはる心のするの松山にこゆるなみたの袖を見せはや

右　寄竹戀勝

せめて身に思ひわひては呉竹の一よはかりの契りなりとも

左の末の松。（山脱歟）こゆるなみたとそへられたる。只浪にてこそあらまほしけれ。なみたといひなされたる。おもはしからすそ侍る。右のくれ竹、とかむへきふしも侍らす。まさるへくや。

七十六番

左　寄枕戀持

かりそめのふしみの里のさゝ枕むすひし夢はよゝに忘し

右　寄莚戀

はらひこしうらみもふかく積るよの霜のさむしろ濤の衣て

此兩首つねに見なれたるやうにおほゆ。となる過失侍らねは持とすへし。

七十七番

左　寄鶴戀

子を思ふよるなくつるの心をも迷ふ戀ちのやみにしる哉

右　寄露戀勝

うつり行人の心や秋草の露のみ深きやとのかよひち

左。鶴のこゑを夜のおもひにしるらんとはりは。さもありぬへけれとも。子をおもふ心を戀ちのやみにしるとこうち出たるにや。すこし似つかすもあらむ。是はしゐたる申となれともいかゝ侍へき。右は事なくてよろしきにや。

七十八番

左　寄衣戀

おもひねのなみたの河にかけてみんかへす衣の夢のうきはし

右勝
夢にさへあひみぬほとのさ夜衣たかいつはりにかへしきぬ覽
左の夢浮橋。幽玄にみえ侍れとも。右はそのしたてあたらしき衣に侍れはまされりと申へし。

七十九番
左　寄鳥戀
よそにゐみこよひも明て相坂や八聲の鳥にそふうらみかな
右勝
うらやまし思ふかたにはよるとなく雲ゐの鴈を聞につけても
左の八聲の鳥。歌のさまよろしく侍れとも。右歌。二三四の句の詞つゝき。よくいひくたして尤艷に侍り。可爲勝。

八十番
左　寄虫戀持
それとたに人はとはしなしら露のそこにも誰をまつむしの鳴
右
かきりとや思ひわふらむ秋更てたえ〳〵にのみまつむしも鳴
此虫のこゑ。兩方いつれとも聞わきかたくこそ侍れ。右の結句も文字。只左とおなしく。のにてそあらまほしき如何。

八十一番
左　述懷勝
世中の波のさはきもおもほえすわかの浦半のなかめせしまに
右
天下おさまる時を朝夕の月にも日にも先いのる哉
右歌。晨昏の丹精忠義私なく。日月の感應もそらにしられ侍り。左歌。道にふける志深切にして。是又鬼神をも誠にあはれ思はせつへし。殊終の句。小町か我身世にふるといへる末の詞能よりきたりて。たくひなくも侍るなゝに。なかめといふとは。書によりて庶幾せさるやうに沙汰あるとなるを。是は神妙に侍り。作者平生の數寄外にあらはれて。感思あさからされは。猶勝字を左に付侍るになん。

八十二番
左
いつかさて身のあらましの末かけて猶山深く世をのかれまし
右勝
花になれ月にめつともますかゝみみろめにうつる心とめすは
凡花を見月をみるも當一念々々。是を君子の心とす。されは月草に衣はすらむ朝露にぬれての後はうつろひぬとも。歌人のまもる所只是にありとこそ。先哲もをしへをのこしをき侍ぬれ。右歌。其こゝろあるへし。可爲勝。

八十三番
左勝
思へたゝしつかなる江かあさみとり水の心もすめるかもめを

右

としけき憂世の中にましろとも心の塵を身にははらはん

左。黄山谷か江南野水も。此しつかなる江のあさみとりにみる心ちして。よそめもなくこそ。

八十四番

左　晩鐘

山かけや立出てきけはくれわたる嵐にしつむ鐘の聲哉

右　木持

としく\に猶茂りそへ山ふかみうへをく木々も雲かゝるまて

左。嵐にしつむかねの聲。うつくしく聞えたり。上句や下の美麗にたくらへは無下に無文に侍らむ。右歌。木をうふるは十年のはかりとゝ。唐の世話にもいひならはせるにや。うへをく木々も雲かゝるまて。郷里の繁榮。子葉孫枝の長久。祝言もこもれるうへに。樂天か插柳成高林。稀桃作老樹とつゝれる面影も立そひて。此うへ木いと高くこそ侍けれ。

八十五番

左　山家持

山にても雪のやまちにつかへけん法のみちをや猶尋まし

右

水のをと風のこゑさへしつかなる山をたのしむ住居とをしれ

左は雪山童子の跡をおもへる釋門の教。右は仁者は山を樂といへる孔子の道。いつれをよしあしと申へきにもあらすや。

八十六番

左　山家嵐勝

聞なれしあらしのをとも問ひとに今さらさひしまつの下庵

右　閑居友

そをたにもともなる宿の松の風杉のあらしもしつかにをふけ

問人に今さらさひしといへるは。おなし嵐もめつらかにこそ聞なされ侍れ。

八十七番

左　羇旅持

草枕旅にしあれはいなみ野のいなともいはし露のかりふし

右　旅行

ゆくすゑをいそく心に鳥の音をまたてや月に出るたひ人

左。歌の姿古風を存し。いなみのゝいなともいはしなとやさしく侍るを。右。うちむきてありく\とゝはりかなひて又すてかたし。仍て持とさたむ。

八十八番

左　羇中關勝

ゆくとくと人の心も安からてこのころせきのこのもかのもに

右　山路旅行

いひしらす山ちよ深き椎のはをおりしく袖にもる時雨哉

闕といふは令條ニ所載界邊の門を謂といへり。されはみたりにそとなくこれを立へきにあらす。帝京のためには鈴鹿不破會坂の三の外はあるへからすとみえたり。この比心のまゝに行人の妨をなす。歎てあまりある者也。左歌其心をやすらかにいひ述たる。作者の雅量もみえて尤甘心せしむ。右歌。旅宿の題にそ猶相當すへきと覺侍るは僻案歟。以左爲勝。

八十九番

左　旅泊勝

さためなき浪の枕に浦かせのあまのふなちをくもにみる哉

右　富士山

富士のねにめつらしけなきなかめとは思はすしもそ雪も煙も

ふしのねのなかめは誠高くして及かたくは侍れとも。左の夜泊。心こまやかにたゝありのさま。是又一の風情にて逸興あるやうに覺て勝とす。

九十番

左　庭

尋來て人もとへかしうみ山をゝのつからなる庭のけしきを

右　樵夫勝

暮ふかくかへるま柴にやとしきて山ちを出る月のかけかな

此歌合は歌合のためとよめるにあらされは。病なとの事強て沙汰すへからすといへとも。左歌。上下の句のはてのを文字。聲韵は猶さらまほしきと先達申來事歟。右歌。五もし暮ふかきといへる。此比人々好よむ詞に侍る。夜ふかきといふにはをとりて。愚意には存する者也。前の五番の右歌。梅かゝを夕くれふかくと侍し。さやうのつゝきは殊不苦者乎。惣てとかめ申にはあらす。との次申出計也。一首のさましたても又あしからねは以右爲勝。

九十一番

左　遠望持

住の江や波ちはるけきあさなきの日かけにむかふあわち島山

右　船

つくりそめし昔を今の波の上に木葉みたるゝ興のつり舟

兩首等同歟。

九十二番

左　雨

春の花秋の紅葉もふる雨のかゝるめくみのほかにやはみん

右　吉野川勝

春秋を空にしのへはよしの河おもかけうかふ花よ紅葉よ

おなし花紅葉。吉野川はおもかけふかく侍りかし。

九十三番

左　窓竹著

すなをなる心のみえは月も日もへたてぬかけや窓のくれ竹

右　巖苔

たちぬはぬ人のためかも雲水の深きいはほの苔の衣は

右歌（昔歌）。晋の伊せは裁ぬはぬきぬきし人と仙人をさしてよめるにこそ。今たちぬはぬ人のためといへるは。すこしことたらすおほゆ如何。左はとはり叶て侍り。勝へし。

九十四番

左　鳥

春秋のあはれいつれと分てみん花にうくひす月にかりかね

右　夜鶴鳴皐著

夕日さす澤邊のつるのあはれけによるの思ひをかねて鳴らん

花と月とのとり〳〵のあはれ。いかてがをとれりとは申へきなれとも。夜のおもひをかねてなくらむ。この心淺からす。なを勝へきにや侍らむ。

九十五番

左持　春日法樂卅首中齋寺

二葉より匂ふはやしと此寺の法のはるかせ世にあふくらん

右　釋教

法の舟さしてわたらんしるへにや佛の御名のかすをつむらん

左。栴檀香風悦可衆心は法花の要文。法相大乘一味の心ー此山しな寺に吹つたへけんかし。右。稱名念佛の反對を他力本願の船につゝむらむ心。易行往生の直道。凡先出離の本懷たり。なすらへて持とす。

九十六番

左　多武峯大明神法樂之内玉

深き海いかにはかりてこの神のとりしこゝろの玉のひかりそ

右著　三輪法樂三十首中に

法の聲父も聞てん三輪の山わしのたかねにのこる光を

左。多武峯明神滄海の玉とり給へると本說あることにこそ。老翁當座覺悟し侍らねは是非を述るにあたはす。右。尺尊の轉法輪を三輪の和光に思ひよそへられぬる。たつとくこそ侍れ。爲勝。

九十七番

左持　住吉法樂百首中に

あふき來ぬ身にむつましく住吉の神のまもりを世々の契りと

右　春日御神樂之時終夜侍りて

榊とる神の岩戸をみかさ山うたふ夜聲に明わたる空

兩社の神威。とり〳〵にかけまくもかしこきによりて。得失を論するに所なし。

九十八番

左勝　三輪法樂三十首中に

敷島の道をあふけはちはやふる神代のまゝのやまとことのは

右　人丸法樂三十首中に

道まもる神に手向るとのはの色をもそへよみつのはま松

左。やすらかにいひなかしてともなくよろし。右は初の五字おたやかならすや。負にて侍へし。

九十九番

左　神前祝

まもれ神人のまに／＼ます鏡みるかけたかく宮つくりして

右　社頭祝持

春日山月と花とをみつかきのひさしくとめる春秋の空

右歌。長生殿のふるきためしを春日山の春秋にとりいてられたる。ゆゝしくめつらかに見給ふれは早々勝と定へし。

百番

左持　年始三十首中に祝言

三笠山神のめくみにこのさとはいく春秋ををくりむかへん

右　住吉法樂百首中に

難波津の流をくみておさめしる御代のあつめん大和とのは

左。三笠の山。神のめくみに萬代の四の時をくりむかへんとを祝し。右。わか君の天のした延喜天暦の泰平に復し。古今後撰の遺美をおこし繼へき趣こひねかふ所。よき持とす。

抑此歌合は兵部少輔中原遠忠といふやまと人。やまと歌を詠吟することを世とゝものとわさとして。神佛にとなよせ月雪におもひをのへて。造次にもこゝにおいてし。顚沛にもこゝにおいてす。しかあれはこゝらのとし比かきあつめたるところ。濱の眞砂の數つもれるを。杜の下葉のちりうせなんともいかにそとや。身つからいさゝかこれをえらひ出て。左右にかたわけて百番とせり。彼圓位ひしりのかけまくもかしこき御裳濯宮川のふるき流をひけるに似たり。かく一判の詞くはふへきよし。此老法師にこひもとむ。凡よろつの道よしあしの證義者にえらひもちふることは。ふかく其ことをさとりしり。其時に秀たるをぬきんて賞するならし。されはいそのかみふりにし代々にも。歌合の判者たる人。そこらの歌仙の中にいとまれらなるものなり。たとひ今の時世に人なしといふとも。烏なき島のかはほりは用てもちふるにたらす。かりにてもさる器にかすまへらるへきにあらす。いはんや蓬のかみをはらひすて。麻の衣にやつれはてにしよりこのかた。すてに廿とせにをよひ。齢いま八十の老の末葉に。朝の露のきえをあらそひ。夕の雲のむかへを待つのみにて。九品上生のゝ

〔三號〕のみのほかは。三十一字の行ゑをも忘れはて。春日のゝ雪まの草。ほのみしことも心のそこにくち。芳野川の岩浪はやくきゝをきしことも。夢の中にて跡もなし。すへて思ひかくへきにもあらさるよし。たひ〳〵かへさい申つかはせしかとも。三輪の山もとふりはへ。十市のさとのとをきをしのきて、厩の便をわつらはし、鳥の跡たえす、たひ〳〵のせめ。のかるゝに所なくて。つゐにやむことをえすかたはかり勝まけをしるしつけ侍程。手ひきの糸のくりかへし。ひらき見しつゝおもふに。一錦色をましへ玉聲をあらそへり。よしあしをわきまへんとするに。老の心まとひやすく。かれこれとかきのふるに。みしかき詞をよひかたし。いま見後みん人をはさらにもいはす。歌の心道の心にはち思ひおそれなけくこと。淺香山のあさはかならす。難波の波のかへる〳〵もかたはらいたき事なれは。耳なしの池のいひ出すふかき意のうち。箱の底にかへしおさむへしと也。穴賢々々。

待みむやいかにとそおもふみわのやま
花を花ともわかぬことの葉

道治叟花押

續群書類從卷第四百十八

和歌部五十三

百五十番歌合

兵部少輔中原遠忠

一番

左　早春霞　明惠上人寄像に献する卅首中ちもしを冠字にて

ちはやふる神代の春もかはらしな霞明行あまのかく山

右勝　柿本法樂三十首の中に

春の色はけさまたわかぬ山のはに松のけふりの立霞かな

左歌。たけあるさまにはみえ侍るを。なれたるやうにや侍らむ。右歌。下句なといひしりてきこゆ。可爲勝。

二番

左

春はまた幾日もあらぬにみ吉野の花さくはかり霞むのとけさ

右勝

をとめ子か袖ふる山に春はきて雲のかよひち霞とちけり

左。春きてやかて花さくはかり長閑ならむ。其詮たしかにあらまほしくや侍らむ。右はおもへる所ありとみゆ。又勝と申へきにや。

三番

左持　山早春

いつしかと波ちしつけき住のえに春日うつらふ武庫の山かけ

右　初春

朝ほらけ霞木たかき神杉のみわの山かけ春や立らむ

武庫の山かけ。みわの山かけ。ともに姿とはよろしきにや。宜爲持。

四番

左

忘すも傍はとひきこ三輪の山やまもとかすむ杉のむら立

右勝　初春霞

いつしかとうら風さえし年の矢の磯への松もうちかすみつゝ

左。杉のむらたち。詮なくきこゆるにやと思たまふるはいかゝ。右。いひしれるさまにや。まさると申へし。よみをける歌を何となくつかへるとなれは。常の歌合の例に病なと云事はすへて申ましとそ思たまふる。

五番

左勝　霞

何となく心も空に成にけり明ほのかすむ春の山のは

右

うな原や八重のしほちは長閑にてかすみ立らむ波の明ほの

左。春の明ほのゝ詮をいひなかされたる。尤よろしくきこゆ。可爲勝。

六番

左　連峯霞

明ゆけとそれともわかす立こめて霞につゝく峯のよこ雲

右勝　松鶯

あたなりと花を思ふや鶯の松よりすたつはつ音をそ聞

右。めつらしくや。まさると申へし。

七番

左勝　朝鶯

今朝そ開花の香ならぬ日かけにもさそはれ出る鶯の聲

右　竹鶯

あかなくに春の日影もにしなるやとよらの竹のうくひすの聲

左。よろし。可爲勝。五もしけさははや。結句山のうくひすと侍らは。はしめをはりなをたしかなるへきにやと存るはいかゝ。

八番

左　春雪

消やらて春風さゆる山姫のかすみの袖にはらふあは雪

右　殘雪

松か枝にいつまで深きしら雪をみねにのこして春かせのふく

左。五もしいますこしおもひたきにや。右。いつまてふかきといひ。みねにのこしてなといへる。よろしと申へし。

九番

左　梅風

にほひくる神のゐかきも春こえてむへ山かせに梅さかりなり

右　山梅

鶯は人をもさそへむぬかゝになれのみきなく春の山里

左。神のいかき。むへ山かせ。此題にむかひて思よせられ侍る趣向。さためてゆへあるへき歟。右。なれのみきなく

春の山さととい へるよろしく聞ゆ。左勝とすへし。

十番

左　梅帶雨

咲そふやみぬ色ふかき夕くれにむめかゝかすむ春雨そふる

右　軒梅

色も香もしらぬたもとになれ〳〵て軒はの梅の花をしそ思ふ

左歌。題の心を思ふに。見ぬ色といはんは頗無念なるへき歟。梨花一枝春帶雨とはへるも。貴妃のすかたたくひなきを眼前に見てたとへいへる心なるへし。右。すかた詞妖艷にして心こもれりとみゆ。可爲勝。

十一番

左　戶外梅

槇の戶に春のあらしのさそひきて梅かゝにほふ明かたの空

右　梅薰夜風

さそひくる立枝ゆかしき梅かゝのにほひも深き夜半の春かせ

右。むめかゝのにほひもふかきとかさねていへる。さまて其詮なくやと覺侍るはいかゝ。かににほひけるなといへるには。すこし心かはるへくや。ゆかしきと云ことは不庶幾樣に侍る歟。されと上句なともゆへ〳〵しく。下句も詞つゝきよろし。左も首尾相應せり。此歌にとりて春のあらしいさゝかことさらめきたるやうなれと。いつれもしゐたる申となるへし。なすらへて持とすへき歟。

十二番

左　社頭梅

色も香もちらさて神に手向はやぬさはありとも梅のしたかせ

右　柳

うちはへて空もひとつに靑柳のいとゆふかゝる春風そ吹

左。第四句すこしいひおほせられぬやうに侍る歟。ぬさにはと有へき歟とそ覺侍る。右。大かたはなひやかに侍るを。とりたてゝ思ひいれたる所みえす。左を勝とすへし。

十三番

左　柳靡

くり返しあかすそみつる春風の心になひく靑柳のいと

右　池柳

春かせにちりなき池の汀をもはらふとそ見る岸の靑柳

春かせのこゝろになひくといへる。よろしきににたり。勝とすへし。

十四番

左　霞中月

おしめ猶ゆくともみえす春はたゝかすみにふくる夜半の月影

右　春月幽

春のよの月なかくしそ伊駒山さこそはかすむならひなりとも

左。心よろしく見え侍るを。いますこしいひおほせられぬにや。此第三句を第一にをきて。腰の五字したひわひぬなと侍らは。心たしかにきこゆへきかと覺侍るはいかゝ。自他稽古のためなれは。思ひよる所を不敵に申侍るはかりなり。いかさま左の勝たるへし。

十五番

左　嶺春月

つくはねや春のよふかくみなの河月もかすみておつるしら波

右　歸鴈

花にのみ心そめしととし〳〵に春しも鴈のかへりゆくらむ

左右ともにともなくきこゆ。持と申へき歟。

十六番

左

たか世より春に別れしつらさをもとへとこたへす歸る鴈かね

右

暮ゆけは雲にやとりやかりかねの數さへみえすかすむ山のは

是又ともによろしきにや。右の五もしくれぬなりと侍らむ歟。

十七番

左　深夜歸鴈

聲たてゝ夜ふかき鴈のゆくゑまてやみはあやなき春の空哉

右　春植物

植そへてなを見はやさん色〳〵に柳も花も宿の春へと

左心あるに似たり。勝と申へし。

十八番

左　栽花

櫻花うへつゝ千世の春までもこの山かけに猶見はやさむ

右　待花

咲ほとを春の日かけにまかせてもなを待わふる花のころかな

山城館下に花をうへて。萬歲不易の春を祝し思へる心珍重々々。第五句我見はやさむ。古語にてなをしかるへく哉。右も心とはよろし。されと勝は左に侍らん。

十九番

左

なかめつゝ花待ほとのなくさめやふもとの霞嶺のしら雲

右　雨中待花

さらぬたに春の日なかき雨の中に花待ほとのきさらきの空

雨首花を待こゝろ。歌の體もおなし程によろしく侍るを。永日の雨中につれ〳〵と待くらさむよりも。みねのしら雲に對してまたむ心は。はれ〳〵しくそ侍らむと。こゝろをよせ侍り。

二十番

左　初花
春風にまかひし雲は消はてゝ明かたかほるみねのはつ花
右　尋花
尋はやいつれとくさく春そともよし野はつせの花の心を
右。おもへる所あるに似たり。勝とすへし。
廿一番
左　見花　大師法樂三十首の內に
高野山花に契りを結ひをきてそのあかつきの春をかもみん
右　花歌の中に
をのつからおさまりぬへき世中の花ものとけき春にみゆらむ
左。めつらしき法樂にて。二尊の出世までおもひよせられたれは。大かたの花に侍らし。勝にこそ侍らめ。
廿二番
左　禁中花
なかめやるみはしの櫻かけたかく雲ゐはるかににほふ花かな
右　夜花
たかためかにしきをりかくさほ姫の明るよ待し山のさくら戸
雲ゐはるかに匂ふ花哉といへる。風情ある心ちす。
廿三番
左　三輪山
尋はや人にしられぬ花も世になへての春をみはの山かけ
右　山花
月にのみいとひてみつるしら雲の花にな吹そ春の山風
左。三輪山をしかもかくすかとよめるをとりて。たとひ人にしられぬ花なりとも。なへての春のたくひに。なを尋みんといへる。心ふかく聞ゆ。可爲勝。
廿四番
左　山家花
山里の櫻はをそきこの比や宮こは花のさかりなるらむ
右　遠望山花
咲つゝく嶺もふもともしら雲につゝむはかりのみよしのゝ山
左。山のさくらはまたさかりなりといへる。本歌の心を引たかへて。宮こは花のさかりなるらんと侍る。おかしくや。
廿五番
左　杜間花
駒なめて杜のした草すさむ日のゆく手におしき花をみる哉
右　花漸盛
芳野山ふもとは花のおく深き櫻にのこる峯のしら雪（雲イ）
左。第三句思ひたくや。右。雪ふとしたるやうにきこゆる歟。持とすへし。
廿六番

左　花未飽

いく春をしつのをた卷くり返しあかぬ心にみよしのゝ花

右　花忘老

なれ〳〵し花にや老を忘きてふるの山人春をへぬらん

右。歌からつよくきこゆ。可爲勝。

廿七番

左　春日法樂花十首の中に

春日山しつかなる世の春にあひて花さく比の宮めくり哉

右

いく春とさしてもいはしみかさ山花もときはの松の下かけ

春日山。三笠山。いつれとわきかたくは侍るを。花もときはの松のかけには猶立より侍らん歟。

廿八番

左

やへさくらならの都の春かせにさかり久しく吹つたふらん

右

あけぬとや八聲の鳥もしろ妙の花に空音の相坂の山

同科と申へき歟。

廿九番

左

春をへてこの山陰にさくら花あかぬこゝろにうへそへてみん

右　明魚十八に詠する中　はなゝを冠字にて

花な思ふ事に心をつくすかなかすみも雲も雨もあらしも

左。まへに此たくひとも見え侍れは。めつらしけなき心ちす。右をまさると申へし。

三十番

左　やもしを冠字にて

山里も大かた春のならひとて松にも花とみゆるしら雪

右　ふもしを冠にをきて

舟のうへ波ちのとけき春の日にいく浦つたひ花をみつらん

又右の勝たるへし。

三十一番

左　於米田宮法樂十首中に

心あてにみれはこそあれよしの山たゝくも雪の花の明ほの

右　幽居花

うつろはぬ色にたくへて松の戸の花も世にふる春やとふらん

右。ふとその心えかたきやうに侍り。左。おかしくみゆ。

三十二番

左　藤花

春風のたかねの雲は今朝消てすそ野にふかき花の白雪

右　落花風

うらみしな花なき里に散花をさそふはかせの情ならすや

花を雲雪に見なし侍るはつねのとなるを。これはすかたとはいひしりて其興ありとみゆ。又さそふはかせのなさけならすやと侍るも。こゝろすてかたけれは持とす。

三十三番

左　庭落花

なかめきておしむ心も春深く消すも庭の花のしら雪

右　澤雲雀

かけかすむ澤邊の水にはゝ木々のあるにもあらてひはり立空

右。はゝきゝ。そのよせなくや侍らむ。左。おかしくきこゆ。第二句心のとあるへきかとそ覺侍る。

三十四番

左　庭菫菜

なこりあれや野となりてたに菫菜咲庭も籬も春のふる郷

右　桃花宴

行水にもゝよの春をせき入てみちとせなれん花のさかつき

右。百世の春をといひて。三千とせなれんと侍る。いますこしとたかひたるやうにや侍らむ。左の春の故郷とはいへる。かのあすよりはしかの花園まれにたにたれかはとはむ春のふる郷と侍るは。春のためにも故郷と成ては誰かとひこむとなり。是は野と成て後も。猶春は春にて猶名殘有けりといへる心。いとおかしくこそ侍れ。勝とすへし。

三十五番

左　藤花風

紫の藤の島ゐの春かせに日かけうつろふ花さかりかな

右　末松山

かすみつゝこえゆく波にいつしかと春の契りのすゑの松山

藤の島井。すゑの松山。歌にとりては勝劣なき歟。

三十六番

左　暮春霞

したへともとまらぬ春のならひには霞のせきの何のこるらん

右　名所暮春

くれ行なを山ふかくみよし野や殘る花にも春なしたはん

又持とすへし。

三十七番

左　暮春水

よし野河春もとまらて行水に散ていくかの花のしら雪

右　暮春鶯

春は猶かすむかきりを鶯のこゑのうちなるゆふくれの空

左。きえていくかのみねのしら雪をおもひよせられたるにや。おかしからさるにあらす。

三十八番

左　更衣

山姫のすそ野の木々のあさみどり霞の衣たちやかふらん

右　岡卯花

夕月夜なをかけみえてなかのへの里の垣ねにのこる卯花

右。すかたおかしと申へし。

三十九番

左　葵

色かへぬ松の尾山のあふひ草二葉に千世をかけて契らん

右　郭公

花散しかけも忘て水鳥のあをはの山になくほとゝきす

右。こゝろありけにみゆ。

四十番

左

やよいかにとふとまれの郭公かへる山ちにこゑなおしみそ

右

たちはなの花に鳴音もかほりきて山郭公軒ちかく聞

右むすひ句つまりてそ聞え侍るいかゝ。左勝へきにこそ。

四十一番

左

又もとへあやめそにほふ夕かせの軒はにちかき山ほとゝきす

右　月前郭公

またれつる山郭公一こゑの空よりいつるゆふ月夜かな

右歌。ことはのつゝきとゝこほる所なくして。姿きよけに餘情ありとみゆ。尤可爲勝。

四十二番

左　初聞郭公

聞そむる聲そさやけき郭公月もくもらぬ山をいてつゝ

右　三輪法樂三十首の中に

いつれにか音はむつましき郭公軒のたちはな庭のうの花

月に契れる時鳥はなをきかまほしくや。

四十三番

左　同法樂三十首の中に

郭公鳴一こゑはさやかにも空さへはるゝさみたれの比

右　[illegible]宮法樂十首の中に

夏の夜やねぬに過つる村雨のはれゆく月に山ほとゝきす

雨首さしたる勝劣なくや。

四十四番

左　明恵上人に獻する中いろしを冠字にて

いつちにか鳴てわかれし有明のつれなく見ゆる山郭公

右　夜郭公

時鳥いつはありともね覺して今一こゑとおもふ一こゑ

これも持とすへし。

四十五番

左　聞郭公　高野大師法樂の中に
あはれいかに世をのかれても音をや鳴たかのゝおくの山郭公
右　長岡寺法樂十首の中に
郭公今そきなかむさ月まつ花たちはなのむらさめのやと
左。めつらしく聞ゆるにや。

四十六番
左　旅宿時鳥
かへるにはしかしとのみそ夕露の草のまくらをとふ郭公
右　早苗
誰しかも霜をくまてと岡のへにわさたのさ苗うへてみるらん
右をかちとす。

四十七番
左　明恵上人に法する中かもし冠字にて
風かよふ山もあを葉の夏衣すそ野の小田にとるさなへかな
右　五月雨
はれまなくふれは中〳〵雲水も空にやたゝむさみたれの比
右。一ふしありと見えたり。

四十八番
左
この比はせみのは衣五月雨にほすまもなしとねにやたつらん
右　續五月雨
五月雨の日數ふりゆくかひかねやさやにもみえぬさやの中山
左右ともにいひかなへられたり。可爲持。

四十九番
左　五月雨久
さみたれの軒はにかゝる夏引のいとうちはへて幾日ふるらん
右　夏草滋
草深き夏野わけゆく夕くれは花こそみえね秋かせそ吹
左。軒はにかゝる夏引のいと。いともおほつかなくきこゆ。右。花こそ見えね秋かせそふくなと。いひしりたる姿にや。勝とす。

五十番
左　夏野
秋はいつねにかたてましはつせ山すそ野の草に鹿そこもれる
右　村夕立
みるまゝにてる日へたつるむら雲もさとわけて行夕立の空
左。はつせ山。詮なく聞ゆるにや。但本歌なとも侍るやらん。右もさとわけてゆくといへる。其とはり如何、なすらへて持とすへし。

五十一番
左　夏　明恵上人に法する中かもし冠字にて
歸るさの家ち忘ぬあなし吹弓槻かたけの夏のひくらし

右　夏雨

五月雨にもくつしからむこもり江や雲水たかしをはつせの河

左。其所に望ての興さそ侍らん。右。をはつせの河とのみ申ならはしたれは。をもしとの文字とくはゝりて。みゝなれぬ心ちす。さためて作例そ侍らむなれとも。いかさまにもつまりてよろしくはきこえす。しはらく負にても侍れかし。

五十二番

左　鵜川

月にゆく情もしらて鵜かひ舟かへる波ちの川つらの里

右　庭螢

結ふ手のしつくも涼し夏むしのひかりうつろふ庭のやり水

歌のしな又おなしと見えたり。

五十三番

左　夕顔

あやしくもたそかれ時にときしらぬ雪そ空めの夕かほの花

右　松下泉

松風の音も夏なき岩ねよりわきて泉のいとゝ涼しき

右。まさるへし。

五十四番

左　納涼

すゝみきてたゝまくおしき夕くれの道たと〳〵し衣手のもり

右　夕納涼

涼しさの夕になれは夏の日のめにみぬかせも空にふくらん

左。まさり侍らん歟。

五十五番

あつき日にしゐて待つる椎柴の夕すゝしき山のした風

右　風告秋

いつしかと夏の衣の一重山けさ身にしみて秋かせそ吹

納涼の歌おほくめなれて。一重山の秋かせ。めつらしくおほゆ。可爲勝。

五十六番

左　秋　明恵上人に献する中 きもしか題字にて

聞からにけふはさらなる荻のはの風をやとりの秋やたつらん

右　初秋

露もまたをきあへぬ秋の夕とややとろもうすき袖の月かけ

右。下句なと優美。可爲勝。

五十七番

左　初秋夕

夏衣また一重なる夕より秋をしらする袖のうへの露

右　七夕

うらむなよ稀にあふせの月も日もかはらぬ中のあまの川なみ
左。夏の歌にもかやうにはよむへきにやといふきも侍らむ歟。右。心はあらはにきこえ侍るを。五もしいますこしいひおほせられぬやうに存るはいかゝ。持とすへし。

五十八番

左　七夕萩

ほしあひにともすほかけもそよさらに空かけて吹おきの上風

右　織女待夜

待もうし逢瀬にかけは天河くるゝ夜いそけかさゝきのはし

ほしあひにともすほかけは。乞巧奠のとゝきこえ侍る。そよさらにとつゝきたる詞。よせもなきにや。さゝの葉のみ山もそよに。いてそよ人をなといへるも。おなのさゝはらの縁にこそ侍らめ。くるゝよいそけかささきのはし。ことはりかなひてや侍らん。

五十九番

左　七夕霧

心あれやこのほしの(あひ脱歟)牛天にたちもへたてぬ天の川きり

右　七夕月

七夕の契りそめけんはしめをもとはゝや月に秋のよの空

左右ともによろしく見え侍り。右の下句とはゝやいかに夕月の空なとはいかゝ侍らん。不可如沈吟乎。

六十番

左　古郷萩

秋よいかにたれうへをきし故郷の庭にはかれぬおきの上風

右　萩

高圓のむかしをとへははきか花おのへの色に秋かせそふく

庭にはかれぬといへる。おもへる所ありと見ゆ。

六十一

左　女郎

たのましな千種の花にをみなへし心おほくやなひきあふらん

右　岡邊薄

秋風に夕日うつろふ袖みえてをはな露しくをかのへの里

秋風情ありてみえ侍り。

六十二番

左　草花

秋かせのたゝまくおしき色をなと花の千くさに織いたすらん

右　叢露

露ふかき床の山かせはらふよの草むらとにうつら鳴なり

雨首かもなくふかもなし。持とすへし。

六十三番

左　散朱田法楽十首の中に

いつのまに秋はきぬらむ花あれは入にし山をいつる月かけ

右　野外鹿

あはれしれ露の恵みをかすか野の深きちかひに鹿やすむらん

左。歌からも心も美麗と申へし。右のしかもすてかたくや侍らむ。五もしはあはれさそと侍らむかとそ覚侍る。可爲持。

六十四番

左　月前鹿

秋の月ふけゆくかけもしらかしのみ山かくれにをしか鳴なり

右　夕月

秋きぬとゆふはかりなるみか月の山もほのかにくるゝかけ哉

ともに又すかたとはよろしきにや。

六十五番

左

ほのかにも先かけみせてはつ秋のゆくゑはろけき夕月夜哉

右　山月

うき身にはをは捨ならぬ月みてもなくさむ比や秋の山里

右歌。なくさめかねつと侍らは。本歌の心にかなひ侍らん歟。又うき身にゝと有て。月みてはとあらは。なくさむ比や秋の山さとにて。ことはりかなひ侍らむ歟。左の歌ははつ秋のといへるか。さゝへたるやうに聞えて。ことはりやすらかならぬにや。たゝ入ぬれとなと侍らは。ことはりよくきこえむ歟。此番持たるへし。

六十六番

左　大師法樂の中に

いつか身の憂世を秋のよそにしてたかのゝ山の月をみるへき

右　聖廟法樂三十首の中に

ふしのねの雪より出る月かけのこほりをしける田子のうら波

高野山。富士のね。とり／＼に見え侍るを。たこのうらなみ立そひて見所有と申へきにや。

六十七番

左　野月

みかさ山月も光をさしかはす花の千くさのかすかのゝはら

右　林月

色見えて林にしけきことのはも月のためとや秋はなるらん

左右おなしほとにや。

六十八番

左　杣月

あふきみよわかたつ杣に秋をへてをひえのみねに（のイ）有明の月

右　江月

雲もはれ塵ものこらぬなみの上の玉江の月にしくかけそなき

右。きら／＼しく聞ゆ。神妙の風骨にや侍らん。

六十九番

左　瀧月

白妙におちても淸き瀧のいとのよるとはみえぬ月のかけかな

右　池月

空かけて秋の夜ふかき池水に心へたてすすめる月かも

右。勝たるへし。

七十番

左　浦月

をしてるや難波のうらの秋の月身をつくしてもあかぬ空哉

右　浦邊月

あかすのみ海士のたくなは長夜も月みて明す秋のうら波

左歌。難波のうらの秋の月といひて。身をつくしてもあかぬと侍る。よろしくきこゆ。可爲勝。空はかけにて有へき歟。但初一念串となり。時々沈吟あるへき哉。右も歌からともなく見え侍り。

七十一番

左　海上待月

心なきあまともいはしもしほくむ袖しのうらに月を待よは

右　木間月

みわの山人にしられぬ雪かとも杉の木のまにみつる月かな

左。とはやすらかにして心あらはなり。可爲勝。

七十二番

左　雨夜月

山の端にむら雨はれて塵もなくはらふあらしのいさよひの月

右　故鄉月

花のみか志賀の都の秋の月むかしにかへるかけなしそ思ふ

左右おなしほとにや。

七十三番

左　社頭月

神もさそあかぬ心にみつかきの久しき代よりすめる月かけ

右　松間夜月

露しくれそめすはありとも秋のよの月にうつろふみねの松原

雨首ともにすかたことはよろしきにや。

七十四番

左　水邊月

水とをく空すみのほる秋の夜の河邊淸くも月そ滯くる

右　蕭寺月

たくひなき法の水とや影とめて山しなてらに月もすむらん

法相の宗門他にとなると。あふくへきにこそ。尤可爲勝。

七十五番

左　月の歌あまたよみける中に

雲きりもはれつゝ瀧のしらいとをよりはへ月にさらす夜半哉

右

あかす我みねの松はらすむ月のかけに千とせの秋もへぬへし

左歌。夜半かなといへる。おもひたくや侍らん。右。山舘の秋の興に心をすまされたるなかめさそ侍らむ。京極の黄門小倉の別業をしめをきて。軒はの松そなれて久しきとよめるもおもひよそへられ侍り。勝とすへし。

七十六番

左

たれすみて草の庵のうちまてもとふ物とては月のもるらん

右

たかれゆく雲は嵐に消はてゝうす霧のこる月の下道

左。心すみたるさまには侍れと。右のうすきりのこる月のしたみち。なをまさるへくや。

七十七番

左

一かたにいとひははてしうき雲は晴てそ月の光そひ行

右

月はわか心にやとす影なれはこの世の後のやみもあらしな

左。首尾相應のすかたなるへし。右。又其心深切なり。持とさため侍るへし。

七十八番

左

なをそあかぬあたに咲なす花をたにたえぬなかめの久方の月

右

今年はやなかはは過ぬみか月の弓槻かかけに秋かせそ吹

又持とす。

七十九番

左

君か世に月もくもらて八幡山先わか國とてらすかけ哉

右

朝ほらけ河せに殘る月かけにこきわかれゆく宇治の柴舟

是もおなし科にや。

八十番

左　月前扁舟

あさほらけ波まに殘る月かけををくりて出るあまのつり舟

右　殘月

心をもたれとめさらむ秋ふかきすまの關屋のあり明の月

右歌をよろしと申へし。

八十一番

左　月照瀧水

月影も夜はすからにおちそひて瀧のしらいとたえすみえけり

右　月契秋

名をかさね光もさそふ世々をへて秋の契りの長月の空

左は第二句あなかちに共詮なく。右は第一句ふとしたる様にきこゆ。可爲持。

八十二番

左　暮秋曉月

秋もはや一夜はかりをたま篠のすゑの丶露にあり明の月

右（前惠上人に與する中むさしを冠字にて）

むくらおひ淺茅も茂る古郷の露もはらはて秋やくれなん

左。秋はや一よになりては。有明の月もあらしといふ難もそ侍らむ。しはらく右を勝とす。

八十三番

左

なかめやる心や深くそめつらんしくれぬさきのみねの紅葉は

右　秋夕

世をうしと閉し蓬か門なれはゆふへの秋に身をもまかせし

右こゝろありと見ゆ。

八十四番

左

雲の色かせの音まてあちきなく夕の空や秋にうらみん

右　武藏野

行てみん限もしらす秋はたゝ見なから花のむさしのゝ原

右又勝たるへし。

八十五番

左　初鴈

月もいさ北なるほしのかけたかく鴈かねわたるよこ雲の空

右　田家聽鴈

秋の田を鴈かねさむみね覺していほもる賤はいかゝ聞らん

兩首のかりかね。田家の秋感はふかくきこゆるにや。左。殘星數點鴈横塞なといへる心にや。されと北なるほしと侍るは。北辰ときこえ侍れは。さしあたりたる所用なくてはつとさらこと〳〵しくや侍らむ、との次に申はかりなり。

八十六番

左　野外虫

草の戸を今はさせてふ秋のよにたれまつむしも鳴あかすらん

右　籬下聞虫

ゆふくれのまかき露けき軒はより松かせさむみまつむしそ鳴

松むしのなきかはしたるこゑ。いつれともきゝわきかたくや侍らん。

八十七番

左

月の行かた野のさとに音すみて衣うつなりよやふけにけん

右

はつせめや花にもそめし月草のうつし心の衣うつらん

月のゆくかたのゝ里といへるわたりさもときこゆ。勝たるへし。

八十八番

左

衣うつ音もかすかに秋かせのさそふかたのゝ里か月影

右　遠擣衣

山鳥のおのへへたてゝ衣うつをともあらしのまとをにそ聞

このかたのゝさと。さきのつかひにはをとれり。山とりのおのへへたこゝといへる。隔林髣髴聞機杼。知有人家在翠微と云詩の面かけもうかひて興を催し侍り。爲勝とす。

八十九番

左　秋　明魏上人に談する中しもしを冠字にてよかおとかへしてよみ侍る

しのひきてすむ草のとか野をみれは露のよすかに誰結ひけん

右

秋きりは立へたつとも山風の紅葉はなかせさほの川なみ

左のまけにこそ侍らめ。

九十

左

時雨つる軒はの木々のはつ紅葉立田の山も今かそむらし

右　山紅葉

立田姫秋の思ひの色にいてゝくれなゐふかき嶺の紅葉は

此番ともにうたからよろし。持とさたむ。

九十一番

左　庭紅葉

この比の四方の紅葉のさかりとは庭の一木の色にしるかな

右　殘紅葉

泉河をちの紅葉のこすゑをもわたる柞のもりのしたかけ

左四方の紅葉のさかりをも庭の一木の色にはかり思へる。さもやときこゆ。とに結句なといひしりてみえ侍り。

右又心たくみにして詞相應せり。なをまさりてや侍らん。

九十二番

左　夕紅葉

これも又入逢のかねに散やせんけふは紅葉の色そうつろふ

右　紅葉渦水

山河の秋の木のはのくれなゐにうつろふ波もうちしくれつゝ

左はこれも又いりあひのかねにちりやせんとは、かの能因か春の夕くれの歌を思ひよせられたるにやとに見え侍るを。今すこしことたらぬ様にや侍らん。右は眼前の景氣おほえて、ことはのつゝきもよろし。尤可爲勝。

九十三番

左　菊籬月

山陰やまかきの菊の下水に千とせをうつす長月のやと

右　明叔上人に試する中せもし冠字にて

せきて見ん山の下水なか月の菊も紅葉もかけそなかるゝ

左はるかにまされりとみゆ。

九十四番

左　暮秋紅葉

秋くれぬ野への千くさの後までもみねの紅葉の色そ猶みん

右　暮秋鐘

秋やけふかへると告て入相の聲もそなたのにしの大寺

此番持にても侍れかし。

九十五番

左　九月盡

物ことの秋のあはれもあらし山けふをさかのゝゆふくれの空

右　時雨

暮ていにし秋をやしたふ袖の上にけさから衣しくれきにけり

左右歌。作者沈吟な凝されたるにやとみえたり。よき持にてそ侍らむ。秋をやしたふは。秋をしたへはとあるへきかとそうちおほえ侍る。いかゝ。

九十六番

左

冬の日はさらぬもさひし山かけのしくるゝ雲にあらし吹聲

右　落葉

山里の雪には跡をつけすとも木のはふみわけ問人もかな

左。むねとせる第二句。心ゆかぬやうに見たまふるはいかゝ。右。第一第三句たゝ詞にてや侍らむ。ことに第三句のはてともに侍るも心へす。此歌にとりては。してあらは心かなふへきにや。いかさま持とすへし。

九十七番

左　曉落葉

冬の夜の月はつれなき山かせに殘る木のはやちりてみすらん

右　朝霜

のこれ猶霜の花のゝあさ日かけにほへる色もさらにあかねは

此番思へる所有とは見え侍れと。左のむすひ句。右の五もしおもひたく侍り。なすらへて持とす。

九十八番

左　篠霜

日かけさすかたえは露の玉さゝにをく朝霜の見えてすくなき

右　寒蘆

霜まよふあしのかれ葉をよすかにてなみにかたよる水鳥の聲

又勝負なかるへし。

九十九番

左　寒月

はらひかねさむきよな〳〵袖の上に霜をきそふる月のかけ哉

右　明空上人に和する中かもしを冠字して

かくらくのはつせのひはらふる雪のくもるなみれは入相の空

左歌のさまさひてきこゆ。勝とす。

百番

左　朝雪

白雪にけさ跡つけてとふ人をうれしとやいはん厭ふとやみん

右　山雪

春ちかきしらゆふ花や榊葉に雪ふりかゝる天のかく山

左まさるへき歟。五もし庭の雪にとあるへき歟。結句もいとひてやと侍らはや。

百一番

左　松雪

友と聞松のあらしもうつもれて雪のしたなる柴のかりいほ

右　明空上人に和する中たもしを冠字にて

高雄山木すゑの秋の日かすふる紅葉はみねの雪にかへりぬ

左の勝なるへし。

百二番

左　古寺雪

一とせの花も紅葉もはつせ山雪におとろくいりあひの聲

右

いらかをもみかきそへけりはつせ山出る日かけの雪のしら玉

これも又左まさるへし。

百三番

左　雪の歌あまたよみけるうちに

はつせ山花より月の日かすふるおのへのかねにつもる雪かな

右

世はなへてさむきもしらす埋火のおきてそみつる庭のしら雪

左。花より月の日かすふるといへる。いかにそやきこゆ。

右。おきて見〔[illegible]〕つる庭のしら雪といへる。かた侍らん。

百四番

左

あかすむかふよのまは月の光にてあくれは花とみねのしら雪

右

かきくもるひ原からへも晴そめて雪をかさしのをはつせの山

左。まさると申へき歟。

百五番

左

さらぬたに冬そさひしさ積りぬる庭もまかきも雪の山里

右

鳥の聲かれの音さへ雪のうちはしつけき森の山のしたいほ

左。上句いますこしいひおほせられすやときこゆ。右。さ

ひしきさまけにとおほゆ。

百六番

左

しら雪の積る光やむは玉のくるゝよしらぬをちこちの空

右

見るまゝに松のみとりも年ふかく積るやいつれいつれしら雪

右。下句かしかましきやうにや侍らん。左を勝とす。

百七番

左　積雪

けぬかうへにふりまかひつゝ白雪の深きみ山はやむ時そなき

右

ふしのねは田子の浦波たゝぬ日もあり共雪のはるゝまやなき

左右ともに思ふ所をいひかなへられたり。持とす。

百八番

左　夜雪

しら雪に明る空かとおとろくやよふかき關の鷄の聲

右　名所雪

雪よけさわたしもはてぬ岩橋をいかにふりつゝかつらきの山

左を勝とす。

百九番

左　雪中興遊

しら雪のうち野のはらに思ふとち駒のあしなみみつるけふ哉

右　深雪

山たかみけぬかうへにもふる雪に猶ふかゝれとかゝるしら雲

こまのあしなみはやくかち。鞭あけ侍りなん。

百十番

左　山家雪

さえしよの月は入ても松の戸に千さとくもらぬ雪の明ほの

右　海邊松雪

春秋のうらはの空も忘草おふてふきしの松のしら雪

おふてふきしの松の雪よろし。

百十一番

左　氷

氷行ほとそしらるゝよな〳〵のみきはに遠きをし鴨の聲

右　千鳥

もしほくむ友よひかはすあま人の袖しのうらにたつ千鳥哉

左。こほりゆくよをへて。みきはのをし鴨の聲とをさから
む。さこそときこゆ。

百十二番

左　炭竈

あさな〳〵雪のうちにもすみかまの煙はたえぬをのゝさと人

右　歳暮近

大かたの世のとわさもくる春をひとつにいそくとしのくれ哉

　兩首しゐて勝劣なき哉。

百十三番

左　歳暮雪

なすともなくてふりぬるしら雪の積れはとしの暮をしそ思ふ

右　初尋縁戀

誰にわれもすの草くきそれとしもはつかに戀の道は尋む

　左。第一二句の第三句にいひかけたるわたり。いかにそや侍るらん。右。しはらく勝たるへきにや。

百十四番

左　忍戀

數ならぬ身をしるあめにしのふ草しけき戀ちやまたき絶なん

右　待戀

なかめわひをかへの里にくるゝ日の雲のはたてに松風の聲

　左をかちとす。

百十五番

左

とへかしなまつに千年はふるとこそ思へは人のあす知らぬ身を

右

待わひぬさていかならむ我やとの夕へたつる空のうき雲

　持とすへし。

百十六番

左　明叔上人に送する中くもしを冠字にて

くるゝ事も待としなれは久かたの空をいく度うちなかむらん

右　待空戀

あさかほの露のまをたに契らはやまつに千とせをふる思ひ哉

　左。うちおもへる所をいひつゝけられたる。然るへし。

百十七番

左　初祈戀

思ひあまりけふより神にゆふ襷かけてそたのむ人のつれなき（ナ歟）

右　不及戀

戀そうきをよはぬ物をふしのねの雪も思ひもきゆる日そなき（になし歟）

　持とすへし。

百十八番

左　初逢戀

今夜しもいかなるすちに黒髪のなかきよかけて契りそめけん

右　逢戀

我袖はいつかほすへきあふよはのうれしきにさへあまる涙よ

　ともによろし。持とすへし。

百十九番

左　夢逢戀

思ひねの夢ちへたてす逢夜半に我もみゆらむ人にとはゝや

右　明恵上人に涙する中にもしを冠字にて

〔此間闕〕

まさると申へくや。

百二十三番

左　遠戀

憂たひに猶思ひやるすまの浦をいせおの蜑のとふかひやなき

右　隱戀

人しれぬやとりをとへは深るよの闇はあやなくたとり侘つゝ

左。源氏物語かやうにたしかにとりもちゐたるたくひも侍り。あなかちあしとにはあらねと。こひねかふへきにはあらすや侍らむ。されと遠戀の心もよせありて。すてかたくやとて爲勝。

百二十四番

左　恨

つく／＼と何を恨の種ならんと思へは人のうきにそ有ける

右

思ひねの床は海なるさよ千とり我うらみにや鳴音そふらん

左。心とはよろしく。下句なとも古歌のすかたをひたり。

右。めつらしきを〔マヽ〕所みえす。尤左の勝たるへし。

百二十五番

左　欲絶戀

うらみわひかけてもうしや秋風にたえなは絶ねさゝかにの糸

右　寄風戀

こひすれは身にしむ音とならのはのなれし軒はの山風もうし

右。軒はの山其詮なくや。ならのはもさこそ侍らめなれと。松杉なといへるやうには聞えす。左はたえんとすと侍る。題の心すこしかなへりとや申へからん。

百二十六番

左　寄雨戀

あはれしれ雨ともみえし面影の戀の山ちにのこるむかしを

右　寄月戀

くちねたゝ涙ととふ夜半の月なかめわひてはしほるたもとを

左。巫山の神女の心にや。下句つよけに見えて。上句に相應せりともおほえ侍らぬはいかゝ。右も袂をといへる。このたくひも侍れと。此歌にとりては。たゝよと侍らはやとそ思たまふる。荒涼ゝ。

百二十七番

左　寄草戀

消やらてちきりあさちのしら露に身の秋ふかき年そへにける

右　寄關戀

名のみして行てはかへる相坂の關のしみつにかけもいつみん

左。契りあさちのといへる。すこしにくいけしたるやうに

や侍らむ。しゐたる中ことなるへし。身の秋ふかきといへるわたり。すへて上下いひしれるさまなり。爲勝。

百二十八番

左　寄獣戀

いかにして一よかるもを枕にもふす猪の床のいをやすくねん

右　寄鏡戀

いつしかとかはる心のます鏡かけても見しと何いとふらん

左のふする。右のますかゝみ。ともに見所ありておほえ侍る中にも。左はいますこしまさるへくや。

百二十九番

左　戀鐘

別にもまつにもつきぬうらみにはたえてもきかしかねの聲哉

右　浦松

あかすなを手向やをかむ色なくてつもりのうらの松のとのは

左又可爲勝。

百三十番

左　洞松

露時雨もみちの洞のみねの松そめぬ色まて秋の一しほ

右　鶴

子をおもふ霜よもさそな興津洲に鶴の毛衣かさねてもなく

持とすへし。

百三十一番

左　鶴洲立

さえわたる霜よの月やかさぬらん興津しらすの鶴の毛衣

右　曉夢　住吉法樂百首の中に

かねてその恵もしるくみつるよの夢はまさしき神の告かも

右。靈夢たひかさなり侍ること聞をき侍り。希代のことにや。此道數寄深切の志。神感さこそと測おもひたまふるも恐おほく侍る。されと歌もさる躰のとと。ふとうちおほえ侍にまかせて。勝の字をつけ侍るへし。左も霜よの月やかさぬらんといひて。おきつ白洲の鶴の毛衣といへる。尤よろしきにや。

百二十三番

左　晩鐘

あすもありと夕の鐘をつく〲と大方の世にたのむはかなさ

右　旅宿夜雨

情しる旅のあるしそ草の庵にかゝる雨夜の物かたりして

左まさるへき歟。

百三十三番

左　春秋野遊

かすか野や秋は千種の花にめて春はわかなにとしをつむかな

右　名所浦

すまのうら波ちはるかにしらむよの明石のとよりいつる釣舟
此番ともによろしくみえ侍り。持とす。
百三十四番
左　名所橋
誰もさそきちの橋のかけてたにやすく渡らむ浮世とはみし
右　名所松
との葉の道に高砂すみの江のむかしをとへは松かせそふく
左可爲勝。
百三十五番
左　瀧水遠流
石はしる瀧の水上しら雲の天の川せの波や落らん
右　山家鳥
山ふかき月かけさむみ籠のうちの鳥をもはなつ心しらなん
左右ともにもろこしの古事を思へり。宜可爲持。
百三十六番
左　田家
朝日かけ鶴そなくなる秋ふけて霜よやさむき小田のかりほに
右　幽居
たれかすむをのゝ山陰ふみ分ておちはにたとる露のかりいほ
左。結句にもしよはく聞ゆ。たゝかりいほと侍らん歟。右。
源氏の物語をへつらひとれる様にて心ゆかす。但たゝよめるにも侍らむをかく思よれるや。心きたなく侍るらん。
勝負はなかるへし。
百三十七番
左　舊寺　釜口愛染王法樂
えにしあれや長岳寺の法の水結ふいほりちほとちかき身は
右　明惠上人に献する中ともしを冠字にて
とにかくに世は出かたしさらはいさなをき心の道をまもらん
右。とにかくに世は出かたしといへる。一ふし有ときこゆるを。さらはいさといへるや。無下にたゝ言葉のやうに侍るらん。おなしとなからいさゝらはと侍らは。かやうにはきこゆましきかとおほえ侍る。いかゝ。宜在沈吟。よしさらはゝ詞もまさりて心もまさるへき歟。左の寺ゆへある所にや。めつらしくきこゆ。可爲持。
百三十八番
左　曾米田宮法樂十首中に
山里はいつもさひしと聞なからさらにゆふへの松かせのこゑ
右　明惠上人に献する中みもしを冠字して
見つゝこし行ゑはるけきあし引の山よりうらにかゝるしら雲
又持とす。
百三十九番
左　或人の七年忌にありしを冠字して

あはれ世になこりや思ふはゝそはら散にし秋も春のよの夢

右　同ゆもしを冠字にて

ゆかり思ふ秋そかなしきむさしのゝ草葉の露を袖にかけつゝ

右歌。心あはれにきこゆ。可爲勝。字頭なくは。たゝなこりおもふなと侍らは。ゆかりの心はをのつから侍らむ物をとそおほえ侍る。

百四十番

左　同くもしを冠字にて

雲きりもはれぬ思ひの夕時雨七とせめくる空やほとなき

右　或人追善あもしを冠字にて

あはれいかにとのは草のしら露も消てみぬ世の秋をとふらん

ともによろし。可爲持。

百四十一番

左　述懷

ふかき山遠き浦半に出る身も名をとけてこそ世はのかれけめ

右

わかの浦の鶴にましはる鴨のあしのみしかき心のふるとの葉

右歌。頗可謂異風乎。左歌。可爲勝。下句名とけて後そ世はのかれけんとあるへきかとそ覺侍る。いかゝ。

百四十二番

左

なれなれん月と花とに身をいとひ世をうしとのみすてぬ限は

右

たのもしな五の濁ある身にももとの心の水はすむなり

右。いさゝかまさると申へき歟。

百四十三番

左

あはれとも神にしるらん和歌のうらのとのはとにくたく心を

右　述懷非一

しれかしな生れぬさきの身の上もこの世の程にみゆる後の世

右。三世了達の心さそ侍らむ。かちと申へし。

百四十四番

左　獨述懷

愚にもたすわさなくて年をへはたかとかとてか誰をかこたん

右　懷舊

たらちねのあはれ古にしとのはゝかれなて殘る身のいさめ哉

左。すこし平懷なるすかたにや。右。可爲勝。

百四十五番

左　寄月懷舊

みるまゝに古きすかたをしるやとて月にもいのるやまと言葉

右　遊女

さためなく波の枕をかはしまやめくりあふとも誰かたのまむ

左右おなしほとのとにや。

百四十六番

左　釋教

聞てたにまたふみもみぬ法の道の佛に遠き身をいかにせん

右　神祇　聖廟法樂十首中に

梅の花一えたをりて神はいかにみし世の法の跡したふらん

右。無準和尚の夢裏入給へる心にや。左。猶とはりやすらかにきこゆ。爲勝。

百四十七番

左　六師法樂の中に

法のため神も契りやおくふかみたかのゝ山にしめしみつかき

右

すなほなる道はかはらてみかさ山神のめくみも人の心に

持とすへし。

百四十八番

左

あふきみて出る日毎に天照す神のめくみそさらにたうとき

右　寄神祝

神もしれ我すむさとはみわの山ちかきをえにしあふく心を

又持たるへし。

百四十九番

左

春日山あゆみをはこふ月つきに神のめくみを猶あふく身そ

右　祝言　御神事執行の時御祈念にて一續中に

神と君の契りもいくよみかさ山もれぬめくみのすゑか末まて

両首共々にはみえ侍るを。右はなをかすならぬ身にたのもしく侍る思ひなしにや。心ひき侍るなり。

百五十番

左　鞍馬寺法樂十首中に

治れる時いたりてやくらふ山やまもうこかぬ世をはみてまし

右　寄世祝

おさまれる世に相坂の關の戸もさゝぬ往來をうたふ諸人

左右歌のさま。さしたる勝劣なくや。

抑此歌合勝負をつけよと侍る。かゝるとたひ／＼に成ぬるうへは。いなひはてんも。いまさらなるやうにて年月過侍れは。初一念をひるかへさす。思ふ所を書つけ侍り。題の次第前後せる所有とや。書あらたむへしと有しかと。あなかちにくるしからすやと申て。そのまゝにしるしつく。さき／＼もこれにほゝ歌數おほきはなかりしやらん。いとゝ分別しかたくおほえ侍れと。たゝ嚴命にしたかひて。是非をわすれぬるなめり。

天文乙未孟夏初吉

右此帖書寄畢。更不可有他見。穴賢々々。

于時天文五年七月廿一日

兵部少輔中原遠忠

和歌部五十四

岩山道堅自歌合

一番　初春待花　山路尋花

夫自詠和歌相分左右。乞求判者詞之由來。圓位上人勒三十六番於兩卷。長秋雄才中興龍作判之。其繼跡綿々于今不絕者乎。爰方外公投贈此一冊。而請勝負之評論。余匪重代之家。又非當時之器。依何事應其命哉。唯以多年芳契之好。難拒一日競望之情。聊志之所之。恣記翰墨供一咲耳。

左對臘底之雪。纔雖思花信之風聲。逢春之情。忽感木德之陽氣。意云詞云。盡善盡美。右察山陰之餘寒。猶歸洛陽之好景。念慮不淺。風體有所思。暫雖傍右抛之。盡慮左待之乎。

二番　山花未遍　朝見花

左歌。ふかゝらぬ春といへるこそ。ことはりにもそむかす。聞にくゝも侍らねと。春淺き春ふかきなといへるやうにはきこえね。右歌。上下五句ともに花といふ字のほかには春の歌ともみえす。卯月のはしめ比のわかかへての緑。あるは九月はかりの初紅葉なとの景氣そ侍る。花に涼しききも。極暑に霜氷をいひ出侍るも。和漢述作の一體にては侍れと。此歌にとりて風情過たるやうにそ侍る。左。猶おもかけは峯の白雲なひやかにたけもありて宜聞れは。これも左の勝にて侍なん。

三番　遠村花　故鄉花

花の中には櫻。さくらの中には山櫻。をそ櫻。やへ櫻。かは櫻。とり〳〵にすてかたく侍れと。家櫻はいと優にしも侍らす。右。けふのあるしに身をなして思ふもかなしなといへる。故鄉の春の永日にっこゝにしもさきけむ花の哭までもくちおしく。閑寂のなかめをよくいひなされて侍れは。

かた山本の家花の故郷に立ならひかたくや。

四番　田家花　古寺花

田家花は所しもあたら色香をと。此題にてはいかか思あくらすへからんなとおもはるゝに。なはしろ塘におりそへていふかひもなきといへる。ことにいふかひありて。農家の心なき苗代かきも。かくいひたてられぬれは。風流にも侍かな。古寺花はかの二本ある杉といへる旋頭歌をとりて。又やあひみん初瀨山といへる。たくみに侍るうへ。世のうきもまたや逢みんといひ。いのりし道は花そふりしくと侍る。さためておもふ所ありて沈吟も侍けん。世俗の口すさみにてたにかゝる述懷は哀成へきに。捨身のむねよりなかめ出けん花の色はあさかるへからす。初瀨寺の惠日も。此花にや春のひかりもくはへ給ふらんとみえ侍れは。返々右の勝とこそ申へき。

五番　花似雪　河邊花

音羽川の春の夕かせ。聞すてかたくは聞れと。色に跡なきにはの白雪は。すかたも詞もなをたちまさりて。左のかちとそ定侍る。

六番　深山花　暮山花

左右の下句。あはれうき世の春やいかにといひかへらんとせしを。山の端の月と侍る。とりくにいひしりてやさしくきこゆ。上の句も詞音共に强て勝なくや。可爲持。

七番　古溪花　關路花

左。對春風恨落英之條。去溪岸之固居。右。愛朝霞比艷花之次。添關路之美景。詩言雖區分。玉啼隣同科。勝劣不分明。猶可爲持乎。

八番　霧中花　湖上花

左歌。春風のあさたつ峯に思おきしといへる上句。たけありて心又こまかなるに。いかゝなりけんと。第五の句にいひはてたる。猶思ひたくや。右歌。うみ吹風も花の香そするといへる。下の句は詞よくつゝきて難なくきこゆ。初の五文字より第四の句まではいひつゝけたるに。句つゝきたる心地もせすきこゆるはいかゝ侍るへき。左右共に思所侍り。是も持にて侍らん。

九番　橋下花　花下送日

此紅葉の橋。和歌にはもみちを橋にわたせはやと讀るを初て。星合の銀河に讀ならはし侍るに。これはかの楓橋とかやをよまれ侍るにや。蘇軾か夜雨の感興をさためて紅葉の上にてそ侍るらん。張繼か夜泊の詩も。晩天霜月比のなれは楓葉のさたも侍らす。凡よみならはしたる此國の名所たに。よくいひいたせるはかたき事にこそ侍るに。みぬ唐の秋の色を春の花にそめかけたるは。誠に七夕の手もた

の田[illegible]の心もをよひかたくや。右。吉野より外にはいてすといひ。同しかけなる花はみねともといへる。心もあさからす。詞もいひしりてきこゆるにや。數反吟味し侍るに。とりどりの光輝わきかたくこそ。から國の紅葉の橋。もろこしのよしのゝ花。とにかくに同し程の色香にや侍らむ。

十番　庭上落花　暮春惜花

あるをみるたに春風そ吹。尤宜きこえ侍り。

十一番　初秋月　月前草花

左。おもふにも限そしらぬといひ。秋に心は月の行末と侍る。詞なたらかに姿やさしくて。かゝる歌には。いかなる透[秀歟]逸の出あひてか勝劣をもあらそふへきと思給ふるに。月はなをあかぬ物かなといひいてゝ。末の句をきかぬさきに。碧海青天夜なよなの清光もさる事よと覺ゆるに。萩の露。尾花の風。とりつとえたる秋の花の容色。きくにみるおもかけうかひて。よろしくも侍る哉。誠によき持にて侍へし。

十二番　雨後月　松間月

伏見山松よりをちの川かせは。月をなかめくはへすとも。聞過しかたき風流にて侍るへきに。河瀬のひゝきに松の浪さへかよひて。ふけたる月尤感興ふかくそ侍へき。雨後月桐のひろはの露の上に心のまゝにやとりたらんかけ。

ことにひかりあるやうには侍るを。雨おきしといへる五文字。先達も讀たる詞なから。しゐて好へき詞には侍らぬにや。この五文字には桐葉の秋の心もこもりて捨かたくは侍るに。又心をく心もおかすなと侍る。ふるくはみな心をつけたるかたによめるに。いかさま梧の葉のよりおちのかけはと。をしろく優美にや侍らん。

十三番　山家月　月前竹風

左歌。心こそあれどいへる。ふとしたるやうにて。にほひなくきこゆれと。全篇心あるさまにみゆ。右歌。吳竹の葉分の月に秋の風をきく時。袖の露まつもろかるへき事。理かなひて。彼竹風鳴葉月明前といへる古詩の心も思出られ侍れと。なに事のうきをもいはぬ山にてもなといへる上句。左は猶位たかく聞るにや。仍以爲勝。

十四番　野徑月　澤邊月

左。驅月下美景。要遊洛陽之外。右。感澤畔清光。似思楚水之邊。前後共叵弃。勝負又難决者乎。

十五番　月前聞鴈　海上月

秋ふかくなるとのうみのはやしほ。まことにとゝこほりなく。上下やすらかにいひなかされて。暮秋の影を月におしむかたもやさしく侍れと。月たにすめは鴈もなくなりといへる。おほろけの人のよみいつましきやうに覺侍る

はいかゝ。されは左猶珍さまに侍れは勝と申へし。

十六番　月照瀧水　松間月

熊野河の瀧のしら玉。きすなくきよけに侍るに。杜の注連縄くるしくもといひ。おもふ木のまなと侍るいひしりて。左の瀧のしら玉も。このしめをはこえかたくみえ侍れは。尤よき持とや申へからん。

十七番　月前秋風　江上月

左歌。たれをいさめて秋かせのふくといへる。こと〳〵しく聞ゆるに。雲霧もおよはぬ月のうへまてはとある上句。限なくたけたかくもの〳〵しく侍れは。首尾相待の歌とそ申へき。右歌。よるなく鶴のこゑ。ふる江の月にすみけん秋の夜のあはれ。たくひなくすかたさひて。鶴の半夜をしる心も。子を思ひて籠中になくといへるも。よるの鶴にて侍れは。詞の外に心あまりて。右もおとらす。左もまくましく侍れは。これも持にて侍りなん。

十八番　月前虫　月前聞鹿

虫の命。鹿のなく音。秋を感して月に對せんに。いかなる涙かつれなからん。とり〳〵に哀あさからす侍るにとりて。よもきふの月はえもいはす妖艷の體有て。さしむかへる詞のほかに。こもる心はなきにや。ひとりある暮の涙は。千萬行の愁をもなかくそへぬへく。餘情もふかきやうにみえ侍れは。右まさるへくや。

十九番　旅泊月　月前草露

槿花葉上之露、雖殘閑前之軒。不待日影而凋盡之外、此風情始觸耳、尤有珍氣。前一首依遊浪疾風之障。不慮驚秋水之美色。自然勝境。吟中有滋味。以左爲勝。

廿番　菊籬月　〔暮秋曉月〕

しら菊の籬にうつろふ月の霜ににほふをみて。こゝにのみとゝめはてたる心の色もやさしく見え侍るに。わかれては又もこむ世の秋の月といへる。千々のあはれこもりて、殘るねさめの枕のうへもをしはからるゝ心地し侍り。左右しはらく吟しあはすれは。暮秋の曉には猶心すむにや。

廿一番　寄雲戀　寄風戀

左歌。あらぬ方なからといへる第四の句。いひ叶ても聞えすや。右、思ひらはたよりなるへき山風をはけしとのみなけくといへるは。すみつかぬ山居なとに。なれぬ山風を聞わひたる。にくゝもなとかなからん。山家の心はたしかに。戀の心はかすかに侍り。俊頼朝臣のひとを初瀬の山おろしにておもひよそふれは。このはけしさも人のけしきのはけしきにて侍るへにこそ。されと左右たかひにおもふ所あれはおなしほとにや。

廿二番　寄雨戀　寄草戀

くもるはかりのこゝろをもはらはん袖は。なほさりのは山しけやまわくへき戀路には侍らぬにや。至道無難なと辨せん眼よりそ。まとにかくまてはおもひよられ侍けん。おもふあたりの草の露も。かのみせはや袖にと侍る面影うかみなから。下の句猶色香あるさまにきこゆるにや。されと草葉にきえやすかるへき露よりは。袖にはらひかたきあめはぬれまさるへくや。

廿三番　寄木戀　寄鳥戀

左は上の句。右は下の句ことによろし。しひていつれをかみにたて。いつれをしもにたてんとも。わきかたくこそ侍れ。

廿四番　寄嵐戀　寄舟戀

一夕對松風。恨不成之約。多年望桑海。慕無賴之人。兩首難有甚思之躰。孤舟殊具餘情之德者也。

廿五番　寄琴戀　寄衣戀

左は貞峰宗貞か舊風をしたひ。右は大貳重家か往事をまなふに似たり。二首の得失を論するに。貧家のきんきよくは他にゆつりてみつからのこゝろをのふ。禪室の衲衣は自を專として他事をなけうつ。かの鷄□宗傳の宗風。かれこれ右を勝といふへきにや。

右以衆島井雅枝親自筆之本寫之畢。

〔右道堅法師自歌合宜參照正編卷第二百廿一所收同名書〕

五十番自謌合

雙門貞德

一番　初春待花

左

聲のあや今朝織そめし鶯にとはゝやいつと花の錦を

右

年なみは越てもおたし契哉櫻は春のすゑの松山

二番　山路尋花

左

夢かとよ見しをしるへの山路には雲と成行花のおもかけ

右

山深み誰にとはましさく花は匂ひのみこそしるへなりけれ

三番　山花未遍

左

白雲のかゝらぬ奥の山のはに花の盛のこなたなそしる

右

[illegible]しまて咲そは[illegible]山桜哉

四番　朝見花

左

[illegible]ひらくる花に有明の影

右

[illegible]三花の匂ふは[illegible]の曙の山

五番　[illegible]村花

左

白雲か何そとゝへはしつのおかそれその村の花とこたふる

右

[illegible]花にたなひきにけり

六番　[illegible]

左

人はなとかはる習ひと故郷のむかしに匂ふ花や思はむ

右

故郷は心地まとはす人もなしなまめく春の花はあれとも

七番　[illegible]花

左

[illegible]（江イ）[illegible]山里に[illegible]の宿にてかはつ鳴なり

右

[illegible]たかけて春ももれかし

八番　古寺花

左

かくらくのはつせの花の春風やもろこしまても匂ひ行覧

右

[illegible]へて[illegible]花[illegible]春の手向なるらん

九番　花[illegible]

左

[illegible]にこそ[illegible]はてけれ[illegible]はたちゐに惜るゝもかな

右

見まかへし[illegible]花をこその白ゆき

十番　河邊花

左

花を思ふ人の涙の[illegible]吉野の川となかれそめけん

右

[illegible]川へゐ櫻あからめなせそ

十一番　深山花

左

おる人も又ふみ散す鳥もなしみやま櫻はもるとなけれと

右

人はなと友による覧深山木の中にも花は咲にける哉

十二番　[illegible]山花

左

暮ぬれと花の光に山鳥の尾上の春の日こそなかけれ

右

夕くれに吹そふ物は白雲の歸る山へのさくら成けり

十三番　古溪花

左

埋木とならぬ梢もなかりけりみ谷の櫻咲やそふ覽

右

谷川の浪の初花そのまゝに吹かさねたる山さくら哉

十四番　關路花

左

あふ坂やまた明ぬ夜も曙の花にやこゆる春の關守

右

いにしへの關路のあとの櫻花いまも往來の人そとめける

十五番　霧中花

左

やすくとも花なき里は何かせん春は櫻の陰にこそねめ

右

花こそは旅のあたなれこれみすは都の春も思出しを

十六番　湖上花

左

鳰の海や春の湊と成にけり花吹おろす四方の山かせ

右

散てこし山やみるめのなかる覽鹽ならぬ海そ花に成行

十七番　橋下花

左

花の波なかめんとてやかけつらん常は水なき山川のはし

右

仙人の雲にのるてふ心ちして花の梢やわたるいはゝし

十八番　花下送日

左

花見つゝしらぬ日數も故郷にかへるをまつや久しかるらん

右

なれ／＼し花の木陰のな（い歟、）莚（くさイ）散南後そしきしのふへき

十九番　庭上落花

左

散はてし跡の梢はみとりにて庭の苔ちそ花に成ぬる

右

ちる花を又とかたにちらさしといとひもやらぬ庭の春風

廿番　暮春惜花

左

何ゆへに春の別れを惜む共思ひしらてや花の散覽

右

暮ぬまの春をたのみて大かたに惜みし花の日數とへうき

廿一番　初秋月

左

吹風の音にのみ聞初秋をさやかにみする月の影哉

右

一葉ちる柳の糸のたえまよりくる秋ほそき月の影哉

廿二番　月前草花

左

夜もすから月もあかすやなかむらん千種の花を照すひかりは

右

秋野ゝの千草の花を闇の夜の錦となすな山のはの月

廿三番　雨後月

左

音は猶軒の雫に殘しをきて月より先に晴る村雨

右

かきくれて降にし雨も時のまにうつりかはれる月の影かな

廿四番　松間月

左

かそへなは數へよとてやこまかなる松の葉こしにすめる月影

右

つれもなき我よもいつか我宿のまつに見はてん有明の月

廿五番　山家月

左

立出て誰をとはまし山ふかみ見ぬ人もなし秋の夜の月

右

都にはいく家々に詠らん我のみむかふ山の端の月

廿六番　月前竹風

左

夜もすから月影さやく竹の葉に窓打雨の音をしる哉

右

おきふすは月やぬかつく大てらのかきほの竹の風のよすから

廿七番　野徑月

左

夜もすからゐなの篠はら露落て宿なき月に秋風そふく

右

打わたす遠方人も跡たえて野もせに白き月の影哉

廿八番　澤邊月

左

あまの原同し光に廣澤の水の底にもすめる月哉

右

澤邊には水草きよしいつくにもすまぬまさると月やすむらん

廿九番　月前聞鴈

左

霞なはとわたる鴈や帰らましさらてもさへよ秋の夜の月

右

春霞たつを見捨てゝ心まてさやけき月に渡るかりかね

卅番　浦邊月

左

更行はあまの子ならぬ月影も浦つたひして宿も定めす

右

月影の明石の浦のいさり火は煙はかりそ見え渡りける

卅一番　月照瀧水

左

秋は月のかつらの花をせき入ておとす音羽の瀧のしらなみ

右

雲きりも那智のお山の秋の夜は月より落る瀧の白波

卅二番　杜間月

左

霍公鳴聲よりも片岡のもりてかなしき秋の夜の月

右

月そとふ秋のはつかせ日數へていくたの杜や落葉しぬらん

卅三番　月前秋風

左

きえかへり又たつ雲も有やとて月を見捨ぬさよの秋かせ

右

闇と見し雲(容イ)のうちより吹初てあふきににたる月の秋風

卅四番　江上月

左

ことゝはん堀江の月の都鳥玉しきし代の秋もかくやと

右

秋の夜も昔をしらは玉くしけはやくな明そ水の江の月

卅五番　月前虫

左

鳴虫の泪くたけて見ゆる哉夜さむの月に千々の白露

右

見ることく聞てふとの哀さは月になるみの野邊の虫の音

卅六番　月前聞鹿

左

はてしなき哀そこもろさをしかの月に妻とふ武蔵野のはら

右

秋やうき妻やこひしき有明の月にをしかの夜もすからなく

卅七番　旅泊月

左

日くるれはこきて入江の波の上に月の御船やさして出らん

右

かはらぬやかはるうきねのとことはに波の手枕袖の月影

卅八番　月前草露

左

をきわたすかけ野の草の夕露の光もいつろ山のはの月

右

淺茅生のをのれとおつる白露はやとれる月の影やあまれる

卅九番　菊籬月

左

白菊の色もへたてす夕暮の籬の山路出る月影

右

月すめはかくろゝ星の空よりや折かけ垣の白菊の花

四十番　暮秋曉月

左

長月の末野にのこり鳴虫の聲よりほそき有明の月

右

初秋のみそめし影に歸る哉暮はてしするゑの弓張の月

四十一番　寄雲戀

左

いかにせんあしたの雲の跡もなし見しよは夢の契なれとも

右

さゝかにのくものはたてを打詠めくへき宵とはいつか頼まむ

四十二番　寄風戀

左

なれたにも又僞の數そへてこぬ夜のねやをたゝくさよかせ

右

そよさらに音やはせさるさゝの葉のみ山颪ははけしけれ共

四十三番　寄雨戀

左

君に今さはりとなるにくらふれは月に恨みし雨はものかは

右

もろともにきかは雨しもつらからしこぬ夜のぬらすわか袂哉

四十四番　寄草戀

左

袖の露なにゝつゝまん秋の野の千種の袂我にかさ南

右

戀侘て我身の土となる野には思草のみおふとしらなん

四十五番　寄木戀

左

稻荷山いのる月日のしるしをはいつかみもとの杉の下みち

右

獨ある身はから崎の松なれやみるめ渚に年をふりつゝ
四十六番　寄鳥戀
左
うら山しれに行鳥も君かすむ宿の梢の夕暮の空
右
いかにして常はまたれし鳥の音の逢夜をしりてまたき鳴らん
四十七番　寄嵐戀
左
誰かいふむへ山かせをあらしとは人の心の秋もしらすて
右
たのみなきうつゝそ賴むあふことの夢路はこよひ嵐吹之
四十八番　寄船戀
左
絕はつる夢の通路舟もなし枕の下に海はあれとも
右
淵は瀨に川風吹てさす舟のあたなる波にぬるゝ袖かな
四十九番　寄琴戀
左
あふせなき水の音にやかよふらん泪かきなす玉のをとは
右
いとむてふためしも有に玉琴のたまくくるを引もとゝめす
五十番　寄衣戀
左
人しれぬ中の衣のへたてこそきてねぬよりも苦しかりけれ
右
君をなとおもふ色にはかへるらんうき世にそまぬ墨染の袖

此貞德五十番自歌合。彼翁以自筆本寫之訖。尤可爲證本者也。

中秋中三日　　　　　　　　　　　　尙(花押)

〔右貞德五十番自歌合以內閣文庫本校合〕

貞德翁自歌合

一番　草花早
左　　　　　　　　　　　　　　　老　尼
ほし合のそらやうらみむはつ秋の露にひもとくなゝくさの花
右　　　　　　　　　　　　　　　少　童
むしも又はたをりそめぬ秋の野ゝ花のにしきは誰かいそきし
二番　旅天鴈
左

人やりの道かとそおもふ時しもあれうき秋風にわたる鴈かね

右

故里やなをわすられぬ風さはきむらくもまよふ夜半の鴈かね

三番　秋枕夢

左

山鳥のおきの葉そよくなかきよにひとりみしかき手枕の夢

右

手まくらの露にこゝろや置ぬらんむすひかねたる長き夜の夢

四番　月宿松

左

遠山にしはしいさよふ月のうちのかつらのとき峰の松かえ

右

雲はらふ嵐をよはのあるしにておのへの松にやとる月かけ

五番　蕭寺月

左

古寺の時のつゝみもなかきよのふくるや月の影にしるらん

右

ふるてらにもりいる月の燈火はあるゝにつけて數そそひける

六番　岡竹月

左

置ぬ露をくや岡への竹のはにそよかぬ月もそよく秋風

右

かたおかの月そさひしきさと人の夏はすゝみしさゝのしの原

七番　寒庭虫

左

朝日かけさせもか露をいのちにてかきれの霜に殘るむしのね

右

こなたかなた虫の鳴ねもかれ殘る垣根やをのかたまみを薄

八番　里擣衣

左

更行は雲ゐに高くなるかみのをとはの里にうつ砧かな

右

深草や野となる里のしかすかにうつら衣をいまや打らん

九番　題欠

左

いかなれは山へのもみち色ふかき里は時雨のふらぬものかは

右

秋山のもみちの色にうつろはぬひとのこゝろの花はあらしな

十番　庭殘菊

左

春秋の草木の花の色もかもにはにそ殘る菊の一本

右

にほひつゝしほめる花もをく霜に色さへのこる庭のしら菊

十一番　逢増戀

左

いきぬへき心ち社せね命にはかへらんといひて逢ぬ身なれは

右

くるしさは益田の池のねぬなはのねぬまそ今は戀しかりける

十二番　切待戀

左

とはゝ又いかにせよとてたましゐの待佗る身をうかれ出らん

右

待よはる露の身そうき契をかぬ草のはらをは猶もとはしを

十三番　久忍戀

左

いく秋の木々のははいろに出れとも□はいはての森の下露

右

今さらの思ひとやせん猶さらにいはしといひて年もへにけり

十四番　關路雲

左

治れるよにあふさかの關の戸はなれさへとちぬ山のはの雲

右

花の朝雪の夕もたゝこゝにおも□しらかはの關

十五番　寄日祝

左

萬代のよはひは君をはしめにてあまつひつきの末ひさしかれ

右

曇なくかはりなきよは久かたのひかりならては何にたとへん

右貞德自歌合以尾崎雅嘉本書寫畢。

續群書類從卷第四百二十

和歌部五十五

長承二年相撲立詩歌

一番 占手

右　山家春　四條大納言

春きてそ人もとひける山さとは花こそ宿のあるしなりけれ

左　元日大極殿前陪從　儀同三司

玉展日臨文鳳見。紅旗風卷畫龍揚。

二番

右　堀川院行幸歌　好　忠

みな神のさためてければ君か代に二たひすめる堀川の水

左　述懷　匡　衡

身老五亊風月席。家傳十葉帝王師。

三番

右　梅近香入窓　齊　言

梅かゝを夜半の嵐に吹ためて我れやの戸をあくる待けり

左　紅梅　齊　名

仙臼風生空簸雪。冶鑪火暖未揚烟。

四番

右　從冥入於冥　泉式部

暗きより暗き道にそ入ぬへき遙にてらせ山のはの月

左　不輕品　以　言

眞如珠上塵厭礼。忍辱衣中石結緣。

五番

右　松聲入夜琴　齋宮女御

とのねに嶺の松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけん

左　落花渡水舞　儀同三司

雪膚皆濕霓裳重。風力橋高錦袖明。

六番

右　関路暁月　　範永

有明の月も清水にやどりけりこよひはこえしあふさかの關

左　月前多遠情　　孝道

遊子不歸郷国夢。明妃有涙塞垣秋。

七番

右　　好忠

我かせこかきまさぬよひの秋風はこぬ人よりもうらめしき哉

左　思友

年々別思驚秋雁。夜々閑聲到曉鷄。

八番

右　　小大君

岩橋の夜の契もたへぬへしあくるわびしきかつらきの神

左　新年會（亭イ）在簡舞　　儀同三司

錦帳運歳燈照曙。金樓宴罷月徘徊。

九番

右　　嘉言

君か代は千世に一たびいるちりのしら雲かゝる山となるまで

左　鶴壽會　　齊名

秦案具萬三章日。殷網復張一面風。

十番

右　鷹狩　　長能

霰降かりはのみのゝすり衣ぬれぬ宿かす人しなければ

左　雪飛千里外　　爲時

胡塞晰花遙去馬。巴山歌月遠行人。

十一番

右　　堀川右大臣

いかなればおなし時雨に紅葉するはゝその杜の薄くこからん

左　冬日法普寺　　匡衡

紅葉嵐深窓暗雨。若苹日暮鬢寒霜。

十二番

右　　伊勢大輔

いにしへのならのみやこの八重櫻けふ九重ににほひぬるかな

左　菊花照宮殿　　以言

漢栢彌奢香迸暮。堯茅非仰色來秋。

十三番

右　　兼澄

春の内にちり積るともきよめせし花にせかるゝ宿といはせん

左　秋葉逐日落　　中書王

逐夜光多吳苑月。毎朝聲少漢林風。

十四番

右　　惠慶法師

八重葎しけれる宿のさひしきに人こそ見えね秋は來にけり

左　閑中日月長　以言

陶門跡絶春朝雨。燕寢色衰秋夜霜。

十五番

右　相模

見わたせは波のしからみかけてけりうの花さける玉川のさと

左　秋夜雨　齊名

蒹葭洲裏孤舟夢。楡柳營頭萬里情。

十六番

右　七夕　堀河右大臣

たなはたの雲の衣をひきかさねかへさてぬるやこよひなる覽

左　銀漢是故人　後中書王

雲衣范叔羈中贈。風櫓瀟湘浪上舟。

十七番

右　住吉松　安法法師

あまくたるあら人かみの相生をおもへは久し住吉の松

左　遊栖霞寺　儀同三司

庭松百尺歷年老。山月夜曲仍舊圓。

十八番

右　好忠

雪消はえくのわかなも摘へきに春さへ清ぬ深山へのさと

左　宇治別業　齊名

野酌卯時間露、山中日暮花風。

十九番

右　惠慶法師

あさち原たましく苔の浦風にうらかなしかる秋は來にけり

左　秋聲多在山　以言

索颯寒風林頭老、蕭瑟夕卯谷心寒。

廿番　持

右　郭公　實方

さつきやみくらはしやまの郭公おほつかなくも鳴渡る哉

左　八月十五夜　後中書王

晝夜和同迷漏刻、乾坤渾朗照玄黃。

長承二年八月廿八日。蒙法性寺前太相國御教書。俾可撰進詩歌事。以詩爲左。以歌爲右。可被撰之秀逸也。撰進之恩。可令撰擇古今詩句和歌事。無其人之人。當時尤其人。仍所撰進也。予無才。執筆不能固辭。撰其秀歌。涉獵和漢。然而大卷已成。自非精求。深思不過。遂被相混之。同年十一月十八日、依忠通留。竊以進覽之。同廿日御教書云。所合賦詩、和漢兩篇各有其人、白居易白氏之一體。歌詩赤人之大業。就中和歌傳世。不慚古人。無以當世。深染心肝所感思

食也者。(是者去九月盡日獻詩歌御返事也。)同日重被命云。相撲詩歌鳩集之體。神也又神也。貴下者文道英華。久攀春華之香氣。深知秋實之氣味。撰定之趣已叶御察。感氣無極者。(已上三箇度御教書。中書侍郎重某奉書。)予一揖並拜。納匱待價。非啻施當時之名譽。兼又爲身後之美談也。仍記錄微志。以貽後昆。只恐有詩歌之幽靈遺恨。風月之時罷反脣耳。

保延二年十一月八日。以前左金吾自筆本書寫畢。

延文元年五月九日。依源高秀所望。以入道三品俊成卿自筆本(爲秀朝臣相傳。)書寫訖。

于時文龜四年三月十六日。以或證本書寫、

前因幡守三善朝臣

三十六番相撲立詩歌

一番　春

左　鱗介悉逢春

諸蟄驚雷應啓戶。蟠龍出凍欲遷雲。

右　餘寒

空はなほかすみもやらす風冴て雪けにくもる春の夜の月

二番

左　春過野村

偸折花枝歸我宅。恐猜鶯舌語他人。

右　花

春はみなおなし櫻になりはてゝ雲こそかゝれみよしのゝ山

三番

左　春詞

鳥聲拂地知垂柳。花色滿山辨遠松。

右　花

花はみなかすみのそこに移ひて雲に色つく小泊瀨の山

四番

左　花下醉吟

林邊枕碧花下臥。池塘閣盞水邊眠。

右

けふこすは庭にやあとのいとはれんとへかし人の花の盛を

五番

左　女御入内屛風詩曲水宴

花色幾年春暮月。水聲周且昔餘淸。

右　春曙

み[illegible]て[illegible]のこさ[illegible]より昔にかすむ春の明ほの

六番

左　[illegible]

[illegible]花[illegible]。[illegible]花[illegible]春。

右　[illegible]

よしの山[illegible]たへてたなしき枝に春風そ吹

七番

左

山路[illegible]行[illegible]月有。江樓晩望片雲[illegible]。

右　舟中夏月

夏の夜をやみてあかしのかたや枕浪にかたふく月をしそ思

八番

左　夏日水行

[illegible]村[illegible]、[illegible]草[illegible]水岸晴。

右　蟬

なく蟬のはにをく露に秋かけて木陰涼しき夕暮の色

九番

左　早秋

野亭見草[illegible]白、山館聞松風始雨。

右　秋夕

物おもはてかゝる露やは袖にをくなかめてすりな秋の夕暮

十番

左

已過再宿虎賁夢。猶隔四朝牛女情。

右

眞木の戶をさてあり明に成行をいく夜の月ととふ人もなし

十一番

左　女御入内屛風詩

（細）赴詩隱紵江月白。臥思前路海風寒。

右　同屛風歌

東よりけふあふ坂の關こえてみやこに出る望月の駒

十二番

左　秋思入滿山

波月嶺雲知已舊、池魚籠鳥與吾俱。

右　鹿

たくへくる松のあらしやたゆむらんおのへにかへる棹鹿の聲

十三番

左　詩家秋色富

香山雲物自然得。彭澤風光孫後貽。

右　秋月

山とをき門田のいなは露晴てほなみにしつむ有明の月

十四番

左　九月十三夜月下言志

天地氣晴迷晝夜。林叢苑白照春秋。

右　月

さらぬたにふくるはおしき秋の夜の月より西に殘るしら雲

十五番

左　秋

荒院竹風生曉枕。深宮穐雨滴秋階。

右　蔦

うつの山こえし昔の跡古てつたの枯葉に秋風そ吹

十六番

左　秋

霜催礁杵村聲急。露濕衣裳山氣來。

右　暮秋

しけき野は虫の音なから霜枯て昔の薄いまも一村

十七番　冬

左　初冬

巖叟採薪林有月。村民牧棕野无雲。

右　初冬

月やとす露の夜すから秋暮てたのみし庭はかれのゝけり

十八番

左　冬

嵐似鄭公溪北路。雪同袁氏汝南心。

右　冬

さひしきはいつもなかめの物なれと雲間のみねの雪の曙

十九番

左　雪中山居

地爐火消柴枝濕。雲碓水凝藥杵閑。

右　冬朝

雪ふかきみねの朝けのいかならん槇の戸しらむ雪のひかりに

廿番　雜

左　山家

欲買閑山雲管領。試求隙地草羅生。

右　山家

麓まておなしさゝ原跡もなし深山の庵の露のした道

廿一番

左　山家

古松夜雨斷溪涙。薜蘿秋風荒巷情。

右　山家

瀧の音松のひゝきもはけしきにつれなくあかす岩枕哉

廿二番

左　山家

〔候歟〕檉鳥豈傳時俗語。烟嵐不記故人心。

右　舊宅

古郷は淺茅か末に成はてゝ月にのこれる人の俤

廿三番

左　山寺

耳界厭喧風一樹。頭陀照跡月千巖。

右　花

あはれなる花のこかけの旅ねかなみねのさくらの衣かさねて

廿四番

左　於天王寺即事

堂宇有圖今見昔。海潮无岸水連雲。

右　於住吉社即事

宮ゐせしとしもつもりのうらさひて神代おほゆる松の陰哉

廿五番

左　秋遊山寺

月輪水上空觀主。風葉山中獨覺師。

右　緣覺

おく山にひとりうき世はさとりにき常なき色を風になかめて

廿六番

左　秋夜旅泊

山重江復煙嵐路。寐思寤思桑梓鄉。

右　海路秋望

ゆく舟の跡のしら浪きえつきてうす霧のこる須磨の曙

廿七番

左　旅

劔閣梯危迷霧雨。錢塘舟到宿煙嵐。

右

きよみかた波の千里に雲きえていはしく袖によする月かけ

廿八番

左　旅

江山千里他鄉淚。雲雨三年旅館膓。

右　海邊曉月

忘るなよいまはの月をかたみにて波にわかるゝ沖の明舟

廿九番

左　夏日水行

渡口停船山不動。湖心求泊嶋相迎。

右　於漢河原詠之

むかしきくあまの川原に尋きて跡なき水をなかむはかりそ

三十番

左　述懐

生涯不返水无意。佛界非遙月在胸。

右　別戀

わすれしの契をたのむ別かな空ゆく月の末をかそへて

三十一番

左　述懷

日々悔遇(過歟)前白佛。時々歎逢仰蒼天。

右　戀

泪せく袖におもひやあまるらん詠むる空も色かわる迄

三十二番

左　病中偶吟

病源河海朝窓水。命葉芭蕉秋後風。

右　待戀

よもきふの末葉の露の消かへり猶この世にとまたんものかは

三十三番

左　病中偶吟

三界元安皆火宅。一生有限幾風燈。

右　戀

吹風も物やおもふととひかほにうちなかむれは松の一聲

三十四番

左　病中偶吟

來迎馮誓彌陀佛。罪障[illegible]異緣那落迴。

右　夜戀

みし人のねくたれかみのをもかけに泪かきやるさよの手枕

三十五番

左　春過長秋納言舊宅

花倚春花留有意。宅斯舊宅廢無人。

右　述懷

埋まれぬ後の名さへやとめさらん事なす事なくて此世くれなは

三十六番

左　出現於世

雲擎滿月重山夕。浪發曇花苦海春。

右　寄光動寺座主

なかき夜の更行月を詠てもちかつくやみをしる人そ无

奥書云、

此一[illegible]卷白川二品[illegible]經尹卿男經定(後改伊朝。)筆。可秘藏云々。

和漢名所詩歌合

九條內大臣基家詠給之

題

左　　右

錢塘潮　　住吉浦

虎溪　　春日山

彭蠡湖　　三島江

悟眞寺	葛木山
遺愛寺	泊瀬山
梁園	武藏野
巫山	松浦
鄭谷	御室山
龍門	吉野
鏡湖	宇治河
金谷	信太杜
函谷關	清見關
潁河	大井川
嵩山	伊駒山
蘇州	美豆御牧
汾陽	清瀧河
南宋園	高圓山
陵園	水無瀬河
昆明池	音羽河
商山	常磐山
洞庭湖	須磨浦
上陽宮	龍田山
潯陽江	蘆屋里
廬山	富士山
吳江	伊勢海
蜀都	高砂
花陽洞	田籠浦
履道里	難波江
渭陽	若浦
香爐峯	伏見山
彭澤	猪名野
嚴陵瀨	明石浦
香山	佐夜中山
胡塞	鳴海浦
驪山	天香久山

一番

左　錢塘湖

湖當西畔江月曙。抗櫓南邊海雲長。

右　住吉浦

住吉のいかきのうちに燃す火やまとへる歌の闇路なるらん

二番

左

煙波萬里郷雲泪。山水六年花主鄉。

右

すみのえに岬のかたひく網あらは汐せの小船をして出とも

三番

左　虎溪

竹陰東院鶯千囀。山脚南泉雪一朝。

右　春日山

かすか山心のたねをまき置し野へとやみえんおひのと草

四番

左

嵐庭獨流松徑水。月前三度虎溪橋。

右

なゝそちに身は行かゝる春日山祈りし岑に月はくもるな

五番

左　彭蠡湖

三洲蘆晴螢知夜。萬里山消波洗篷。

右　三島江

みしまえに芦かりすつる里人のかへさは船の音そすくなき

六番

左

湖上秋望嵐送艘。江南霜信雁傳書。

右

人なみに沈み果たるみしまえの入江のみくりさけむせふらん

七番

左　悟眞寺

溪陵遠樹一峯島。渭水綱（絹イ）絲千里鄕。

右　葛木山

かつらきやおくの岩やの荒ましに（くイ）心すめとや月はすむらん

八番

左

嶺上樓臺高有勢。庭前松樹亂無行。

右

かつらきや嵐をゝへる山伏の苔の袖にも花そかゝれる

九番

左　遺愛寺

鐘響東西雙院枕。嵐聲前後一溪松。

右　泊瀬山

吾宿やよはすみかたき初瀬山かすむ河せに月そ殘れる

十番

左

秋橋苔白月侵路。遠寺燈闇花夕峯。

右

あまか繒刈せの山に傾時て夕日さしこす峯の梢

十一番

左　梁園
夕占一花雪浮峯。曉入〔群〕山月作隣。
右　武藏野
むさしのはあすもいかなる露ならん同しころもの秋の花染

十二番
左
霜冷鶴洲松泊夜。鶯吟梁舘竹歌春。
右
落つもる露のきえすはむさしのゝ草はの下や海とならまし

十三番
左　巫山
雨度倡樓秋夢晩。花廻舞榭曉衣薫。
右　松浦山
あふきをもあけてたとへよ松浦姬ひれふる袖の月にかせとか

十四番
左
猿聲臺下數行淚。鬢色山中一尺雲。
右
爪木たく烟そつたふ松浦山もろこし人や冬こもるらん

十五番
左　鄭谷
高低泉暗苔巖水。南北風寒柴扉翁。
右　御室山
三室山よゝの鏡や五月雨の雲のこなたの月をみすらん

十六番
左
煙柳成薪千峯樹。一霜禽授箭一溪仙。
右
みむろ山したはふ葛の玉かつらかけてや雪のふるの神杉

十七番
左　龍門
東岸菊芳新白雪。青山松怨昔秋風。
右　吉野
よしの山これもや花の數ならんみかきの原の秋の白きく

十八番
左
鶯吟蕭寺千行柳。鳳翔龍門百尺桐。
右
さくら咲春にならひのよしの山月にかくるな岑の白雲

十九番
左　鏡湖
雁陣度湖朝叢波。漁燈傳島夜知舟。

右　宇治川

老ぬとて哀かくへき人そなき波にぬれたる宇治の橋姫

二十番

左

野花霜滿鹿聲僻。河蓼鷺藏魚鬘浮。

右

ふけぬるからちの河瀨をさす棹のうたのすさひそ月に殘れる

二十一番

左　金谷

松梢加彩畫圖障。霞影裝紅錦繡樓。

右　信太杜

つく〳〵といつもなけきの同しえになをやしのたの杜の鶯

二十二番

左

園裏風光花百樹。河南古跡水三流。

右

ちえとの雫は雪のたるひにてしのたのもりはみかさなくとも

二十三番

左　函谷關

萬里花多鶯作友。二崤草暗馬嘶關。

右　清見關

きよみかたかすめる關のむかひより又烟たつふしの大嶋

二十四番

左

巴雞高報曉松路。旅店猶扃秋月山。

右

關の戸は入海かけて淸みかたかくこそはみめ秋のよの月

二十五番

左　潁河

許縣故山雲作主。潁河舊室浪廻橋。

右　大井河

大井河かみはあらしの山さくらちれは入江の松の白雪

二十六番

左

一臺高峙逢凌漢。三使空歸遂哭堯。

右

大井河みちあるみよの筏士は今やよもきの嶋つたふらん

二十七番

左　緱山

孤洞碧桃春夕樹。一臺秋樂曉嵐松。

右　伊駒山

ほとゝきすいこまの山は夏なから何秋（いつイ）しのゝ里なれぬらん

二十八番

左

月闇幾嶺虎嚢曲。雲斷笙山鶴駕蹤。

右

あはれとはみつゝそこゆるいこま山花のあたりにのこる月影

二十九番

左　蘇州

臺下苔深雲色近。江心松暗浪聲閑。

右　美豆御牧

五月雨に里にもみつの河近みほすかりこもや庭の浮草

三十番

左

西亭日暖千竿竹。東桂月高六代山。

右

里しるき民の烟をのこしつゝ水上はるゝみつの河きり

三十一番

左　汾陽

河暮鷺度孤松綠。江縣舟來一葉紅。

右　芹瀧河

きよたきや水果たる河風に猶石はしる雪の白波

三十二番

左

南客晚望通某月。漢皇昔宴向（問イ）秋風。

右

山もとのきよたき河のそは傳ひ紅葉になりぬ桴おとすな

三十三番

左　南朱閣

闇磬寺荒鐘似音。吹簫跡僻月殘林。

右　高圓山

たかまとの山した嵐さゆるよの野かみのすゝき露氷ぬへし

三十四番

左

燈照枕席夜尼院。鶯伴笙歌春妓樓。

右

雪もまた名におふみやと古郷の籬はけさやたゝまとの山

三十五番

左　陵園

寒花衣濃黄菊溪。敗壇露脆綠蕪風。

右　水無瀬河

つかへこし道はたえにきみなせ河汀の氷何むすふらむ

三十六番

左

洞中嵐靜松陰院。山脚日長花底宮。
右
みなせ河むすはぬ袖のぬれそふはありて行物や泪なるらん
三十七番
左　昆明池
杜若抽心連古岸。鴛鴦舗翅睡春沙。
右　音羽河
氷ともきえて音羽の河なくはいかてか水の春をきかまし（しらイ）
三十八番
左
波浮西月瑩秋鏡。水浸南山倒曉花。
右
しりしらすすゝむ木陰は音羽河關のあなたも關のこなたも
三十九番
左　商山
曉雞報月一原樹。霜兎臥花百草壇。
右　常磐山
をしはかれ常磐の杜のおくの山秋なれはとて時雨ふる里
四十番
左
漢皓出關秋鬢老。商山向（明イ）路白雲殘。

右
みしかよの明はなれ行常磐山かゝる春をはいつか詠めし
四十一番
左　洞庭湖
七聖軒遊秋樂靜。三江波路暮雲長。
右　須磨浦
もしほやく浦こそあらめたれすみてすまの上野も煙たつらん
四十二番
左
洞庭湖滿岸松白。巖棧霜肥湖橋黄。
右
わかれちは昔をかけてもしほたれ餘波とすれ（ニイ）と殘る月影
四十三番
左　上陽宮
〔闕〕
右　龍田山
たつた山霞も八重のみなと河紅　くゝる船やいつらん
四十四番
左
龍根滿關孤院夜。鶯歸燕去故宮春。
右

たつた山神もやすらん梢かけゆふかけてよる夏の河波

四十五番

左　尋陽江

商客夜船□語咽。陶公舊宅浪聲閑。

右　蘆屋里

春くれは吾すむかたの霞をもいそく芦やのなたの汐やき

四十六番

左

湖心秋月西亭岸。盜上春花東郭山。

右

芦のやのいそやま紅葉こかれてやけにも一葉の舟とみるらん

四十七番

左　廬山

松上風高琴樹地。池心荷馥草堂庭。

右　富士山

ふりつゝく雪のさかひのふしのねや月の都の外山なるらん

四十八番

左

林花春月東西寺。溪水秋寒十八亭。

右

夕烟たかみかしこみふしのねに雪はゝかりてあまる白雲

四十九番

左　呉江

漁歌庭岸孤舟路。鱸鱠交江落葉紅。

右　伊勢海

濱荻の外にそつゝく雪おれやいせおの海士のまかきなるらん

五十番

左

白浪遠清寒夜月。殘松不忘昔秋風。

右

いせの海のあまの原なるいさり火も同し光の星合の空

五十一番

左　蜀郡

江心洗錦巴千里。雞唱送花蜀二郡。

右　高砂

しる人もあらはやみせん高砂の尾上の松の春の曙

五十二番

左

孤鶴斜飛山月境。双龍高歩嶺雲途。

右

舟つなく室のとまりの月影にまた高砂の松の秋風

五十三番

左　花陽洞
仙院〔吐說〕嵐花白雪。洞亭凝日竹靑羅。
右　田簑浦
白たへのなみにたちそふあま人は花をさへくむたこのうら風
五十四番
左
暮松舊跡誰人住。秋月淸光此處多。
右
たこの浦に□うちいてゝみ渡せはうへ島かけてきゆる白雲
五十五番
左　履道里
桃島春風停盞臥。松臺夕日罷琴昇。
右　難波江
あしそよくなには渡りの夕くれは心有ける秋風そ吹
五十六番
左
竹池掬水螢淸冷。花住買家鶯饗應。
右
あしはらのみつほの國にまよふ哉いへはなにはの道は廣きに
五十七番
左　渭陽
村里夏闌槐樹暗。田園雨積竹竿肥。
右　若浦
うかれ行わかの浦船人なみにうち（みイ）にはいてゝつなくて（江イ）もなし
五十八番
左
一堤孤柳懸漁網。二代帝師出釣磯。
右
いかにせん人にこえにしたらちねの跡はつかしきわかの浦波
五十九番
左　香爐峯
遺愛松梢含月曙。爐峯鐘響滿花來。
右　伏見山
すかはらや伏見の里のあれまくも月まつ人と人やみるらん
六十番
左
草堂泉烟山陰水。仙路衣寒雲夕臺。
右
ふしの山都の人はそれなからくるれはかへる春のかりかね
六十一番
左　彭澤
二縣菁荒雲已閉。孤松雞（鷄イ）報月西昤。

右　猪名野

白露のいなの〻小篠いかならん同しはやまも秋の村雨

六十二番

左

菊芳彭澤栄詩境。柳老陶窓八十眉。

右

かへるさをいそくいなの〻旅衣きるはよふかきけしき成とも

六十三番

左　嚴陵瀬

嚴子清稿是照曜。留春傳路月經過。

右　明石浦

初鴈もさしてやきつる明石かた昔の船の跡を尋て

六十四番

左

林中花落只蕭索。澗上嵐高七里波。

右

吾國の光を月日空にみていつもあかしのやまと嶋山

六十五番

左　香山

池園浪細官竹韻。溪傳松響白雲聲。

右　佐夜中山

あつまちの山のあなたの雲ゐよりみえつる月のさよの中山

六十六番

左

春花古院一時雪。秋雨香山六月涼。

右

旅にしていも戀まつもあかしとてなに中〳〵のさよの中山

六十七番

左　胡塞

胡馬一聲寒曉月。漢臣百戰、代城。

右　鳴海浦

うらかけて波はなるみの海のりてひかりみちたる月の入しほイ

六十八番

左

淺深浦白皆羊路。寒草、寒雲闇行。

右

うらかけて波はなるみの海のりて光みちたる月の入しほ

六十九番

左　嵐山

境青葉櫻千百雪。來翫雲只青苔。

右　天香久山

くもの入あまのかく山ほの〳〵と明行空はみな櫻之

七十番
左
泉吞百石飛空落。若爲萬人遂不來。
右
もの思ふ心のおよふ方はなしくものはたてか天のかく山
右名所詩歌合黒河春村藏本ヲ以校正了
天保十三年十二月廿四日　花押

續群書類從卷第四百二十一

和歌部五十六

定家卿獨吟詩歌

建保五（六イ）年の事にや。內裏に此韻の字を人々たまはりて。詩をつくるとつたへきゝて。つれ〳〵なりしかは。歌にもなりなむやと。心にかきならへて見侍しいたつらことを。思ひいてゝかきつく。

春

芳節愛來望帝叢。先花照耀是春衣。
梅かえのうつす匂はうすからし霞はよはき春の衣に
溪風吹浪冬氷盡。山氣帶霞晚月微。
誰かまた花をゝそしとしらせまし春をゝしふる鳥なかりせは
宿雪猶封松葉重。早梅纔綻鳥聲稀。
春とたにまたしら雪のふかけれは山路問くる人そまれなる
閑獸徙居南薺日。賓鴈從今欲北飛。
谷ふかく鶯さそふ春風にまつ花のかや雲にとふらむ
媚景漸深情感頻。林叢增色鳥聲新。
春風にこほりをはらふ池水はやとれる月の影もあらたに
妓樓花綻映紅錦。燕徑草生踏紫塵。
吹はらふ風たにつらし梅の花このころつもれ木のもとのちり
歌吹出霞禁苑夕。綺羅薰洛月城春。
ふるさとの花と月とにとゝはんこれはみよしのありし春かと
幸逢四海敉安世。臨水登山遊覽人。
へたつとて花ちる山はかすそはす霞そうときをちの里人
節屬煙霞風景好。香衫細馬互相尋。
世にしらぬおほろ月夜はかすみつゝ草の原をは誰か尋ん
暫聽鶯鏡花客水。先欲背燈月出岑。
おほ空のまとの雲も匂らん花にあまねき三吉野の岑

斜岸夕陽春暮永。古溪昨雨曉來深。
色にいてゝふりしく庭もうつろひぬ花見てくらす春の深さに
閑居雲物在斯處。墻柳林鶯幾動心。
いかならんたえて櫻の世なりとも明ほのかすむ春の心は
三春芳節徐垂暮。躑躅新開宿露圓。
はるにすむ山の家ゐをきてとへはやよひの月も影まとかなり
霞隔南山黄綺跡。雲連蒼海碧羅天。
つり舟のさとのしるへも事とをしやそ嶋かすむ曙の空
草庵雨裏遅遲日。花樹月前夢少年。
雪とのみつもれはつらし春の風別し花のふるき年〳〵
無事終朝縱（階イ）矚望。紅樓高挿夕陽邊。
山人のゆくての蕨てにためてしはしそやすむ岩のほとりに
親故拋吾忘舊好。忘來誰問暮山霞。
おしむらんとはれし花も散はてゝ春はいくかのみねの霞を
煙生翠竹村南路。雲聳紫藤川北家。
すきかてにもとの春こそ忘られねあるしふりにし道のへの家
遊客漸稀庭有草。樵夫獨往嶺無花。
春はいぬ青葉の櫻おそき日にとまるかたみの夕くれの花
九春將盡幾殘日。瞻望巖陰簷間斜。
こよひのみ春やかりねの草枕ゆふへのまとに影なゝめなる

夏

夏來新樹葉徐陰（晴イ）。當牖家山不得瞻。
霜枯の冬はあらはに民のすむこやしけり行あしまにそみる
盧橘匂中開露簟。拼（栟イ）櫚影底春風簾。
影見ゆるひとへの衣うちなひくあふひもすゝし白き簾に
孤夢未結曉鐘急。團扇暫忘晨月纎。
玉のをのなかき世ちきれ白糸にまかふあやめの根は細くとも
雨後終宵敲枕聽。松聲如舊水聲添。
住の江の松のうへふく浪風にこのころ蟬の聲そうちそふ
節迎晩夏夜初永。夢覺愁人枕上知。
かり枕またふしもみぬあしの葉にまかふ螢そくるゝ夜はしる
石竹餘花多栽種。庭槐一葉且辭枝。
さきにけり野なる草木にをく露の秋に先立萩の一枝
夕陽染影遠村樹。微雨引涼方丈池。
この世にはあまるはかりの光哉蓮の露に月やとるいけ
漸々好風吹北牖。宜哉林席此中施。
すへらきの昔あまねきめくみをやこのみな月の民にほとこす
陵汗猶思衛（荷イ）被早。褚康陶令定作嘲。
夕立の菊のしほれ葉はらふとて花まちとをに人やあさける
北窓風力贈來客。南澗泉聲是淡交。
さゆり葉のしられぬしたに咲花の草のしけみになと交りけん
螢照洲蘆微月後。蟬鳴宮樹夕陽梢。

よるなからなきぬる鳥か行月のうつろひあへぬ庭の梢に

　曉進霜色先秋變。地芥恩信老匝地。

御秡するあさのたち葉はやとヽにかる程もなくなけうてつヽ

秋

　金風忽生殘暑盡。獨吟古集草秋詩。

秋にたえぬとのはのみそ色に出る大和の歌ももろこしの詩も

　亂風黃葉傷人夕。驚浪荷花結子時。

めにたてぬかきねにましるかちの葉も道行人の手にならす時

　柴戸掩窓朝雨冷。草叢待隙曉天遲。とイ

秋の風に荻の上葉はそよくなり妻こふ鹿の音こそをそけれ

　蕭條原野催閑望。露色虫聲逐夜滋。

うらかるヽ秋の白露そめやわく蓬か杣のもとのしけみを

　秋山迢遞秋望遠。仙室泉聲老故溪。

をのか色のをよはぬ秋も染かへつ嵐のつてに紅葉ちるたに

　清滿移霜銀水石。紅嵐吹浪錦江西。

あかつきはかヽらん山の月をみて雲もとまらす秋風の西

　平原露重草螢短。遠浦浪高松月侶。

宮城野の秋の村雨すきやらすそこらの花の枝をたれつヽ

　無興無才無所好。琴詩酒興竊提攜。

月の色に霧なへたてそ難波舟みきはのあしはたつさはるとも

　凄涼八月々明夜。無限秋風吹桶寒。

露こむすたヽ清孝したたへす秋のよわたる風のさむさに

　鳴枕暗螢尋露底。繫書遠鴈出雲端。

秋の夜を虫のなく〳〵うれふともつきし思ひの露のかたはし

　孤燈背壁曉夢斷。急雨灑窓陽景升。

むかしみし秋やいくよの古郷にいまも有明の月そのこれる

　鷄犬聲稀山川靜。遊待人定滿方園。

あさな〳〵ちりゆく萩の下紅葉うつろふ露も秋やたけぬる

　萬物纔衰蕭瑟促。流年徐暮半空過。

うつもれて木の葉をささそふ谷川のしられぬ浪に秋そ過ぬる

　芳蘭濃艶殘花悴。搖草滿情對月多。

なかめつヽいく年々の秋の月あらましかはのなきそおほかる

　露染瀾山千嶺樹。風清桂水九秋波。

たつた川神代もきかてふりにけりから紅のせヽのうき波

　賓卑イ開禮作向霜怨。詩客徒誇白綺歌。

をのつから秋のあはれを身につけてかへるこさかの夕暮の歌

　短晷悠揚雲物冷。蕭條景色望方闌。

たれかすむはやまかしたの秋風に嫗とはるヽ道も闇に

　日薫樹葉山人路。送別黃花兩客舟。

秋の夜の月にいつともわかしかしをのかよわたるあま

　離怍曉寒牀上月。行衣夕薄樹中秋。

露時雨心やすめな色〳〵にすきひはこりぬをかのへの秋

秋風吹草空催涙、白露覺零似舊遊。
苔のうへに昨日の紅葉たきすてゝ秋の林に誰あそひけん

冬

四運同環推節候。金風不駐屬玄冬。
たをやめのかふろ心に染つくす紅葉もしるしきたる冬とは
長河霧外失行客。遙嶺嵐中送遠鐘。
さためなき嵐にかわろ山影のくもりはてぬる入あひのかね
雖有殘花纔紫菊。林無黃葉只青松。
色〳〵に菊も紅葉もうつろへと春のまゝなる庭のわか松
都門路僻今誰問。霜上獨望麋鹿蹤。
うすくこきよもの紅葉を吹わけてかたもさためぬ風の蹤
地民牧稼孟冬節。田畝有年萬國娛。
をみ衣白をすへて盃のめくみによへるよはそたのしき
治世傳聲鳴澤鶴。敬神喩禮在汀鳧。
かけうつす山の青葉も冬枯てさひしき池にのこるをしかも
曉風拂雨(嶺イ)斜陽見。寒浪閇氷流水無。
ふりまさるよしのゝみゆき跡たえてもらぬ岩屋は音信もなし
掩牖終朝頭未梳。賢愚進退跡尤殊。
老樂のとしのをなかき冬の夢昔と今と身こそとなれ
歲暮時侍思往事。當初幽襟倚難堪。
思ひいつる雪ふるとしよ己のみ玉きはるよのうきにたへたる

侵頭霜色白過半。憶子鶴聲数第三。
白妙の色はひとつに身にしめよ雪月花のをりふしはみつ
商老昔容遺嶺雪。鄉公舊跡問溪嵐。
年くれて松きるしつの身のうへにをひてそ歸る峯の嵐を
家僮心倦皆抛我。寒月卷簾與誰談。
わかともとみしはすくなき年の暮夢かとたにも誰にかたらん

詩申請左(良輔)相府御點。

養和百首披露之後。猶可詠堀河院題之由有嚴訓。仍壽永元年又詠此歌。今見之一首無可採用之歌。仍滿歌了。而倩案之。當初詠出此詩時。父母忽落感涙。將來可長此道之由被放返抄。隆信朝臣寂蓮等面々吐賞翫之詞。右大臣殿故有稱美御消息。俊惠來拭饗應之涙。時々人望以之爲始。依思此往事。更書加此奥。殊有赭面之思。
(両書)但件人望僅三四年歟。自文治建久以來。稱新儀非據達摩歌。爲天下貴賤被惡。已欲被弃置。及正治建仁。蒙天滿天神冥助。應聖主聖朝之刺。受僅繼家跡。猶携此道事。秘而不淺。

〔右定家卿獨吟詩歌以拾遺愚草校合〕

朗詠題歌下

雜

風

禁臺風至大王宴。沛邑雪飛高祖歌。　愚作

鶯語遷喬新擇樹。風聲聖代不鳴條。　宮内卿入道

江頭頻動千里浪。松上自彈第一絃。　保修

白蘋紅蓼多添景。松籟竹竿不待秋。　菊壽

松近幽巖知愈好。花開遍界不曾藏。　香機

二品大王

いまも猶世にたちこえてふく風のちりをもあけぬ山のうへ哉

前大僧正

水のおもの草葉よりまつふきそめて松のこすゑにひゝく秋風

按察入道

めにみえぬ物とはいはし草も木もなひくに風の往來をそしる

瑚子

をのつからとふ人もなき宿なれはおきふく風の音もまかはす

禪職僧

くもりなき月日のみかくあまつ風ふきもたゆまぬ雲の上かな

尊位

うちなひくおはなか末にしられけり吹ともみえぬ野邊の秋風

降弁

おさまれるみよをしりてや天津風ふけとも枝を鳴さゝるらん

慶運

もゝしきの雲井をかけて吹風やおさまれる世を空にしるらむ

雲

群臣皆望元王德。大盾偏守漢帝徳。

一巷南津風雨前。千里浪濤雲散花。

落々開軒迷影。片々隨風委散情。

從風花錦映春來。淹月吞嶂起晩天。

朝來歸去高唐夢。天外悠揚向漢宮。

四かへりのあとをはきけとひとたひを猶ふみのこす嶺の白雲

心ひくかたしなけれはしら雲のたちゐは風にまかせてそみる

朝夕にゆきかふ雲のたえまよりみゆるやよそのかつらきの山

さかぬまの花とやいはむみ吉野のあをねかみねにかゝる白雲

さそふへきあらしをやまつ中空にうきまよひたる雲の一むら

かつらきのたかまの峯やしくるらん雲こそかゝれくめの岩橋

のかれこし浮世へたてゝしら雲のたえすたなひく山のおく哉

かゝて世にすむとも誰かしら雲の八重山とをき谷かけにいま

晴

長江月泛金波漲。遠岫雲收碧落清。
清明月冷金蟾影。碧落雲晴曉鶴聲。
九皐鶴舞天膚淨。萬里雲消山黛皴。
雲收萬里朝天碧。煙盡千峰夕日紅。
峯頭指點三千界。海上新開十二樓。

あき霧の空のへたてもなかりけり月にはれたる夜のこゝろは
駒とめてしはしやこゝにやすらはむかすみはれ行うき嶋か原
久かたの空もみとりにはれぬれは雲井のたつの聲そのとけき
あまつそらふきかふ風に雲晴ていとゝさやけき月のかけかな
みわたせはふしの高根は空はれてさやかにみゆる雪の村きえ
吹からにかすみも雲もあらしやまあらしにはれて花そ色こき
てるひかり雲もへたてぬそらなれはたみの心そいとゝはれ行
あまの原くもる時なくてらす日のいはといくしも我君のため

曉

遠鷄聲裏疎鐘報。斜月影前閒盞明。
景陽鐘動花將曙。曉月漸遲霜滿天。
五篠漏轉曙雲底。一點燈殘但月前。
五夜殘燈窓底盡。孤峯落月屋頭圓。
鷄聲十里星初沒。猿叫中巖月白殘。

なにとのおもひつゝけぬなかき夜のねふりもさむる曉の空
鐘のおとも月のひかりも淋しきは野てらの秋のあかつきの空
いまさらに過しむかしも戀しきはおとろく夢のあか月のとこ
たまくしけあくれはしらむ月かけにやかてわかるゝ横雲の空
たひ人もいまややとりをたつたやまゆふつけとりの曉のこゑ
このころはひとりおきゐて曉の月みるほかのなくさめそなき
むはたまのよふかき鳥の初聲もおいのね覺にまたれてそなく
年をへてをこなふ道にきゝなれぬわか山かけのあかつきの鐘

松

雪呈千歳忠貞色。風奏五絃第一聲。
老涙彌深三品名。皇恩益及一株榮。
吳江風底青琴韻。秦嶺雨中翠蓋陰。
參天翠色一株古。學雨寒聲千丈秋。
蓋傾千里清風志。琴奏百灘流水聲。

としをへてあれのみまさる軒はにもくちせて殘れ庭の松かえ
志賀の浦や神のみふねをよせし松しるしは杉に限らさりけり
すみよしのきしの松か枝こす浪に緑をそへていくよへぬらん
ちはやふる神代久しきからさきの松はみとりの色もかはらす
年ふれとこゝろつくしのしくれにてかはらぬ名にも高砂の松
千とせふる松は限もあるものを御代のためしに何をひかまし
千はやふる神代はしらすすみなれてみしも昔のしかのはま松
うき身世にたちよるかけと成にけりなからのやまの峯の松原

竹

此君遐久一千歳、吾友堅貞幾許年。
藍羅月薄當前砌、碧玉風鳴倚北窓。
但枝帶月空横影。葉葉含風寒拂塵。
六逸卜居閑□地。七賢遁俗放遊時。
浮花浪蘂不吾伴。明月清風只此君。

五月雨におひそふ竹のすゑの露あきよりも猶しけきころ哉
もろこしのむかしの人のとの葉を思ひしらせよまとのくれ竹
よにふれは涙そおつるくれ竹のうきふしことに露やをくらん
萬世もすむへきやとのくれ竹はふしとにこそ千代をこめけれ
くれ竹のおきふしそよくおとはしてよる／＼寒く吹あらし哉
九重のみかきの竹のふかみとりよろつ代ふとも色はかはらし
君そみむいすさかへ行九重のみかきの竹のちよもやちよも
いはひをきて君をそあふく川竹の流れて末のよもも八千代も

草

蕙暖風光生鏡水。染春烟色滿錢塘。
蒹葭州上露光靄。蘭蕙苑中風色芳。
錢塘遠見數重綠。鏡水臨望一道烟。
庭蘭泣露秋光冷。岸荻戰風夕色寒。
野火燒時無寸碧。春風吹處又平鋪。

とにかくにわか行末をおもひ草たねしかれせすしけるころ哉
夏草のきしにそれとはなけれともうきことしけきよもきふの宿
秋ふかきおはなかもとのおもひ草萎するの露や霜となるらん
五月雨にこまもすさめすまこも草沼のいはかき波はこえつゝ
よしやよし心のまゝにしけりあへうきを忘るゝ草の名ならは
思ひあらは道ふみわけてとひやせん葎のやとは草ふかくとも
燒すてしをち方のへのめもはるにけふりみえてもゆる若草
いかにせむ身を秋風はたえもせて花にもれたるたにのかけ草

鶴

仙人一擧凌雲翅。君子曉遊澤畔春。
萬谷黄鳥穿雪出。春山白鶴與雲行。
華亭清唳秋空露。茅澗寒聲入遠天。
白毛振雪望天意。丹頂凝霜繋曉聲。
曾無俗韻松千丈。只見清陰雲一圍。

朝なきの雲ゐをさまりて久かたの空にそたつのむれてなくなる
和歌の浦や芦へのたつのさよふけて霜に鳴音のきこえわたる哉
難波かたあしまの霜にさゝえて在明月にたつそなくなる
ふけふけは猶聲さゆるあしたつの上毛の霜やはらひかぬらん
浦つたふたつのもろ聲聞ゆなりしほひのかたに浪やよすらん
ふけ行はわかのうら風よさ寒きかたふく月にたつそ鳴なる
和歌の浦にねをなくつるのいかにして雲井に高く聞えあけ劔
さよふけて霜をくらしも近江なるやその湊のたつのもろ聲

猿

嶺猿欲取孤輪月。山叟得傳一徑風。

胡城駿馬作風躁。巴峡老猿草露深。

旅人催涙空山叫。行客破夢曉峡聲。

暮山催涙三聲後。曉峡破夢萬里程。

不堪逐客放臣耳。又是曉風殘月聲。

時しもあれ小比叡の杉に月おちてましらの聲は神さひにけり

つくはねの峯のあらしのさゆる夜は雲井に高くましらなく之

たひころも袖こそぬるれあしひきの山のましらの曉のこゑ

有明の月もかたふくやまのはにさひしさそふる猿の三さけひ

霜まよひあらしや寒き大比叡や小比叡の杉にましらなく之

やはらくる光をみかく玉すたれたのみをかけてましら鳴なり

あけわたる峯のかけはし風さえてかたふく月にましらなく之

さのみ又ましらなゝきそをのれまて契かひあるなゝの神かき

管絃

宮商變節五音徳。風俗改操萬國心。

竹聲雲冷兩三曲。松韻風高第一絃。

一天風理九韶曲。四海浪閑十徳歌。

舊隣向子笛添眼。彭澤先生琴未抛。

風前若奏清平曲。天下寧無[illegible]人。

雲井にそきゝてふりにし四のをのしらへ云に上るあきかせ

月かけもいとたけのねもふけ行け雲井に高くすみのほるかな

きく人もこゝろすこしやすみのほる月にさえたるいと竹の聲

いと竹の雲井に響くしらへまておさまれる世の聲そしらるゝ

きく人の心そなひくいとたけの代をもおさむる聲やすむらん

たか代よりたむけそめてかいと竹のしらへに神の心ひくらん

心さへかきなすとにかよふかなまつ風のみとなにおもひけん

しらへなる五つ七つの聲にこそ正しかるへき御代もしらるれ

舞妓　　香機

出水芙蓉新態度。向風楊柳妙腰支。

文詞

幽居徒對江山興。閑適唯催風月情。

古詞改粧晩唐作。風詠入神漢魏詩。

一篇催感班揚詠。六義入神白氏詞。

五千言裏虚無道。三百篇中雅頌詩。

九重闕底採明月。五字城頭吞碧雲。

かきとむる筆のあとにそいにしへのかしこき人の心をもみる

むすひをくとはのはなの露のみやきえぬる後の名をのこす覽

いにしへのかきをく筆のあとにこそ人の心のまことをもしれ

住吉の神やへたつる數ならぬうき身にうときやまとことのは

との葉の露のしらたまみかきをきてむかしの人の名を殘す哉

かきをけることはの花の色なくはいかて昔の春をしらまし

神代よりつたへきにけるとの葉の跡をそのこすしきしまの道
もしほ草かきをくあとはしけゝれと心にをよふ一ともなし
香巖

書文

皇墳以後事應紀。天地之間名自留。

酒

卯時飲瀉十分露。臘前醉傾一盞春。
王維歌餞陽關別。羲之浮觴曲水遊。
千鍾醉久百年際。万古愁消一盞中。
醉戲紅葉抱琴客。閑對青山倚杖人。
孔北海樽傾座上。終南山碧落杯中。

うきふしも忘れにけりな竹の葉のかたふく影にめくるさか月
春きぬと風静なる雲の上に千代のはしめとみきたまふなり
竹のはにをく白露やみかくらむ山のはしらていつるさかつき
たけの葉の露をすゝむる春風になひくや人の心なるらん
あら玉の年のみとせはさめすともうきをわするゝ藥なりせは
くれ竹の葉わけの月をみるときそ世のうきともしはし忘るゝ
たまほこの道のちまたにみきをゝきしその古にかへる御代哉
ちとせふる君かためしの竹の葉にもゝの藥もをよふものかは

山

宿鳥犀藏深洞竹。行人帶自故溪雲。
紅葉青苔經雨地。登山臨水送秋人。
夜猿[illegible]巴山月。老[illegible]雨。
松[illegible]戶風聲近。鶴下隣家雲色深。
碧落可攀梯百尺。白雲有約石三生。

あふきみて心高くもおもふかな世に[illegible]わか山の名は
またかゝるためしもあらす有馬山御はかいつみそ谷に流るゝ
岩ねふみこえつる山のおほけれは[illegible]の雲をわけてきつらん
山たかみこそのふるみちこえくれて雲にしほるゝ袂かな
すゝか山年ふるまゝにいかならん昔にはさもそ高くきこゆる
いつくにも月のすむてふくまはあれとその名そ高き姥捨の山
年をへておいそふまつの常盤山ときはかきはに御代そさか行
ほかに又たくひもあらし君をまもり世をたすくへき山そ吾山

山水

青嵐吹月洞庭前。白浪連天潮水長。
帶雲巖々一峯嶺。浸月溪々千里波。
鏡國苔花明月路。釣舟背向白鷗圖。

かしこしなわかれし水の流れさへひとつになりぬ山川のすゑ
川かみにあめはふりきぬ山かけのなかれもにこる谷のした水
あまの川たれせきかけてひさかたの雲よりおつる布引のたき
谷川のたえぬなかれをくむ人やふかき心をしらはしるらん
すみ渡る淵こそ[illegible]あさき心に世を[illegible]

水

巴峽啼猿過遠岸。瀟湘雲雁落平沙。
扁艇眇々一江浪。通海滔々萬古流。
地依名利無閑伴。水閱流淪嘲不言。
賀公垂釣閑中趣。楚屈洗纓塵外情。
吳頭楚尾疑無地。雲盡煙消只接天。
あとゝめしわか白川のみつなみの今にもこえて君そすむへき
いまも猶神代のまゝにかはらぬはいすゝの川のみつのしら波
筏士のさほもかよはすおほゐ川まさるみかさの五月雨のころ
久かたのそら行月のいかなれはのほらぬみつに影やとすらん
いまゝてもよゝのなかれの跡みえてかはらすすめる白川の水
かはり行おいのすかたのいけ水にうつれる影を誰とかはみん
かひなしやみのりの水の深きえにあへるはかりを思出にして

漁父　　香　　機

朝來臾着雪村酒。天上眠閑春水船。

禁中

花芳紫宸南階下。竹綠清涼東砌邊。
朝參衣舊壺中昨。夕拜履寒沙上霜。
紫宮天曙朝參士。青瑣日昏夕拜良。
龍蛇旗動映春日。翡翠簾纖卷曉風。
殘月猶聞行珮響。百花還趾御爐香。
よゝをへてつかへし道も九重におもひへたつる雲のうへかな
大内やみかきの竹にならのはのふりにしよゝのとやとはまし
もゝしきの大宮人は春ことに風にしられぬ花やみるらん
九重のくも井にさけるさくら花大宮人のかさしなるらし
おほうちの山のたかねにすむ月の曇らすてらす影そみえける
こゝのへの雲井の月にいく秋もくもらぬ御代の光をそしる
こゝのへの雲井のにはに月さえてたましくはかりをける霜哉
すめる代のたましく庭のみかはみつ水の心もにこらさるらん

故京

秦城早綫一樓詩。周室已遷九鼎空。
高離鴛歎豐邑宴。買臣着錦會稽旌。
門庭寂寞只三徑。風月凄涼是幾秋。
咸陽風物蕭條在。建業湖塵寂寞遷。
さゝなみやあとなきしかの都にも花にむかしの名や残るらん
ふる郷となりにししかのみやこ鳥むかしをしたふねをや鳴覧
昔よりあれまさるらしいそのかみ古き宮こに名のみのこりて
あれはつるしかの都の山さくら花そむかしはわすれさりける
あれにけりしかの古郷今もなをむかしなからの名は残りつゝ
あれはてし志賀の宮この跡みれは花と月とそかはらさりける
いとゝしくすみこし里はのわきしてあれのみまさる深草の里
すむ人の跡ものこらしむかしたにさとはあれにし三吉野の奥

古宮

溪嵐本自往來客。山月如今留守人。
瑤御庭荒人跡少。玉階構舊地形危。
荒籬草暗唯虫恨。故苑林衰獨鳥聲。
古殿雲深猶憶昔。破窓月冷只看秋。
琴臺夜曲猶奏。錦帳、粧花獨開。

へたてける霞も深しあさくらやはつせの宮の春のいにしへ
すみなれし昔やはいつらあれはてゝ露のみしけき庭の蓬生
たかまとのをのへの櫻ちりぬれはふりぬる宮に春そすくなき
ふるさとのあるしと月は宿れともみる人もなき影そさひしき
さえまさる風の音のみたかまとのをのへの宮はとふ人もなし
すみすてし高津の宮はあれしかと月はむかしの軒はにそすむ
ふりにける宿の軒はゝくちはてゝかはらの松い末そかたふく
【家集】［　］れにたにとふ人はなき故鄕にしけりはてぬる庭のよもきふ

仙家

若溪求簡風隨意。緱嶺吹笙雲隱蹤。
帝闕皇都非物類。翠松素柏拂塵囂。
蓬萊三島春秋久。崑崙二山日月長。
採藥山中雲自宿。練丹洞裏日猶長。
雲外三更烹白石。松陰千載讀黃庭。

くれはてすかへる山ちと思ふまにわかふる鄕は七世へにけり
山人のをのもてたちしふし柴のしはしと思ふに千代やへぬ覽
たちよると思ふはかりの程なさにわか斧のえは早くちにけり
色かへぬはこやの山のみねの松いくよろつよの年をへぬらん
東のまと思ふにくちし斧のえは千代をしへたるかひやなか覽
やま人のありかをとへは萬代のよもきかほらに月そさやけき
君かすむはこやの山の外にまたよもきか島をたれたつねけん
年をふる山路のきゝの色なれや世にたくひなきむらさきの雪

道士　香　機

城外雪朝披鶴氅。山中雨夜聽龍吟。

隱倫　香　機

栽竹工夫論活法。採梅消息入新詩。

山家　愚　作

家山新月窓中出。湖水遠帆松上飛。

宮內卿入道

陶門秋雨柴桑地。潛宅春風花柳山。

眺望

湘潭遠水千里浪。楚嶺暮雲萬里天。
遮眼新花雲隱映。長安遠樹雨斑青。
寸情不繫三千界。雙眼欲穿百尺樓。
日落江西孤島晩。煙消浦外遠村空。
吳楚東南千里眼。山川左右一樓頭。

なかむれはをのへの松に波こえてくもまに渡るよとのつき橋

にほてるや沖つなみまにすむ月を軒はの松の木すゑにそみる
春の日のながらの山に見わたせはかすみてとをきしかの浦松
まつらかたやへのしほぢの月みれはもろこしまても行心かな
すみよしの浦こくふねのはる／＼となかむる末はあはち島山
はる／＼としかの辛崎みわたせは松にゆふひの影そかゝれる
山のはゝそこともみえぬおくの海の浪よりいつる秋のよの月
まつらかた空をかきりに見渡せはおきつ汐あひに月そ殘れる

餞別

行衣應濕雲千里。別淚猶湛酒一樽。
美女何因辭夜月。仁人尊作餞秋風。
情唯在后空將去。我已顧身亦迢歸。
定見此秋〔[illegible]〕江上月。莫忘今日洛陽花。
他日定者春錦彩。今宵先惜曉鐘聲。

たちかへる跡をやはるにまつら潟もろこし舟の一夜とまりは
いのちあらはいくたの海にたつ浪のたち歸るへき別ならすや
たちわかれなこりそおしき旅衣袖のなみたをたむけにはして
おなし世のわかれたにかくかなしきに思ひこそやれ行末の空
別るゝもかへるもこゆる逢坂のせきしまさしき名をや頼まむ
きえかへりなほそこひしきしらつゆのおきわかれにし曉の空
かへりこむほとをはせめてたのめをけ心にかなふ命ならねと
とゝまるも袖こそぬるれこゝろのみをくれぬ旅の道しはの露

行旅

千山萬水入詩境。明月清風訪旅愁。
荻浦洲舟閑入月。藍橋驛馬不維松。
白雲埋〔[illegible]〕驛邊夕。明月送吾郊外秋。
斜風細雨行人淚。山笠水簑遠客愁。
詩情間得江山助。歸思更催杜宇聲。

露にぬれきりにしほれてたひ衣野山こえすきけふもくらしつ
くさ枕むすひし夜半のとこよりも猶つゆふかしうつの山こえ
旅人はいなはの山をわけこえてかへりこむ日をまつぞ久しき
おもひをく人しなけれとたひ衣みやこ戀しみぬるゝ袖かな
たちそめて幾日になりぬ旅ころも露みし袖そまたしくれける
たひ衣あさたつ野へのしらつゆやわかれをしたふ淚なるらん
たかし山木のした露もほさぬまにふもとの波を袖にかけつゝ

庚申

甲子四旬年齒老。庚申一夜興遊酬。
老子三尸天意至。庚申一夜漏聲長。
唯守三尸通五夜。終無一夢屆殘更。
逢思仙術養天性。猶守三尸禁夜眠。
已聞五漏嶋東嶺。何許三尸攀北辰。

影しらむほとにかゝけつ誰も又ねぬよのまとに殘るともし火
響をきしその神の名をとなへつゝふけてねぬよそ今宵えける

かのえさる程やへぬらん難波かたあしまをつたふあまの釣舟
夜とゝもに今宵はねてそもろ人の明行とりのねをは聞らむ
おほつかないかなるゆへにむは玉の一夜の夢を許さゝるらむ
なにゆへのいかなる神の誓にてねもせてよはをあかすなる覧
明るまて月みよとてやなへて世に今宵は人のねぬよなるらん
かのえさるたなゝしを舟こき出て又いつかたの浦つたふらん

帝王

衆星相共北辰位。萬國普霑春雨情。
少陽春至輔皇苑。昆閬風清布政庭。
一人有慶兆民賴。百姓承教四海治。
漢祖高提三尺劍。虞皇閑理五絃琴。
不求五帝三皇昔。只是宗文祖武今。

民の戸のやすきをきくもすへらきのかしこき君の恵なりけり
月も日もかけかたふかし九重の雲井に君かすまんかきりは
雨つゆにもるゝ草木やなかるらんわか大君のめくみあまねく
すへらきの神のみや人春にあひて心やいとゝのとけかるらし
やすみしる君かめくみは深き海の外まて頼む物にそあるらし
いまかゝるかしこき御代にあふ人の末を千年と祈らぬはなし
やすみしるわかおほ君のくらゐ山うこく時なくみよそさか行
やすみしる我おほきみはあめつちの七代五代の跡にこえつゝ

法皇　　香樓

金輪光是四天下。玉座齊排千佛生。

親王

銀漢分派稱城月。瓊樹分枝藩屛風。
雪[illegible]滿落孝王宴。梅[illegible][illegible]馬公主權。
樓多雪重梁園宴。[illegible]枝空閑灌宅鷄。
仙衛淮王雲上犬。幻[illegible]漢帝日邊人。
花萼樓高春色滿。桂陽宮舊月光孤。

猶いかに影しけからんさかふへき竹のそのふのちよの行すゑ
我宿のそのふの竹のわかみとり代々にこえたる一ふしもかな
鶯はいやしきやとをよそにみて竹のそのふのはつねをそしる
をのつからちよもへぬへしさかへ行竹の園ふの影にすむ身は
ゆく末の千代に八千代も常磐なる竹のそのふの影をたのまむ
よのつねのたねにはあらす色もかもわきてえならぬ山櫻かな
色かへぬ竹のそのふの萬代につかへまつらんすゑをのみこそ
ちとせまてこの世のやみをてらさなん竹のそのふの法の月影

王孫　　香樓

遠風德競蘭國種。三代榮傳茅土封。

丞相

周文卜興渭濱叟。殷武夜夢傳野人。
呂望當任七年釣。傅說相逢一夜夢。
七十漁釣渭濱叟。一夜奇夢傳野臣。

巖陵瀨月伴閑隱。渭水橋風執人。
就日賓光堯四岳。列星高但漢三台。
すか原やとはの露のたまほこの道そかしこき世にのこりける
むは玉の夢のたゝちのそのまゝにあひみし人の末のかしこさ
かけなひく雲のうへ人春きぬと星のくらゐにけふはいつらむ
影なひくみかさのやまの春のひはのとけき御代の光なりけり
かけなひくかはそひ柳涼しとてあふかぬ人やすくなかるらむ
かけなひく人のこえ行くらゐやまこれより高き道やなからん
久方のほしのくらゐのたゝしきは君かまもりとなれはなりけり
尋ねつるくまにはあらてみ狩場にあへるや道のしるへなる覽

執政　香　　機

成王幼日周公化。宣帝少時霍氏功。
春風のえたもならさぬ君か代にあつまの柳ちりそおさまる
かれはつるいつみの水もまとある心の底にわくとこそきけ
み雪ふるのはらにこまの跡とめてまよひし道の行ゑをそしる
今もなをみちはたえせす雪の中にたつねし駒の跡をつたへて
つたへきくあをき柳のせきのとにいまも千年の春をとゝめよ

刺史

會稽終織縞衣色。合浦再瑩珠玉光。
孔愉違帶瑞龜印。漢帝始頒銅虎符。
雙鳧飛來千里衛。十金相畏四知情。
紫陌花前馳五馬。金臺月下樹雙旌。
湖田萬頃黃雲滿。山郭一城白日閑。
おさめける國のしるしや民のとにたつる烟の空にみゆらん
陸奧のしのふもちすりあはれ猶みとせの後もみたれすもかな
煙たつたみのかまとも君か代のおさまる時やすなほなるらむ
ふく風もあたにささそふないにしへの春のかたみの山なしの花
くもりなき人の心にささそはれて浦わの玉もかへるとそきく
國をうくる四年はやすくすくれ共我名は長くとゝめこそすれ
たれか又なにはほりえの浦波にかへりすむてふ玉ひろはまし
四年へてひなのすまひにすむ人も君につかふる道とこそきけ

將軍

秋霜三尺隴山下。曉月一張幕府中。
河上投醪衆悉醉。陣中絕幕帝嘉功。
一張片月隴山上。萬里成風榆柳邊。
左文右武俱相過。四海九州惣太平。
囊砂背水尤奇絕。歸馬放牛是太平。
あまつ鴈ゆみはり月のいるそらに雲のほかにや聲はおつらむ
やよひ山ゆみはり月のいるかたの雲ゐにたかく鴈そなくなる
あつさ弓ひくまの野へにもみゝふは行末とをき子日をそする

詠史

巨人跡野中草。衆鳥覆翎水上氷。

箕山月靜許由志。沙漠雪寒蘇武節。
千尋井底一通路、數片煙中二樹春。
十九年間胡地雪。三千里外朔天風。
百世可知文質變。三元必記帝王功。
いかにして雲の外なるとつてを思ひもかけしかりの玉つさ
十年あまり雪とつもりし思ひをやかきあつめけんかりの玉章
ふる里にかよふ心をしるへにて雁のつはさにかくるたまつさ
榊葉にかけしかゝみにうつりけり天のいはとをいつる日影は
うきなからいのちはかりはなをありと雲井にをくる雁の玉章
玉章をあまとふ雁にとつてゝふたゝひ御代にあふそかしこき
あめつちのひらけしみよにかへるなり豊葦原のくにつとわさ
しき島の道のむかしをたつぬれはいつもは雲のあとそ残れる

王昭君

漢雲數片隔鄕夢、胡雁一聲人旅愁。
若以黃金營贈賄、定添紅粉久承恩。
塞遠漢宮千萬里。唯聞胡角兩三聲。
旃裘肉薄戎鹽雪、錦帳夢殘漢地花。
隔天猶見漢宮月、泣露新開胡地花、
ねになけと草のとさしの螢のはれとたにもきく人そなき
ます鏡うつろふ影をたのますはかゝる怨はあらしとそ思ふ
いつはりの心にくもるますかゝみあらぬ姿をたれうつしけん
かはりけるわかおもかけのたくひかと涙にくもる月をみる哉
なかれ行涙そつらきいかなれは思はぬかたに身をさそふらむ
繪にかきし唐人のいつはりや宮こわかれしはしめなるらん
四のをのうきねはかりを身に添てしらぬ越路をなく／＼そ行
今こそあれいかにしりてか兼てよりうき面影をうつし置けん

妓女

隨風春舞未央柳、帶露夕嬌大液蓮。
紅顏恰似芙蓉笑。翠黛更如楊柳低。
細腰結束唐楊景、雙袖曳復漢李袿。
艶曲花香樊素口。纖姿柳舞小蠻腰。
揖擲蒲南投玉地。沈香亭北對花人。
雪はらふをとめの袖もあまつ風いく度までもふきかへすらん
春風に梅のにほひをさきたてゝ雲間にみゆる花かつらかな
雲のうへやをとめの袖にをく霜のひかりもさゆる有明の月
をとめこか袖ふきかへすはる風にこゝろみたるゝ青柳のいと
あまつかせたゝ吹返せやほひめの花のうはきの袖のうつりか
鶯の木すゑをつたふはかせにもみたれやすきは春のあをやき
をとめこか花の衣のはる風は雲井よりこそにほひきにけれ
かくしつゝたえぬちきりと成にけりあまつをとめの雲の通路

遊女

嗟漢先催波上曲、一生空寄浦中情。

夜棹遊船揚妙唱。曉彈雅曲慰離憂。
孤舟月下和琴曲。萬里波中唐櫓聲。
江南春枕一樽酒。月下夜船三疊歌。
桃花扇底歌聲咽。蘆子舟中夢契新。
たれとしも契さためぬうかれつま人のなさけや空にまつらむ
をしてるや浪路を常のとまりにてたのめもをかぬ人をまつ哉
はかなしな空にちきりをまつらかた行かふ船の風のたよりは
旅人もなこりやおしきうかれめのうらわの浪のよるの契に
あさましやよゝの契をしら糸のひとりにはなと結はさるらん
夕暮はまつとしすれとうかれつま誰をさたむる契とはなし
心をはうきたる舟にのせしよりぬしさたまらぬ契をそまつ
なにと又身をうき舟のうきしつみ契はなみにまちあかすらん

老人

上陽愁永六旬夜。南嶺眉寒八字霜。
老心難繋煙霞月。祖業未拋六十秋。
北堰鬢冷胡城雪。南老眉寒商嶺霜。
紅顏春去無歸日。蒼鬢月臨不耐秋。
披書希見稱輪禮。投釣何論茅石心。
よの中にいとはるゝ身の老のはて草のかけにもいつか隠れむ
これも又おひの涙のとかなれやくもりかちなるよはの月影
いかにせむ花よりもろき老か身の五十のゝちの春のすくなさ
よそにても惜まれそするたらちねの老のよはひにつもる年月
あはれなり人に心をつくもかみみたれてものをなに思ふらむ
行末をまたぬにつけて老らくの人やむかしを猶したふらん
うきとのかすこそそはめさらに又老ぬとたにも身をなけく哉
かきりなく我身はおいぬ古のみぬ世をさへに人のとふまて

交友

嵩山不變空門約。胡越猶通淡水情。
范巨郷期元伯別。陸修靜送遠公辭。
清淡重浪池心水。蕭灑千行窓北筠。
閑話舊遊燈下淚。共忘世事夢中身。
孔門德至三三子。蓮社盟香十八賢。
知人のいまはなき身もかめのおの松そむかしの名殘なりける
はなの春もみちの秋をちきりをくまとゐの友のわすられぬ哉
春ははなあきは月とてむかし我そてをならへし人そ稀なる
高砂のをのへのまつは色かへていく世の人のともとなりけむ
さそはるゝわかのうらわの友千鳥人なみ〳〵にあとや殘さむ
かたりてそおなし心のほとをしる誰もかはらぬ末のあらまし
わかの浦に猶たちましる老の波よるへもしらす身こそ成ゆけ
まとゐせし月と花とのおもかけをいく春秋におもひいつらむ

懐舊

千古事過燈下淚。五更眠覺枕邊夢。

少年春意花如見。昨日蒼顔月獨知。
枕邊空濕數行涙。昔莫相逢千古人。
春秋空去皆成夢。憂喜不留何處尋。
三更閑話芭蕉雨。萬事總非蟋蟀秋。
なき跡をしのふ涙のかすよりもおほきは人のわかれなりけり
なにとけに今もかはらぬ憂身もて猶忍はるゝむかしなるらむ
うくてのみ過にし方を思ふにはこれより後のあらましもなし
古へをいとゝしのふのすり衣みたれたるよのうきにつけても
うきことはありしにもなをゝす鏡みしや昔をまたしのふらん
いつもたゝ同し憂身のいかなれは猶いにしへは戀しかるらん
思ひいてのありきあらすを人とはゝいかにこたへて昔戀まし
いはてこそしたに忍はめ身ひとつの昔かたりはしる人もなし

述懷

色心諸法入三諦。榮辱兩端屬一夢。
老鬢已衰霜又雪。我心有蟀月與風。
初綴詞條懸自揣。素非累葉莫人嘲。
顧身尙耻青雲器。述志只投錦水篇。
樂在其中山中興。意傳言外自他間。
よしあしも思ひわくへき方そなきとてもかくても過す我身は
しつかなるみ山のおくにいつよりか心のまゝに月をみるへき
さきの世の報をしらてとにかくにうしと我身をなに恨らん
いとへとて厭はれはこそうき世何に心のとまるとなけれとも
思ひしる心にかはにあるへきをなにかいとはむうきよなる覽
大かたの世のとはりと思ふこそうきになくさむ心なりけれ
嘆きこも身をやる方のなきものはすてゝの後のうきよえけり
はかなくもなけきける哉すつるたに心にかなふ此世ならぬを

慶賀

台嶺已加徒侶首。天朝再作護持身。
仁壽宮間期万歲。繁昌亭裏約千秋。
幸陪高宴遂風詠。既接群英[illegible]。
恩光新拜聖明主。忠節獨爲夙夜人。
歡娛報主遷喬鳥。榮色向人含笑花。
から衣うれしきかすをかさねてや袂にはかに人はたつらむ
身にあまる君かめくみのそのかすに三たひふまれし春陰の梢
すへらきの君につかへて千年へよ雲の上衣たもとゆたかに
憂身とは思ひもはてしかけ卷も畏き御世にあはすゝまさらす
数ならぬ身にこそわきてしられけれ道を君か御代のしるしも
雨露のめくみあまねき時なれは身のむもれ木も春にやあはむ
つたへきく昔の人のためしをもふみきなからにきはめつる哉
君か代のめくみにもるゝ方もなし月日のてらす國のかきりは

祝

四海八埏頒后德。一山九陵[illegible]。

好文樓宴千秋約。康樂聆遊万歲彊。
百姓万民安樂世。八埏四海大平時。
朝有賢良扶政事。山無隱逸遯功名。
南山自献千年壽。中國先知四海清。
久かたの月日の影もかたふかす空にしらるゝ御代のよろつよ
あめつちの道をみかきてたま椿八千代のかけを君そみるへき
君かよのひさしきほとは八日行はまのまさこの數かきりなく
もろ人のいのる心にまかせてそちよにやちよも君はさかへん
たまほこの道ある御代は白雪のふりにし跡にたちかへるなり
君か代はいくよろつよとしらはまの行末とをくかすむ空かな
しもやたひをかへの椿君か代におひかはるへき數もしられす
いすゝ川宮ゐふりぬと君か代にいくよろつたひ造りかへまし

戀

一封爭盡筆端恨。千緒猶殘書内情。
雲還雨去巫陽怨。秋逝春來燕子情。
芳契已空殘燭影。孤夢未結遠鐘聲。
衣裳薫只包涙。鏡匣塵深不畫眉。
琴中竊寄秋愁緒。月外誰知夜涙行。
ころもてにあまる涙やつゆとちるきりの葉おつる秋の夕くれ
果はまたつらさもかはる習ひそと語るはかりの一ふしもかな
夢にたにあひみぬ人のこひしきやさきの世よりの契なるらん
かくはかりしのたの杜のしのふとも涙の川をいかゝせかまし
ちきりをきし露のなさけを命にてうきとし月をふる涙かな
うきとはいまさらなにと夕暮の空たのめのみ身につもるらん
年もへぬあふにかふへき命とはいかにたのみて惜みきつらん
なからへん中とも人をたのまねは心のかきりうらみつるかな

無常

蘭苑風前悲有漏。槿籬露底覺無常。
黄泉道旅孤行涙。白屋假居餘執夢。
日臨籬下槿花色。風報窓前蕉葉聲。
身待幾時秋夕露。命殘孤夢曉更天。
南樓只有空殘月。東岱久〻一抹煙。
ありと見し昨日の人をけふとへはあとなき風に露そこほるゝ
常ならぬ此世なりとはいひなから昨日の夢にけふそおとろく
いつまてか我玉のをのなからへて消ゆく露のあはれとふへき
さためなき世のとはりはわすれねと猶身をしらぬ心なりけり
庭たつみをのれときゆる水のあはの哀はかなき世にもある哉
朝かほの花のうは露くるゝまの風まつほともさためなの身や
草の葉にむすへる露の玉ゆらもあるへきよとはいかゝ頼まむ
なき人のみえつるよはの夢よりもあたなる物はうつゝなりけり

白

至而日白空虚月。湿倚不歸君子心。

始皇忽感烏頭變。高帝自貽馬上盟。
輕波影淨長江月。老鶴翅寒深夜霜。
波心瀾淺三秋月。沙上又添一夜霜。
波底魚遊銀世家。雪中人上玉樓臺。
うちはらふつはさも月のかけ白し露をかさぬるつるの毛衣
こよひこそたなはたつめのわたるらめ雲井にしろき鵲のはし
梅かえを雪にまかへておるたひにみのしろ衣きぬ人そなき
いまさらにつもるもみえす月かけのさえたる庭にふれる白雪
池みつもこほりにけりなしろたへの庭のまさこち霜さゆる比
ふりつもる雪のひかりもしらとりのさきさか山の冬の夜の月
なこの浦やしもよの月の影さえてまさこちとをく千鳥なくこゑ
しろたへのたましま川にやとるなり氷のうへにこほる月かけ

詩十六
愚作四　宮內卿入道
侍從保修二　菊壽三

香嶋七
歌十九
二品大王三　前大僧正三
按察入道一　瑚子三
禪觀師二　佐信一
法印淨辨五　慶運一

右詩歌等去々年七夕披講之。今備一院叡覽。杰所被下勅點也。堅秘深密。莫改外見而已。
曆應三年五月九日記之　花押

右朗詠上下卷者大乘院宮御耦親王眞跡也。殊被自撰之。被下勅點之由。委見奧書畢。誠末代之至寶。何以比之哉。爲後證加卑詞而已。
准三宮 花押 誌之。

和歌五十七

永德元年室町亭行幸和歌集

春日侍　行幸室町第同詠池邊松和歌一首并序
關白藤原師嗣

九重城北有一勝地。蓋右將軍之甲第也。山勢横庭。三島之嵐氣吹面。水聲遶砌。太液之風流遮眸。
我君詔文武之英僚。而幸斯處。展詠觴之華筵。而盡其歡。時也花影照水。松陰映池。玉笛瑤笙謄治世之音矣。蘭舟桂檝引勝日之遊焉。小臣從翠華兮陪　宸宴。染紫毫兮記雅趣。其辭曰。

松かえもけふな千とせのためしとやさらに色そふはるの池水

大納言二位局

かきりなき君と松とのかけ見えていまよりしるくすめる池水

春日侍　行幸室町第詠池邊松和歌
准三后良基

影うつすみきはの松の千代まてもすむにまかする宿の池みつ

從一位道嗣

池水のすめるを時とみゆきするやともやちよの春のまつかえ

陪　從一位藤原實俊

萬代もすむへき庭の池水にきみとあひおひの松そこたかき

從一位藤原實繼

みふねこく池のみきはの松風にかよふしらへもよろつ代の聲

右近衞大將源義滿

この春のみゆきにまさる松の色もはや千世みえてすめる池水

陪　大宰權帥藤原實音

はるふかきみとりをそへて松枝のちとせのかけにすめる池水

權大納言藤原爲遠

松かえのかけにみふねをさしそへて千代をならふる宿の池水

權中納言藤原公時

移しうふる庭の小松のかす〱に千代のかけみるやとの池水

按察使藤原資康

いけ水にうつるもひさし小松原やかて千年のみとりならへて

權中納言藤原仲光

たちならふみきはの松や池水にあまた千年のかけうつすらん

左衛門督藤原資教

君もまたつきつみきりの池水にうつるかけそふやとの松か枝

參議藤原爲重

みふねこく浪に影しくわか松の千代まてうかふやとのいけ水

藏人左中辨藤原資衡

松か枝の常磐のかけやしるからしたつものとけき池のさゝ浪

永德元年三月十五日　和歌御會

題者　御子左大納言

講師　資衡

讀師　前內大臣

御製

講師　御子左大納言

讀師　前內大臣

春日賦花添池上景(以仁爲韻)

好是百花榮色辰。柳營風靜地無塵。水開太液寬涵月。山聳蓬萊長置春。

春日侍　行幸室町第賦花添池上景一首(以春爲韻)

准三宮良基

池館風流日々新。雅筵頌德太平臣。鳳笙龍笛湧花底。遊鶴波暄天上春。

從一位道嗣

水滿池塘〔[illegible]〕花影新。朱樓繡閣照青春。畫船利涉堪乘輿。頻奏笙歌不問津。

春日、、、同賦、、、

關白藤原師嗣

柳條拂浪水無塵。鏡裡蓄圖万象新。蕩々韶光今日好。風和花暖鳳池春。

春日、、、詩、、、

從一位藤原實俊

大廈功成宸宴新。百花池水自財仁。鶴龍高奏太平曲。文武修優幾萬春。

春日、、、一首、、

右近衛大將源義滿

喜今蓬華開黃道。潟得鳳凰池上春。遊輿不須靑蓋永。侍鼓聲
裡萬花新。

春日陪、、

大宰權帥藤原實晉

濟蕩韶風拂紫宸。笙歌聲裡百花新。滿船好景恩波潤。一載得五
湖四海春。

侍、、

權中納言藤原公時

高閣淸池經始新。翠華到處是中宸。岸花影裏綵舟動。寫得蓬
瀛萬歲春。

權中納言嗣房

日御照臨門館新。鷁龍綏載玉池春。汀花倒影覆冠屨。鏡裡
顏　樓上人。

按察使藤原資康

天蹕成蹊桃李新。恩光日綏浴芳辰。一歌詩自有方舟興。池上蓬
萊太液春。

權中納言藤原仲光

新開禁路掃香塵。珠樹玉池席上珍。水湧龍門千尺浪。花移鳳
闕萬年春。

左衛門督藤原資教

子來不日沼臺新。水綠花明別有春。此地宸遊則萬歲。吉歡既
醉綵船人。

兵部卿兼式部權大輔菅原長嗣

滿地物色喜津々。共沐恩波舟裡人。劒珮映花々映水。翠華日
暖柳鶯春。

藏人頭右大辨藤原經重

畫鷁風和絃管頻。水移花影鳳池春。恩波暖處魚於物　可識聖
遊今日新。

大學頭兼文章博士菅原秀長

涌花池面展紅茵。映柳水光浮畫塵。畫鷁綵龍多載興。宸遊日
永太平春。

少納言兼文章博士菅原淳嗣

花開禁路激紅塵。柳挾轅門擁紫宸。又見龍頭連鷁首。滿池歌
吹奏長春。

權左少辨藤原賴房

甲第池邊移玉樹。水枝百世柳門春。牙檣錦纜湧綠竹。更登花
間天樂臻。

永德元年三月十五日　御會

題者　勘解由小路一位　不參

講師　經重朝臣

讀師　前右大臣　下讀師兵部卿

御製　講師　藤中納言

讀師　關白

講頌人

按察中納言　藤中納言

別當　兵部卿

秀長朝臣　淳嗣朝臣

寛正五年仙洞三席御會詩歌

七言冬日侍　仙洞同賦八紘歸　聖猷應

太上皇製詩一首(以明爲韻)并序

從二位行權中納言臣菅原朝臣繼長上

移風易俗。俟元首而寄心。立國制民。資股肱而合體。方今開文武鴻均之道。被禮樂龍興之時。華裔和成。若寧相樂者乎。　太上天皇道則輿蓋之覆載。德同車書之軌文。功成辭楓宸。尙無得萬機之餘暇。治定居芝砌。偶欲催三席之華遊。嗚呼奎章讃金聲。推輪之踵事而轉增華。(恐字衍)蓋德形管絃也。增水之變本而將加厲。侍臣僉議曰。唐室之燕集。風一篇帶花。虞帝之鳳儀。簫韶九成飛月。盡今日之美。豈同年而論哉。加之大樹映仙宮。掛本枝百世之愛日。群英拱　皇室。吐言葉六義之芳風。遂使八紘之黎元。四海之兄弟各歸　聖化。何不歡欣。而月批文峰。而創姑射千秋之雲。鍾嵩藝苑。而向長樂五更之天。纔長筆非周邊。文尉幹押。空垂今白之鶴髮。而奏黃河之一清。謾從二八龍才。而效嵩山之三祝。洪顏魯鈍。偏招胡盧云爾。

三辰珠璧在璣衡。率土輿人歸　聖明。蜡月強開梅蕚景。詩仙挹袖遠滄瀛。

賦八紘歸　聖猷　詩(以明爲韻)

(三行三字)教化多年功未成。逢辭南面據閑情。皇家願復唐虞道。萬國咸誇　聖德明。

冬日同賦八紘歸　聖猷應　製詩(以明爲韻)

從一位臣藤原朝臣兼良上

(三行三字已下缺之)重華宮裏燕群英。倦披時聞賦鹿鳴。無限恩波八蠻外。漁歌樵唱又文明。

冬日……

從一位臣藤原朝臣房嗣上

天恩遐覆德行成。萬國歸朝頌　聖明。陪宴群英皆沐化。笙歌萬々自歡聲。

冬日……

關白從一位臣藤原朝臣持通上

架辨 皇猷滿八紘。殊方異域屬周城。百官惣已繼芳躅。三受
絲綸輔 聖明。

冬日同賦八紘歸 聖猷
應製以—

億兆子來歸帝京。八紘四海仰 君明。掖庭徽號准三后。新得
黃麻紫詔榮。

冬日—— 應製一首以—

右大臣正二位臣源朝臣通侚上

一曲簫韶奏九成。再聞大雅此詩聲。 聖猷記得鳳凰瑞。能使
八紘文彩明。

冬日侍 仙洞同賦八紘歸 聖猷應
太上皇製一首以—

正二位臣菅原朝臣益長上

天心元是愛蒼生。鰥寡獨知荷 聖情。匪啻大猷敷海外。八蠻
九貊也文明。

冬日——

正二位行權大納言臣藤原朝臣實遠上

八紘四海仰升平。 聖藻煕々正大明。自此無遺賢在野。兆民
談化共歡聲。

冬日侍 太上皇仙洞同賦八紘歸
聖猷應製一首以—

正二位臣藤原朝臣資綱上

雨露恩光溢八紘。合天 聖德萬年明。射山臘雪呈新瑞。里詠
塗歌共太平。

冬日侍 仙洞同八紘歸 聖猷應
太上皇製一首以—

從二位臣藤原朝臣冬房上

昔年聞說射山營。今見洞庭功已成。懷惠嘉賓九州外。頌聲々
裏 聖猷明。

冬日—— 詩以—

從二位行權大納言臣藤原公數上

祥發日華耀八紘。盛同末及此升平。萬機餘暇嘉賓燕。玉佩聲
中歌大明。

冬日陪 一首以—

從二位行權中納言臣藤原朝臣敎忠上

金鏡新開照八紘。群英雜還仰文明。蓬萊宮裏雅筵夜。聽得嵩
山萬歲聲。

冬日—— 詩以—

正三位行權中納言兼陸奧出羽按察使臣藤原朝臣親長上

群臣共喜被恩榮。四海八紘歸 聖明。記取蓬宮今夜宴。太平
一曲奏河淸。

冬日——

正三位臣清原朝臣敦秀上

一統八紘方泰平。烝民仰望聖躬明。北宸宮宴陪詩席。不覺漏聲催五更。

冬日　一首 以下——

參議從三位行式部大輔臣菅原朝臣在治上

冬景如春恩澤盈。道歸三代聖猷明。堯風再起吾君德。大化宣滂流八紘。

冬日侍　太上皇仙洞——

參議正四位上行左大辨兼長門權守臣藤原朝臣益光上

群仙遊覽欲三更。大甕聲中吹鳳笙。聖念與民同此樂。八紘四海月融明。

冬日陪　仙洞——

太上皇製一首 以一

藏人頭正四位上行左中辨兼伊勢權守臣藤原朝臣宣胤上

黃道雲開日色晴。蓬萊闕下御高明。八紘知是仁恩洽。野老謳歌唱太平。

冬日侍——

正四位下行大學頭兼中納言侍從文章博士臣菅原朝臣顯長上

大獻依舊合興情。德掩八紘天體明。蕩々恩光誰不仰。堯風舜日育蒼生。

正四位下行少納言兼侍從文章博士臣菅原朝臣長治上

光布聖澤來八紘。唐虞德化至今明。爲君御宴歡遊日。聞得詩章入匠明。

冬日——

從三位上行侍從臣菅原朝臣爲親上

文軌方今混八紘。家々日是有歡聲。恩光如燭御筵夕。愚晴微臣仰　聖明。

寛正五年十二月五日詩御會

題者前菅大納言

讀師右大臣

講師宣胤

御製讀師關白

講師唐橋宰相

冬日侍　太上皇仙洞同詠松爲久友應　製和歌一首幷序

征夷大將軍從一位行左大臣々源朝臣義政上

一陽來復之後。三冬嘉平之前。玉燭調兮泰階明。仁風翔兮玄澤通。上享龜鶴之樂。下歌鴻鴈之詩。
太上皇尊臨八維。則天之大明。見萬里似月之升。功成不居。德篤克讓。雖占姑射山之深洞。猶慕難波津之古風。催歡遊而一宵物喚非廣。設　宸宴而三席蓮德比蹤。詞伯歌仙之揮毫。述雅頌

以誇　聖化。三槐九棘之連袂。　奏綾音以備　叡聴。人已啓恩。
誰不簡德。觀夫松是長生友。千回之色映珠簾。雪亦豐稔祥。六出
之花翻玉砌。天降喜瑞。地出吉符。遂令率土之臣盡議治世之理。
（義）政無才無藝。早傳將相之名。云漢云和。謬接俊英之座。剰居
唱首。彌多厚顏。其詞曰。
（二行）君かへん千年のかけはかねてよりはこやの山の松にみゆらん
詠松爲久友和詞
（三行三字）仙人のよはひともなふ松をうへてみとりの洞にいく世契らん
冬日同詠松爲久友應
製和歌
いまそしる君千世ませのことふきはみなみの山の嶺の松風
従一位藤原朝臣兼長上
千とせとも限りはあらし我君の友とちきれる松の行すゑ
従一位臣藤原朝臣房嗣上
君にいまゝた千とせを契かな砌の松もかけをならへて
關白従一位藤原朝臣持通上
冬日侍　太上皇仙洞同詠松爲
久友應　製和歌
陰ふかき緑をそへて松かえの千とせを千たひ君そかそへん
従一位臣藤原朝臣資任上
君かへん千年の友といはれよりおほるみきりの松の木たかさ
正二位行權大納言兼右近衞大將臣藤原朝臣教季上
君や猶ちとせをそへて契るらんしはの砌のまつをためしに
正二位行太宰權帥臣藤原朝臣公綱上
友なはゝわか葉いく度さしそはん松は千とせに君かよろつ世
正二位行權大納言藤原朝臣勝光上
冬日陪―、
君そ今友とちきらん萬代の色あらはるゝ霜のまつかえ
従二位行權中納言藤原朝臣公敦上
いく千世そちきるもけふをはしめにて君に友なふ松の行すゑ（三歟）
權大納言正三位臣藤原朝臣信量上
（三行五字）敷島やこの道芝のみきりには千世もつもらむ松のことの葉（そ歟）
正二位臣藤原朝臣雅親上
君に今千代の木かけやさかふらん松の緑のほらのみきりは
正三位行民部卿臣藤原朝臣爲富上
末とをき松のよはひそわか君にあらそふ千世の友と見えける
正三位行權中納言藤原朝臣實右上
契をく君かよはひにあひ生の松のためしは千代もかきらむ
正三位行權中納言臣藤原朝臣綱光上
うつしそふるはこやの山の松かえに君か千とせや友に契らむ
參議従三位行右近衞權中將臣藤原朝臣公躬上
正四位下行左近衞權中將臣藤原朝臣雅康上

二行五字
みきりなる松こそ千世の後までも君かときはの陰をたのめめ
從四位下行左近衛權中將兼因幡權介臣藤原朝臣政爲上
ためしありて千世を契れる松風は君かことはの花さそふなり
從四位下行左近衛權少將兼丹後介臣藤原朝臣雅藤上
三行五字
萬代の霜の後まで君そ見ん猶あらはれん松のみとりは
藏人右中辨正五位上臣藤原朝臣廣光上
ちきれ猶千世へん松の行するもおなし緑の芝砌に
正五位上行右少辨藤原朝臣尙光上
行末を君にちきらは松かえも猶いく千世のかすをそへまし
正五位下行侍從臣藤原朝臣爲保上
契をく君かみきりの松かえにかはらぬ色や千世の行する

寛正五年十二月五日和歌御會

題者飛鳥井前中納言
讀師儀同三司
講師尙光
御製讀師室町殿
講師飛鳥井中納言

寛正五の年しはすの初め五日。院の御所に三席の御會ある由きこえ侍れは。人なみによろほひたらておかみまいらせむと。たそかれ時よりまいりて。女官の中にとしひさしきしる人の侍るをたよりにて。まつ御所のうちを見めくり侍りしに。はや室町殿の御まいりとて人々さはきあへり。先つれの御所へ御まいりありて。御さか月まいるほと。いつくのほそ殿やらんにたちやすらひて。むかしいまの物かたり侍しに。さても此御門のめてたくおはしますこと〻申されて。堯舜とやらんのひしりの御代には。醍醐の天皇をこそなすらへたてまつるなれ。御世をたもたせ給へることも卅よねんとか。その後の御門四そちの代に過させたまへと。御位のほとのひさしさはをよひたまへるもなきそかし。いまおりゐさせ給へるは。延喜にもまさらせましますは。いみしうめてたきこと〻はおもひたまはすや。御こゝろさまをたやかに御慈悲もふかく。御のうかたすくれさせ給ひ。御あひきやうありて。いかなるたみ山かつまてもあふきたてまつらぬはなし。さるは室町殿の代々の御ちきりもふかくて。あふきうつくしみたてまつらせ給ふことも。いにしへにこえ。又この御所さまのたのみおほしめして。御こゝろやすきかたも昔にまさりて。御身をあはせたる御なからひは。御ゑいのみたれなとにうちとけたる御たはふれことにいたるまで。御まへにさふらふ人の心あるは。涙をおとしてたのもしくうれしくみたてまつるとそきこゆる。過にし七月に御しやうゐありし時。今上も先室町殿の御所へはたらせ給ひて。それよりひとつ御車にていまの内裏へ入せましましける。御ゆく

するたのもしくこそ。そのゝちうちつゝき御幸はしめも（の脱）御幸なとありしも。おなし御所へそならせ給へる。御幸始ははれの儀にて。かきりあるうるはしきことゝも。きよくをつくしたまひ。後の藝御幸は又きしきのほかのことゝもうちそへさせたまひて。御さしきよりはしめて。さま〳〵のふりうの御さか月。しま破子。いし〳〵。御をくり（よ脱）物のしな〳〵。かす〳〵まねひたてんも。ことはたるましきになとかたられしも。猶きかまほしと侍りなから。御會時なりぬとさゝめけは。ひんかしの御庭のかたにいてゝ。たちまきれ見まいらすれ（ら脱）は。むろ町殿の御とものヽにや。おりゐほしにていときようなるか。おほく御庭にさふらひて。こと〳〵しけに見めくりして。なにのやしんのものかあるへきなれとも。きぬかつきといわす。なさけなけにをしのけられけり。その人にあたりては。さるかたの心つかひもけにあらまほしくそ見え侍る。　としよりたよほめくをやあはれとおもはれけん。さてもあへなん。みあれはうれしくてそのまゝ御ゐんのうへにのほりておかみたてまつる。　詩の御會はしまる。御人數。大閤。室町殿。近衞の前關白。くわん白。右大臣。前菅大納言。西園寺大納言。日野大納言。日野前大納言萬里小路前大納言。　洞院大納言。　葉室大納言。菅中納言。按察中納言。勸修寺前中納言。唐橋宰相。ます光朝臣。殿上人菅原朝臣。あき長朝臣。なり清朝臣。ため親。しんてんの貝の御座敷にみすかけわたして。南のかたのみすをたれらる。南のみすのきは中のほとに北むきにまします。關白御簾に唯し給ふ。おくのかた西はしのかた。東にみなみ（く脱）を上に公卿の座をしかる。室町殿はしの一座につかせまして。右大臣殿以下の公卿つき給ふ。おくには一條殿。近衞殿。二條殿以下の公卿なり。　先文臺の御すゝりのふたもちてまいりて。とくし講師の圓座をしき。おほとのあふらをきり灯臺にうつしなとしてまつ。　席かきたる人にや。菅中納言殿くわいしをもちてすゝみて。文臺のうへにをかせ給ふ。次に殿上人下らうより。次公卿下らうよりをかせ給ふ。右大臣殿とくしし給ふ。右大辨宰相殿したとくし。頭辨のふたねの朝臣奉行にて講師し給ふ。　講頌の人々少々からしのかたはらうしろにすゝみて候せらる。臣下の詩はてゝ。二條殿御製講師せさせ給ふ。から橋宰相殿おなしき講師なり。御製五反にて。二條殿以下公卿もとの座に歸らせ給ふ。さても洞院大納言殿はさいはいにゐい曲のみちにたつさはり給ひて。講頌の人にくはゝりたまへ（ん脱）るか。なとや御製を朗詠のやうにゐいせさせたまはさりけり。　ねんなきことかなといふきぬかつきそ侍りつる。公卿下らうよりしりそき給ふ。にしけんにていらせ。日野大納言殿。攝家の御三人。　室町殿は（は脱）みな歌をかねさせたまひて。座にとゝまりつかせ給へるは猶となりや。詩の奉行の人まいりて。懷紙をとりてしりそく。やかて。和歌の御會は

しまり。公卿、大閤。室町殿。近衛の前關白。關白。儀同三司。右大將。權帥。日野大納言。三條大納言。大炊御門大納言。飛鳥井前中納言。民部卿。小倉中納言。廣橋中納言。三條宰相中將。殿上人。雅康朝臣。雅ため朝臣。雅藤朝臣。廣光朝臣。尚光。爲やすなり。儀同三司はしの座につかせ給ひて。以下の公卿又おくはしにつき給ふ。殿上人懷帋もちてすゝみ給ふ。公卿又下﨟よりすゝませ給ふへきよと見侍し程に。三條宰相中將殿懷紙をおとさせ給ひて。座をたちてしりそき。しはし歸りまいらせたまはす。よそにたにいかゝせさせたまふらんとわひあへり。時にあたりてさこそかなしく思ひたまひつらめ。いつの御遊にか。ひはひかせ給へる人の。てんしゆかへりて。しらへかねさせたまひしを。きぬかつきの袖をさらぬやうにてうちかけたるによりて。しらへすまし給ふるとそ。ふるき人のまうせし。心ありけるかな。今の懷紙もさためてきぬかつきひろいつらん。こゝろなのおしみことやとそおもひし。さるほとにひろ橋の中納言殿。公卿のすゑより第二にていらせたまひしか。それよりそ懷帋をふせたまへる。さて公卿なかは計になりて。宰相中將とのゝさらにくはいしをかき給ひて。此度はすくにすゝみてをかせ給ふ。室町殿は御序あそはしたれと。つねのやうに御下﨟より次第に御懷紙をかせまします。たさせ給へる御さほうゝそ中あへる。讀師儀同三司つとめさせ給ふ。下讀師宰相中將殿。讀師奉行にてひさ光の擧なり。序の御こと葉に。雪の花の玉の砌にひるかへりて。あめつちもよきすいさうを見するよしの御こと葉きこえ侍りしに。をりからはいたくふりみたれて。御庭に御隨身とものたてあかし侍るにかゝやきて。一しほおもしろくめてたくそおほえ侍る。とく師から師しりそかせ給て。室町殿御座をたゝせ給ひて。とく師の座にかはりつかせまし〳〵て。御きくによりて講師に御くし給ふ。飛鳥井前中納言講師の座につき。御製をよみをはりてしりそき給ふ。室町殿めしとゝめさせ給ひて。やかて御製のひかうはしめさせ給ふ。れて五反にさためられしを。室町殿御製をかんしたてまつらせ給ひて。今七へん講せられし。いとおもしろし。かやうに時によりてひかうのかすをまして。御製をもかんしたてまつり。臣下の詠歌をもかんせ させ給ふこと。むかしはつねのとゝこそきゝ侍れ。源氏物語の花のえんのまきにも。源しの君の御〔詩歟〕をはかうしもえよみやらす。何ことにすしのゝしること侍るにや。いといたうある御ことなり。ひかうはてゝ。みなもとの座にかへらせたまへは。院まつうちへいらせ給ふ。御簾はしめのことし。公卿下﨟よりしりそかせ給ひて。しはしありて御遊はしまる　拍子としかす。付歌あやの小路の前中納言。笙中院大納言。ひちりきあやの小路前中納言。笛四辻中納言。ひわ右大將。箏四辻の前宰相中將。和こん大炊御門大納言。呂。あなたうと。

鳥の羽。むした（ス脱歟）作。万さいらく。伊勢の海。さんたいのきう。奉行は氏長の舞なり。父ひきかへて御さほうにて。御ふえのはこもちてまいらせ給ひ。琵琶。和こん。そうのことなと公卿のまへにおかる。院は御しやうのふえあそはす。えもいはすおもしろし。さいはらの聲。糸竹のしらへ。いとさむきにすみまさりて。まことにけふのたうとさ。いつの世に忘れ侍らん。室町殿は猶かたはらの御簾のうちに。しのひて御ちやうもんありて。あかつきかたにそいてさせ給へる。あはれなる事にもゆへ／＼しく御すゝみしりたき。人よりことに見えさせ給ふよと。さすかになにのあやめもわかぬ身なから見たてまつるそかし。事はてゝ入御あり。右大將殿御簾かゝけさせ給ふ。人々あれいて給ふまてはさふらひつれとも。ほれ／＼しくてよくもおほえす。詩歌講せうの人。所やくの四位五位六位なとをもたつね侍らす。かたはしかきつくることも。いかはかりのひかめ。ひかきゝおほく侍らん。御覽せん人はかたはしになをしつけさせたまへとなん。

ぬししらすの物語　　飛鳥井前中納言まさ親の御作。

〔右寛正五年仙洞三席御會詩歌舊本闕今以圖書寮本補之〕

文明年中應制詩歌

禪林應製詩

醍醐帝應制　　臣僧景徐上

淡（満イ）月疎星繞禁闈。釣天宴罷思依依。玉溝鳴雫（寒カイ）夜寒重。暫爲蒼生脱御衣。

應制贊善海公　　臣僧龍澤上

一樹藤花幾萬年。天兒屋後本根堅。海鹹河淡能調鼎。猶勝壇梅傳野賢。

應制贊具平親王　　臣僧龍澤上

源氏名家仰祖宗。山河不改舊提封。仙風倘被雲仍否。今日金華有亦松、

應制菅家　　臣僧景三上

菅家承相是天神　一寸丹心白髮新。聖代祇今無逐客。梅花北野不藏春。

聖德太子　　令諸

片岡逢聖餓顏調。膠木四王誅父讎。更有憲章條十七。至今知我者春秋。

應制小野宮大臣　　臣僧明揄

君正聖時臣亦賢。曾論功賞氣衝天。紫宸夜半退朝後。百鬼魂驚一劍前。

行基　　景沂

大士由來苦海航。度生爲急出扶桑。王畿四十九名利。突兀連雲數百霜。

御裳濯河　釋桂悟拜上

（影向紅日照扶桑）五十鈴日夜聲。水流長濯（五十鈴川）御裳清。（濯御裳兮　君恩思波四海）山河不改釣天樂。共沐（市流）（如帶數天長イ）恩波四海平。

弘法大師應制　臣僧宗馥

果公曾付一袈裟。五佛寶冠輝　帝家。好向金剛峯下睡。野雲深處待龍華。

奉勅再賦役優婆塞　桂悟

苦行萬岑驅鬼神。空飛咒術世無倫。天皮應感孝親節。逢雪邊年稱逐臣。

春日社　大叔上

昔年駕鹿托靈蹤。春日宮深雲自封。金碧裝山三百寺。紫藤花外講時鐘。

應制男山　臣僧景三上

南有男山護　帝城。女郎花下雨初晴。祭神如在中秋夜。月自放生河畔明。

應制富士山　臣僧景三上

莫言北闕隔東關。富士朝朝如對顏。四海一家皆　帝力。千秋白雪　御前山。

龍田河應製　靈彦上

湛湛龍河上有楓。依稀濯錦蜀江中。此流若接御溝水。霜葉浮來幾片紅。

北叡山　令諸

近當東北艮爲山。台教三千護帝寰。從一叡文北嶺教。津津靑色入天顏。

芳野應制　靈彦上

芳野山櫻雲又霞。幾人看去幾人誇。聖朝今少遊遊者。上苑春風無限花。

武藏野　景沂

東武名區懷索聞。草留春色路難分。行人只識鷹鷂樂。新月磨鐮掛野雲。

應制更級里　臣僧周鏡上

千古月明雖庾樓。而今更數信州秋。淸光夜照姨山面。影落長河一帶流。

天橋立應制　靈彦上

碧海中央六里松。天橋勝境是仙蹤。夜深人待龍燈出。月落文殊堂裏鐘。

應制宇治橋　臣僧景這上

小島分流一道長。畫橋橫處欲斜陽。樵舟撐棹微風岸。半岸靑柴半翠楊。

應制大井河　龍統（了庵イ）

（先皇閣昔幸西河　唱年[illegible]殘[illegible]月多　宴是洲邊舊詩[illegible]　昔根青）

洪河流出碧嵯峨。自古遊人此地多。歲歲櫻花楓葉影。浸山錦（處白如波イ）繡不隨波。

應制神泉苑　龍統

上林風物草連空。尙有龍池記（存イ）故宮。何日震遊留玉輦。神泉純（能イ）浸五雲紅。

須磨浦應制　臣僧景茝上

閙路逶迤傍浦斜。瑤琴響處是誰家。廊纔葺葦墻編竹。月色如霜映白沙。

應制賦飾磨市　臣僧龍澤上

曾出播鄉今幾年。夢送買客往來船。若無衣裼懷珠者。一朿必市聲闘九天。

應制白河關　龍統

委轡白河風露秋。長天霞（霧イ）盡隔　皇州。光陰那似鷄鳴客。一吹（夜イ）關門鎖不留。

應制利仁將軍　臣僧明揄

日域無雙烈丈夫。禁林頗牧耐奴呼（呼奴イ）。雲孫猶有齋藤氏。百萬軍中染鬢（白イ）鬚。

金岡　桂悟

世稱金岡能畫名。御前翠障遠山橫。承和不製宜和譜。只有淸涼留月明。

俊綱朝臣　令諸

（在宇城[illegible]系詩　終呼代見伐宋家　歎詩應是[illegible]衣格　昨日夢）

曾家伐見稱陶朱。洛下齊將長者呼。富貴何徵麟父筆。浮雲未散舊仙都（花今[illegible]花イ）。

晴明應制　臣僧景茝上

曾隨賀氏考（記イ）星辰。何歲化來龍樹身。掃雪看梅梅是曆。爲君又獻一枝春。

道風　大叔上

古今書屬二王家。法帖聞君學得誇。昔日御屛（房イ）揮翰處。想應新樣似梅花。

應制贊博雅卿　臣僧龍澤上

仙樂響天初誕生。太平曲假此人鳴。琵琶夜靜披（授イ）花月。洗盡明妃馬上聲。

應制住吉浦　臣僧景三上

住吉神靈地亦靈。市橋一色水天靑。近聞浦口風波穩。鷗鳥宿松呼不醒。

廣澤池應制　臣僧宗筬

何處蟾光天下尤。洛城西有白蘋洲。豈無漢武遊斯境。彷彿影娥池畔秋。

應制業平朝臣　臣僧周鏡上

天下奇男語帶霞。朝廷賜姓舊名家。金釵十二風流首。歌亦有香無色花。

成通卿　景沂

萬古卿門便有卿。蔭家奕葉沐恩榮。薜蔦巢鞠李牟笛。天下俱傳第一名。

人丸　大叔上

風騷高手莫如公。明石一篇詞最工。朝霧漁舟幾來往。不知身在詠歌中。

應制衣通姬　龍統

允恭天子有文姬。半詠蠨蛸在戶時。千古玉津春島上。碧霄抛望到遊絲。

志賀都應制　臣僧宗歲

昔築都城湖水濱。漁樵村裏半簪紳。其君以後無宮殿。遺愛山櫻幾度春。

應制小野小町　臣僧周鏡上

城頭三五少年粧。小野村南澤草芳。可惜君門恩斷後。梨園弟子白頭霜。

應制難波津　臣僧明榆

白鳥明邊烟一隈。難波寺廢夕陽頹。秪應風物無今古。秋有蘆花春有梅。

長谷寺　了菴〔左一首據イ本補之、但了菴者即桂菴也〕

斷木隨流歷幾春。桀陀留跡白花新。景雲鑾駕幸斯境。現梵王身亦度人。

天橋立　芳野　龍田河　聖德太子
比叡山　俊綱朝臣　小野宮大臣　難波津
利仁將軍　醍醐帝　須磨浦　住吉浦
菅家　晴明　富士山　神泉苑
白河關　衣通姬　御裳濯河　長谷寺
金岡　行基　武藏野　弘法大師
廣澤池　志賀都　人丸　道風
春日社

右應制詩三十首。各賦三篇。

業平朝臣　小野小町　更級里　男山
大井川　淡海公　具平親王　博雅卿
飾磨市　役優婆塞

右十首亦應製也。蓋前三十篇、一後加焉。

孔子　御製

海はらや筏の棹のすくならぬ代にはいつくをさして行へき

唐堯　覺惠〔一條〕

茅かやふく水にみしかきつち橋もすなほなる世を立渡れとや

ちかやきらす宮殿のをろかなる事之。つちはし三尺なり。

神農　政家

おしへをく初をきけは小田かへす民もその代をささ〔し歟〕そ仰らし
はしめてすきをつくりて耕作をゝうふるなり。

義之　　　　尊　應（青蓮院）

さらにこのたゝよふ雲も海山の遠きしろへにみつくきの跡

莊子　　　　増　運（實相院）

我やゆめこてふや夢とたとるまに南の花の春もへにけり
南花とは所の名なり。其所にすむ人なり。

善導和尚　　禪　空（前法輪三條殿）

もとの身もけにかの國のあるしとや出入息の佛なるらん

老子　　　　通　博（久我殿）

萬代を松の藤なみむらさきのけしきもうかふ庭の春風
仙人なり。此人より初なり。たうとく經をとく。可尋。

東坡　　　　實　遠（西園寺殿）

筆の跡の殘る汀に袖ふれし硯を海のためしにそしる
袖中の東海とは硯の事なり。

褒姒　　　　信　量（大炊御門殿）

とふ火のゝ草葉もえぬとみる比はほゝゑむ花の色もそひけり

李太白　　　榮　雅（栢木入道殿）

水くきにさくをみし夢まさしくそことはの花と世に匂ひける
夢に花筆に生すと見てより作文勝れり。

達磨大師　　通　素（中院殿）

乘えてもかくこそありけれ渡りせし芦の一葉の跡の白浪
葦にのりて天竺より大唐にいたる。

陶淵明　　　教　秀（勸修寺殿）

五本の柳のみとり春過て秋にうつろふ庭のしらきく
五柳をうへ籬に菊をうふるなり。

郭熙　　　　高　清（海住山殿）

秋の山うつしとゝむる筆の跡に朽ぬその名も殘る紅葉は
秋の山。平遠の躰を繪にかくなり。

伯牙　　　　親　長（甘露寺殿）

見れはなを思ひもうしと琴のをゝたちてやしたふ心なるらん
鍾子期といふものに別て後。絃をたちし人なり。

張良　　　　雅　康（飛鳥井中納言）

つたへてし一卷よりや勝とを千里の外にしらせ初けん
黄石公に逢て一卷を得たり。

孫思邈　　　實　隆（三條西殿）

わかえつゝ三十いろえてし藥もや千々の金の名に殘るらん
龍宮より藥方三十首を傳たり。

楊貴妃　　　教　國（滋野井殿）

心ありて花も情やふかみ草人の手ふれし色に咲けん
花にたとへたり。

列子（仙人風にのる）　　政　爲（下冷泉殿）

空にふくたより待てふ仙人も風の治まる世をやしるらん

原憲　基綱

人とはぬ草のとほそにもる雨もたのしむ道にきくはうからし

蓬の戸桑の窓に居て。雨を聞て樂者なり。

養由基　爲廣（上冷泉）

かしこくも世にちらす名やしらま弓あたる柳の七葉なるらん

潯陽江（うしほて、まてみちて又かへる所也）　同人

村雨の音をのこしてよる浪もむかしにかよふ江のほとり哉

羅浮山　覺惠

梅か香をかりねの山に夢さめて梢にさはく村鳥の聲

梅ある仙境也。昔夢に行てあそふ事あり。

輞川　政家

住なるゝ所からにやうつし繪の筆もたへ成名を殘すらん

繪かきの王維か居所なり。景勝たる所

慈恩寺（小下閑雲秋寂院と云詩あり）　尊應

法をきく林の庵もをのか名の蘭の昔の秋やこふらん

咸陽宮　増運

つたへきくその宮つくりいかなれや六を合せし國のさかへを

秦始皇の殿。六國のさかへ有。後にまた六國よりやきたり。

五湖（梅の在所也）　覺空

梅か香のにほてる海の夕なれを見ぬおもかけにうかふ月哉

錢塘江　通淳

月影のさすやうしほも名にしほふ秋のも中の後も三夜まて

八月十五夜より三夜潮さして。月おもしろき所之。

含章簷　實遠

ちりかゝる軒はの梅は色そへて猶ひとしほの花のかほはせ

正月七日に壽陽公主のひたいに梅おちかゝる之。是梅花粧と云也。

渭濱（太公望つりせし所也）　信量

つりの糸によりくる浪の白玉やかゝる所の名にのこるらん

昆明池（星の影うつる也）　榮雅

ひこ星のかたちをうつす池水は天の河せやせきてたゝへし

華表　通秀

音にたてゝつるのむれゐし二柱千とせの後も名こそ朽せね

仙人丁令威鶴と成て人間へかへりて。華表柱に書て云。城郭は是にして民は非之。

廬山瀑（青の東院の裏詩也）　高清

音にきく人や庵をむすひけん名におふ山の高きしら糸

函谷關　教秀

深き夜のせき路越くる月影にかゝやく玉の沓のかすく／＼

孟嘗君か三千人の珠の沓をはきてとをる所之。

黄河　親長
君やいまためしにうけむ五百年にすむ川水の濁なき世を
五百年に一度すむ川なり。其時聖人出る之。
湘江夜の雨ふる所也　雅康
舟つなく入江の水のふかき瀬にあはれそへたる雨の音哉
商山四皓秦始皇ノ時ハカクレテ漢ノ世ニ出タリ　實隆
みし人は春の都に出はてゝ月ひとりすむ秋の山陰
楓橋三體詩ノ心也　教國
浦かせにいそ山さむき鐘の音やちかきうきねの枕とふらん
巫陽臺楚ノ襄王ノ時也　政爲
いつこゝにむすひし夢の名残さへあしたの雲に跡かたもなし
天津橋こゝにて郭公を聞て天下の事をしれり　基綱
出て世につかえん人を郭公かねてなのりし橋とこそきけ
赤壁　同
舟とをく月にあこかれふく笛のしらへにかよふ浦鶴の聲
東坡あそふ時笛をふく。道人在。つゐに鶴とけして見えす。

右以酒井雅樂頭忠道朝臣之本校合了

〔右禪林應制詩以内閣記録課所藏古寫本（林羅山自署）加校合了〕

文龜二年春日社法樂詩歌

都初春　桂林　德昌東堂
春入皇州曙色殘。千官鏘珮侍朝端。天顔有喜黄封酒。雪似落花吹不寒。
政家准后　近衛殿
日の光いつくはあれと春の色に奈良の都や先霞むらん
野霞　仁甫　聖壽東堂
春日晴時野色分。凝如碧露（霧イ）散紅雲。何須杏艶桃嬌春。元是神衣五彩紋。
冬良　一條前關白殿
さほ姫の春の衣を春日野の神に手向て立かすみかな
夕鶯　古桂　弘稽西堂
古廟雨餘花委泥。夕陽無賴盡情啼。神鑪定惱惜春意。百囀聲中日又西。
尚通　近衛前關白殿
暮るゝをもしらて木つたふ鶯や花の光にめてゝなくらん
原若菜　東江　中昇西堂
原在都南易得春。青々穿雪玉芽新。可憐村婦爲明信。摘來盈

儻欲薦神。

山はまた古葉なからの松もあれと若菜つむらん春日のゝ原　實淳　徳大寺前左大臣

簷梅　雪嶺　永瑾西堂

野外那勞去問梅。簷間自有一枝開。只疑身在老逋宅。疎影暗香侵戸來。

吹風やよその木末なうつすらん今朝何ふかき軒の梅か香　公藤　西園寺内大臣

柳靡風　有慶　光榊毛頭

翠柳陰濃不自持。春風嫋々有天姿。千條吹散龍池水。似我鏡中愁幾絲。

青柳のなひくはかりを姿にて袖におほえぬ春の夕かせ　宗綱　中御門新大納言

峯皈鴈　周叔　善秀毛頭

日暮衡陽雲路懸。北皈思自雪消加。此心欲向春風問。花戻鴻邪鴻戻花。

かへるさをいそく心に花やあらぬ雲ゐる峯をこゆるかりかね　政爲　冷泉民部卿

春曉月　慶初　清叔毛頭

春天垂曙遠鷄啼。殘月朦朧照碧閨。蝶夢醒時捲簾見。銀蟾掛在朶梅西。

花も木もみとりにかすむ庭の面に村々白きあり明の月　實隆　三條侍従大納言

花交松　光初　宗贇毛頭

庭松知歴幾星霜。蒼翠交花向夕陽。一片未飛風有意。歸來仙鶴多應香。

目かれすよ春の日かすむ峯の松にたえ〳〵かゝる花の白雲　季經　四辻右衛門督

杜花　周文　宗桂毛頭

太子遺蹤歳月深。片岡山下樹森々。影堂花落無人掃。信道黄鸝空好音。

風かほる三笠の杜の影ひろしいく重かなひく花のしらゆふ　季種　小倉中納言

春曙　欽仲　正捷首座

曙色朧々暁靄生。城南無處不春情。鶯聲破夢窓初白。忽覺陽鳥上若英。

春の色を三笠の杜のみしめ繩引つられたる横雲の空　政顕　勸修寺中納言

岸藤　貞堅　宗幹首座

曾聞玉戸闌千霜。岸畔藤花風露香。枝蔓臨流影撩亂。一條紫綬濯滄浪。

元長　甘露寺中納言

長閑なる南の岸に咲初てさかりひさしき北のふしなみ

待郭公　温仲　敬光首座

有鳥教人思故郷。雲如楚塞水如湘。花時不断（聽イ）又何夕。却月廊前盧橘香。

宋世　飛鳥井中納言入道

忍ふねは誰も人まをまつらんとむくゐしらする時鳥哉

荷菖蒲　宗峯（京イ）　梵伊首座

出水新蒲數寸幾。良辰樂事共相催。任他九節着花未。先採青々泛酒盃。

雅俊　飛鳥井宰相

今日といへは緑の色をあやめ草かりほにふかぬ軒端をもみす

早苗　月舟　寿桂首座

四月分秧幾戸租。青々出水細於鬚。老農先卜豐年瑞。涼葉露凝千斛珠。

政家

きのふけふとるや早苗もせき入る水もみとりの色そすくなき

五月雨　先甕　宗悟首座

簫瑟過旬梅雨邊。簷聲倦聽日如年。人間惜愛雨難免。一滴千金六月天。

龍霄　萬里小路右大弁宰相

五月雨にみかくれぬとも春日野の荊の路は下に断めや

島夏草　春莊　宗桂（椿イ）首座

天開一島水中央。夏雨過邊幽艸香。地似蓬萊人易老。芊々寸緑又迎涼。

冬良

さゆりさく野鳥かさきの溝しほに今朝みし花も浪の下くさ

湊夕立　悦岩　東念首座

雨逐輕雷忽掃空。釣絲卷罷暮江風。不知新月吹晴上。蓑衣殘聲半掩篷。

政賢　細川右馬助

みなと江や空にも雲のみほつくししるしは浪に過る夕立

螢過窓　春園　寿崇書記

暗飛自照逐風蹤。客舎無灯欲夜初。憶得觽窓十年雨。練嚢分影讀漁書。

済繼　姉小路中將

飛螢ひま行影のほとなさもあつむる窓や猶おしむらん

早涼至　有自　瑞承蔵主

偏覺光陰似急流。暑威未退早涼浮。吟邊記得歐陽賦。一夜風聲六月秋。

尚通

荻の葉もあらぬ音して吹かふる風こそ秋の初なりけれ

七夕　仙英　以養蔵主

獨夜空登乞巧樓。佳期歲々望牽牛。銀河恐似黃河帶。鳥鵲無
橋幾度秋。

政春　細川阿波守

織女のをるてふ絲のふしもあへすさをなくるまの別かなしき(もイ)

山居萩　希三　宗環藏主

山家喜萩似滄洲。露葉風莖吹人秋。自是園人難結夢。幽窓夜
答小蟲響。

爲孝　冷泉中將

秋の色も憂世の外に見る夢を軒端の萩にさそふ山かせ

女郎花　文舉　龍選藏主

金屋佳人難見料。愁根託草幾年花。一叢泣露秋風暮。似護芙
蓉舊草花。

高國　細川六郎

名にたゝはうき物とてや女郎花とへとこたへぬ色に吹らん

草花露　仲舒(龍イ)　元暢藏主

草著深紅淺色加。詩情勾引小籬笆。一鶚好保淸香露。恐有微
風來觸花。

宋世

ききわくる尾花葛花なてし子の花野を時とむすふ露かな

秋夕雲　常菴　竜崇藏主

山拭秋稜遠且平。西風一抹暮雲橫。曉來只恐漫吹盡。合向陽
由作商葉。

公藤　西園寺內大臣

みるもきくもさひしかりけり秋は猶人めかれの軒に山のはの雲

幽寛　覺雪　渓藏侍者

湯飲雲泉飽食葷。岩山吹茅覺秋生。幽々呼友清涼地。誰有林
間代木聲。

實　晴

さを鹿の妻は遂か袖ふりて心もひかぬ音をやたつらん

月見秋　河清　且温侍者

白帝素秋情互加。清光偏似向秋詩。夜來掬水在吾手。更待衣
上欲點花。

實　淳

霞む夜の春より秋と契り置ていまはの頃の月のさやけさ

老惜月　春和　悟聞侍者

三五東時頭上樓。暮齡無幾月西流。自獨立書涕流後。不識明
年又値秋。

行二　二階堂山城入道

したふとは更行影に思ひしれ老ぬる後の秋の夜の月

擣衣　東暉(暉イ)　永果侍者

一葉西風送夕涼。淸砧戶々碎愁腸。旅人不作故鄕夢。玉杵聲
高殘夜霜。

宗世

とはゝやなうてはノたくる紫の花すり衣それはいかにと

水邊菊　玉岑　如玲侍者

霜後菊黄秋漸過。一枝倒影照清波。落英若是隨流去。須爲三閭入汨羅。

政家

さほ川のなかれや奥に（とほくイ）匂ふらん露もおちそふ菊の下水

紅葉遲　廷綸　惠信侍者

春暮花稀連夜風。幾回樹底認殘紅。何如霜後楓林好。天下江山錦繡（綉イ）中。

季種

分つくす山また山も露霜のあさくは染ぬ木々の色かな

關時雨　文宗　契範侍者

千里天陰頃刻間。秋風吹雨度重關。行人掉臂歸程急。雲晴林梢一抹山。

季經

村時雨わらやの軒に音はせて露のみもるか相坂の關

田家霜　鳳崙　發祥侍者

村落秋深打稻場。平田萬頃草初荒。農夫不識靑雲熱。蓑袂裏歸殘夜霜。

政爲

おきまよふ霜のいなくき猶見えて水なき小田そいとゝ寒けき

澗氷　月林　宗進侍者

寒玉光凝千仞深。帝留一片豈無心。潛龍若要蘇枯槁。可向旱天爲傳霖。

元長

音さはく瀬々をのこして波もなき淵より先そ氷初ける

千鳥　桃蹊　光悟侍者

群飛成隊影高低。月暗寒沙迷舊棲。殘夢易驚終底客。數聲啼過海門西。

實隆

さよ中に川風寒きさゝらなみまなくも有哉千鳥なくこゑ

海冬月　韶陽　瑞蓮侍者

浦雲欲雪月朦朧。浸影瑠璃萬頃中。波底夜深看不見。堅氷鎖斷廣寒宮。

政顯

海士の燒あし火はきえて月影の波に更行（ふけゆくイ）浦の寒けき

深山雪　膺甫　就呂侍者

山從深處謝風塵。臘雪連天奈不晴。却怪諸峯頭盡白。夜來埋得斷猿聲。

宗綱

みやまへや杉のたつきをしるへにて道ふみ分る雪の下庵

歳暮迎　仙女　正□侍者

双鬢漸斑情萬般。送年却易立名難。林鳥暫日今無幾。想把殘書和雪存。

雅俊

うつりこし月日へたてゝあし垣のま近き年やくれんとすらん

寄風戀　延秀　光賢侍者

白蘋風起楚江涯。望人碧雲情思加。憑信頻傳此意。夜来吹夢到君家。

衛通

行かよふ我みち芝のかれ〳〵に人の心の秋風そふく

寄煙戀　中岩　龍崇侍者

冉々輕烟惹恨長。六宮宴罷月昏黄。羊車未到芙蓉殿。知有佳人裊娃香。

冬良

いとはるゝ身を浦風の夕烟くゆるおもひの外になひきて

寄瀧戀　虎岩　光遠侍者

瀑布岩前夏自涼。愁人来此洗中腸。銀河瀉下三千尺。輸我多情白髪長。

政為

思ひせくみ舟の山のやま風そ袖なる瀧の上にはけしき

寄橋戀　毓之　祥雯侍者

何虹横水影浮沉。却訝鵲橋□淺深。爲異女星今□約。鳳□□過亦驚心。

宋世

我心かよはぬなかを恨はやとつなの橋のくりかへしても

寄草戀　瑞岩　正仰侍者

草有荏苒野水涯。叢々吹綠晩陽斜。美名恐毀周詩後。恨向春風根日華。

政家

人しれぬおもひを誰にいはすけ（こすけイ）のなかき音をのみ獨なかめや

寄蓬戀　安溪　周曹侍者

窮居蕭索有誰尋。白髪殘生情不禁。回憶昔年袁氏宅。蓬蒿幾尺沒人深。

濟繼

更にけり今宵も人は蓬生に露（つイ）けき床のまろね成らん（なからにイ）

山家　春英　宗傑侍者

老屋蕭條住翠微。登々小路往還稀。仙翁採藥遊何處。一片閑雲半掩扉。

龍霄

さはかりの憂世になれし心とて此山住もあられける身を

樵夫　中・昇

伐木丁々斜照移。白雲深處下山遲。京華到日英薪重。樗散斐

成蟾窟枝。

薪とる不破のたか山立歸り錦をきつゝくる道もかな　壽泉書記

羈中衣　永瑾

遊子經年憶古園。征衣唯有寸絲存。龍鍾双袖斑々色。行路幾乾又涙痕。

爲孝

きつゝなるゝ心の色も旅衣あかぬみやこにふかくそむらん

古寺路　理壽

古寺南朝路坦平。至今遊事喜春晴。往還應是吟詩佛。常向百華深處行。

實淳

奥山に鐘の響も鹿の(すかイ)音をしのくはかりに道はくれつゝ

神祇　德昌

三笠山高七百秋。風迎雲御鹿呦々。妖氛消作太平象。今夜深宮雨一樓。

公藤

三笠山高きいやしき天下にすむ身は誰も神のあはれみ

祝言　弘稽

仰見今王定八紘。衣冠献壽九重城。白鷗亦樂太平化。江海三年波不驚。

春日野やおとろへし道も更に今興してめくむ御代のかしこさ　雅俊

春蘭上人頃者乞一時詩鳴。而將唐什配倭詩。献納于春日神祠。一日携倭唐集一策。謂曰。夫倭詩也者五雲天上臺閣文章。決非山臺野邑之所諳焉。如唐什則群玉諸彦嗜相交釋。豈光一諾題後也耶。廼念之曰。長帽翁有言。詩書本一律。况詩而唐者倭者。體裁雖殊。其趣一也。又能經曰。詩者志之所之也。言志之所之。則寧間毫釐哉。宜哉上人用心于斯。幸述共義塞責。歳次壬戌五月十三日。七十四老桂林德昌清凉東軒書。

題者　飛鳥井中納言入道

讀師　侍從大納言 三條

講師　濟繼朝臣 姉小路中將

右五十首和歌者。爲春日社法樂。中山春蘭外史就飛鳥井黃門之亭請之。愚老之詠三篇。合少納言菅原章長集而書之。依神感外史他日衣錦還鄕之榮。以有待者也。

旹文龜二年二月十七日　野子于思拜

〔右春日社法樂詩歌以内閣記錄課所藏二本校合〕

永祿五年一乘谷曲水宴詩歌

曲水宴といふ事は。もろこし晋武帝曲水を尋給ひしに。束廣微といひし人の申けるは。昔周公洛邑にてながれにのぞみて酒をのみ給しよりはしまるとかや。我朝もこれにならひて康保のころまでは有しなり。久しく朝廷にておこなはるゝことはたえけり。私さまの興遊は常事にや。こゝに金吾將軍ふるきをおこし。絶たるをつぐ心ざしはありながら。年月をおくりけるに。大覺寺のきみ。そのほか雲のうへ人おはしつとひたり。かの王右軍か蘭亭記にも。四美二難あはせかたしといふにや。濂順か詞にも。良辰美景ありといへとも。座に其人なければ詩境寂莫たり。其人ありといへとも勝地にあらざれは。風月の媒なしといへり。しかるにいま良辰の春の景を秋の色にうつしてとりおこなへる事は。昔より春秋のあらそひは人のこゝろにさためかたきを。是は偏にあきにこゝろをよせけるにや。俄に遊地を經營し。香爐峯下にして觴詠泛浮へり。詩歌会をひゝかし錦繡玉をくたけり。まことに希代の興遊末世の美談といふへし。此時の詩歌とて見せられしに。此身漁翁にてもあらましかは。釣舟に棹さして武陵桃源の道をもとめまほし。

此序の一巻をひらき。感嘆のあまりいさゝかしるしつけゝり。

仲秋氣與春齊。曲水飛盃日巳酉。仙境定須有桃發。武陵不隔一乘溪。

草はいまもゝの花咲あきのみつ天もゑゝるか春のさかつき

稱名老比丘仍覺

曲水宴

早涼至　義景

花なかすむかしをくみて山水の一葉をさそふ秋のすゝしさ

秋露　覺阿

あきはきの花のしら露つもりなはくむはかりなる流をやみん

女郎花　季遠

手にとらは名にやたちなんをみなへしうつろふ水にうかふ杯

葛　吉重

やすらはて山路はるかに行袖をうらみかほなる葛の夕風

初雁似字　聖澤

野雲成行字々連。秋風萬里夕陽邊。旅鴈影映芙蓉錦。恰似回文詩一篇。

曉霞　景秀

すそ野よりかへる山路を心とやあけゆく月をしかなくこゑ

山居秋夕　周筮

山居秋冷有誰從。愛見孱顔不改容。獨座茅簷夕何夕。松風吹月上前峯。

野徑月　明宗

くるゝ野をしはしは月に分やらて道のせきもる花のしら露

嶺月　景紀

もろこしの遠き影みも手にとるや峰をうかふる月のさかつき

洞上月　親秋

さしのほるそらの光をかはしまの水にまちとる秋のさかつき

林葉漸黄　周瑠

葉々漸黄秋樹陰。停車留馬不堪吟。曉來露若爲霜去。鴉外夕陽紅滿林。

紅葉帶霜　雅敦

露しくれそめもわかしをうすくこく紅葉にとくる霜のした紐

菊　義俊

なかれくる菊のさかつきとり〳〵の袖のかほりも花のした水

菊延齢　知玉

群賢相集宴江頭。曲水流觴採菊浮。花作莊周大椿去。一枚上豈八千秋。

暮秋遠情　永繼

かきりある空をしたへは長月の月のうちにもゆくこゝちして

寄天戀　公遣

空にのみあくかれはつる心をやまちとる月になくさめてみん

寄月戀　是治

なかめやる涙に空はくもる日のくれまちぬへし契ともなし

寄木戀　明名

明くれはなけきこりつむ奥山のふかきおもひに袖やくちなん

寄松戀　景連

つれもなき下葉も袖も色に出ぬとしたけくまの松とせしまに

寄杉戀　禪佐

うきなから思ひよはるな祈りこしゝるしやつゐに三輪の神杉

寄篠戀　俊直

我涙いかにとゝはゝ秋の野のさゝ分しそての露とこたへむ

寄絲戀　宗因

たえねたゝ中のちきりはかた糸のあはて亂るゝ思ひなりせは

寄衣戀　雅敦

もらさしとつゝむなみたの唐衣くちなん袖をさていかゝせむ

寄琴戀　日尙

つまとのしらへふけ行眞木のとの月にそ人を松かせのふく

寄笛戀　吉繼

笛竹の一よのよかれそのまゝにたへてうきねをたてゝ住ぬる

水鄕鷺　吉仍

さきのゐる芦へすゝしき柳陰このかはつらにうかふみしま江

白雨滴篷　宗澄

旅泊誰言思萬重。篷窓和雨一吟濃。滴聲喚醒客船夢。何齊寒山半夜鐘。

旅人渡橋　宗譽

たつねゆくさとちかくなる旅人の橋うちわたす駒そいはふる

披書知昔　周伊

牙籤三萬學紋々。芸葉風翻人膓來。聖代祇今化民處。似看九舜十堯時。

寄鶴祝　應璉

白鶴聲淸聞九天。遐齡正好祝安全。十洲三島人皆手。千歳仙禽在御前。

文月のはしめつかた。越前へおもむき侍り。國のかみ心さしをはこひ。興をさかすへき思ひをめくらしけるにや。中秋下旬望のけしきも春にひとしく思ひよそへて。曲水宴を興行せし詩歌かきあつめたる一卷を。稱名院前右府に見せたてまつりけるに。やまともろこしのためしまてしるし給ふ中にも。金吾將軍の詩歌に心をかけ給のみならす。身をおさめ家をととのへ、國をたもちけるは。まことにくしの道をまもり給とかや。なをみしかき筆にはつくしかたくて。長歌に心さしをのへ侍り。

業俊

はつ秋の　すゝしき方の　みねつゝき　分入まゝに
みやこをも　かへりみもせす　うち出の　はまへをさして
ゆく〳〵も　はるか成けり　みちのくち　いふはかりにも
しくれきて　あさち色つく　あらちやま　あらしの音も
しつかにて　おさまる國は　にこらしの　水行河の
なかれより　うかひうかへる　さかつきを　とり〳〵袖の
かくはしき　とはの花も　いろそへて　やまともろこし
たへたるを　つくこそいまの　よの中に　まれなる人の
こゝろなれ　これをおもへは　三千とせに　なるてふ桃の
ためしまて　二ともなき　一せうの　谷にうつして
春秋に　とめるものから　見わたせは　菊ももみちも
さかりなる　木のもとことに　人しけきかけ

永祿五年八月廿一日

畠山匠作亭詩歌

新正梅　南禪寺僧 景南

乾坤淸氣百花魁。占得春風第一開。從此長安二三月。任他桃李得輿儓。

祐藥

ちらぬ花さえぬ雪とやなかめまし梢さかりなる春の軒はを

檻下嫩柳　東福寺僧 風月主人恩綸蔵主

鶯梭織柳線纎々。日暖櫻花雪壓檐。二月門庭春富貴。詩歌宴罷半鈎簾。

参議雅永

松藤　天龍寺僧 近江釋笠雲等連

山さくら今そひらくる枝かはす柳のまゆも花の心も

凌霄岡有倭邪姿。成立依佗不自持。滋蔓貪緣古松頂。門花占得暮春時。

下冷泉 左中將持爲

たねとなる筆のすさひの松のはをちらぬ例にかゝる藤浪

早苗　東福寺僧 宗鏡老衲妙篤

農務村々佩犢跡。翠雲萬頃寸苗生。誰知禽語輔王化。微雨溪邊布穀聲。

左中將雅親

うらわかみなひく早苗にはる〳〵と音なき風のみえて涼しき

新竹　相国寺僧 鹿苑釋周藤

清陰能致仲夏寒。錦繃玉立幾千竿。何人倚笛江南雨。鳳羽毶々染不乾。

細川右馬助法名 道賢

ことし生の竹も八千世の初にて行末契るまとのことのは

瞿麥　相国寺僧 孫僧周鳳

堂前種竹小嬋娟。碧黛紅粧日闘妍。誰識杜陵曾入寺。山庭寂寞野香眠。

一色 左京大夫教親

むすひしもみぬよの露の玉かつら面影のこるなてしこの花

落梧新月　建仁寺僧 謙齋老衲清播

桐葉曾知封弟情。至今雨露共恩榮。高枝涼月蒼々好。要聽來儀雙鳳鳴。

東福寺僧 智正徹

ちらせ猶みぬもろこしの鳥もねす桐の葉分る秋の三日月

荻叢萩花　東福寺僧 寶諸一慶

荻葉萩花秋一窠。曉風吹月影婆娑。門前車馬塵如海。野水寒塘興轉多。

和歌所 權少僧都堯孝

露になひき風にともなふ萩みめて荻をうらやむ秋の夕暮

楓下黄菊　建仁寺僧 正印祖默

未見題詩付御溝。滿林楓樹曉紅稠。天憐霜蕊抱無伍。爲駐黄花伴晩秋。

今川三位入道法名 常閑

立そよる紅葉も菊もそれなからおられぬ筆の跡を忘れて

檜頂落葉　建仁寺僧 歸闇龍惺

楚水東西岸々楓。幾霜十月捲寒風。誰鋪雲錦畫堂上。錦樹長留霜後紅。

さもあらぬひはらなそむる音そへて色なる雨に山風そ吹　（右馬助入道）仙空

雪中碧杉　相國周嚴

律入黃鐘寒尙加。滿山矮木六英花。森々祇合漢皇劍。遠岫横岡走白蛇。

野も山もみなうつもるゝ雪の中にしるしはかりの杉の村立　（畠山修理大夫）賢良

雪裏早梅　（[illegible]）撫隣軒崇

一樹簷前新吐花。瓊瑤枝重壓横斜。曉來莫使了童掃。好在寒梅雪裏花。

春よりもまさきの雪の花かつら冬を盛と梅ひらく也　（宗雲門弟）行正朓

畠山匠作亭十二月繪詩歌

〔右畠山匠作亭詩歌以内閣記錄課本校合〕

和歌部五十八

後鳥羽院御集

正治二年八月御百首　人々多詠之

春二十首

いつしかとかすめる空のけしきにて行末遠しけさの初春
春きても猶大空はかせさえてふるす戀しき鶯のこゑ
霜かれし野邊のけしきも春くれはみとりそうつる雪の下草
梅かえはまた春たゝす雪の中に匂ひはかりはかせにしられて
昔よりいひしはこれか夕かすみ霞る空のおほろなる月
なかむれは雲路につゝく霞かな雪けの空のはるのあけほの
うすくこきそのゝこてふはたはふれて霞める空に飛まかふ哉
なにとなく物あはれなる二月の雨そほふれる夕くれの空
秋のみとたれおもひけん春かすみ霞るそらのくれかゝるほと
花か雪かとへとしら玉いはねふみ夕ゐる雲にかへる山人
櫻さく春の山邊にこのころはそこともみえぬ花の下ふし
春雨に軒のかけろふみえわかすくれゆく空のたと〳〵しさに
吹まよふ吉野の奥のはる風は匂ひをそふる雪けなりけり
春のあした花ちる里をきてみれは風に浪よる庭の淡雪
かせけ吹としつかに匂へをとめ子か袖ふる山にはなのちる比
櫻はなちりのまかひに日はくれていつちも遠し志賀の山越
芳野山木すゑさひしく成ぬとも猶やすらはんはなのあたりは
こやのいけのあやめにましる杜若花ゆへ人にしられぬるかな
すきかてにゐてのわたりを見渡はいはぬ色なる花の夕はへ
明ほのを何あはれともおもひけん春暮る日のにしの山かけ

夏五十首

夏くれは心さへにやかはる覽はなにうらみしかせもまたれて
くるかたへ春のかへらは此比やあつまに花のさかりなるらん

夜もすからやとの木すゑに郭公またしき程に聲を待かな
續古卯の花のかけなかりせはほとゝきす宿にやけふの初音聞まし
つくはねの夏の木陰にやすらへは匂ひし花の名殘ともなし
新後拾夏の夜の夢路にきなく子規さめても聲はなを殘りつゝ
時鳥空かきくもる夏の雨におもはせかほの夜半の一こゑ
夏の月秋にかはらすすめる夜はかけさへ涼しせみの羽ころも
軒ちかくしはしかたらへ時鳥雲よく夜ゐのむら雨の空
五月雨にふしみの里は水こえて軒にかはつの聲きこゆなり
うたゝねの夢路の末は夏のあした殘るともなきかやり火の跡
むら雲はたゝなるかみの聲なから夕日にまかふさゝかにの糸
夏草の草の葉かくれゆく螢さはへの水に秋もとをらす
何となく過行なつもおしき哉花をちはてゝ花ならね共
みそきする河瀬に風のすゝしきは今夜をこめて秋や立らん

秋二十首

いつしかと荻のうは葉に音信て袖にしらるゝ秋のはつかせ
竹の葉を吹うらかへすあき風に露の玉ちる夕くれのそら
萩原や曉のへの露しけみわくるたもとにしらぬ花すり
風雅うす雲のたゝよふ空の月影はさやけきよりも哀之けり
あさくらや木丸とのにすむ月の光はなのる心ちこそすれ
まはらなる槇のいたやに影もりて手にとる計すめる夜の月
大かたの秋のなさけの荻の葉にいかにせよとて風なひくらん
うす霧にあかしのうらははれやらてさたかにみえす沖の釣舟
くまなしや朝ゆふ霧にはれす共かつらの里のあきの月影
難波かたさやけき秋の月をみて春のけしきそ忘られにける
立花のこしまかさきの月影をなかめやわたすうちの橋守
月影を浪路にるかになかむれはあまのとまやは山のはもなし
夕暮はさなしき物かよもすから月をなかめてうちゝらんほと
すまの海のあまの漁火ほのかにて猶有明のひかりをそまつ
山おろしにみきりの浪はあらくとも猶霧ふかし道の川風
明くれの空もたとらぬはつ雁は春の雲路やわすれさるらん
きり／＼すうらむる聲も庭の荻のすゑこす風も秋ふけにけり
虫のねはほの／＼よはる秋のよの月はあさちか露にやとりて
さほ姫のそめし緑やふかゝらんときはのもりは猶もみちせて
身にしみてものあはれなるためし哉村雲まかふ秋すくるくれ

冬十五首

秋くるゝかねのひゝきはすかはらやふしみの里の冬の明ほの
立田山紅葉の雨のふるまゝに嵐のをとの梢にのみして
ちりはつるたつたの山の紅葉はを梢にかへす木からしの風
冬くれはみ山のあらし音さえてむすほゝれゆく谷川の水
竹の葉はおほろ月夜に影さえてむら／＼殘る庭のおも哉
さらに又うすき衣に月さえて冬をやこふるをのゝすみやき
雪積る有明の月は月さえて籬の竹のうらみとりなる

冬さむみひらの高ねの月さえてさゝ浪こほる志賀のから崎
おもふにも哀なるへきとたち哉かた野の原のゆきくれの空
ふゆのあした三輪の杉むらうつもれて雪の梢やしるし成らん
なかむれは春ならねともかすみけり雪おろ降る遠きのゝ里
この比のときはの山はかひもなし枝にも葉にも雪しつもりて
しほ風やさむけかるらん冬のよのふけゐのうらに千鳥なく也
ふりつもる雪は朝日にむら消て空にしられぬ軒の雨かな
（風）けふまては雪ふるとしの空なから夕暮かたはうちかすみつゝ

戀十首

我戀はしのたの杜のしのへとも袖のしつくにあらはれにけり
月夜にはこぬ人まつといとへ共曇るさへこそねられさりけれ
おもひ侘ねられぬものをなにと又松ふく風のおとろかすらん
此くれとたのめし人はまてとこすはつかの月のさしのほる迄
白菊に人の心そしられけるうつろひにけり霜もをきあへす
いにしへに立かへりける心さへ思ひしらるゝまつよひの空
身をつめていとひし人そ哀なるいこまの山の雲をみるにも
さりともとまちし月日も徒にたのめしほともほとすきにけり
住よしのきしにおふなりたつねみんつれなき人は戀忘草
待かぬるさ夜のねさめの床にさへ猶うらめしきかせの音哉

覊旅五首

これまても旅のね覺はあはれそしつかおかみもこゝろ〳〵に
岩田川谷の雲まにむらきえてとゝむる駒のこゑもほのかに
はる〳〵とさかしきみねを分すきて音なし河をけふみつる哉
何となく名こりそおしきなきの葉やかさしていつる明方の空
ひくまつはまた霧ふかくも立にけり明ゆく鐘は難波わたりに

山家五首

山さとの柴の編戸にかけもりてほのかにかすむ春の夜の月
霜ふかしそこともしらぬ山寺にはるかにひゝくれいの音哉
秋の月霧のまかきにすみなれて影なつかしきみ山邊の里
物ことにさひしき宿のすさひ哉まかきになるゝ嶺の白雲
な〳〵さめに烟はかりはたえねともさひしき物を冬のすみかは

鳥五首

春〳〵れはみとりの空になくたつのなかゐのうらに友さそふ之
しろきさきひとりはねしい聲す也ゆるきのもりの暮かたの空
結ひをきしひはりの床の草かれてあらはれわたる武藏野の原
風をいたみ小島か崎にすむ鷺はみえても見えす浪のなみまに
白山の松の木陰にかくろえてやすらにすめるらいの鳥哉

祝五首

萬代の末もはるかにみゆるかな御もすそ川の春の明ほの
石淸水たえぬなかれの夏の月衫のこけもむかしおほえて
みかさ山みねの小松にしるきかな千年の秋の末ははるかに
冬くれはよもの木するはさひしきに千世をあらはす住吉の松

千早振日よしの影も長閑にて浪をさまれる四方の海哉

正治貳年第二度百首　月日未勘

霞

春のくる空のけしきはうす霞たな引わたるあふ坂のやま
深山邊のまつの雪まにみ渡せは都は春のかすみなりけり
大方はかすみもやらぬ明ほのにはるをむかふる塩かまの浦
海のうへはかすみにくもる春の月に心はかりはすまの明ほの
梅か丶はなかむる袖に匂ひきてたえ〳〵かすむ春の夜の月

鶯

鐘の音にこその日數はつきはて丶春あくる空にうくひすの聲
春きぬと誰かはつけし春日山きえあへぬ雪に鶯の聲
谷に殘るこその雪けのふるす出て聲よりかすむ春のうくひす
梅かえの梢をこむる霞よりこほれてにほふうくひすのこゑ
鶯のはつねをもらせはるやとき花やをそきとおもひさためん

花

さきにけりかせのこぬまにけふ櫻心のほとにたをりつ丶みん
いかにして春さく花を志はしたに風にちらさてみよしの丶山
櫻さくひらの高ねのはるかせは木のしたのみの雪け成けり
花にくもる月みよとてや御芳野の梢をはらふ春の山かせ
いはまつたひきえすなかる丶雪なれや花散か丶る春の山水

郭公

時鳥しのひもあへすもらす也さ月まつまのこそのふる聲
子規一こゑ聞は夏のよの名殘の空にありあけの月
名のる也雲井はるかにほと丶きすあさくら山のたそかれの空
郭公またよひなからあくる夜の雲のいつくに鳴わたるらん
やとりせし花たちはなはそれなからまれに成ゆく時鳥かな

五月雨

音羽川せきいる丶水にみゆる哉浪さへくもるさみたれのそら
この比のみつのわたりは軒にふくあやめにちかき五月雨の浪
あま人は袖ともわかす志ほるらんをしまか磯の五月雨の比
五月雨はこやの志のやにあらす共これもほしあへす蜘蛛の糸
水まさる八十宇治河の五月雨に木すゑをかよふまきの島人

草花

うちなひきさやかにみえぬ秋なれと荻ふく風そかたへ涼しき
風になひくかたをか山の女郎花たれよもきふに思ひたつらん
秋風の吹にし日より志のすゝき忍ひもあへすほにいてにけり
あきはきた鹿のねさそふ志るへせよ萩か原をわたる夕風
大かたは玉にまかひし白露もはきにしたかふ秋のゆふくれ

月

いかにいひいかにかすへき山のはにいさよふ月の夕くれの空
なかむれは木の間もりくる秋の月かせにさかなき森の下影
有明の月にはちかき名のみしてすむかひなしやにしの山本

いまは秋山ある里にすまひせし月みる空に有明もなし
はゝそはら木末をもとに染かへて殘るくまなき森の月かけ

紅葉

大井河あらしの山のかけみえてそこの木末にもみちしてけり
薄紅葉ちらす風にもつれなかれ時雨にそまぬ色もかひあらは
秋の時雨ときはの山をそめかねて嵐にそかるよそのもみちを
あきふかし染ぬ梢はあらし山ゐくれにもるゝあをき一えた
龍田山そむる時雨のあやめまて秋ももみちもふかき比哉

雪

をかや原うらかれにけり冬の雪ふるからをのゝ明ほのゝそら
新古 此比は花も紅葉も枝になし志はしなきえそ松のしら雪
冬の夜のしのゝめの空は明やらてをのれそしろき山のはの雪
あやにくに時雨にたへし松の葉の心よはきは雪の下おれ
さひしさに煙たえせぬしつの庵をとへかし人の雪の夕くれ

氷

冬くれはいしまのたつき氷しておもひたえたる山川のみつ
霜さゆる玉もの床にこほりしてはらひもあへぬをしのこゑ哉
あけかたは遠のみきはに氷してかへりてちかき志賀のうら浪
うき草はなをあとゝめす冬のよの谷行水はうすこほれとも
冬の夜の河かせさむみ氷しておもひかねたる友ちとり哉

神祇

いすゝ河たのむ心しふかけれはあまてる神そ空にしるらん
新古 ちはやふる神や知らんもろかつら一方ならすかくるたのみを
玉かきや神のひかりもまさり行月のかつらの昔おりえて
跡たれし道にしかたを思ふにも賴しるしをみわの山もと
千早振庭火のまへにとる榊香をかくはしめ山あひのそて

釋敎 五首

花嚴

いつる朝日山の高根をてらせともゆくゑもしらぬ谷の埋木

阿含

しりそめしかせきか園の森のはにひまなくおける無漏の朝露

方等

さま〱に敎し道のかひあれは終にはふかしさとりいてにき

般若

池きよき水にうつれる月かけや昔といへるためしなるらん

法花

いたつらにもるゝ草木もなかりけりいちみの雨の所わかねは

曉

はつせ山あけぬとつくるかねの音に驚うちそふる嶺の松かせ
秋の月ひかりそまさる玉くしけふたみのうらの明かたの空
くもりこしひはらの下の月影も殘るくまなし有明の空
秋の夜の月のかけさすまきの戶をしあけかたの横雲の空

雲もなしなかめはにしにめくりきて山のはちかき有明の月

暮

三日月のほのめくくれの山のはゝなかめはかりも有明の空
大井河ゐせきに秋の色みえていさよふ浪のゆふくれの聲
山おろしに梢の木のはつきはてゝ色なき枝の夕時雨哉
ふる雪をたそかれ時の空めには花とや人のみよし野の里

山路

春ゆけは霞のうへにかすみして月にはつらしおのゝ山みち
葉をしけみもる隙もなし秋のよの月おほろ成足柄の山
秋の月くまなき比はとまりせしひるにやかはるさやの中山
なかめこし心（みしイ）は秋の關なれや月影きよきふはの中山
立田山もみちし秋はうつもれて木の葉にまよふ岩のかけ道

海邊

なかむれはあはちのせとの夕霧にむらきえわたるあまの釣舟
月きよきあかしのせとの浪のうへにうらみを殘す有明の空
あま小舟行ゑもしらぬ波の上にいつくの浦へさしてゆくらん
磯の松あらしにたえぬおりしもあれ哀うちそふ浪のをと哉
あかしかたうらふくかせに霧消て浪よりにしにあり明の空

禁中

はるはたゝ軒はの花をなかめつゝいつらわするゝ雲のうへ哉
うすみとりまた夏あさき木間より春をとゝむる藤つほの藤
九重に（いイ）はきのさかりはみかきは木岩間の浪も花さきにけり
夜もすから雲井の庭をてらすなるゐしのたく火は有明の月
隈もなき雲ゐの月にやすらへはうらしみつまてに夜も成にけり

遊宴

千世の春たにの戸いつる鶯のはつねにそ引二葉なるまつ
結ひあくる宿の泉の水さえて夏も夏なき物にそ有ける
秋の夜の月にそうたふ舟のうち浪のうへなるうからめのこゑ
雪ふかきあはつの原のくれかたはあはするたかも手に歸る也
敷島ややまとの葉かちまけに人の心そ人にこえぬる

公事

雲のうへにこれや春たつ驗しなる袖をつらぬるけふの諸人
逢坂の山たち出て雲のうへに影さしのほる望月の駒
あまつ風雲井の空をふくからに乙女の袖にやとる月影
もろ人のみたらし川にするか舞雲ゐにかへるあか月の聲
年のくれ三世の佛の御名を聞て心はれ行雲のかよひち

祝言

三笠山いつる朝日のひかりよりのとかなるへき萬代のはる
春くれはひとしほまさる住よしの松やちとせのためし成らん
千早振神そ知らんふしておもひおきてかそふる萬代のおく
（新後撰）龜のおのいはねをおつる白玉の數かきりなき千世の行末
むしろたやかねてちとせのしるき哉いつぬき川に鶴遊ふ也

建仁元年三月内宮御百首

春廿首

風 朝日さすみもすそ河の春の空のとかなるへき世のけしき哉

見わたせは今朝はかすみの志賀のうら舟〔ママ〕そむる春の初かせ

立田川柳か枝の春かせに氷きえてはさゝ浪そたつ

御芳野のこその山かせ猶さえて霞はかりの春の明ほの

鶯のはねしろたへのあは雪をきえねと春のかせはふきつゝ

淡雪のいまたふるのゝ下わらひをのれもえ出て春はしるらん

難波津にさくやこの花朝霞春たつ波にかほる春かせ

やまかつのかきほの草のうすみとりやかてもなるゝ春の露哉

朝霞もろこしかけてたちぬらしまつらかおきの春の明ほの

かへるかり都の雲をはるかけてなれこし空のかたみともみよ

梅かゝをまやのあまりにさそひきてありとや袖に春風そふく

櫻はなそれともえこそしら雲のなへてかゝれるやまの夕くれ

歸るかりたひの空にもわするなよよし野の花にかすむよの月

いかにせん花に山風吹ぬ也物おもへとのみよし野の春

花の色は昔なからに匂へともたれかはとはんしかの春かせ

まかふとも今はいとはし春の風花より後のみねのしら雲

新古 待わひぬまれにもとひこ都人やよひの月のあり明のころ

いかにせんよにふるなかめ柴の戸にうつろふ花の春の暮かた

春の名殘よし野のおくにたつぬれは花の青葉に山かせそふく

あつまちのさのゝ船橋あすよりやくれぬる春を戀わたるへき

夏十五首

なにとなくすきこしかたの戀しきに心ともなふおそ櫻哉

時鳥さて山鳥のしたりをのなか〳〵つらきさ夜の一こゑ

子規まつよひなから明にけりさもあらぬ鳥の音のみきこえて

涙にはこれをからなん時鳥はなたちはなのむら雨の露

むすふての露に月すむ山の井のあかてもあくる夏の空哉

里人のおりはへほせる夏衣なぬかもすきぬさみたれの比

まはらなる蚕の箔やの五月雨にかつかぬ袖をほしそわつらふ

郭公月見よとてのしるへ哉なきつるかたのありあけの空

しほたれぬほの水海あまの袖ほしえぬものを五月雨のころ

すきぬなり夜半のね覺の郭公聲をはしはし月にのこして

日にみかく玉かとそみる夕たちのはれゆく跡の野への白露

みたれあしの下葉すゝしく露はゐて澤邊の水にかよふ秋かせ

なかむれは秋ちかしとの顔しかな鳥羽たの露にほたるとふ也

故郷の庭のさゆりの花にをく露に秋なるかせわたる也

夏と秋とゆきかふ空やふけぬらんやゝ露をもる夜はの袖哉

秋廿首

袖のうへに秋しれとての光かな木のまの月のぬるゝかほなる

いかにしていくかもあらぬ秋風の身にしむ色を深くそむらん

山ひめの衣秋かせふくからに色と〳〵にのへそなりゆく

露しけき鳥羽田の面の秋かせに玉ゆらやとる宵の稲妻
とこ世より山とひこえてくる雁の翅にのこる故郷の雲
秋をへて物おもふ事はなけれとも月にいくたひ袖ぬらすらん
夜こすからあかさの有明を水無瀬川邊は袖に宿る月哉
きえしかの大野の野へのはつ尾花たれ手枕にむすひそめけん
思ふ事わか身にあまりや宵の月かたしく袖にをける白露
いかならんときかわすれん宮木のゝ萩の上葉の露の月影
一夜ねる野へのしのやのさゝまくらかとかましき袖の霜哉
たかむかしすみこし里の秋風か錦ふか草の野へに吹らん
をしか鳴秋の山田のかりよりにいなはの風本ノママ、
来てみれはあかしの浦の夜半の秋おもひしよりもすめる月哉
うきねするねさめの秋をなかむれは昔の月に松かせそ吹 むしあけイ
秋の雲千さとをかけて消ぬらし行事なそき夜はの月哉
白露のをくてのいなはかりそめにやとるともなき夕月よ哉
春の夜のおほろ月夜の面影をしはしみせける夕霧のやと
あきふかしたれ浅茅生にひとりかも夜さむの衣月にうつらん
もみち葉をぬさにたむけてゆく秋の宿の名残をしかなく也

冬十五首

我袖にいくたひ月のやとる覧くもれははるゝ初時雨哉
やとりこし露の行衛をとひかねて霜になれぬるむさしのゝ月
冬のきて幾日もあらぬをなかむれは雲さえわたる霜の上の月
ねさめとふかけなの木も中の松も音にせぬ山の奥哉
かりにこしうつらの床もあれにけり冬ふか草の野へそ淋しき
立田山木のは吹はらふ木からしにたとりつれなき嵐の松哉
すむ頃もふしみの里にかきくれて空になりゆくをはつせの山
さひしさは世のうきよりはいかゝせん山のおくの苔の下草
霜むすふ庭のかるかやほの／＼とまかきのくれにのこる秋風
山かせのふしみのすそにおろす雪そかそまこに空にしられぬ
しほ風の吹あけの濱のとも千鳥いく夜さえたる月をみるらん
月ならぬ雪も有明の冬の夜のそらくもらはくもれさらしなの里
身ふよふやそらち川のかは風にたれかこしまの雪の夕くれ
けぬか上にふりしけみ雪あすよりの春の気ふかは梅にこそみめ
おしみこし花ももみちの名残さへさらにおほゆる年の暮哉

祝五首

雲ちかく飛かふたつの声まてものとけき空の験しとそおもふ
萬代は浪こそかけてかそふらめはまへの松のゆくすゑの陰
かせ吹はおはなかたよる呉竹のしけきよよに千世そこもれる
我宿に千とせをかけてすむ月の光をちきれ庭の松陰
四方の海の浪に釣するあま人もおさまれる代の風はうれしや

神祇

つきもせす都の空に吹かよへ神路の山の千世のはつかせ
神風やいせの濱邊のあけほのに霞ふきよる浦の初風

神風や空なる雲をはらふらん一夜も月のくもるまそなき
秋の空のとけき浪に月冴て神かせさむしいせの濱荻
みもすそやたのみをかくる神風の心にふかぬ時のまそなき

雜二十首

引てうへし人の行衞はしられね共木たかきまつのかせの音哉
秋草のかりねのまくらいくよへぬ下はの露に袖ぬらすとて
草枕都の秋をさそひきて月におほゆるふるさとの空
こよひたれ松と波とに夢さめて吹上の月に袖ぬらすらん
忘るなよ露にしほるゝたび衣きつゝもなれぬあつまちの月
淸見かた曉明の月の影さえてせきちの鳥もこゑさかる之
旅の空おなし雲路を通ひきて月をともなふ故郷のかせ
哀なるあまの磯屋もいかゝせんさらて世にふる方しなけれは
すまのうらふるきせきやを月そもるかよふ衞はきく人もなし
故里をたゝ松かせそひとりふく月はみるやととふ人はなし
山深み柴のかりいほのね覺をも月はさすかにとはすやはある
住の江の松のしつえに浪かけて梢に殘るおきつしほ風
みなれ棹さしてそれとはなけれ共過にしはかり戀しきはなし
月のすむをしまの松の風の音はなれたる蜑も如何に忍ふや
人しけき都の空におもふかないかにみ山の月はさひしき
事そともなきたにぬるゝたもとより戀や恨のなかめをそ思
我のみとむすふ深山の柴の庵に月はもとよりすみなれにけり
大空をその事となく詠れはあきなる風そそこにふきける
松にふくみ山の風のはけしさもおほえぬまてに住なれにけり
おもふへしくたりはてたる世なれとも神の誓そ猶もくちせぬ

外宮御百首

春二十首

宮河のはるたつ空のはつかせにうち出る浪の花やちるらん
たにかせのうくひすさそふたよりにや山里人も春を知らん
はるの來てなをふる雪はきえもあへす杉のは白き三わの曙
み山にはまた雪ふかき松のかせすそ野に春の氷とく也
かすめともよしのゝ雪の猶さえて松の葉しろき古里の春
からさきや春のさゝ浪のとかにてかすみに成ぬにほの水うみ
あさかすみ春のしきつのうら風にみとりにかよふをきの浪哉
にほの海やかすみの空にこく舟の浪にきえゆくしかの明ほの
物思はゝたへてもいかゝなかめましふけ行月の春のけしきを
春霞立出てみよ芳野山今いくかありてさくら咲なん
かすか山木末はかすむ峯のまつもとの岩ねに春雨そ降
時しあれはかへるならひのはるのかり涙そ花の枝にを本ノマヽ
櫻花いまか咲らん足曳の山下風のにほふあけほの
續後 かすみたちこのめはるさめ古里の芳野の花もいまや咲らん
かきりなきゐはれは春とみゆる哉よもの山邊の夕暮の空
かすみしくとこよの方を詠れはくれゆく山にきゆる鴈かね

かへる鴈の夜はの涙やをきつらむ霞にしけき春の明ほの
野も山もおさまれる世の春風は花ちるころもいとひやはする
御芳野の春はやよひに暮にけり隈になりぬ四方の山かせ
さほ姫もくれゆく春をおしむらんわきてかすめるけふの空哉

夏十五首

きてみれはなにはの夏の梢ほらけ春こしかたへかへるうら風
なれ／＼し春の袂の花の香もとをさかりゆくなつの比哉
みしま江のひしの浮葉にゐる玉をみかくか夏の月もさやけき
をのつからならのかけもる夏の月いかて下葉の露にすむらん
ぬれつゝや獨ゆくらん郭公とはたのをのゝ雨のゆふくれ
なつの夜のふかき楢のかせふけは曇ぬ月にむら雨そふる
故郷の立花そゝく庭の雨に鳴郭公むかしこふらし
夏の空きよ瀧川のいかたしやいく夜も月にすゝみきぬらん
郭公なきつるかたの山のはになこりかほなる夜はの松かせ
ほとゝきす月に契や有明の山よりいつる聲のさやけさ
時鳥こゑやむかしの磯神ふるき都のむらさめのそら
蓮葉にこらぬ露の玉こえてすゝしくなりぬみな月のかけ
さゝかにの糸に玉ぬく夕暮はなかこそなかね秋そ來にける
螢とふもりの下草秋かけてまたき色つくみな月の空
六月やたけうちそよくうたゝねのさむる枕にあきかせそ吹

秋二十首

橘の上に露たゝならぬゆふへ哉おもかし事と袖の香かせ
あはれをは荻の上葉になしはてゝきゝならす夜なる秋の初風
ときは山やまたちならす鹿の音をとふらふみねの松の風哉
さをしかのいる野のすゝき方よりに風にみたるゝ虫のこゑ哉
袖の露をいかにかこたん事とへとこたへぬ空のあきの夕暮
我袖にあきなれはとてをく露を有かほに宿る月かな
山里は月みよとてやをのつから行雲をはらふ秋かせ
しのにをく露ふか草のあき風に鶉なくなる野邊の夕暮
今はたゝおもひもいれて月はみん我やとからの秋のかせかは
しかのねも聞ぬ寝覺のかせたにも深山の月はさそなさひしき
かり人も哀しれかし秋かせに夜こゝ庭のふくれのこゑ
秋ふかきみかきか原の夕暮にさもおらぬ袖をしほり流ぬる
あきの田のかりほの庵に露をきて隙もあらはに月そもりくる
草枕夜半の哀はおほえ山いくのゝ月にさをしかの聲
すみわひぬ事とひこなん都人み山の庵の秋のくれかた
たかまとの尾上のみやはあれぬともしらてやひとり松虫の聲
すかはらや伏見のあきのくれかたにあれまくおしむ垣哉
長月の有明かたの月影に秋をやかこつさをしかの聲
野への色はおもひしよりもうらかれて虫をうらむる蓬かな
秋ふかき有明かたのよものあらしみ山の月に木のはふくたり

冬十五首

さをしかのをのゝ草ふしあれぬらん秋はいくたのふゆの曙
續拾 冬のきて紅葉ふきおろす三室山嵐の末にあきそ殘れる
霜ふかき夜半のあらしやこほるらんむすほゝれ行嶺の松かせ
みよしのゝしくれも日數故郷にかよふあらしや雪けなるらん
冬さむみ岩まの浪は氷しく清瀧川に月そのこれる
足曳の山にしろきはかきくもり昨日の空に降し雪かも
天川河瀬にやとをかり衣かたのゝ冬の雪のゆふくれ
故郷は軒のいたまに月もりて嵐にのこる冬の夜の夢
雪しろくかひのしらねのさゝのいほやとれる袖に宿る月影
冬さむみあさあけの袖の氷る哉軒はの松の雪の下風
風 とりかへる谷のとほそに雪深しつまきこるおの道やたえなん
有明の月さへあまりさゆるかな庭の淺茅の雪の下風
ひらの山高ねの雪のけぬかうへに又ふるものはあられ成けり
絶〳〵に殘れる嶺の椎柴にふけゆく冬の日數をそみる
松かせに又こんころをたのめてやふゆもいなはの山のしら雪

祝五首

關守も關の戸うとくなりにけり治れる世に逢坂の山
和歌の浦のあしまに鹽や滿ぬらん千代をこめたるたつの諸聲
かせふけはなひきおれふすなよ竹の末はの露もいく千世の數
浪かゝるいその岩ねの松か枝のかはらぬ色にうら風そふく
しほの山さし出の磯のしきなみに千とせをいのるとも衛哉

神祇五首

春の色をけふ宮川の杉の葉に吹くるかせも神さひにけり
宮河やいつもみとりの椙の葉に今一入のはるかせそふく
久方の空ゆくかせに雲きえて月影さむし宮河の秋
すゝか山いせのうらはの秋の浪やとれる月をよする春風
よゝへてもかみやみ川にたえぬ浪たえて忘るゝまなく時なし

雜二十首

昔には神もほとけもかはらぬをくたれる世とはひとの心そ
都人たのめぬやとの槇の戸になにのならひの庭の松かせ
なかめつる明石の月のなこり哉島かくれ行冬の明ほの
月をのみゝ山のおくにむすふいほもとよりたてる庭のまつ哉
草枕床にね覺をすかのねのなか〳〵しよを月そとひける
詠侘ひぬかくてふるひを又もありやみるらん物を空にすむ月
はつせ山あかつき方のかねの音にうちおとろきて月をみる哉
山さとのね覺もよほす松かせもすみなれぬまそ夢はのこりし
たれみよと人も音せぬ奥山のまきのはわけに獨りすむ月
おなし露の袖や草はにをきわけてほすましもなき旅衣哉
しほたるゝすまの浦はゝよる浪の幾夜の月をやとしきぬらん
つたしけるうつの山邊の山かせにたひねの夢を結ひわひつゝ
よそにみしたかねの雲にこよひかも衣かたしきあかしつる哉
今宵たれあかしのせとにうきねして浦半の月に袖ぬらすらん

風
何となくすきこしかたのなかめまて心にうかふゆふくれの空
唐衣袖しくうらのとまやかたならはぬいその松のかせかな
故郷にまてとつけこせうつの山みやこへかよふ有明のつき
草枕たひねの夢の關守は野にも山にも松にふくかせ
かりにてもおもひをこせよ宮こ人おなし心に月はみすとも
わかの浦のあしまの浪のたちかへり昔ににたるたつのこゑ哉

同六月千五百番御歌合

春二十首

春たてはかはらぬ空そかはり行昨日の雲かけふの霞か
冬と春とゆきあふ坂の松かえに霞をしのき淡雪の降
葛城や高まの山に雪消てさえし嵐は春の初風
白妙の衣春雨かきくもりふる野の若菜今やつむらん
たをりけん軒はの梅をたつぬれは花もえならぬ袖の香そする
春かせのさそふか野への梅かえになきてうつろふ鶯のこゑ
池水のみくさにをけるよるの霜きえあへぬうへに春雨そ降
ふかき夜の哀はしるや春の月しく物もなき有明の空
宵のまはほのめく月のしかすかに霞も果ぬ春の大空
月よゝし夜よしと誰につけやらん花あたらしき春の故郷
みよしのゝ吉野の山のはなさかり雲より下にはるの白雲
鴈かへる峯のかすみのはれすのみ恨つきせぬ春の夜の月
かへるかり霞のうちに聲はして物うらめしの春のけしきや
よし野山雲にうつろふ花の色なみとりの空に春かせそふく
ちらはちれよしや芳野の山櫻吹まよふかせはいふかひもなし
花は雪とふるの小山田返しても恨果ぬるはるの夕かせ
かすみゆく三月の空の山のはをほの／＼いつるいさよひの月
よの中に絶てあらしのなかりせは花に心はのとけからまし
かせふけは花の白雲やゝ消て夜な／＼はるゝみよし野の月
古の春さへけふはつらき哉ふるとていかゝ歸りそめけん

夏十五首

はる山の霞の衣ぬきすてゝけさはみとりのなつの明ほの
夏の空曇れる夜はの卯花の月をやとせる玉川の里
ほとゝきす心してなけたち花の花ちるさとのさみたれの空
郭公なかすはたゝにふけなゝん夢のたゝちもまち心みん
またよひの月まつとても明にけりみしかき夢の結ふともなく
夕月夜しはしやとれる山の井のあかぬ光の袖にすゝしき
心あてにきかはやきかん郭公雲路にまかふ峯の一聲
おもひ入てなかむる空のむら雨にあまり程なき時鳥哉
筏士のやみをもわかぬみなれ棹流石に夏は月をまつた
ともしする影をよな／＼深山木のこりすも鹿のめを合すらし
風をいたみ蓮の上葉にやとしめてすゝしき玉にかはつなく也
澤水の草葉にやとをかりこものおもひみたれて行螢哉
柳かけすゝみにきたるから衣ならす袂になるゝ川かせ

夏深み草の葉かくれ露はゐてしのひ〳〵の秋のはつかせ
みそき河瀬々の玉ものみかくれてしられぬ秋や今夜きぬらん

秋二十首

かせの音に秋はけふより立田山よはにや夏の獨こゆらん
秋たちて昨日にかはる波かせにすゝしくなひくいせのはま荻
しのすゝきまたほに出ぬ夕つくよ流石に秋のけしきなるかた
七夕のくものたもとやぬれぬらんあけぬとつくる秋かせの聲
日かけさすをかへの松の秋かせに夕くれかけて鹿そ鳴なる
このゆふへかせ吹たちぬ白雲のあらそふ萩をあすやかもみん
女郎花枝もとをゝにをく露をまちとる風にむし恨なり
わけゆけはしけくも露のみゆる哉月吹やとす野への秋風
あはれ昔いかなる野邊の草はよりかゝる秋風の吹はしめけん
野へにをける露をは露となかめぬはななる玉かかりの涙か
ものやおもふ雲のはたての夕暮にあまつ空なる初鴈のこゑ
秋の田のしのにをしなみ吹かせに月もてみかくつゆの白玉
小山田のいなはかたより月さえてほむけのかせに露みたるゝ
めくりゆく秋やはもとのあきの空月そむかしのしかのふる里
おなしくは哀しられん人もかなしかとむしとの秋の夕くれ
秋の虫の手玉もゆらにをるはたを誰きてみよとのへの夕暮
ますかゝみみるめのうらのよはの月こほりをよする秋の鹽風
玉ほこの道のしは草うちなひき古きみやこに秋かせそ吹
秋山の松をはしのけ立田姫そむるにかひもなきみとり也
けふこそは秋の日数もくれは鳥あやなし名のみなか月の空

冬十五首

かせさえてけさより冬をなら柴のかりはのをのに時雨過なり
秋暮て露もまたひぬならのはにをして時雨のまつそゝく也
冬きぬと嵐に菊の露のまにぬれてほしあへす今朝そうつろふ
紅葉するほとは時雨のむら雲に空行月のめくりあふらん
はれくもり時雨ふるやの板まあらみ月をかたしく夜はのさ莚
から錦秋のかたみをたゝしとや霜まて殘る庭のひとむら
み山ふく四方の木からしさえそめて嶺のは白く初雪そふる
里人の庵にたけるしゐしはの煙吹しく山おろしのかせ
をしてるや難波のあしの下かくれかりねもる鴨の霜になく聲
浦ちかき末の松山雪ふれは冬よりうへを波やこゆらん
雪のあした木の下風は寒けれと櫻もしらぬはなそちりける
月かとてはらはねは又白妙の袖にそさゆるふかき夜の霜
まきもくの嶺の小松に雪ふれはひはらか末に雪そかゝれる
杉の葉のみとりもみえすふる雪をわたるあらしの跡の一しほ
冬くれてとしもけふにつくはねの木のめもかねて春めきに鬼

祝五首

萬代と御濯川の春のあした浪にかされてたつかすみ哉
萬代とみたらし河の夏のよに秋ともすめる山のはの月

よろつよとみかさの山の秋風にのとかにみねの月そすみける
萬代とみつの濱かせうらさえてのとけき浪に氷いにけり
萬代とみくまのゝ浦の濱ゆふのかさねても猶つきせさるへし

戀十五首

足曳の山した水のわきかへり色にはいてし木かくれてのみ
神無月袖のみしたの初しくれ人の心のあきの一しほ
芦のやのなたの鹽屋の海士人もしほるゝ袖のいとまなきまて
いつら秋のなかきてふ夜は名のみしてつきぬ名殘そ有明の月
つれもなき人をはたのむかひなくてくるゝよことに秋風そふく
詠むれはこぬ人またるわひつゝも今宵の月にあかすかもねん
君はしるやまつ夜あまたに積りきて袖に有明の月をみる哉
うらみよとなれる夕へのけしき哉たのめぬ宿の荻の上風
荻の葉に身にしむ風はをとつれてこぬ人つらき夕くれの雨
現こそぬる夜〳〵のかたからめそをたにゆるせ夢のせき守
はまひさし久しくもみぬ君なれや逢夜をなみの浪まなけれは
かす〳〵におもふ心はおほよとの松をうらむる浪のをとかな
つれなくはたゝとうらにたて煙わかすむかたは月そさやけき
白露もあけ行ほとは野邊にをく時ともわかぬ袖の上哉
長月の月みてかひはなけれともたのめしものは有明のころ

雜十首

夕たすき萬代かけて住吉の神や種まきし岸の姫松
都にもみしは月そとおもへともそゝろにぬるゝたひの袖哉
すまの浦にまつ夜ふけゆく月影を浪のあなたに誰おしむらん
宮古人とはて月日はすきの庵の軒になれたるみねの松かせ
これやさは都にてみし空の雲それをかたしく嶺のたひふし
旅ねする夜はのあらしに夢さめて打詠れはありあけの月
わするなよかゝるね覺の夜半の秋いかなる空の月をみるとも
月殘るあしやの里の有明に昔ににたるあまのいさり火
誰みよとあれたる宿の松かせにひとり住けるあさちふの月
朝夕にあふく心を猶てらせ浪もしつかに宮川のつき

建保四年二月御百首

春

昨日まてさえし雪け（な歟）の引かへてあくる霞の山そのとけき
うちいつる春やとませの波まより白ゆふはなの色そくたくる
時しらぬ山はふしとし聞しかと春たつ空はまつそかすめる
いもはけふしめのゝあさちふみ分てひれふる袖に若菜をそ摘
春かせの鶯さそふたよりにや谷のこほりをまつはとくらん
櫻花えたにはちるとみるまてにかせにみたれて淡雪そふる
鶯の飛火の野への雪のうちにそれかと計匂ふ梅かえ
みよしのやむつたのよとの川柳みとりをくゝる春の岩波
みとりなる野への柳の露をもみたえぬはかりに春風そふく
さゝ竹の大宮人は跡ふりて霞そふかきさほの山かせ

難波女のたくやあし火のけふりさへ朧月夜の色やそふらん
たかみそき夕されくれてかけろふのもゆる春邊の短夜の月
さ保姫の霞の衣ぬきをうすみ花の錦をたちや重ねん
かへる山おもひつるかのこしの海に契やふかき春のかりかね
山さくらさきにけらしもみよしのゝ八重たつ雲に匂ふ春かせ
をはつせやみねはさくらにうつもれて入逢のかねに匂ふ山風
白鳥のさきさか山の岩つゝしいはねと春の色はみえけり
ゆく春の名こりやすらふ村雨におる手露けき山吹の花
春の行みよしの川の瀬をはやみせくもかひなき花の岩波
おしみこしおなし名殘のゆかりとて花の道より春や行らん

夏

すきにけり春も程なくしゐておる昨日の藤の露もひぬまに
郭公はつ聲さそへをとは川せき入る水の波のたよりに
夏きてもまたゆみはりの月草のうつりやすくもくれし春哉
いく年の天津日影にさらすらんたかてつくりの布引の瀧
せきかくるをたの苗代水すみて畔こす波にかはつなく也
深山出ていつれのさとを契るらん曉ふかきほとゝきす哉
五月雨に水ゆきまさる飛鳥川淵瀬もみえぬ（ふイ）浪の通路
うは玉のやみにやはれんいたつらに月の比なる五月雨の空
（續古）はしたてのくらはし川にかる菅のなかき日くらしすゝむ比哉
天の川雲のみほ行月なれはなかれてはやくあくる夏の夜

ほたる飛あしやの浦のしほひかた蜑のたく火の數やそふらん
みたれ蘆のしたはなみよりゆく水の音せぬ浪の色そすゝしき
（風雅）かた岡のあふちなみより吹風にかつ〳〵そゝく夕たちの雨
日くらしのなく木かくれの山陰に夕露にほふ大和なてしこ
みそき河ゆきかふ空やふけぬらん露なからおるあさの一ふさ

秋

このねぬる朝けの風のをとめ子か袖ふる山に秋や來ぬらん
秋はけふくるすのをのゝまはき原また朝露の色そにほはぬ
吹かへすまくすか原の秋かせにうら葉の露も今朝よりそ吹
織女に今朝かすいとのうちはへてよるも程なくあくる秋風
山のはにふくれははるゝうす雲を待出て出る秋のよの月
いなみのや草葉にすかる玉ほこの道のなかてに秋かせそふく
庭ふかきおきの葉分にもる月の心つくしの秋も有けり
初鴈のとはたのくれの秋かせにをのれとうすき山のはの雲
今朝みれは夜半の野分の淺茅生にあれて草はの露そみたるゝ
久かたの月かけきよしあまの原雲井（にイ）をわたる夜半の秋風
色かはる身を秋山となくしかの涙もふかきみねのゆふきり
露にふす野邊の千種の明ほのにおきぬれて行さをしかのこゑ
をく露のあたのおほのゝまくすはら恨かほなる松むしの聲
秋風にのへのあしたは音もせて分ゆくあとそ露はこほるゝ
月そすむたれかは霜と夕嵐雲吹はらふかつらきのやま

いたつらに人こそとはねおく山の霧よりふかきみねの紅葉ゝ
深草やあかつき寒く吹かせにいとゝ身にしむきり／＼す哉
新古撰
おしめとも秋は末のゝ霜の下にうらみかねたるきり／＼す哉
なにとなく庭のよもきも下おれてさひ行秋の色そかなしき
秋はけふくれなゐくゝる龍田河神よもしらす過る月かは

冬

もみちはのこかれそわたる海士を舟初せの山はうち時雨つゝ
神無月時雨にくるゝ冬の日をまつ夜なけれはかなしともみす
わけいれとゝふ人もなし岡山木葉ふりしく音はかりして
三室山しくれこきたれ吹風にぬれなからちる峯のもみちは
をしねほすふしみのくろにたつ鴫の羽音さひしき朝霜の空
霜こほるのたのうはてにせく池のみきはになひくしの薄哉
雪ふれは岩ほにしろくさく花のおられぬ色をあらふ浪哉
しほかれのひかたに遠しさ夜ふけてこほらぬ沖の浪そあれ行
音に聞くあのさら山さら／＼にをのか名たてゝふる霰かな
けふりたつ思ひのしたやこほるらんふしのなる澤音むせふ也
おもひかね猶いもかりとゆきもよにわか友千鳥空になくなり
あけはつるあさちの霜にかけみえてほのかに残る庭の月かな
山人のみちのしほりと成にけりかへるたかねの松のしらゆき
常磐木につもれる雪をふりはてゝ杉のまともる風のはけしさ
すかもかる八十宇治川の瀬を早み手にもたまらすくるゝ年波

戀

我戀はたかまと山の雲間よりよそにも月のかけを待哉
袖にやはせくとせかれんはつ瀬川ゆくての浪は色みえすとも
もゝつてのやそのしまもり心あらは戀にみるめの行衛知せよ
我戀はしつかさゝのや管をあらみもりやしぬらん時雨ふる比
常磐木とたのめし人に秋立てことのはなから色かはる比
わすれめやちきる末野の梓弓とかりのはつるたえにはつとも
あたに行たなゝし小舟さしもやはうきたる浪の跡はためまし
思ひのみつもりの蜑のうけのをのたえねはとても寄方もなし
風吹はみ山にそよくさゝかきのいたつらおきの露そうき
我戀はみなきる浪のあら磯に舟よりかねてかまとはす
うらみ侘わか獨ねのとことはにいはれしまての思ひ出もなし かなイ
月日のみすきのまきめの徒にあはすふきけん人や恨みん
から衣袖もひとつにくちにけりみしやその夜のまゝのつき橋
津の國のなにはたゝまくをしそ鳴したの思ひにこかれわひつゝ
しかすかに人に心をおきつとりあふ事なみにうき名殘すな

雑

久方のあまの露しもいくよへぬみもすそ川のちきのかたそき
千年ふる松のしけくみゆる哉たのむみくまの山のかひには
はつせ山の檜とそおもふ御芳野のたきのみなはの浪の夕暮
谷ふかく開ある雪やみちぬらん麓にみえぬときは木の峯

みさこゐる岩ねの松のいかにしてあれたる波に年の經ぬらん
朝日いてゝ空よりはるゝ川霧のたえまにみゆる遠の山本
蜑乙女しほやきめかりしかの浦につけのを櫛もとるまなき比
山深みねさめの友としつたまきかすにもあらぬすまひなれ共
ふりぬれはいはやもまつも哀也むかしの人をみる心ちして
あけゆけと木かけはくらきみ山路に嶺とひこゆる鳥の一こゑ
哀なりあかつきちかくいつる月のくもらぬ空も朧なるかけ
かすむ色をやこゑにたくふらん入相の鐘にすくるうき雲
宮こには山の端とてや詠らんわかすむ峯をいつる月影
難波えやあしのはしろくあくる空に浪うつ鳥の遠さかり行
み渡せはむらの朝こそ霞行民のかまとも春にあふ比

詠五百首和歌

春百首

うちなひき春にきにけり朝またき昨日にかはる嶺の白雲
まかねふくきひの山かせ打とけて細谷川も岩そゝくなり
みよしのゝ瀧のいともてとちこめし川との氷けふやとくらん
天にますとよをか姫のゆふかつらかけて霞めるあまのかく山
天の戸は所もわかすかすみつゝ宮もわらやも春は來にけり
消やらぬ雪まにねさすかた岡の草のはつかに春めきにけり
よしの山今朝はみゆきも消はてゝ霞にたゝる岩のかけみち
みよし野の松の葉しろき山のはにかゝりもやらぬうす霞哉

（續）しからきの外山の空はかすめとも峯の雪けは猶やさゆらん
今朝こゆる春の行手にかすみけり音はの山の嶺のこゑ
春の日になをさえ殘る沼水や袖のこほりのためし成らん
いせ嶋やいちしのうらの蜑乙女春をむかへて袖やほすらん
春はまたあさゝは水に袖ぬらし摘やね芹のなをこほりつゝ
朝またきたかためとしも若菜摘野澤の草はむすほゝれつゝ
行か鶯をのゝあれたをふみ分てえくつむ袖やかつこほるらん
梅か枝をおれはこほるゝあは雪はをのれも匂ふ心地こそすれ
あらち山やたのゝ野邊も春めきぬ峯の淺雪きえやしぬらん
山ふかみとはれんとはた思はねとかきほの梅のしるへかほ也
生駒山いとひし雲はなけれとも霞そかゝる春の明ほの
（續後）みわたせはなたのしほやの夕くれにかすみにかゝる興津白波
うちなひき春のくるてふ色なれや霞にめくむ青柳の糸
（新後撰）から衣龍田川原の川風に浪もてむすふ青柳のいと
袖たれてたか形見とはわかすともけふやつまゝしみねの早蕨
としへたる濱まつかえの手向草はらはぬ色も春はみえけり
（玉）百千鳥さえつる春にあきぬとり野への霞に匂ふおち枝
梅かゝのそれかと匂ふ夕へかなたか袖ふれし名殘成らん
猶さゆる雪につゝめる梅なから梅かえわきて鶯そなく
ものとにあらたまりゆく春雨にいとゝふりゆく我そ物うき
（風）まつらかたもろこしかけてみ渡せはさかひは八重の朝霞かも

すみ染の袖に匂ひは移る共おらてはすきしのへの梅か香
にほはすは誰かはゆきてたおらまし霞も八重の野への梅かえ
紀の國や吹あけの濱の朝霞なかめし春もむかしなけり
なかむれは霞も浪もはてそなきすまのせきやの明ほのゝ空
うちわたす遠方人の袖なから霞にこもるよとのつき橋
梓弓をして春雨いるかたもさたかにみえぬ春の夜の月
うくひすをさそふしるへの春風も花のあたりは猶もよかなん
鶯のこそのやとりの梅かえにかはらぬねこそ袖はぬれけれ
袖ふれてたかためとしはわかすとイ共けふやつまゝし嶺の早蕨
龍田山花にあらすも誰かみん櫻かえたにかゝるしら雲
なかめてもいかにかもせんわきも子か袖ふる山の春の明ほの
みよしのゝ月にあまきる花の色に空さへ匂ふ春の明ほの
いとふへき方こそなけれ久かたの月をへたてぬ花の白雲
新拾をはつせや霞にまかふ花の色をふしみのくれにたかなかむ覽
猶きかはまれなる人もとひこかし山櫻とのはるのゆふくれ
ときは木のたえまに匂ふ山櫻まれなる色にめかれやはする
春とによし野のたけにかゝる雲のこゝろ空なる山櫻かな
難波かたかすまぬ波の明ほのにをのれはるなるあまの釣舟
みよしのゝとやまにはなのさきぬれは春そ絶せぬ瀧の白糸
しる人も花より外はあらし吹身は山なからいくよ經ぬらん
明やらぬ月のかけさへ匂ふかなはなのあたりの春の曙

山路わけて手折櫻の夕露にぬれてそかへる花のかたみに
面かけに夕ゐる雲しまかひけんたくひなよはぬ山さくら哉
みし人の心うつろふはなの色にたかかをよりあらしたつらん
咲あまる花のかけもるみよしのゝ朧月夜に匂ふ山かせ
昔たれあれなん後のかたみとて志賀の都にはなをうへけん
昔たかをするのゝはらの櫻かりしらふにはなの色をまかへて
あたら夜の名殘を花に契をきて櫻わけいるあり明の月
朝またき霞もやへの塩かせにゆらの戸わたる春の舟人
たつねこしまきのを山の朝ほらけ家路もみえぬ春霞哉
あかしかた春こくふねの島かくれ霞に消るあとのしら波
たにふかみかすみにとつる槇の戸を春のたよりにたゝく山風
煙たつ室の八島はしられとも霞そふかきをのゝ山さと
歸鴈かすはたらすやなりにけん山とひこゆる聲そすくなき
今はとてはやくもかくれ行鴈は秋こしつらやかはらさるらん
今はとてたかあかつきをうきものと曉明の月にかへる鴈かね
春といへはかくてもたゆき玉つさの契むすはて歸かりかね
うら人も難波の春の朝なきにかすみをむすふあまのうけ繩
風續古いせ島やしほひのかたの朝なきに霞にまかふわかめ松はら
心あらん人の爲とやかすむらんなにはのみつの春の明ほの
さゝ竹の大宮人の戀しきにかさすさくらなかたみにやみん
花にあかぬなけきはかりに年を經し昔も猶や袖はぬれけん

續千芳野山くもらぬ雪とみるまでに有明の空にはなそちりける
久方の天きる雪のこゝちして霞よりふる山さくらかな
續古山姫のかすみの袖やしほるらん花こきたれて春雨そふる
續撰馴ゆくはうき世なれはや御芳野の山の櫻もあかて散らん
三室山神のしらゆふはるかけておしめとあたの花はたまらす
志賀の山はなのした行たひ人のすけのを笠につもる白雪
春雨のふるは涙とちる花をおしみもあへぬしかの山こえ
浪もせになかれもやらす芳野川なのかかけたる花のしからみ
新後拾くもゐなる高まの櫻ちりにけり天津乙女の袖匂ふまて
吹にほふ花のつまとはしら雲のいつ山のはにかゝりそめけん
みよしのゝきさ山きはにちる花は松につもれる雪かとそみる（ふるイ）
すみすてし人さへつらし山かせに櫻みたるゝしかの山さと
ふりにける吉野の宮の櫻はなひとりちるとも誰かしのはん
いとふとや人はみるらんかり衣さくらの雪に袖をはらへは
よしの河岩こすたきもたえぬへし嶺のさくらに嵐吹ころ
これまてもうき世にとまる心かなあたなる花のちるを詠て
つみにこんをのゝ芝生のつほ菫わかむらさきの露にぬれつゝ
續古わきも子か袖のつますりいかならん浪に色こきかきつはた哉
玉川の岸の欵冬かけみえて色なる波にかはつなくなり
風欵冬の花の露（色イ）そふ玉川のなかれてはやき春の暮哉
下山吹のはな色衣さらすてふかきねや井手のわたりなるらん

續拾春雨にぬれつゝおらんかはつなくみつのな川の山吹のはな
都人今もこしまの山吹に浪おりかくる宇治の川なみ
しゐておる袖さへふかく匂ふらん藤のうら葉につたふ春雨
山姫のはなの袂やしほるらんくれ行春のあかぬわかれに
咲のこる花のかたみをおもふにも心のつまにかゝる藤浪
山の井のあかても春そくれにけるむすふ雫に影をとめなん
大方のあかぬは春にかきらねとけふのこよひそ袖はぬれける
なこの海のいり日をあらふ浪の上に春の別の色なそへつゝ

夏五十首

夏衣けふたちぬともつけやらんかせのやとりする人もかな
たけしまの波のよるかとみゆる迄かきねをこえてさける卯花
布さらす八十宇治川の里人のやとにまかひてさけるうのはな
思ひいつるその神山のもろかつら昔をかくるつまとなりぬる
くれし春たなゐの水にたれまきし苗代かきは今やきすらん
大空のひかりになひくあふひ草いつまてかけしかさしけん
日かけ山さしもかけこしもろかつら落葉なたにもよそに聞哉
續古神山の麓のもりの郭公なれし昔の音にや鳴らん
神山にゆふかけてなく子規しゐ柴かくれしはしかたらへ
いくしたつるいほしろ小田の浮草になくや蛙の聲もすみけり
くるゝかとみれは明ぬる山のはにかたふくほとも夏の夜の月
心あれやさよふけかたのほとゝきすまつになく也玉川の里

たか香にかはな立花の匂ふらん昔の人もひとりならねは
榊とる卯月の後のならのはにまはらに夜半の月ももりけり
夜もすから涙やそゝく郭公今朝は露けき軒のたち花
五月こはむろのはやわせ手たまゆらとりあへすなけ山郭公
時鳥ともに山をやいてつらん雲間の月に一こゑそなく
夏山にたれをこひてかほとゝきす聲ふりたてゝ夜はに鳴らん
みしか夜のかねてものうき暁に山時鳥一こゑそなく
郭公まつとし人やつけつらんいなはの山のみねになくなり
時鳥そらにしほるゝ聲す也鳥羽川の面の雨のゆふくれ
續拾　子規かたふく月ややすらふと有明の雲にしはしかたらへ
ほとゝきす雲のいつくにやすらひて明かたちかき月に鳴らん
を山田に引しめ繩のなかき日も猶くるゝまてとる早苗哉
わきも子かほすまもなしと夏引のいとひやすらん五月雨の比
あつまやのかやか軒はもいかならん日數ふりゆく五月雨の比
おりしもあれすゝしくくもる村雨の雲まにきなく山子規
をやみせぬよとのわたりの五月雨に雲路夜ふかき山郭公
袖ぬらすたなかのゐとの五月雨に光たなきもくちやしぬらん
新後撰　五月雨の程もこそふれ御芳野のみくまか菅をけふやからまし
さみたれは藻塩の烟立まとひあまの笘やそいとゝいふせき
哀也こん世そかねてうかひ舟うきてもえ行かゝり火の影
夏かりの玉江の芦の下かくれたくやほたるのあまのもしほ火
夢の世によそへつゝみる朝かほの花の露にそ袖はぬれける
ゆく螢草のたもとにつゝめとも猶かくれぬはおもひなりけり
まとのうちにわれはあつめす飛螢もゆるおもひは思しれとも
夕たちの雲の名殘を吹かせにあさの葉たひき露そこほるゝ
夕立のすきぬる跡の空晴て入日にみかくまつの下露
雨そゝくはすのうきはにゐる玉のたまらぬものは涙成けり
山城のよとのゝまこも絶〳〵にみたれてやとる夏のよの月
新拾　きふね川岩うつ波に飛ほたるたかあくかるゝ玉にか有けん
夏山の峯とひこゆるかさゝきのつはさにかゝる有明の月
あかなくに雲のいつくに宿りつゝはるれはあくる夏の夜の月
なつの月まつよひなから明にけり岩もる水も結ひあへぬに
隙もりし玉江のあしはかりたてゝすゝしくやとる夏のよの月
夏野わけ草のあをはをゆくしかのこゑはほに出ぬ夕暮の空
をきかされはこほれもやらて白露の秋かせをまつ宮城のゝ原
みそき川あらふる神やなひくとて今宵そかゝる波のしらゆふ
けふといへはさはへの神やみそきする河瀬の波に心よすらん
御祓川かたへすゝしくよる浪に手にとるあさもおき風そふく

秋百首

昨日まて忍ふのうらの秋の風けふあらはれてなみもよせけり
さらてたにうらみ侘ぬる夕くれの荻の上葉に秋は来にけり
いかはかり草はに露のあまる覽すかのあらのに秋たちにけり

朝またきはとふく秋の音たてゝおかへの松にかせかはるなり
ほにいつる室のをしねもからなくに山田のいほに秋かせそ吹
すまのあまの袖にくたけて玉そちる岩うつ浪に秋やたつらん
夕されはいなはそよきて吹かせにあしの丸やをとふ人も哉
荻原や秋ふくかせやすゝむらん下葉みたれてものおもへとは
續古里のあまのたくもの煙心せよ月のてしほの空はれぬ也
銀河あさせふむまにふけぬとや紅葉のはしをわたしそめけん
織女のあかぬ名殘の涙にや雲の衣もしほれはつらん
今日まては猶秋かせも忍ふ山したはふくすにまかふ夕露
夕されはまのゝ秋かせ吹みたりしつ心なきはきのうは露
世のうきに思ひとりてし松のとをさすかに秋の尋ねきにけり
葎わけて月もまはらに成にけりまきのふせやの秋のよなく
さしかへる（すイ）うちの川長いく秋かしつえにやとる月はみゆらん
秋といへは野にも山にもすむ月の我袖にしもなとしほるらん
續拾天の原雲吹はらふ秋かせに山のはたかくいつる月かな
かつきゆるのはらの露にすみ侘て外山にかへる晨明の月
まれにたにとはるゝ方もなきやとにたか玉章の初鴈の聲
朝霧にやへ山こえてくるかりのつはさ吹ほせみねのあきかせ
わくらはにいかにとゝはん人もかな晴ぬ雲井の秋をこたへん
飛鳥のあすかのさとの萩君かあたりの秋やとふらん
すみそめの袖こそあらめ吹むすふ風はむかしの秋の夕暮

新古夜もあかすそみつる久かのあまのとわたるあり明の月
明ぬるかかせにわかるゝよこ雲のたえく殘る山のはの月
廻あはん月のみやこはしられともはかなく契る有明の月
ふか草の露の夜すから秋かけてすみこし里は鶉なく也
秋されはゆる山田のひたすらに世をうきものと思わひぬる
白露の遠方人もとひこなんすそ野をかこふ萩のまかきに
我ならて誰かをきゐてこたへまし外面の萩のとはすかたりを
小萩原わけゆく鹿の跡よりや下葉の露に月もすむらん
秋といへはなへての空も色そそふ月のかつらのをのか光に
夜半になくかりの涙はをかねとも月にうつろふまのゝはき原
笘をあらみかりほの庵にもる月のなれても袖にぬるゝ顔なる
はまかせにおはなか露はたまらねと眞野の入江に月は澄けり
苔むしろさしては秋のつまやなきもらぬいはやの初鴈の聲
難波かた浦こく船の浪の上にかけすみ渡るあきのよの月
菅原やふしみの里のさゝまくら忍ひしものを秋の夕くれ
露しけきむくらの宿のさひしきに昔に似たるすゝむしのこゑ
分てなを秋は袂そしほれそふいつはとわかぬよはのね覺も
長夜をひとりやなきてあかさましとふらふ虫の聲なかりせは
をとろかす野原のむしそ哀なる心にわかぬあきのゆふへを
たか御祓ゆふかけ草の下露にをりはへてなくきりく す哉
大江山いく野の道の長夜に露をつくして宿る月哉

萩あかつきかたの草のいほに人つてならぬ枕にそ聞
立歸る浪のゆき來にいろそそふ玉よる浪の秋のよの月
心あらはよきてふかなん秋のかせ物おもふ人の夜半のね覺を
淡路島月おちかゝる明かたにこくやみ舟の音そ身にしむ
夕久禮野曾良田能月瀬背九留鷹濃我於毛婦人戸思波滿志加者
うき事を思ひつらねてなくかりや物思ふ人のね覺なるらん
ふかき夜の人さたまれる淺茅生にひとりさひしき庭の月影
我宿はつれなき人をまたね共まかきは野へと鶉なく也
いつこにか露はたまらん小男鹿のしからむ萩もあらしたつ也
住の江のふかき汀による波はいくよの秋の月になるらん
さをしかの入野の薄露しけみたか手枕に月やとるらん
月影にむしあけのせとを漕出れは八十島かけておくる鹿の音
露なから袖にくたくるあらし哉物おもふ色はそれとなけれと
時しもあれうたて吹そふ嵐哉さらてもふかき袖のおもひに
天の戸をおしあけかたの木からしに嶺やと山の槙鹿の聲
昔たれいくよの秋とちきりけんあれたる宿の庭の月影
忍山下葉布久濃滿風仁うらみかほなるさをしかのこゑ
宮城野の木の下露に色かはるもとあらの小萩あきそ深ぬる
日くらしのなく夕影の柴の戸をあらしの外にとふ人もなし
秋の露に袖もくち木のそまかたに道まとふ鹿の聲そ身にしむ
露しけみ草にやつるゝ故郷は袖にそ虫のこゑはみたるゝ

かつらきや旅ねの月の床や[illegible]よるなと契りし暁やくやしき
雲はれていつれの秋か月はみんなをもひつきせぬ宿の夕霧
鹿のねにかたしく袖やしほるらん今宵もふけぬうちのはし姫
ね覺する夜半のあはれをつくせとや秋しも鹿の鳴始けん
山里のあはれをそふる村雨にきりの下はも色に出けり
鳴よはるのはらの虫の聲きけはわか身の秋そいとゝかなしき
君すまてとはれぬ秋もふけにけり生田のもりの有明の月
逢坂の關のゆきゝに色かはるをとはの山の秋の紅葉は
はつ時雨ふれとかひなき常盤山身にしむ色を風やそふらん
わきも子か袖ふる山のうすもみちそれかとまかふ秋の夕くれ
日かすふる紅葉の下の旅衣たつ事やすきにしき成けり
立田姫このかにしきのたもとかも時雨の下の峯の紅葉ゝ
物おもふ人の袖よりしくれきて色かはり行宿の道芝
秋ふかき難波のあしのうらかせにこやのしのやも衣うつ也
時雨もるもみちの露にたちぬれてなく音色こきさをしかの聲
かり金のきこゆる空にすむ月の光をかけて衣うつ也
いなは山松のあらしやさむからん秋のふもとに衣うつなり
まかちとるふなきの山の夕しくれそむる紅葉もこかれてそ行
奥山のいはかきもみちいたつらに時雨にそほちおる人もなし
夜やさむき時雨にきほふかりかねに衣うつ也山のした庵
ふしわふるしつのまろやの竹すかき夜すから秋の衣うつ也

おなしくはもみちの露に袖かけて秋のかたみの色を殘さん
きり〳〵す草のやとりのはつ霜にうき行秋やいともかなしき
秋はつるかれのゝ虫の初霜にむすほゝれ行聲のはかなさ
をく露もあたのおほのゝまくす原恨かねたる秋のくれ哉
秋風の玉まく葛も枯はてゝうらむるかひもなき世成けり
しもまよひなかはかれ行下荻に秋のすゑはの色をみる哉
露しけきをのゝあさちに鳴鹿の聲も夜ふかき長月の末
玉かつら秋のかたみにたえねとやしほれてそ吹野への木枯
むなしくは深き瀬もかひなきにいかにせんとか秋のくれぬる
大空はくれ行秋のかたみかはおしむ袂もうちしくれつゝ
きえかへりあさちか末の白露に初霜むすふ秋の程なさ
いつ方に鐘のひゝきもなりぬらんあけぬかきりの秋の名殘に

へ　冬五十首

山風に紅葉ふりしく道芝の露ふみわけて冬は來にけり
いつのまに谷の岩まの氷るらん秋は昨日の山川のみつ
冬きても猶色ふかしやまかせにちらぬ袂の秋のかたみに
神無月しくれてわたる木するより雲にわかれていつる月影
あやなくも露ふきむすふ嵐哉秋のとめたるあたの形見を
しくれとてこゝにも月はくもるめり芳野の奥もうき世成けり
新千 かきくもり有明の空のしくるれは月もしほるゝ心地こそすれ
いかはかり木の葉の色のまさるらん昨日もけふも時雨ふる比
散かゝる時雨のにまされはや色のみふかきやま川の水
ものおもふ心や空にくもるらんさも時雨つる神無つきかな
玉 神無月雲間まつまにふけにけりしくるゝ比の山のはの月
立田山みねのしくれの糸よはみぬけとみたるゝよもの紅葉は
大かたの時雨は人をわかねとも我袖のみそいろかはりゆく
晴まなき袖の時雨をかたしきていくよねぬらんうちのはし姫
あふみのやにほてる月は晴にけりみかみの嶽はなを時雨つゝ
冬さむみ涙は袖につらゝゐて袂に白きありあけの月
月もれと嵐のふけるあはらやにあらそふ霜の袖にさえつゝ
おもへたゝこけの衣に露をきてね覺さひしき冬のよな〳〵
さえわたる清瀧川の岩まより氷にやとるふゆのよの月
かさゝきの雲のかけはしさえわたり霜をきまよふあり明の月
風さむみあさゆく道の小さゝはらうきふしことに袖はぬれつゝ
昔思ふふるきまかきのよるの霜猶きへかへりこひつゝそふる
霜かれのむくらの門もあけなくに誰とふものはあられ成けり
たつた姫ちるやかさしの玉かつらかつらき山にあられふる也
霜はらふ庭の玉さゝあられふり空さへさゆる冬の夜の月
けさみれはやたのゝあさちうつもれぬ風もあらちの峰の初雪
ちり殘る秋の名殘もたえはてぬもりの木葉につもる白雪
空さゆるひらの高根に雪かけてあられ吹まく〳〵かせの烈しさ
難波かたそよきしあしも霜かれてしほせの浪の音のみそする

しほれあしのふし葉か下も氷けり一夜二夜のをしのよかれに
山影やなつみの川にゐる鴨の上毛の霜はきゆるよもなし
光そふみたの玉川月清み夕暮千とり夜半になく也
雪ふれはみなをしなへて白妙のさきさか山の松ものこらす
ゆきつもる旅の宿ゐにたつ烟これも世にふる道やくるしき
とはるへき山路もたえぬ冬籠り菅のねしのきつもる白雪
いもかすむ寺井の水も氷るらしかちの葉さえてみ雪つもれり
今朝みれはならのひろはに降雪のいとゝさひしきみ山への里
さしくしのあかつき千鳥をきわかれ猶つまこひのこゑ恨也
かりねする玉江の月のあけ方に聲もさやかになく千鳥哉
ね覺するとふのすかこもさえわひてあかつきふかく千鳥鳴也
須磨の關有明の月に潮ひかたみきはの千とりとをさかるなり
今朝みれは雪の白ゆふかけてけりこれや手向の山路成らん
ふりつもる雪ふきをろす山おろしに山のはしろくさゆる月影
續後拾かた岡のもりの木からしさえ〳〵てしつくも氷よはの白ゆき
みかりするかりはのをのゝ風さえてとたちのしはに霰〔ふ歟〕ふる也
夕暮の空とるたかのすゝの音にゆくゑまよはぬ芝の下草
山里のすゝきをしなみふる雪にとしさへあやなつもりぬる哉
身にとまる月日はいつもかはらねとくれぬる年そ物は悲しき
我またぬ年さへせめてくれぬれは涙もいとゝふりそほちつゝ
いかにせんよそなる春は飛鳥河なかるゝ年はしからみもなし

戀百首

いかにせんせけともあまるたもとかないはての山の谷の川水
わか戀はまきの小山の秋の露色に出しとしのひこしかな
みすもらすみさせし人のおもかけは夕の雲にみたれなる
風をいたみしのふの浦によする浪を衣のみやは袖にかけつる
せきかへしなみたも色にそ出にける思によはる袖のしからみ
忍ひあまり袖にもおくちはてゝをき所なきわかなみたかな
奥山のすかの根しのきをく雪の人こそしられきえかへりつゝ
なけきあまりおさふる袖のひまをあらみ色にいてぬる我思哉
くちねたゝあやめてとはん人もあらし忍の山の谷のむもれ木
大空にいかにまかへんもしほやくあまたにつゝむこひの煙を
あふ事はとを山鳥のをのれのみなかき契のためしとそみる
思ふともしらしな心あまを舟かまくたにはたえすこふると
我戀はいそまをわけていさりふねほのかにかよふ浪のまも哉
命あらはめくりあひなん常陸帯の結ひそめてし契くちすは
下紐のむすほゝれゆくうらみかなゆふてまたゆくとけぬ思に
夕かたの日影のかつら手にかけて心の色をたれにみせまし
あふ事のかたみのうらのうつせ貝むなしきこひの絶ぬ年のを
つくはねの嶺はや人のつらからん衣手かれてひとりぬる夜を
はるしこはつらき心もとけなゝんうら山しきはけさの池水
夏虫の身よりあまれる思ひかはあはてきえめや浪のうたかた

みちをなみ山したしけき夏草のしらぬ戀路も露そこほるゝ
逢みても夢かとおもふうたかひに現なからもなをやうらみん
つれなさを恨みもあへすふくるよにすゝむるものは涙之けり
いかなれや契りし色はそれなからわかかねとのはてそ悲しき
むつこともあふ人からのならひかもいつらは夜半も長月の空
おもひかねなく〳〵わけし白雲の忍ひし中を何へたてけん
續後拾 あま人のをのれけふりとなりしよりみるめはたえぬ鹽竈の浦
續拾 我爲はつらき心のおくの海のいかなるあまのみるめかるらん
さても猶面影たえぬ玉かつらかけてそ戀るくるゝ夜ことに
君こふる涙や空にかよふらんおもひはてける夜半の村雨
かる萱のみたれてものをおもへとも君か下葉の露そつれなき
くやしくそたのむもつらしみつの淡の消て留らぬ人の情を
戀せよとなるみのうらの鹽干潟かた思にそしほれわひぬる
あふ事のまとをの衣名もつらししほれ侘ぬる須磨の浦人
恨侘扨もたゆまん方もあらしあはてへにける年のしろへに
袖のうへに秋おく露の玉すたれかけてこふるを知人のなき
野分せし昔の秋のゆふへより面影さえぬ山のはの月
そのまゝに涙の露もをきかへすありしなからのつけのを枕
たのめても心つくしにふけぬなり待よゐすくと君につけこせ
ふけにけり中〳〵なにしたのみけん人の契りも淺茅生のやと
袖の上にむすほゝれ行なみた哉軒はの荻のちきりはかりに

わするなとちきりしほとの夕くれは松吹風そかたみかほなる
まとろまて月にあかせる夜ころ經て夢路もうとき人の面影
なをさりの遠方人やはらふらんあはてくるよの道芝の露
かくしつゝいつかとくへき下ひものむすひもをかぬ人の契に
恨侘さてもあはせん人もかな夢よりけなるあたの契を
さても猶たえぬ契をたのむ哉おもひ忍ふのもりのしめ繩
我涙しくれとともに故郷のあさちかもとをとふ人もかな
玉をなす涙の露の袖のうへにをきてけぬへき朝ほらけ哉
御垣守衛士のたく火はよそなれととへかし人のもゆる思ひを
女郎花はなのたもとに露をきて誰夕くれの契まつらん
戀すてふ名のみたかしの濱千鳥なく〳〵かへる袖のあた浪
おもへたゝ逢夜まれなる明くれに露きえわひし人の面影
つらけれとさすかにかよふ心哉身をうちはしの中もたえなて
思ひねの夢のしるへのはかなさをたのむ程なるなくさめも哉
今日もまたならのを川にみそきしていのりやせまし人の契を
君かためふかきおもひやとふ鳥の聲しも聞かぬ山のはの月
袖のなかに人のなこりをとめをきて心もゆかぬしのゝめの空 みちイ
戀わひてねもやしなましむは玉の夢にたのめし人や待らん
おもひ人こひの道芝秋すきてとはてかれぬる草の原哉
霜こほり霰みたるゝ冬のよを君きまさねはこひつゝそぬる
たのめこし有明の月のそれなから同し袖にもめくり來にけり

かはりしといひけん山賤いかならんまもの山出しを時すゝるころ
谷ふかくたゝむさたまきの心地しておもひも猶そ村にいなん
うき沈みこふるもくるしみたれ葉の末こす浪のしほれ花つゝ
ねる夜なき心のとかに年を経て夢の浮りもいくよへたてつ
ともねせぬかもの上毛の夜の霜おきあかしつる袖をみせはや
戀わふる涙にくもる秋の空みしやその夜の月なへたてそ
あちきなくなかきかたみのつらさゆへ君にとめてし我心かな
人しれす袖にしむる夕くれをしらすかほにや君なかむらん
なけきつゝねぬよの空の月影を戀しき人のかたみにそみる
くれしてもかひ名残すゝる夢に二たひ袖をぬらしつるかな
有明のつれなくみえし空のみやなれし名残のかたみ成へき
戀すとて袖には雲のかゝらねと涙の雨はをやみたになし
あふ事はかたむすひなる白糸のとけぬ恨も年そへにける
菅枕たえたる閨のそての上になるゝかほなる床の月影
わきも子かゆつのつま櫛さしもやはつれなき人を思わたらん
戀衣しほる涙の手をたゆみしはしたにまんそてのまもかな
明かたをしらする鳥のつらさゆへ我涙さへせきそかねぬる
逢みてもいつれを夢とわかぬまに泪くたくる床のさむしろ
秋かせになひくさ山のすかつらくるしや心うらみかねつゝ
かせの音のそれかときかふ夕暮の心のうちをとふ人もかな
おもひ草葉する露も今は霜かれて秋の末はの人のおもかけ

かせのをきのたのめしくれにゝたる面かけ道にし庭の萩原
うき人をしのふの衣あちきなくつれなき色に何みたるらん
まろかつらかけてやとふと待わひぬはかなき草の名を頼つゝ
夏まへ渡津はまのかきつはたへたてはてぬる名こそつらけれ
衣々の人の別の関くれをむすひもとめぬ道芝のしも
我袖に色もかはらすしからきのまきのそま山時雨ふれ共
あふ事も今ははつかの山のなも我身ひとつにふくるよの月
思ことなく枝のうつせみ木かくれて下葉の露をおのれやはけつ
わするなよけふは昔の秋までもこの夕暮の萩のうはかせ
ふみわけし跡をかたみのにはつ鳥かけのなかをの亂れてそ思
積のをきし露のやとりをわけわひて昔にそまとふ道のさゝ原
逢みてし人をしのふにをく露にわすれかたみの涙なりけり
曉のわかれは袖にふかきより行もとまるも露こほれつゝ
俤をいくよの月に残すらんつれなくみえしひとのなこりに
身にちかき我身の秋をなけくまに木葉さへにそ色かはりゆく
思出よまかきの菊もおりおりはうつろひはてし秋の契を
わすれゆく人の心をなけくまに我袖さへも色かはりけり

雑百首

みこの島松原こしにみ渡せは有明の月に田鶴そ鳴なる
初瀬山入あひの鐘の聲すみて檜原かすゑに雲そかゝれる
おほ空に時雨ぬ春もあるものをいつも秋なるわかたもと哉

きえやらて波にたゝよふうた方のよるへしらせよ八重の鹽風
（續古）世中は如何たのまん飛鳥川昨日のふちの淺せしらなみ
よふねこくふち江の浦のあり明に浪路を送る月のさやけさ
それとなく思いつれは袖そぬるゝすきにしかたの夕くれの空
稀にあへる松の戸ほその明方にみし世にたる月をみる哉
山ふかみその名もしらぬときは木のしけき峯にも月に澄けり
いそのかみふるのゝさはのまろ木橋くちぬるものは袂之けり
鹽かまのうらこく舟のつなて繩くるしきものはうき世成けり
みさこゐるいそまの松のふかみとり色もかはらぬをきつ鹽風
こきちらす瀧の白玉からねとも涙はつきぬものにそ有ける
山里のまきのいた橋あれはてゝとはれぬ程も餘所にみゆらん
芳野山岩のかけみちわけいらはいかはかりなる露のおくらん
狩人のいるのゝ草やふかゝらんなひくゆするのかけそ行かふ
けふもくれあすも過なはと思ふまに空しき年の身に積りつゝ
山もとの杉の驗もたのめをかし誰かはとはん三輪の夕くれ
すまの關たれしのへとか濱千鳥ゆくゑも知ぬあとの月影
うちはへて波まに靡くはすなはの根てかひの有世なりせは
すてやらぬ憂身のはてのかなしさを嘆きなからも猶すこす哉
なさけあらは四方のかたより吹風のつてを尋てとふ人もかな
（風）大方のうつゝは夢になしはてつぬるかうちには何をかもみん
なけき餘りをき所なきうき身哉袂は露のやとりなれとも

奥山のをのかふもとをまかきにて岩かきし水底にせくかな
岩ねふみわけこし嶺のかたみとやかさぬる山にかゝる白雲
露なからたかはかりしきさぬる夜は夢も旅ねの床やみゆらん
かきくらす野山の雪はきゆれとも身の思ひこそ年つもりけれ
いさこゝにわか世はへなん久方のかつらの里の月のよな〳〵
玉もかるしきつの浦のたひねには磯の松かせ身にやしむらん
ありしにもあらすなるよの驗とやまつ色かはるこけの袖哉
故郷もとを出すりのかり衣いく朝露をそてにかくらん
枕とて草ひき結ふ宮木のゝ秋とたにやは月もたのまん
いへはえにかはらぬ月そ恨しき我のみふるきこけのたもとに
霜しけきのしまか崎のたひねには浪こさぬよも袖はぬれけり
人はみなもとの心そかはりゆく野中の清水たれかくむへき
から錦たれたむけこし色なれや紅葉のぬさの秋の山みち
山ふかみまきの戸たゝく木からしに泪のこらぬ床のさむしろ
物思へとなるみのうらの濱楸ひさしくなりぬうき身なからに
雲のなみけふりの波路へたつともとへかし人の思ふかたより
あさりするたななし小船漕かへりえ島か磯はあかすかもみん
松島のあまのとまやはしられ共我袖のみそしほれ侘ぬる
わか心なくさめかねていくよへぬをは捨山の月はみねとも
そての名になれてもかなし奥山の松のは分の有明の月
ふれはかく涙そいとゝふかき夜のまとうつ雨は峯にかけねと

すみわひて爪木こるへき宿ならは淋しさのみや嘆かさらまし
住吉や八十島遠くなかむれは松のこすゑにかゝるしら浪
山さむみかせもさはらぬこけ莚（衣イ）立ゐにつけて袖そぬれこし
身のうきをなけくあまりの夕暮に問もかなしき磯の松かせ
さゝめかりのはらの露にさぬれつゝこひの衣の面影そたつ
うかりける世にすみかまの薄煙たえみたえすみものおもふ比
山路をはまた夜ふかくて出つらんあくれはくたるうちの柴舟
かせはやみ浦にたゝよふうき舟の定めなき世を何したふらん
賤のめかあれ田の畔にたせりつむあさの衣（浜イ）もかくはしほれし
とまりするあまのかくみに引とまの隙なく物をおもふころ哉
幾夜われ浦はの浪にそほつらんあまのなはたきいさりせぬ共
をきつ島あまの磯屋の藻鹽草かく數ならてよをやつきなん
いつくとも昔の庵の跡ならんよをうち山の秋のゆふくれ
故郷にとめてもみせんと思ひしを袖にも月そかき曇にし
うき舟のこかれてわたる浪のうへによるへしらせよ沖津濱風
松の戸やさしも夜ふかきかねの音に涙の露のをきあかしつゝ
まつかきのまし葉のとほそあけくれは思亂れてよをや盡さん
大方に人をはわかぬかせの音もやとからつらき山の夕くれ
我思ひつもり〳〵てあらたまの年をあまたもなけきこし哉
いつとなきをくらの里に心あれやくれぬといそく山のはの月
久堅の空もあはれとてらさなんあふくかひなく年のへぬれは

いとゝしく物おもふやとの道芝に露をきそふるよはの村雨
奥山のいはねにたゝむ苔むしろたかしきすてし名殘成らん
なけきあまり憂世の年をせめきてし夢の内なる夢をみしまに
水草ゐて月さへすまぬ故郷の岩もるしみつけふやくまゝし
老にけるすかたの池のうきぬなに昔しき世をそ思ひわつらふ
笠ゆひのしまこきわかれこく舟の跡ゆく波のあはれ世の中
花の色鳥の聲にもなくさますうき世をさとるかりのやとりは
くやしくそあたのすさみに年を經て佛の道になをやたとらん
そむけともかとはかりのこけの袖心をそむるなく（すみそめイ）さめそなき
（讀占）誠には佛の國もよそならすまよふかきりそうき世ともみる
夕まくれのりの山田にひたはへて命もしもとおとろかすかな
なにとなくなにとかしのふ徒に思もをかし露のよの中
みる程もしはしなくさむ隙もかなあらしも月も常ならぬよに
世中のつねなき色をしれとてや露のやとりに月もすむらん
ひとりきく曉のかねのつく〳〵と思ふねさめそ夢には有ける
西へゆく心の月のしるへあれとまたはれやらぬ雲そかなしき
燈のつくるをきはにおきゐつゝこの世を夢とさとり行かな
をろかなる心のうちをたつねみよほかに佛のみちしなけれは
（讀占）[illegible]ふなよくるしき海によする波もみのりの木のほかにやはたつ
思ひとけは心につくる六の道をいとふそやかてまとひ成ける
あきらけき道にもいかてさとりいらんまた深き夜の夢の行末

入月にあふきをあけてたとふれとうきよの闇そかこつ方なき
空にかふ身の怠のつれなさをなけき〳〵のはてをしらはや
諸神を賴しかひそなかりけるゐてのしにはこそ手にはくまれと
いにしへのなけきの杜の名もつらしわかねきとの神のみつ垣
神風やとよさかのほるあさ日影くもりはてぬる身を歎つゝ
哀しれ神の惠はしらねともいせまてなをもかくるたのみは
おりしかん旅ねもつらし浪まくら名はむつましきいせの濱荻
おもひいつる袖にそ影はやとりけるその神山の有明の月
住吉の神の驗しと賴め共心のうちのまつは年經ぬ
あまくたる神もあはれとみつの濱心のしめをかけてたのまん
かはらしとたのみし物を足引の山のみなみのまつかせのこゑ
たのみこししるしもいかゝ岩しろの野中の松にむすふ恨を
わかたのむ御法の花の光あらはくらきにいらぬ道しるへせよ

建仁元年二月老若五十首御歌合十六十八兩日有評定被付勝負

春

春は今冬をこめてやたちぬらん霞にもるゝみねのまつ風
朝霞たてる山邊そなをさゆる木のめも春の雪はふりつゝ
わたの原遠の霞のはるのいろに八十島かけてかへる鴈金
（新續古）武藏野のきゝすよいかにこや思ふ烟のやみにこゑまよふ之
都人そともいはすうちむれて花にやとかるしかの夕暮
花匂ふかすみの空をなかむれはおほろけならぬ春の三か月

[illegible]あたら夜のまやのあまりに来し[illegible]にくもる有明の月
花ゆへにしかの故鄉けふみれはむかしをかけてはるかせそ吹
分てこの吉野のはなのおしきかはなへてそつらき春の山風
思ふとも明なん空はいかゝせん夜のまはおしめ春つくる哉

夏

み渡せは名殘はしはしかすめとも春にはあらぬけさの明ほの
久方の月のかつらにあふひ草かけてそたのむかもの川なみ
郭公くもるこよひのむら雨にまたしき聲やよにふりぬらん
あやめ草岩かき沼の袖をたへすけふは袂（た歟）のにほひとそなる
郭公おもひもわかぬ一こゑにあけぬるかさはしのゝめの月
夏の月しはしみるまもあらはこそくもらはくもれ山のはの空
時鳥雲のはつかにきこゆなりよとのわたりのむらさめの空
秋ちかきしつかかきねの草むらに何ともしらぬむしの聲哉
夏もまたをしまかいそのかち枕うきねの波に秋かせそ立

秋

秋立てけふみかの原かせさむしやゝたなはたにころもかせ山
荻の葉にあきかせ吹ぬともすれはかはらぬ月の影そすゝしき
秋風は身にしむ物とはきの葉に吹よりこそはならひそめしか
住吉の松にあきかせ小夜ふけてうらよりおちに月そさやけき
をきの葉におく白露の玉ゆらも閑しのふへき秋のかせかは
秋の色はまた一しほの紅葉はに心してふけ山おろしのかせ

あきやとき時雨やおそき宮山葉はこすゑにあかし　歟也
くれて行秋の名殘におほあらきの森のこすゑに有明の月
長月や秋の末葉に霜をけはみはらの小萩かれまくもおし
尋みよいかなるせきの關守かつれなくくるゝ秋をとゝむる

冬

津の國のこやもあらはに霜かれてやへふく軒にしくれふる也
此比はさ夜の時雨もきゝわかす木のはになるゝみ山への里
冬に猶かされて雪のかせさえて時雨にかはるみねのしら雲
ときはなる松のみとりを吹かれてむなしき枝にかへる木枯
見わたせは浪こす山のすゑの松こすゑにやとる冬の夜の月
から崎や氷に浪のをとたえてみきはに殘るさ夜の松風
高さこのまつふく風そむもれゆく尾上の雪やふりまさるらん
すまのうらにをそともなき煙雪のあしたのあまのもしほ火
冬ふかみとやまのあらしさえ／＼てすそのゝまさき霰降也
西のうみのあら磯浪による竹の一夜になりぬ冬の日数も

雑

心をしあまてる神にかけまくもかしこき光くもりなき世に
淡路島ふきかふすまのうら風にいくよのちとり聲かよふらん
おしめともつれなくあけぬ夜はの月名殘を山のはには殘して
とひもこぬ人の心を三輪のやましるしの杉の名こそおしけれ
なかむれは橋の木影にほの／＼とあくるもつらきうら島の月
浪かまし浪のまに／＼なかむれはゆるこしまに有明の月
呉竹のふしみきたのすれもいらす鳥のなく／＼まて月をこそみれ
霧とはん誰かはこゝに角田川名にしおふ鳥はありやなしやと
宮古人さひしき宿のまつかせに月をはみるかとたにとへかし
住吉の松にいく世と事とへは岸うつ浪そ磯にこたふる

建仁元年九月五十首御會

初春待花

雪きえてけふよりはるをみよしのゝ山も霞て花をまちける

山路尋花

雲かゝる木末を花とたとりきてまたころあさきしかの山越

山花未遍

大方のはなはまたしき嶺の月のはれゆく空に殘る白雲

朝見花

明わたる山路の花のほしもあへす朝露なから春かせそふく

遠村花

櫻さく野邊の春かせかほるなりいさみにゆかんをちの里人

故郷花

さき殘る吉野の宮のはなをみて昔はむかしと誰うらむらん

田家花

底むすふ春の山田も時しあれはなはしろ水に花をまかせて

古寺花

はつせ山山たちはなれちる花をゆくゑさためすさそふ風哉

花似雪

古郷はよしのゝかせやかよふらん櫻の雪もふらぬ日はなし

河邊花

芳野川ゐせきそ花をせきとめて水の心も春をみせける

深山雪

あたら夜の吉野のおくにひとりたれ月と花との哀しるらん

暮山花

みよしのやなけの櫻を頼にてしほりもしらぬ山の夕くれ

古溪花

咲てちるおもひなしとも如何せん谷にも花のよそならはこそ

關路花

ふはの山かせもとまらぬ關の屋をもるとはなしにさける花哉

羇中花

旅衣きさらきやよひ日數へて花に馴たる袖のうへ哉

湖上花

春かせのにほてるおきをふくからに櫻をよするしかのうら浪

橋下花

岩はしの神をたのむのかりなれや櫻をわけてよると鳴也

花下澄月

花のかけの旅ねのあらし夜比へて月そなれゆく袖の手枕

庭上落花

かりにたに人こそとはね故郷のさくらはゆきと庭にしけとも

暮春惜花

いたつらに春くれにけり花の色の移をおしむなかめせしまに

初秋月

秋のきて露またなれぬ萩のはにやかてもなるゝ夕つくよ哉

月前草花

月影を我身ひとつとなかむれは千々にくたくる萩の上露

雨後月

夜半になくかりの涙に雨すきて月にうつろふ野への色哉

松間月

ほの〳〵と心つくしにもる月をなをふきしほる庭のまつかせ

山家月

山かけや秋ははらはぬ庭の面の桐の落葉にすめるよの月

月前竹風

古里の月吹かせになよ竹のなよりあひてもいくよ經ぬらん

野徑月

わするなよ月にいく野の道すから袖になれたる女郎花かな

澤邊月

くもりなき澤邊のあしの埋水やとしもなれぬ月の影哉

イくもりこし澤邊のあしの埋水やとしもなれぬ月の影哉

月前聞鴈
をのかくる嶺の夕きりはれはてゝ月にかすしる初鴈の聲
浦邊月
あけぬへきよをしほかまの恨わひからくも月のたけにける哉
月照瀧水
ぬきみたる瀧の白糸くりはへてよるともみせぬ月の影かな
杜間月
月殘る生田の森に秋ふけて夜さむの衣夜半にうつ也
月前秋風
たかためとわきてはふかぬ秋かせも月みる袖の露をとひくる
江上月
みしま江のいりえの蘆のしたみたれ亂れても猶月はすみけり
月前虫
新古 あきふけぬなけや霜夜の蛬やゝかけさひしよもきふの月
月前聞鹿
ね覺のみすゝのしのやに聞こゆ也月につまとふ小男鹿のこゑ
旅泊月
舟とむるむしあけの秋のはつ風にわすれかたくもすめる月哉
月前草花
夕露にやとして月をみや木野の小萩か風よ心してふけ
菊籬月
白きくもうつろはんとのわきなれす霜のまかきの有明の月
暮秋曉月
秋もいなは戀しかるへきこよひかなたのめかをきし有明の月
寄雲戀
我戀は嵐にまよふ空の雲うきてそともなき世成ける
寄風戀
我袖に露はもとよりをきけるをあらはすあきの風の音哉
寄雨戀
こぬ人を月に待てもなくさみきいふせきよひの雨そゝき哉
寄草戀
續古 袖にをく露の向後をたつぬれはあはてくる夜の道のさゝ原
寄木戀
人心秋の木葉とうつろへはかはらぬまつのかせのをとかな
寄鳥戀
しはしこそあけぬるかとも恨しかまたはそ今は鴫の羽かき
寄嵐戀
忘てはねぬへきものを何と又誰まつかせのあらくふくらん
寄船戀
わたのはら跡なき波のふな人もたよりの風はありとこそきけ
寄琴戀
かすかすに思ひし事はねにたてしかよふ松風はいかに吹とも

寄衣戀

から衣きしもせぬ夜のなかめこそ扨もわすれぬ妻と成けれ

元久元年十二月八幡卅首御會

春

八わた山みねのかすみのうちなひき春にもなりぬ明ほのゝ空

霞たち木のめ春風ふくからに消あへぬ雪に花そうつろふ

うちなひき春やたつらん吉野山やまもかすめるかせの音哉

難波かたあし火たくやの春のそらくゆる煙にたつ霞かな

春ふかみ花や山風ふくまゝに吉野のまつにかゝる白雲

とはれてや春もくれなん御芳野のはなちる庭の有明の月

夏

春くれて一夜ふしみの明ほのにをはつせ山の夏をみるかな

我宿の軒の梢に夏はきてもりえぬ月の影そさひしき

郭公こゑのよすかとなるものをなきつる雲のむら雨の空

村雨のつゆの名殘をならのはに殘してみかく夏のよの月

夕たちのまたはれやらぬ山のはにをのれさやけくとふ螢哉

かせのをとも立田のもりになく蟬の羽にをく露も秋を待らし

秋

秋はきの上はつれなくをく露にやとれる月のかけそうつろふ

さをしかの涙はみえぬ夕まくれほしえぬ袖は露をからなん

笘をあらみ露はたもとにをきゐつゝかりほの庵の月をみし哉

たれみよと露のそむらんたかまとの尾上の宮の秋はきのはな

露のをくとてこそぬるゝ袖の上をあやしと月を影やとすらん

かねの音にけふもくれぬとなかむれはあらぬ露敷袖の秋かせ

冬

神無月もみちになりぬ立田山三室の時雨日數ふるらし

冬はまたあさちかうへにふる霜の雪とそまかふ明方のそら

木葉しく山下水の薄氷ひとへにあきをむすふ成けり

網代木にいさよふ浪やこほるらん千とり吹よるうちの川風

冬さむみよし野の雪のさえ〳〵てくもるも知らぬ山のはの月

とほさかる波も音せすさよふけてこほりをわたるしかの山風

雜

から衣袖しくうらのかちまくら枕の波に千とりをそ聞

たひの月清見か浦にやとからん浪の關守うちもねなゝん

都たにさそなさひしき松のかせひとりみ山にたれ忍ふらん

すききつる旅の哀をかす〳〵にいかて都の人にかたらむ

草枕もとより露はをく物をあらぬすちにや月もすむらん

いはし水きよき心をみねの月てらさはうれしわかのうら風

同月賀茂上社三十首御會

春

賀茂山のふもとのしはの春かせに御手洗河の氷とくらし

二見かた春のしほやのよはの月煙いとへはかすむ空かな

たてなから三世の佛にたてまつる花かきおるた谷の山人
さとはあれぬしかの櫻の木のもとに昔かたりの春風そふく
いそのかみふるの山への山おろしいくへの春の花さそひきぬ
花ちりぬいし井の水のしゐてなを春をとゝめよしかの山かせ

夏

郭公をのか五月を松のかせふくかときけはむらさめのこゑ
時鳥まつ夜なからのうたゝねに夢ともわかぬ明かたの聲
なかむれは槇の木のまに月さえてみ山はまたき秋かせそ吹
夏ふかみ月まつよはの山のはに光をならす空のいな妻
夏ふかみ木たかき松の夕すゝみ梢にこもるあきの一聲
夏と秋と行かふ夜はの浪の音のかたへすゝしきかもの河風

秋

心すむためし成けり千早振かもの河原のあきの夕くれ
羽にかくるとこ夜の雲やくる鴈の行の月のくまゝ成らん
新古 野原より露のゆかりをたつね來て我衣手に秋かせそふく
すゝむしのこゑ枚[illegible]のあきちふによすからやとる秋の月かな
秋かせも身にさむしとや虫くらゝ夜ことに聲のからむらん
今こんとたのめし庭に露さえし有明方の長月の月

冬

吹さよふ木の葉にいろや殘るらん神月くれにし杜の秋かせ
紅葉にも今はあらしの日数へてみ山あらはに冬は來にけり

おもくふる雪の嶺の積くへに[illegible]の鳥にかすはしれゆく
晩の雪に[illegible]分かたく成ぬ山もとしてとふ人を待しなけれと
きゝのはゝみ山もとやに雪積のこはれるにさへ月はすみけり
宮こ人とはて月日の移のはに雪のみふかきをのゝ山もと

雑

賀茂山や山風かせはのとかにて神のちかひもたのもしのよや
雪にまたゝくもらすと月はみるすましや賀の木の間もる影
山里はみねの嵐にねさめして思へはそてに[illegible]のつゆ
[illegible]山さかひの嶺のはまに[illegible]松かせよはそ消えかける
山寺のけふもくれぬの鐘の音に[illegible]そふ[illegible]のかたこそ
みたらしや神のちかひを聞[illegible]そなたのみある此世成ける

賀茂下社三十首御會

春

神さ[illegible]の春風にきそはれて千世をこめたるうくひすのこゑ
春のきてかみすあらしはき[illegible]の其[illegible]たいそくあまのかく山
芳野山[illegible]たつぬれみか[illegible]よ[illegible]今年は[illegible]なとふく[illegible]白雲
故郷の[illegible]むかしの[illegible]は[illegible]月にかすまれる[illegible]みけり[illegible]花
春のきてあけはてく山のむらの[illegible]ほらにのこるよこ雲の月
[illegible]あけのしすそのゝ雪に[illegible]な[illegible]てゝ[illegible]にきゝす鳴也

夏

けふよりや山をかすみの立はなれいなはのみねの夏の明ほの

山のはに月そ朧の夏の雨にひとりさやけき郭公かな
有明の月の行衛をなかむらし山のはかこつほとゝきす哉
羽衣のうすきにすゝむ夏の夜は月影よりそ秋はおほゆる
一こゑの名殘はさても有明の難面みゆるほとゝきすかな
わきも子かやとのさゆりの露さむみかせよりさきの秋の夕暮

秋

月影もまたこん比をたのむなりいなはの山の秋の初かせ
大方の秋とはしらてなかむともしるくもあるへき袖の露哉
天の川雲のしからみ浪こえ　露所せき秋のそてかな
里からの秋とはとになかむとも宮もわらやも同し夕くれ
いとゝしく袖ほしかたき故郷に露をきそふるあきの村雨
誰ね覺とふ共わかぬかせの音も秋はならひの床の白露

冬

山かつの冬くるからにたきすさふしは／＼くもる初時雨かな
白露も時雨もいたく故郷は軒の木末もこさまさりけり
立田山ふゆのあらしは雲なれや木の葉の雨の五月雨のころ
きのふかもいなはもそよの秋の風み山の松の雪をふくなり
さ莚に衣かたしき月をのみまつの木の間そ冬もかはらぬ
うきねもる鴨のつはさにをける霜かさぬるからにさゆる毛衣

雜

淡路かた波まの月を吹しほれうらこくふれのあとの鹽かせ
から衣きつゝ馴にしあとふりてけふそ三河のぬまの八はし
村雨の音になれたるすまひかな月すむよはも庭の松風
山里はみはてぬ夢もしはしこそ住なれぬれはすみうからぬを
世中はあるにまかせてふるさとの袖もまかきも同し白露
あしのやのなたの鹽くむ蜑の袖ぬるれはとてや月もすむらん

同月住吉三十首御會

春

いくとせの初春風になれぬらんみてたに久し住よしの松
さしむすふ春の池水隙もりてこほりのうへにさゝ浪そたつ
つま木こる谷の北かせ吹かへてけふよりはると人にしらるゝ
あはち島浪にをちぬるあかつきのくもらてあくる有明の月
八重かすみけふりもみえす成ぬ也ふしのたかねの夕くれの空
わか身世にふるの山邊のやま櫻うつりにけりな詠せしまに

夏

さゆり葉の葛城山のみねの月曉かけて影そすゝしき
夏のよはを鹿の角のつかのまにやすらふ月のあくる山のは
すかはらやふしみの山の郭公木のまの月にきつゝなくなり
雨そゝくかた山をのゝさなへとき引しめ繩にかはつなく也
夏ふかき鳥羽田のいなは露落てまたほにいてぬ風渡るなへ
ほの／＼とうきたる船のいかならん夕たつ波のあらきうら哉

秋

露しけき袖をたつねて秋の來はよそにはきかし荻の上風

たか秋の物おもふやとに吹なれてわか袖かこつ荻のうはかせ

松かせに夢のうきはしと絶してたひねよふかき秋のよの月

難波かたしほせの波を吹かせにあしのはそよく秋の夕くれ

なかめ行心の色の初もみちいつれの山のしくれそむらん

嶺の雲まきのを山にふくあらしふけぬやとかせうちの里人

冬

秋はつるうらみは今朝そきり〳〵す頼むよもきふ霜さえぬ也

山ひとのとやまの袖や時雨らんたかねかくれに雲のかゝれる

御吉野のさとのね覺の床さえてけさまつしろし雪の下風

さひしさに煙をたにのけふり行外山のしはにかせすさむ也

今朝きたるをのゝ里人ととはん擲のかたの雪はあさしや

たつた山しくれはそむるあとにまた紅葉ふきかへす木枯の風

雜

あらし吹しのやの月に思ふかな都もかくや夜さむなるらん

月ゆへになれしを忍ふ人やあるとやすらひかねてあくる山端

いつのまにむかひの岡の小松原月もるまてに成にけるかな

何事を思ふ人そと人のとはゝなしとやいはんいかゝこたへん

山ふかみとはぬならひをうち忘雲のはたてになかめわひつゝ

我かくて世に住吉のうらかせをたのむこゝろは神のまに〳〵

同二年三月日吉三十首御會

春

春來ぬと聞つるやまのかひなれやかすみてすくる嶺の松かせ

ほの〳〵と春こそ空に來にけらし天のかく山霞たなひく

春はなをあさつま山をいつる日に波立そむるしかのから崎

よしの山春そ白雲彼つゝ花咲けなるみねのいろかな

あかつきのこれもならひの別れそと横雲みえてかへる鴈かね

をしなへて花と雲とをさそひけりなからの山のみねの春かせ

夏

かた岡のもりの木陰に立ぬれてまつともしらぬほとゝきす哉

玉かしはたま〳〵はるゝ五月雨の雲まの月の影をしそおもふ

ほの〳〵と有明の月をまち出て山郭公ひとりなくなり

すかはらやふしみの里に來鳴なりわか世やへつる山郭公

夏の日のもりくるからに涼しきは山たのはらの杉の下かけ

六月の一むらすくるよひの雨におほえて月のたけにける哉

秋

しかの浦に釣するふねの蜑の袖今朝吹かへすうらの秋かせ

大かたのならひかさとのそての露霜ふか草のあきの夕くれ

物おもふたれになれたるあきかせのたゝ大方の袖にふくらん

忘なん中〳〵荻のうはかせと思ひすつれと秋のゆふくれ

足曳の山たもる庵のとまをあらみ木の下露や袖にもるらん

なかむれは涙しくれとふる里におもひもいれし秋のよの月

冬

冬にいまはなるみの浦のうつせ貝うつれはかはるなみの音哉

新古 ふか緑あらそひかねていかならんまなく時雨のふるの神杉

同 冬の夜の長きをゝくる袖ぬれぬあかつき方の四方のあらしに

なかむれはかり田の雪にゐる鴈の友呼こゑのさむき明ほの

冬ふかき草のはらなる霜の上にいとゝさひ行かせのをと哉

冬きても空たのめなる緑哉いつら常磐のもりの木枯

雑

神のちかひかはらぬ色を頼かなおなしみとりのからさきの松

よをいとふ吉野のおくの柴の庵にあかすも咲る山櫻哉

すまの關かよふ千とりもうち侘ぬいたくなふけそ有明の月

新拾 さらぬたに宮古戀しき東路になかむる月のにしへゆくらん

いにしへの人の心にゐしせきはいつれの世より跡絶にけん

續千 みすしらぬむかしの人の戀しきは此世をなけくあまり成けり

承元二年二月内宮三十首御歌

春

春かせのなひくにつけて吉野山嶺の小松そ色まさり行

しつか庵の中かきかこふ梅かえのゆく手の袖に匂ふ春風

みよし野の霞つれなき山のはをわけてもいつる春のよの月

歸鴈いやとをさかる雲かくれなきてそこゆる明ほのゝ山

歸かりとこよの雲におもひいてよ吉野の花の明ほのゝ空

ひらの山みねの櫻はちりぬらん花にこき行しかのうらふね

夏

うたゝねの夢や昔にのこるらん花たちはなの明ほのゝ空

郭公よはのたひねの曙に山とふ聲の雲に落くる

うき世をやしのふの山の時鳥おもひかねつゝこゑきこゆらん

新古 時鳥雲井のよそに過ぬ也はれぬおもひの五月雨の比

きえねたゝもゆるほたるの下の思ひさりとて人もかけし哀を

まつしけきむかひの岡の夕すゝみ秋よりさきにかせゑなれ行

秋

夕露のおくか荻はらこゝろしてふきなかへしそ秋の初かせ

わすれにしよゝのおもひの袖の露に色ふきそふる秋風そうき

續古 足引の山の道芝ふみわけてまた間なれぬあらしをそ聞

同 おほえすよいつれのあきの夕より露をく物と袖の成けん

みよしのゝ岩のかけちをならしても猶うきものは秋の夕くれ

宿とはん方もいつくと白雲のたな引わたる山のかけはし

冬

しくれつゝみ山色つく山おろしに涙あらそひちる木のは哉

山里は夜まさに長き窓の前ふかき木葉を吹あらし哉

あやしくも夜のまの風のさえ〳〵て今朝雪しろし庭の淺茅生

冬くれは身にしむかせに夢さめて獨ぬるよは床やさひしき

かさゝきのさはねに霜をき寒き夜の有明の月は影そこほれる

嶺の雪みきはの氷あともなしとはれぬ冬のうちの川風

雑

（新古）なかめはや神路の山に雲消て夕の空をいてん月かけ
けふまては心のうちに嘆く世をいかてしろ夜の月そあやしき（ヘイ）
よそにては恨むましともみえしよを袖しほれつゝ嘆きこし哉
世中を誠にいとふ人やあるとこの夕くれの雲にとはゝや
大空にちきる思ひのとしも經ぬ月日もうけよ行末の空
神路山あふく心のふかさをもいはておもへは色にみゆらん

同外宮三十首御會

春

（續拾）白妙の袖にそまかふ都人わかなつむ野のはるのあは雪
百千鳥なけとも雪はふるさとの吉野の山の明ほのゝ空
にほの海やみきはの氷こきわけて霞にまかふ春の舟人
大空はそこともみえす霞つゝかたへ（行かたイ）はしらぬ晨明の月
なかめやるとを山松の木のまより霞にみえて歸る鴈かね
吉野山たかねの雲ははれぬらん故郷さえぬ雪つもる比

夏

（新古）いにしへをこふる夕の軒はなる立花すくるかせそかなしき
山里はみねのあま雲と絶して夕涼しきまきのした露
五月闇はれせぬみねの天雲になさはや袖のほすまなき比
秋ちかくみたるゝ澤のほたるかもいなつますくる露の草村
六月や一むらすくる夕たちにしはしすゝしき森の下露
露はらひ夏野にそよく小男鹿のなかぬ計の夕暮の空

秋

秋の露いかにをきける名殘とて今朝色ふかし庭の村はき
（續千）朝露の岡のかや原山かせにみたれてものは秋そかなしき
かせ吹は玉とみえつゝ朝露の萩のうへ葉そしつ心なき
末たはむ庭の小はきの朝しめり物おもふかりや鳴て過つる
誰こよひひなのなかちをこきはなれ大和島根の月をみるらん
袖にふく夕の風のふかきいろをわすれてすきんみ山路の秋

冬

いこま山雲のいにしへしらねともはれぬ時雨に忍ひ佗つゝ
網代もるうちの里人うしと世をしらすなからや袖ぬらすらん
山里のかりたの末のあさほらけしもうちはらひたつそ鳴なる
冬の夜のこほれる雪をふくかせに月さへさむく成まさる之
（新拾）かさしおる袖もや今朝は氷るらん三輪の檜原の雪の明ほの
花をまつ吉野の松の雪のいろにかねてそ春の面影はたつ

雑

かくれなくてらせはうれし神風やあふく心のふかきおくをも
故郷になれし夕へをおもひ出て山吹をくるあきの松かせ
波にしく袖に跡ふめはまちとり明なは月の影もとまらし
（新千）なかむれはそこはかとなく袖ぬれぬむなしき空の四方の雲に

山里のよるのあらしに夢さめておもふ心を入はしらなん
新古 神風やとよみてくらになひくしてかけてあふくといふも畏し

承元二年十一月最勝四天王院御障子

春日野
わかなつむ春日の原の雪まよりそれかとにほへ野邊の梅かえ
吉野山
みよしのゝたかねの櫻ちりにけりあらしも白き春の明ほの
三輪山
三輪の山杉のこかくれゆく月にすゝしく名のる郭公かな
龍田山
木葉ちる秋も立田の山をろしよなきてもおしめさをしかの聲
泊瀬山
はつせ山よのうきものはすみぬへし杉の窓ふく雪の下風
難波浦
難波江やあしの葉しろくあくるよの霞のおきにかりもなく也
住吉濱
住吉のうらこく船のたえ／＼に霞すとてもあとはみえしを
蘆屋里
ほたる飛あしやのうらのあまのたく一夜もはれぬ五月雨の空
布引瀧
布引のたきのしら糸うちはへてたれ山かせにかけてほすらん
生田杜
大方の秋の色たにかなしきにいくたのもりに露そうつろふ
若浦
わかのうらのあしま飛わけゆくたつの聲聞かたに月そ住ける
吹上濱
かちをたえ夢路もたえぬ沖つかせ吹あけの浪の音のあらさよ
交野
やとかさん人もかたのゝさゝのはに三山もさやと霰ふる也
水無瀬川
水無瀬山木の葉あらはになるまゝに尾上の鐘の聲そちかつく
須磨浦
すまのあまのしほたれ衣うちはへてきてはなとみぬ波の月影
明石浦
袖ぬらしいく夜あかしの浦風におもふかたより月も出にけり
飾磨市
はりまなるしかまの市にたつ民よ世にたつとても物や思はぬ
松浦山
まつらかた浪にちかつく冬のよの月なへたてそ八重の鹽かせ
因幡山
天の戸やあけはいなはの峯にしもまつ夜なふけそ秋のよの月
高砂

高砂や尾上の鐘の長夜もあけぬとひとり鹿そ鳴なる

野中清水

古しへの野中の清水たつぬれはさゝわくる袖に露そこほるゝ

海橋立

久かたのあまの橋たて霞つゝ雲井をわたるかりそ鳴なる

宇治川

新古 橋姫のかたしき衣さむしろに待夜むなしき宇治の明ほの

大井川

大井河瀬のかよひち立かへり跡あるかせに木のはちりつゝ

鳥羽

續千 雲井飛かりのつはさに月さえて鳥羽たの里に衣うつ也

伏見里

をしねほす伏見のくろにゐるかりの遠さかりぬる明ほのゝ聲

泉河

泉川かは波しろくふくかせに夕涼しきかせ山のまつ

小鹽山

をしほ山こ松か原の明ほのに峯をへたてゝたつ霞かな

會坂山

あふ坂やせきの杉むらかすむめりゆくもかへるも雲の道とて

志賀浦

しかのあまの袖ふく嵐うらふけぬかへれやみきは氷もそする

新古 すゝか河ふかき木の葉に日數へて山田の原の時雨をそ聞

鈴鹿山

二見浦

二見かた月をもみかけいせの海のきよき渚の春の名殘に

大淀浦

おほよとのうらかせかすむ曙に雲ゐをかりの音つれて行

鳴海浦

よる波も哀なるみの磯さへかさねてそてにさゆるころ哉

濱名橋

頼とてねになきかへるこしの雁濱名の橋の秋霧の空

宇津山

日くるれは逢人もなしうつの山うつゝもつらし夢もみえぬに

佐良之那里

あちきなくなくさめかねつ更科やかゝらぬ山も月はすむらん

清見關

きよみかた月に出ぬる友ふねのこき行波のあくる程なき

富士山

ふしの山おなし雪けの雲間よりすそ野を分て夕立そする

武藏野

むさしのやくれはいつくに宿からん霞もみちも末をしられは

白川關

雪にしく袖に夢路もたえぬへしまた白河の關のあらしに

阿武隈川

かせはやきあふくま川のさ夜千鳥涙なそへそ袖の氷に

安達原

人とはぬあたちのまゆみたかひけはすへさへよるの錦成らん

宮城野

宮木のやあかつきさむく吹かせに鳴音もよはき萩かな

安積沼

さゝわけしあさかの沼の花かつみかつみる夢のあくる程なき

鹽竈浦

しほかまや春のもしほのうき枕おほろ月夜に浦かせそふく

建暦二年十二月廿首御會五人百首中

春

みよしのゝ宮のうくひす春かけてなけとも雪は故郷のそら

いにしへの人さへつらし歸かりなと明ほのと契りをきけん

あさみとりのはらの霞ほの〳〵と遠方人のそてそきえゆく

あふみたゝしかの花そのさと荒て鶯ひとり春そ忘ぬ

なれ〳〵て雲井の花をみし春の木のまもりこし月そ忘ぬ

秋

旅人の袖うちはらふあきかせにしほれてしかの聲そきこゆる

こそよりも秋のね覺そなれにけるつもれる年の驗なるらん

なみたかもあやしく秋の曇かなうらむるからの月やみるらん

中〳〵におもひいてゝそ袖はぬるなれし雲井の秋のよの月

年ふれは秋こそいたくかなしけれ露にかはれる色はみえねと

白妙の袖にいくよかなれぬらん過にしかたの秋のよの月

濱かせにいまや衣をうつらなく眞野の入江の秋の夕くれ

長月や影ほのかなる有明に衣うつ也やかのへのさと

しくれ行庭の木の葉の色よりもふかきは秋の思成ける

窓ふかき秋の木のはを吹たてゝ又時雨ゆく山おろしのかせ

述懷

人心うらみわひぬる袖のうへを哀とやおもふ山のはの月

續後 いかにせん三十あまりの初霜をうちはらふ程に成にける哉

人もおし人もうらめしあちきなく世をおもふ故に物思ふ身は

うき世いとふ思ひは年そつもりぬるふしのけふりの夕暮の空

かへしつゝそむかん世まて忘るなよあまてるかけの有明の月

正治弐年七月北面御歌合

松契多年

長世の友とやちきる春日野のまた二葉なるまつの緑を

水邊月

續古 いはし水すむ月影の光にそむかしのそてをみる心ちする

初見紅葉

見わたせはけふ白露のうはそめに色つきにけり衣手のもり

同七月十八日歌合

關路月

きよみかた關もる波に夢さめて都にすみし月をみる哉

故郷虫

あれにける高津の宮をきてみれはまかきの虫やあるし成らん

門田稻花

山さとのかとたのいなはかせこえて一色ならぬ浪そたちける

同八月一日新宮歌合

社頭祝

神まつるゆふしてかくる榊葉のさかへやまさん宮の玉かき

池上月

ひろ澤の池にやとれる月影や昔をうつす鏡なるらん

野徑虫

宮木のゝこはきか枝に露ふれて虫のねむすふ秋の夕風

同九月御歌合

神祇

日影にも昔わすれす神かせや御裳濯川のさゝ浪の聲

若草

春きてもつもりし雪は消やらてむら／＼あをしのへの若草

落花

御芳野の（にイ）春の嵐やわたるらん道もさりあへす花のしら雪

菖蒲

夕かせははなたち花にかほりきて軒はのあやめ露さたまらす

時鳥

郭公いつちいく田のもりならん聲の名殘を雲に殘して

浦月

秋の月浪路もとをくかけさえて心さへにもすまのうらかせ

山嵐

うすもみちなを色まされ三室山あらしにつたふ秋の時雨に

曉雪

なかむれはくもりもやらす風さえて雪まの空にあり明の月

水鳥

池さゆるみきはのつらゝさ夜更てかきねのをしも遠さかる也

庭松

年は今あけぬとみれは我宿の緑の松に春かせそふく

同九月盡日歌合當座

月契多秋

千とせまておもかはりすな秋の月老せぬ門に影をとゝめて

暮見紅葉

暮にけり秋の日影もあらしやま紅葉を分て入逢のかね

曉更聞鹿

しのゝめや吹さたまらぬ秋かせに尾上のしかの聲まよふ也

同十月一日歌合當座

初冬嵐

山河や岩まの水のいはねともあらしにしるし冬のはつそら

暮漁舟

あはれなりふたみの浦のくれかたにはるかに遠き蜒の釣ふね

枯野朝

思ふよりうらかれにけりなら柴やかりはのをのゝ明ほのゝ空

同日歌合當座

社頭霜

千早振かた岡山は霜さえて玉かきしろくゆふかけてけり

東路月

すきゝてもしはしやすらへ秋の空清見か關の月をなかめて

同十一月十一日新宮歌合當座

社頭夕風

具親 ちはやふるあけの玉かきさひて榊葉とになひく夕風 持

海邊霞

前座主 心なき人もあらしや難波かた霞に曇るはるの浪路に 勝

古寺郭公

家隆 名にしおはゝしはしやすらへ時鳥立はなてらのなつの夕くれ 負

杜間月

寂蓮 秋かせはうはゝにさむしかしはきのもりのわたりに有明の月 持

山時雨

定家 立田山木する々のもみち秋くれてつれなき松になを時雨也

同十月〔十一月イ〕七日新宮歌合

紅葉殘枯

つれなくもあらしに殘るこすゑ哉下葉の色のゆくゑなきまて

寒夜埋火

音きゆるよはのあらしも埋火のあたりは冬もなき心地して

海濱重夜

霜さゆる月をなかめてかや莚しきつのうらにあまた旅ねぬ

同十一月八日影供歌合

暮山雪

冬籠り春にしられぬはなれや吉野の奥の雪の夕暮

古寺月

はつせ山あらしにかねの音さえて月よりしらむ有明のそら

朝遠望

駒なめてうちいての濱をみわたせは朝日にさはくしかの浦波

同十一月廿九日御幸住吉社三首(御熊野詣之次)

社頭祝

はる〳〵とおもふもとをし住吉やかねての松の千代の行末

海邊雪

磯とをく浪ふきたつる鹽かせは雪にそつらき住吉の浦

羇中月

かねの音も聞えぬたひの山路には明行そらを月にしる哉

同十二月歌合

曉尋千鳥

さよ千とりゆくゑをとへはすまの浦關もりさます曉のこゑ

山家如春

花やいそく日數やとしを惜むらん梢春たつふゆの山さと

海邊歳暮

冬の磯に春は來にけり年波をたつとやいはん歸るとやいはん

建仁元年正月十八日影供御歌合

遠嶋朝霞

春霞たてるやいつこ朝日かけさし行ふねをまつかうら嶋

隣家夜梅

梅かゝのかすめる月ににほふかなよその垣ねに春風そふく

山家殘雪

まれにたに人もとひこぬ杉の庵の軒はに殘る春の淡雪

同三月十八日影供御歌合

梅香留袖

梅かゝをなかめし袖にとゝめをきてむなしき枝に風そ殘れる

翠柳誰家

ぬししらぬそともの柳これそこのなひくにつけて春過るもの

水邊躑躅

山川の苔のいはねの岩つゝし春にもあへぬはなの色かな

故郷山吹

故郷の春やむかしの春の月われもとの身とさける山ふき

雨中藤花

たそかれのたつ〳〵しさに藤のはなおりまよふ空に春雨の空

山家暮春

くれぬともかすみはのこれ柴の戸のしはしも春の忘館に

同三月晝新宮撰歌合

霞隔遠樹

うらの松色やまさると春みれは霞そたてるしかのから崎

羇中見花

かせ吹は花は波とそこえまかふわけこしたひも末の松山

雨後郭公

松下納涼

山家秋月

柴の戸やさしもさひしきみ山への月吹風にさをしかのこゑ

湖上曉霧

志賀のうらやにほてる沖は霧籠て秋もおほろの有明の月

嵐吹寒草
草のはら露のやとりを吹からにあらしにかはる道芝の霜
雪似白雲
雪（風）やこれはらふ高まの山かせにつれなき雲の峯に殘れる
寄神祇祝
神かせや八重の榊葉かさねてもみもすそ河の末そはるけき
遇不逢戀

同四月廿六日御會　鳥羽殿初度
池上松風
松かせに打出る波の音はしてこほらぬ池の月そ殘れる
同四月晦日影供歌合
曉山郭公
時鳥こゑはつかの山のはの有明の月にしはしやすらへ
海邊夏月
明石かたねぬにあけぬと詠れは浦よりつたふ空の月影
忍戀
一すちに色に出しとおもふには忍ふ心にかつものそなき
同日當座御會
竹風夜涼
夏も猶かはらぬ月をしるへにて秋かせかよふ庭のくれ竹

山家五月雨
はれゆかん程をも今は松のかとさしもつれなき五月雨の空
同五月日城南寺歌合
社頭祝言
つたへる秋の山邊のしめの内にいのろかひあるあめの下哉
雨中時鳥
雲のほるをのか五月のむら雨に聲をあらそふ郭公かな
野亭水涼
せくし水ふかき夏のゝ草の庵にもりきて月の影そとめける
同七月廿七日當座御會　和歌所
暮山遠鴈
はつかりのとこよの秋をすみすてゝ山路はるかに夕くれの聲
同八月三日影供御歌合　和歌所初度
初秋曉露
昨日よてかゝる露やは袖にをく秋來にけりなあかつきの風
關路秋風
夏たにも月は秋なるきよみかた浪ふく風のこのころの空
旅月聞鹿
夜をかされ月に朝たつたひ衣きつゝなれゆくさをしかのこゑ
故里虫
とふ鳥のあすかの宮の蛬月やむかしの秋に鳴なり

初戀

ならはすゝ袂なれはとてをくか露かたしく袖のうちしめる迄

久戀

今こんといひしはかりを賴にていく長月をすくし來ぬらん

同月十五夜撰歌合

月多秋友

ゆく末の千とせのあきはいく廻りなれても夜はの月を詠ん

月前松風

庭の松の木の間もりくる月影に心つくしの秋かせそ吹

月前擣衣

あさちふの月吹かせに秋たけて故鄕人はころもうつなり

海邊秋月

湖上月明

から崎やにほの水うみの水の面にてる月浪を秋かせそ吹

深山曉月

すみなれてたれ我やとゝなかむらん吉野の奧に晨明の月

野月露冷

月すめは露を霜かと宮城のゝ小萩か原はなを秋の風

田家見月

やとちかき山田の庵のいなむしろ誰しきなれて月をみるらん

河水似氷

同夜當座御會　和歌九品

月前鴈

かりのくる嶺の秋きり空はれて羽しろたへにすめる月影

月前旅

旅の空秋のなかはをかそふれはこたへかほにも月そさやけき

月前戀

たえすとふ月いくたひか詠してこぬ夜數多となけき侘らん

同十二月影供歌合　隱名

寒夜冬月

ふかき夜の霜をちさとに詠れは月に殘れるむさしのゝ秋

山家暮嵐

庭の松にあらし吹こぬ夕たに深山のおくはさそなわ（さイ）ひしき

初戀

大方の露なきころの袖のうへにあやしく月のぬるゝかほなる

同十二月廿八日石淸水社歌合

社頭松

（新續古）八幡山あとたれそめし注連の内になを萬代と松かせそ吹

月前雪

山かせの木のまの雪を吹からに心つくしのふゆのよの月

旅宿風
草枕むすはぬ夢に夜比へてたゝ山かせの松にふく聲
同二年正月十三日御會　和歌所
初春松
萬代のはしめの春としらせけり今朝初風の松にふくなり
春山月
霞たつ木のめも春の山のはを光のとかにいつる夜の月
野邊霞
梅かゝは霞の袖につゝめともかやはかくるゝ野へのゆふかせ
同二月十日影供御歌合
海邊霞
うす煙もとよりかすむ鹽竈のうらなれにける春の空哉
關路雪
新古 鶯のなけともいまた降雪に杉の葉白き逢坂の山
忍戀
浪にぬるゝいせおのあまのすて衣忍ぬたにもしほれわふ也
同三月廿三日三體和歌高體(春夏)疲體(秋冬)艶體(戀旅)
春
鴈かへるはつせの花もいかなれや月はいつくもおなし春の夜
夏　御本此上ニ端作ニ八鴈カヘルト同作ノトアリ
なつの夜の夢路すゝしき秋の風さむる枕にかほる立花
秋
しほれこし袂ほすまも長月の有明の月に秋かせそ吹
冬
おもひつゝあけ行夜はの冬の月やとるかせはき袖の氷に
戀
新千 いかにせん猶こりすまのうら風にくゆる煙のむすほゝれつゝ
旅
たひ衣きつゝなれ行月やあらぬ春は都と霞むよの空
同三月同日當座御會
暮春
ことしさへしかのやよひの花盛とはれてくれぬ春の故郷
同五月影供御歌合
曉聞時鳥
今こんとたのめやをきし時鳥月そ立出るあり明の聲
松風暮涼
夏山のしかに告こせまつのかせをのへに今は秋のゆふくれ
遇不逢戀
わすらるゝ身をしる袖の村雨につれなく山の月は出けり
同六月水無瀨釣殿御歌合
河上夏月
筏士のうきね秋なる夏の月淸瀧川にかけなかるなり

海邊見螢
津の國のあしやの里にとふ螢たかすむかたのあまのいさり火
山家松風
柴の戸をあさあけの夏の衣手に秋をともなふ松の一聲
初戀
大方の夕へはさそのなかめより色つきそむる袖の一しほ
忍戀
嘆きあまり物や思ふとわかとへはまつしる袖のぬれて答ふる
久戀
新古 おもひつゝへにける年のかひやなきたゝあらましの夕暮の空
同八月十五夜
月前虫
故郷のよもきか月にむすふ露さひしとかこつきり〳〵す哉
月前鹿
いつとても月に袂はぬれこしをわきてこよひの小男鹿のこゑ
月前風
なかはたけは今夜の月を吹かへせさそなむかしの秋の山風
同八月廿日影供歌合
江月聞鴈
秋を經て月そすみ江の松かせに鴈かれさむし霜になる空
夜風似雨
松かせはみやまの月に廻なりね覺の秋の袖に時雨て
依忍增戀
せきかへす涙の川にうきねしてみる夜の夢の定かにもあらぬ
同九月廿九日戀十五首撰歌合
春戀
月殘る彌生の山の霞む夜をよゝしとつけよまたすしもおらす
夏戀
さてもいかにいはかきぬまの菖蒲草あやめもしらぬ袖の玉水
秋戀
よしやさはたのめぬ宿の庭におふるまつとなつけそ秋の初風
冬戀
うつり行まかきの菊もおり〳〵はなれこし比の秋をこふらし
曉戀
白露のおきて侘しき別をもあふにそかこつ有明の月
暮戀
新續古 いかにせんこぬ夜あまたの袖の露月をのみ待夕くれの空
霧中戀
君もゝし詠やすらんたひ衣あさたつ月を空にまかへて
山家戀
身をしれは思ひもよらて杉の庵に猶さりともと松風の吹
旅泊戀

おもふ人をうきねの夢にみなせ川さむる袂にのこる面かけ

關路戀

戀をのみすまの關やのいたひさしさして袖共波はわかしを

故里戀

新古 里はあれぬ尾上の宮のをのつからまちこし夜ゐも昔成けり

海邊戀

いかにせん思ひありその忘貝かひもなきさに波よするそて

河邊戀

我爲とさてや山川瀨になひく玉もかりそめにかはく世もなし

寄雨戀

おもふ事そなたの雲となけれ共いこまの山の雨の夕くれ

寄風戀

わくらはにとひこし比におもなれてさそあらましの庭の松風

同九月十三夜御會當座

月前秋風

夜はの月いつるとやまの嶺におふる松をもはらへ秋ふかき風

水路秋月

にほの海やひとりそ出る秋のよの月を友とはしかの舟人

曉月鹿聲

さをしかのなく音にあらぬ露そをく空行月は嶺近き程

同夜當座御會

折句十三夜

志賀のうらやうらはの月のさゆる夜に昔こふらし山の秋風

隱題水無瀨河

浪をみなせかはそ月のしはしすむ淸瀧川のはやきなかれは

同三年正月十五日御會　高陽院殿

松有春色

庭の松をのか緣もたよりあれは今かいく世の春をむかへん

同六月十六日影供歌合

草野秋近

のへの庵の軒はの荻にむすひをく露をかことに夏更にけり

水路夏月

いかたしよいく夜か袖にみなれさほ淸瀧川の夏のよの月

雨後聞蟬

せみの羽にもとをく露に雨過てぬるゝかほなる夕くれのこゑ

同六月十六日影供の次夏月二首

秋の月かけをや夏にかさゝきの雲のかけはし程はなけれと

ほともなく出ていなはの峯におふるまつとしつれは有明の月

同七月五日八幡宮撰歌合

初秋風

わきも子か袖吹かへす秋かせのまたうらなれぬ涙とふらむ

野徑月

さひしさは秋のさか野のゝへの露月に幾とふ千代のふる道

故郷雪　海邊鶴　霞中春（已上三首御製不被入歟。）

山家松

都人とはぬ程をも思ひしれみしよりのちの庭の松風

同八月十五夜和歌所當座五首

月　アキノツキ五字置首上一字

あふみのやなからの山の秋風に雲こそなけれからさきの月

北へさりし鴈も今夜の月ゆへや秋は都と契をきけん

のとかならんまてとや人の見すけんあれたる庭の秋のよの月

津の國の難波わたりは月の秋忘ねいまは春の明ほの

きてとはん人のあはれとおもふまてすみかし秋の山里の月

同十一月釋阿九十賀御會

ちゝとせに近つくつえのよゝの跡にこえてもみゆる老の坂哉

同時屏風御歌

霞

霞しく春の夕くれなふむれは山さしのほる朧なる月

若草

下もゆるかすかの野への草のうへにつれなしとても雪の村消

花

新古 櫻さくとを山鳥のしたり尾のなかなかし日もあかぬ色かな

郭公

ほのかにもいまや聞らん郭公いやまさきかねのさと人

五月雨

水まさるみつのわたりの五月雨につなてほとふるなほす舟哉

納涼

清水せくかた山きしのこ松かけこゝをしはしてや庵むすはん

秋野

旅ねするのはら秋かせ身にしめて面影さらぬ故郷の月

月

秋のしも白きをみれはかさゝきのわたせる橋に月のさえけり

紅葉

山のせみなきて秋こそふけにけれ木々の梢の色まさりゆく

千鳥

たひねするあまのとまやのとまをあらみ寒風に千鳥さへなく

雪

山ふかきしのやの雪のあさけれは都はなをやみそれふるらん

氷

大井川氷をしのくいかたしのあとよりこそは舟のかよひち

同月日六首　和歌所

故郷春曙

三吉野や花はかはらす雪とのみ故郷匂ふあけほのゝ空

霧中夏雲

玉もしき一夜ふしみんあしのやのなたのしほちにほたる飛也

野徑秋風

いにしへの千代の古道としへても猶あとありやさかの山かせ

山家冬雪

いつまてか跡をも雪におしみこし春にまかする柴の庵哉

海邊月明

清みかたふしの煙やきえぬらん月影みかくみほのうら波

寄暮雜歌

なかめのみしつのをたまき繰かへし昔をいまの夕くれの山

元久元年七月十六日御會(宇治御幸)

うちの山雲ふきはらふ秋かせにみやこのたつみ月もすみけり

水月

むかしよりたえぬ流にすむ月をみかきてわたるうちの川風

野露

宮城のゝ草葉に露やをもるらん木の下はらふ秋のはつかせ

夜戀

足引の山嵐吹て寒き夜のなかきをひとり戀つゝそふる

秋旅

都いてしまた夏衣うすき程しはし吹そふふしの秋風

同八月十五夜御會　五辻殿初度

松間月

月のすむひらのゝ松に吹かせのちかきを宿のかひにする哉

野邊月

むさしのや明行月の山のはゝわけこしかたの荻のうは風

田家月

鹿そ鳴小田のかりいほの笘をあらみ名計月はもりあかせとも

羇旅月

都おもふ涙に月をやとしをきてあさたつのへのすゑの秋かせ

名所月

月は今夜うらはあかしとしらす共しるくもあるへき浪の上哉

同夜當座御會

曉月

あすよりは秋の半も杉の門しはしなあけそ在明の月かけ

同十月石清水御歌合當座

初冬

秋の露わすれぬ袖も有物をいつしかかはる野への霜哉

時雨

まきのやにいとはし時雨もるとてももれはそやとる床の月影

寒野

一とせも今はすゑのゝむら薄霜ふく夜半の風のさむけさ

北野上ノ歌合之内御製在上ノ字霖

同十月日當座歌合

時雨

月そ今はもるやま道の夕しくれのこる下葉もあらし吹也

忍戀

（新古）わかこひはまきの下葉にもる時雨ぬるとも袖の色にいてめや

羇旅

淋しさをいつよりなれてなかむらんまたみぬ山の秋の夕くれ

同十一月十三日春日社御歌合

落葉

木の葉ちる山のすその丶夕くれを詠てけりな袖はぬれつ丶

曉月

足引の山の木からし吹からにくもるときなき有明の月

松風

あはれまむ數には入よ春日山それをそ今は松にふくかせ

同二年三月廿六日

新古今竟宴和歌

磯のかみふる世をいまにならへこし昔のあとを又たつねぬる

同七月十八日北野御歌合（新雨當日出題攝政判有序）

初秋曉

秋になるあかつきの鐘うちつけになる丶か袖の露もしくれも

暮山雨

足引の山邊もよそに曇來ぬ秋のめくみのゆふくれの雨

田家風

空にこふかとたの雨の日數經て雲吹かへすあきの夕かせ

建永元年正月十一日御會　高陽院

庭花春久

春とめる庭のあるしは八雲たついつもつきせぬ花のかそする

同七月廿五日御歌合　卿相侍從歌合

朝草花

横雲のたな引山の岡邊なるす丶きもしろく吹あらし哉

海邊月

（新千）もろこしの山人いまはおしむらんまつらか沖のあけかたの月

羇中暮

をくるへき月たに山をまたてぬに夕のあらし袖に馴れぬ

同日當座御歌合

曉聞鹿

はつかりの山とひこゆるありあけに風吹すさむ荻のうへかな

田家鹿

夜もすからいほもるこゑのと絶せて外山にかへる鹿そ鳴なる

深山戀

（新續古）跡たえてふかき涙の色まてもとはれぬ山の秋そかなしき

同月中後日當座御歌合

湖邊月

にほの海のもとよりぬる丶袂哉かはりてやとれ秋のよの月

暮山雲

しら雲のたな引山のゆふかせに身をやすてゝんしかそ鳴なる

行路風

忍こし道のへ柳秋もなをあはれむかしのかせはらふらん

同月中當座御歌合

寄風懷舊

わすれぬる今は三とせの冬のあらし時雨し露の袖にまたひぬ

雨中無常

新古 なき人のかたみの雲(レイ)やのほるらん夕の雨に色はみえねと

被忘戀

同 袖の露もあらぬ色にそ消かへるうつれはかはる嘆きせしまに

同八月五日鳥羽院御所初度本度缺

庭上月　當座

庭の松にふるき嵐やかへるらん光をみかくやとの月影

同八月御歌合式御會

述懷三首

なにと又深き思ひのかさぬらんくたるよをのみ嘆くへき身に

なさけありし昔を今になし侘て袖のしつくのしつのをたまき

うしとみしそれより袖はしほれにき扨も月日は過しけるよを

建永二 承元々年正月廿二日御會　和歌所

春松契榊(宸筆御清書)神路山有闕字

我たのむ神路の山の松のかせいくよの春も色はかはらし

同三月七日に同社歌合

山家朝霞

槇の戸や難面あけし名殘とてこれよりつらき朝霞哉

湖邊夕花

けふくれぬあすは麓の雪とみんなからの山は嵐吹なり

社頭述懷

みつ垣やわか世のはしめ契をきしそのとの葉を神やうけけん

同日賀茂之社歌合

海邊歸鴈

難波かたすきこし春に又やあふはかなく歸る鴈そ鳴なる

暮山春雨

御芳野や春雨きをひちるはなをけふもくれぬとさそふ山かせ

社頭夜風

和歌の浦たむくる夜半のかせにみん猶此道に神はなひくや

同二年三月住吉御歌合

寄月祝

行末はなをもつもりのうら風にくもらぬ月の影の長閑さ

寄旅戀

足曳の山わけころもかはく程すま(わすイ)れぬ袖の夜はの面影

寄山雜

(新古)おく山のおどろか下もふみわけて道ある世ぞと人に知せん

同閏四月四日

雨中子規

しつかなる夕の雨の草の庵とゝへ山の鳥のひとこゑ

遇不逢戀

あひみても中〳〵つらきさやの山さやはちきりし嶺の月影

寄述懷雜

青柳の林の下よたつね入ぬ千年の跡のそのゝ故道

同四年八月十一日

雨中草花

雨ふれはいとゝ池水ますかゝみかけさへうつる秋はきのはな

同九月粟田宮御歌合

寄海朝

とまりする一夜のちきりこきわかれをのかさま〳〵出る舟人

寄山暮

水無瀬山入相のかねに年を經て三十あまりの冬そちかつく

寄月戀

中〳〵に見し世ににたる月もうし同し袖には廻來ぬれと

建暦二年二月廿五日

於紫宸殿花下三首

吹かせもおさまれるよのうれしきは花みる時ぞ先おほえける

我ならてみしよの春の人ぞなきわきても匂へ雲の上の花

(新後)九重の花も老木に成にけりなれこし春も昨日と思ふに

同三年七月十七日松尾社歌合無判

初秋風

みとりなる一葉もまつは落ぬらんはゝそのもりの秋の初風

山家暮

山里の夕影草の下露を袖にかけつゝとふ人ぞなき

社頭雜

夕時雨いかにそむとて尋こし色かはるなよ松の尾のみや

建保元年十二月十四日御會　水無瀬殿當座

冬月

わすれめや雲のかよひち立かへり乙女の袖を月にみし哉

みなせ川むすはぬ水につらゝゐて月にぞ冬のそては濡ける

天の戸ををし明かたの冬の月氷はをのかひかり成けり

時しもあれ太山の月に音もせておもひそふかき雪の淺茅生

小忌衣たつ面影そへたて行月はその夜にめくりあへとも

同二年二月御會

春風

おさめけん古きにかへる風ならは花ちるとても猒はさらまし

春雨

大かたの木のめ春雨ふるたひに松さへみれはいろかはりゆく

同八月撰歌合

秋十首

はつを花たか手枕にゆふ霧のまかきもちかくうつら鳴也

しきしまや高圓山のあきかせにくまなきみねをいつる月影

續古 明石かた浦路晴行あさなきに霧にこきいる海士の釣舟

中〳〵に風も音せね夕くれのみやまの秋は心すみけり

木からしのすゝ吹みねの夕時雨そめぬ色しも身にはしみけり

山ふかく秋のあはれを尋いれは猶なかつきの晨明の月

にしの海のかりのこの世の浪の上に何やとるらん秋のよの月

ありきつゝ來つゝもとはんから衣たつたの山のおくの秋かせ

物おもふ秋の夕への露よりや袖にそ月のやとりそめけん

いかにせんまつちの山の女郞花人もとはねは露にしほれつ

同九月三日當座二首

曉山

おもひ入色は木のはにあらはれてふかき山路の有明の月

夜戀

よひ〳〵に思ひやいつるいつみなるしのたのもりの露の木枯

同九月十四日

月契多秋

契あれは秋もかはらし久かたのあまてる月のすまん限りは

同三年六月二日御歌合

春山朝

春のたつ霞の光ほの〳〵と空に明行あまのかく山

夕早苗

さなへとる山田のあせにせく水のにころにもすむ夕月夜哉

行路秋

わけゆけはその色となきみやま木も秋は身にしむ風の音哉

曉時雨

かたしきの衣にさむく時雨つゝ有明の山にかゝる村雲

松經年

かたそきのゆきあひの霜のいくかへり契を結ふ住吉の松

同四年八月廿日五首　御熊野詣路次當座和歌　湯淺

宿暮山花

契けり神のみしめの山さくらさかふをかせの手向とや思ふ

夏山夕

かた山のむらのかやり火霞つゝ春みし色の夕月夜哉

秋山月

おなし秋のたか里にまつ詠むらん高き峯より出る月影

冬山曉

をはつせやみねの木からし夜もすから吹あけ雲の雪の山のは

なにとなく旅ねの袖もぬれぬへし山の南のまつかせの聲 [illegible]

同十月十一日御車嵯峨殿

山家落葉

奥山我身よにふるなかめしてはなに匂ひの峰の紅葉は

同五年四月十四日庚申御會

春夜

をみつから夜ちる色もみるはかり月のころまてみよしのゝ花

夏曉

夏の夜に更行かおりのたゆむより曉こめてあくる山の端

秋朝

たちならす紅葉の山の朝霧にあけはしほると鹿や鳴らん

冬夕

雪つもるときは木はらふ夕暮のあらしもしろくなひく山哉

久戀

としも經ぬわか名もみなと立波にみるめよるてふ浦風もかな

同七年三月八日御會　水無瀨殿

松契春

をのか色も契や春にふかみとり葉かへぬ松の風のまに〳〵

撰歌合 建保二年四月廿一日 家隆卿賜之判進云々。

一番

左　初春

谷風に山のしつくもとけにけりけふより春も立やしぬらん

右　おなし

うちなひき雪まの水も氷とけゆきもたなやま春の山川

左。谷風を待より句ことはのつゝき。まことにとゝこほるところなくめつらしく。こと葉はふるきさまにたけありて。秀逸のすかたかきりなくてみえ侍にや。春のたつとはいひさことふるきいゝてむかしよりよみのこし侍けん。右。またえんにやさしく。おもひわきかたくはみえ侍れとも。左。なを上下の句のおはりも。いますこし匂ひ有てみえ侍れは。しつくにぬるゝ春たちまさるとも申侍へきにや。

二番

左　鶯

うくひすのなく音を春にたくへつゝかへりて花をさそふ春哉

右　落花

をはつせやそとやはわかぬ吹にほふ風のうへ行花の白雲

左。流かせのたよりにたくへてそといへるうたをひきかへて。かへりてはなをさそふ春かな。心詞おもしろく。おもひよりかたく侍へし。右。吹にほふかせのうへ行花のしら雲。まことにたけありて。花の匂ひもまことに遠く思ひやられ侍れは。なそらへて秀逸の持と申侍るへし。

三番

左　霞

芳野川せかはや春のやすらはんおられぬ水の花のうたかた

右　おなし

さほ姫の春のわかれの涙とや露さへかゝるきしの藤浪

　せかはや春のとて。末におられぬ水のうたかた。心ことはめつらしくありかたく侍にや。さほ姫の春のわかれの涙。きしの藤なみにもをきそふらん。心もやさしくすてかたく侍れと。猶歌のたけよしの川せきとめかたく侍へし。

四番

左　暁時鳥

過ぬるかあり明のみねの郭公物おもふとてもいとひやはせん

右　海邊霧

難波かた磯邊の浪の音すみて夕霧よする秋の鹽風

　まつ夏と秋との歌はともによろしきにとりても。あきの歌はまさる事にて侍れと。有明のみねの郭公は。ものおもふとてもなと。心すかた又いかに侍るへしともおほえ侍らす。夏山にとをけるには。なを何となくなへて景氣もすくなく侍けんかし。夕きりよする秋の鹽かせ。又いかにも物にまけかたくみえ侍る。持と申へきにや。

五番

左　月

月影もうき身からとやかこつらん人をはわかぬ袖の涙に

右　萩

故郷のもとあらの小萩いく秋かあるしよそなる花にほふらん

　この番又心詞とり〳〵にいつれをいかにとわきかたく侍り。人をはわかぬと侍。心ふかくいひしりて。まとにありかたくきこえ侍へし。またあるしよそなる花にほふらん。とはをかさり心をもとめたる様（さイ）にて。これひとつのすかたにて侍うへに。こその秋ころ心あくかれ侍しまゝに。ふるき玉のみきりをとをくたつねまいりて侍しかは。花の色露もかはらす思ひいてられ侍れは。をとるとも申かたく侍へし。

六番

左　鴈

はつ鴈のつらきすまゐの夕しもをゝのれなきつゝ涙そ（とイ）ふらん

右　雨後月

久堅（六方イ）の空も涙にかきあへぬ月かけぬらす秋のむら雨

　初かりのつらきすまゐとつゝきたる。すかた詞（ヒイ）まことにたくみにきこえ侍うへに。をのれなきつゝ涙そふらんと。一句にあたの詞なく哀に聞え侍に。月影ぬらす秋の村雨。又めつらしくえんにありかたくみえ侍れは。わきかたく侍へし。

七番

左　山時雨

露時雨もる山かけのうす紅葉下草かけて秋そかれ行

右　菊

なからへてみるはうけれと白菊のはなれかたきは此世成けり

下草かけてかれ行らん。もる山のあきのしくれ。三室の山にも色まさり侍にや。但みるはうけれと白菊のとて。はなれかたきなとを。心詞すかた。きくの露もすてに袖にうつろふて。かきりなくかなしくきこえ侍れは。をしてまさると申侍るなり。

八番

左　海邊時雨

わたつうみの波の花をは染かねて八十嶋遠く雲そしくるゝ

右　雑

さらてたに老は涙もたえぬ身にまたく時雨と物思ふ比

波の花をはそめかねて。やそしまとをくしくるらん雲。心詞たけかきりなく秀逸にこそ侍めれ。また老は涙のたえぬ身にまたく時雨ともの おもふころ。これは愚老か心の中あひかよひて。時雨袖をあらそひ侍れは。尤可爲持也。

九番

左　戀

人はよもかゝる涙の袖はあらし身のならひにそつれなかる覽

右　待戀

うつゝにはたのめぬ人の面影に名のみはふかぬ庭の松かせ

人はよもかゝる涙のとつゝき。身のならひにそつれなかるらん。誠にあはれにもをよひかたく見え侍ほとに。たのめぬ人の面影に名のみはふかぬといへる。心もふかく。なをありかたくみえ侍れは。

十番

左　法文

をしなへてむなしき空のうす緑まよへはふかき四方のむら雲

右　おなし

袖のうへにあたに結ひし白露やうらなる玉のしるへなるらん

左右の法文。いかにも心をよひかたく被註付。ふかきさとりも猶まよひ侍ぬれと。まよへはふかき四方のむら雲も。末句すこしまさると申侍へきにや。大かたはかくえらひつかはれ侍にけ ろ秀逸ともは。みしかき心いよ〳〵をよひかたくて。わきまへ申やられす侍れと。さのみ持とのみ付侍らんも恐思給故に せう〳〵注申旨。さら〳〵不可被用之事也。

皆以異様。其上卒爾之間。撰定僻事多歟。事宜物不過兩三候也。其中法文歌難無指事。若得其意候者。爲出離至要也。

左歌心者

法性之空念來清淨なれとも。妄想の雲おほひぬれは。正因

佛性ありともしらす。このとはりをしらては佛になる事かたし。即一微塵のうちに法界とくくおさまろ。況や卅一字に實相のとわりきはまれり。

右歌心者

或一切諸法悉是佛法といひ。或一色一香無非中道と釋すれは。霜露のあたなるおもひも。色にめて香にふけろも。皆是佛法しかしなから中道理也。しかれは袖のうへの露をみてもこのおもひをなさは。衣のうらの玉たちまちにあらはるへき因緣也。

承應二癸巳仲冬吉日

〔右後鳥羽院御集以圖書寮所藏本校合〕

續群書類從卷第四百廿四

和歌部五十九

順德院御集 一名紫禁和歌草

建暦元年三月五十首

立春

きのふまて結し池の水のおもに氷なからの春風そ吹

子日

ねのひする小松か原に白雪の消あへぬまに春はきにけり

山霞

白雲のかゝるか峯にゆふ月日かすみたつ田の山もおほろに

谷鶯

谷川のうち出るなみの浪まよりまた春なれぬ鶯のこゑ

籬梅

この比はまかきの梅に風さえて春や昔の月そ傾く

若菜

わかなつむ袖もしほれて春そとも野へにしらせよ雪の村消

春雨

春雨はすきぬる跡の夢の中に窓うちすさむ軒の玉水

岸柳

青柳のきしの白波よる春の綠はふかし明ほのゝ空

庭櫻

春とのわすれかたみの庭の花梢も雪の明ほのゝ空

暮春

夕附日名殘もなくて行春のひかりも今は入相のかね

郭公

夏草のしけれる比の時鳥中〳〵過る聲なもらしそ

卯花

夏木立やすらふ程の夕暮に卯花垣をこゆる白なみ

菖蒲
五月雨の雫はいまた軒にしてあやめか末に露そかさなる
瞿麥
夕立の名殘はしるしとこ夏の花に露そふ暮かたの空
鵜川
かゝり火の河波しろくなるまゝにくたす鵜舟も横雲のそら
立秋
今朝はまた梢も夏の色なから草葉の露にあき風そ吹
曉鹿
秋といへは有明の月になく〳〵鹿の聲吹送る峯の松風
夕霧
春かすみ霞し山のふもとにもかはらすみゆる秋の夕暮
草露
夕されは野原の秋の風過て荻の上葉に露そ色つく
野萩
宮城野の色ある袖や小萩原露こそむすへ秋風そ吹
刈萱
秋ふかきあさちか原を尋ぬれは露にみたるゝ野へのかるかや
雲鴈
初鴈の雲ゐのよその一聲はきく人さへに袖そしほるゝ
夜虫
虫の音に夜ふかき鐘の音そへてむなしき夢そ通ふ秋風
羇月
草枕こよひは野邊の月をみんおなし都の秋の夜の空
暮秋
秋そ今は暮行程のたそかれにけふをかきりの入相の鐘
時雨
神無月時雨はあきもみむろ山かはらぬ空に冬は來にけり
落葉
立田山さこそ紅葉はちりつめと木葉な吹そ冬の山風
庭菊
庭のおもの菊の白露今はとてうつらふ比の夕くれの空
橋霜
氷とち下行水もたえ〳〵に霜こそむすへ宇治の橋姫
朝雪
冬ふかくなり行程のしるへにはけさふる雪に山風そ吹
初戀
きのふまてよそに思ひし袖の上の涙の色も今日そかなしき
忍戀
つきもせす思ふ物から忍ふ山たえなん後の峯の白雲
尋戀
尋ても中〳〵つらし袖の露秋なる色を人にまかせて

契戀

たのめをきし契はかりやうきことの忘かたみの思出にせん

待戀

秋の夜はなかきかたみと思ひしにまつには出ぬ有明の月

逢戀

よそにても月日をいかに過しけんあふにもつらき人の心を

恨戀

たのめてもかひやなからんまくす原うらむる露の秋の夕暮

旅戀

いつよりもれ覺さひしき草枕かりにみし夜の人そ戀しき

見戀

中〳〵によそには人をおもふともかつみる袖の色そかなしき

久戀

すかのねの契も今は朽はてし昔かたりの山のはの月

關路

あり明の月も雲ゐに影とめぬかすめる末や白川の關

旅宿

ほの〳〵とかすむ山路のたひ人の分行末は春の松風

野徑

野へはまた霧のまかひに分かねぬいつれかおきの露の曙

眺望

はる〳〵となかむる人も絕〳〵に霞みてみゆるみよしのゝ花

海路

なかむれは春の物とやあかしかた霞のまより有明の月

難波江やあしのわか葉に雪消てこほらぬ浪はたゝ春のかせ

山家

山ふかみさこそあるしはなしとても花ちる比は人のとへかし

閑居

人とはぬ宿にも秋のかなしきはむなしき夢に迯る鹿の音

擣衣

秋の夜の月にさひしき衣うつ礎の聲に夢そみしかき

祝言

君かへん萬代までもしら雲のかさなる山の峯の松風

同比内々歌合　春

氷ゐし岩まの水の解やらて雪ふる里に春は來にけり

みよし野や跡なき雲をふきかねて花にあらそふ春の山かせ

夏

この比は淀のわたりのあやめ草末こす浪にかゝる人もなし

忘るなよ又こんとしも郭公軒のあやめの五月雨の空

秋

久かたの空行雲の絕まより月の都に秋風そふく

み山より松のあらしやかよふらん眞葛か原に露そこほるゝ
冬
露をきし草葉の霜や消かへり庭にしくれの故郷の空
なかめつゝなにを何とか思はましはゝその森の雪の夕くれ
戀
なけきつゝまたしと思へと袖のうへに恨かほなる秋風そ吹
いつまてか人をも身をも恨へきたえぬうき世の忘かたみに
同比當座　秋海
伊勢島やしほ風寒くなるまゝに浪に宿かる秋の夜の月
冬池
池水はこほりにけりと霜むすふ芦の枯葉に風よはるらん
同七月當座　月照草花
山の端に有明の月は出にけり小萩か原の露そうつろふ
夜虫
中〳〵に霜よの床のきり〳〵すなきてなつけそ秋の哀を
又當座　秋
見わたせはまゝの萩原露しろしなかめの末に月や出ぬる
寄松戀
たのめすはつらきならひと思はまし中〳〵なりや松に吹風
同八月十日當座　深夜月
里人のをのかよわたる聲もせす更行月に道はあれとも

述懐
われ〳〵は誰かは身をは思はねは世のことはりの人もすくなし
同二年二月廿六日内々歌合
山中花夕
みよし野や花に跡とふ夕くれの空はにほはぬ春の山風
かつらきやたかまの櫻咲ふけて夕ゐる雲の跡そさひしき
野外秋望
袖にをく朝けの露のほしもあへす霧に分行秋の旅人
あさちふや野邊のあはれも白露の深きは秋のならひ也けり
同三月女房侍臣大炊殿へ
むかひて花月をもてあそふと聞て遣之
住なれしおなし花とは思へともこよひの月にいかゝうつろふ
いかはかり雪しく庭のうつるらん月に出ぬる雲のうへ人
此大炊殿去年春内裏也。頭中將道方朝臣以下無指歌
仙。仍良久返事持來。依見苦不能注。
三月庚申夜三首は替人當座
霞隔殘花
花はみなちり行かたの朝霞たなひく山にかせや吹らん
山人の霞をわくる袖のうへに馴しかたみの花の香そする
暮春曉月
春の行あり明の月の山の井にあかてや影をうつしとゝめん

今宵にや春のあはれをかきるらんかすみに殘る明方の月

深夜待戀

ふかき夜の哀はおなしまつら山もろこし船の風のたよりを

まつ人の夜半の契はをともせて更行鐘に山風そ吹

同比行幸七條殿夜當座　雨中落花

ちる花のかたみと殘る雲たにも色こそ見えね雨の夕くれ

宴遊待曉

もろ人の春のあそひのなこりより明なはおらん宿の梅かえ

對泉戀夏

春なれはむすはぬ水の心にもをのかさかりの夏やまつらん

同比當座　山花

花の色もうつりにけりとしら雲の道行ふりにかほる山かせ

五月十一日詩歌合詠無風聞始予今度

山居春曉

松の戸になれぬ嵐をさきたてゝ花より明る春の山のは

人とはぬまきのと山やかすむらんおなしみとりに明る空哉

水郷秋夕

よし野川櫻なかれし浪のうへも霧に跡なき秋の夕くれ

袖よ又　いく秋にしほれきぬゆふへことへ宇治の橋姫

霧中眺望

行くれぬなを又こえんしるへせよ里とふ山に出る月かけ

わすれなん思ひなれにし故郷も月はみしよのさやの中山

同廿五日歌合　霞隔花

櫻色の雲分なれし旅衣うつろふ袖に匂ふ春かせ

晩郭公

郭公夕の雲に聲すなりまつとしもなき五月雨の空

田家月

かり庵の月をかたしく袖のうへに稲葉か末の露そみたるゝ

深山雪

都人けさのしほりも跡たえぬ槇の葉白き雪の山道

後朝戀

かへるさの袖にもなをやむすふらんきのふのくれの床の白露

同比當座　松風如秋

山おろしの松ふきしほる夕くれも秋かは袖に露こほれつゝ

月前水鶏

なかめきて月も幾夜のまきの戸をたゝく水鶏やね覺とふらん

朝瞿麥

とこなつのまかきうつろふ朝しめり夕立またぬ露そこほるゝ

同比當座　松間時鳥

子規雲をたよりにすきぬめり松の嵐に聲をまかせて

水邊夏月

夏山の木のまにかけや更ぬらん浪よりしらむ明方の月

同比當座　水上月

ますらおかたかせさしこす跡見えてゐせきによとむ波の月影

夏山風

をくれてもけふの櫻の木のまより春ありかほの山の下風

同比當座　海上夏月

難波かた浪に鹽くむあま人の袖にすゝしきこの比の月

故鄕落葉

秋ふかくならの落葉に霜さえて名におふ里はふりまさりつゝ

又當座戀

明くれぬひかりそふしの煙をもおもひありとは誰に歎かん

浮沈みかくそみるめのかひもなき人をしまの怨めしの身や（よイ）

春

この比は秋みし色の跡もあらしなれしかたみや春の松かせ

同六月於大内禁庭竹お

九重やなにも涼しきかは竹の風にしらるゝ代々の行末

同比詩歌合當座　海上月

末にみし雲ちもしらぬ浦半より月に漕出る海士の釣舟

白雲を袖にかけこし嵐たに昨日ともなき浪のうへの月

山寺花

花の色を入相の鐘にたつねきて昔もしるき志賀の山かせ

はつ瀬山花はあらしに跡たえぬよそなる松を峯に殘して

七月會當座　契變改戀

きのふみし夕の雲は跡もなし契し山は月もいつれと

恨後悔戀

天のとや明て別しあかつきのなこりの空を何恨けん

同秋比無清　晩風在秋

萬代のはしめの秋をしらすなり夕風すくる庭のくれ竹

野花幾開

西よりそ色かはり行小萩原野原の露もまつや染らん

橋邊秋月

かけてのみ思ひそわたるあつまちや月すむ比のさのゝ舟橋

逢不逢戀

尋てもふかきよもきの白露をむなしく分ぬ夕暮そなき

不忘絶戀

しら雲はたえにし後の山の端になを面影の月そすみける

同八月三日夜　湖上月

志賀の浦や月は昔の色なから浪にふりゆく秋の松かせ

曉山鹿

霧のまはなを明やらぬみ山より袂に送る小男鹿の聲

同月行幸七條殿當座　月契久秋

いくとせとかきらぬ空にめくりこん月にそ契る行末の秋

草花滿庭

雲井行かりの涙もふる鄕の庭にうつらふ萩のうは露

秋風增戀

こぬ人をまつとつけこし夕くれはさらてもつらき宿の秋かせ

同比當座　山路苔

み山ちやむら雨とめぬかりのやに露あまりある苔のさむしろ

霧中夕

暮ぬともなを行末はそらの雲何をかきりの山路なるらん

同日當座　寄雨戀

思ひわひ今宵もさてや山の端の月にしられぬ袖の急雨

寄水戀

消かへりたれか岩もる水のあはのあはても袖の色しみえねは

寄筆戀

侘つゝもかたみと思し筆の跡も今はかひなきすさひ之けり

同比當座　戀

あはれまたたかみし夢のさめやらてはては現の身をくたく覽

うらみはや山の端ちきる村雲のたえて世にふるよその月かけ

契しやそれかと計みねの月いつのならひの暮を待らん

同比當座　春夕

都人かへる山ちはまよふらん霞ふきとけ峯の松風

夏曉

郭公旅ねのとこや明ぬらん神なひ山のよこ雲の空

秋朝

萩か花さきちる野への朝ほらけをけらん露をまつははらはし

冬夜

袖の上もいくたひはかりしめるらん物おもふ宿の有明の月

同比合詩當座　野亭月夜

さ莚やすゝのしのやの軒をあらみ月にもなれぬ夜床なれとも

暮山紅葉

夕霧はなへて錦をたつた山神に事とふ松はらもなし

同夏比當座　夜深有水聲

雲かさね山のはしらむ瀧川の水にになれゝ夏の夜の月

月影によそなる雲もはらふ覽山の嵐る秋風の峯

同秋比當座　舟

伊勢島や波路くれ行霧のまをほのかに過るあまのつり舟

風

秋風やかつをく露を拂ふらん影はたまらぬあさちふの月

秋

秋の夜は明かた遠く成ぬれとなを中空に月やすむらん

又當座　海月

あかしかた浦風寒く霧晴て月にこき行あまの釣舟

野月

月の行峯のうき雲吹はらへ露にいかなる野への嵐そ

九月十三夜内々詩歌合　山路月

山といへとさのみは露もをくものかぬるゝかほなる袖の月哉

ためしとも秋は今宵を長月の名こそ山路の菊の上の霜

同比秋十首會

ならはすよ寢覺は秋のうたゝねに昨日にもあらぬ風の音哉

秋はいまたあさちか末のきり／＼すたへぬ泪そ色に出ゆく

おきて行あかつき露のいかならん鹿の音はらふ秋の山風

吹風は秋なき色も久かたの月に忘るゝ浪の夕霧

袖の色よ秋しもいかにうつるらん人もいくのゝ萩の白露

しくれつる跡は夕日の色なからよそにはほはぬ山の端もなし

霜は今いく夜か袖にしきたへの枕つれなくうつ衣かな

山姫のそめぬ袂もうつろひぬ村雨ほさぬ四方の嵐に

ゆく秋をおしむとすれと有明の月やとる袖も時雨晴つゝ（はイ）

ときは山秋にとまらぬ時雨にもさそはぬ色は松風そふく

同十月廿九日昨日大嘗會御禊を見て　俊成卿女

天津空日の御かけにも曇りなし萬代までの君かみそきは

返し

くもりなく日影もみえし冬の日に我も千年の程はしりにき

同十一月比當座　秋野

尋はやむかしの跡はかはり行世にもさかりゝ秋の夕くれ

野邊の露花もほしあへぬ秋風をあたにうつさむ袖の色かは

同比當座　戀

ときしもあれあたにしくるゝよゐの雲更行月に恨かねつゝ

同比合詩間詠勒字旅歎當座　雲

今宵まついかなる霜にぬれ／＼てやとらん宿も末の白雲

曉

故郷をたか面影にさそひ来て月に物おもふ夕くれの空

同比當座　薄暮戀

秋山の夕ゐる雲の色に出しうつるを人の心とは見よ

故郷戀

待人の心もしらぬふる郷に猶秋はてぬ虫の聲かな

旅泊戀

わたつ海の我身こす浪いかに又うきねの袖のしほれそふらん

關路戀

相坂のゆふつけ鳥の聲とにそなたの風をなく／＼そきく

海邊戀

なひけたゝ身をうら風の夕煙思はぬかたのたよりとえけり

同十二月九日會　行路夜氷

玉ほこの道ふみしらぬ我からや袖さへ月の氷なるらん

鷹狩日暮

かりくれて鳥立もみえぬ雪の中にそれかと過る天の川かせ

寄不留戀

大かたの月をや人のうらむらんさもあらましの宵のなごりに

同夜隱題各探而詠之　直衣袖當座

冬もなをそてし　　せる野への月四方の草木は霜枯にけり

藤壺紅葉を

苔ふかき軒はの色ににほひつゝ下葉はおをき庭の紅葉は

建保元年正月十日　竹添春色

春の日のなかきよわたる色にまた緑あらはす庭の呉竹

同三月十八日閑院遷幸後初會内々

松浮池水

霞よりやよひの池のふかみとり松とかきらぬ春の色哉

同比良平卿大内花見にまかるを聞て遣之

散ちらすいさしら雲の九重にいつかみゆきの春のさかりは

返し　　權大納言良平

昔より花のみゆきはふりにしを何中〳〵にいつと待らん

同比於水邊即事　當座

大井川春も嵐の山風に花のにしきの中や絶なん

又當座

春ふかみ松のしつえに色そへて梢にかゝる池の藤波

いつはりの思はぬほかの名とり川うきなとゝむなせゝの埋木

同比十躰を人〳〵分て詠之　當座

長高様

忘れすよたを山の端をかこちても見し月のよその俤

幽玄様

よしさらは身をは恨し中〳〵につらきならひに思ひなしつゝ

同比當座　忘淺戀

わすれしにけふをまつへき契にて今更に成我心かな

思昔戀

すかのねのなかき契となりにけりなれし昔の袖の月影

同比當座　山路花

しをりせし　　春の事とはん花にいくよの袖かふれつゝ

竹裏鶯

夕まくれ竹のは山はふかけれと常よりあさき春の鶯

同日春　當座

梅かゝも今は春へとちる雪にまたやみ山の〔[illegible]〕こもるらん

もろ人はわかなつむめりかすかなるみかさもりの春の光に

この比はかすまぬ山もなきからにをのれおほろの春の月かけ

同比當座　月前花

花のかにくもれはくもる久かたの雲もうつろふ春の夜の月

雨中燈

雲かゝりふりそふ雨の暮のまにあらぬ色なるよゐの灯

同比當座　山路聞鶯

かち人の春の衣にきえぬ也霞の遠の峯のしら雲

山霞

みよし野のかすみ吹まく山風に故郷とをき有明の月

野梅

二月や岑への梅か枝をりはへて袖にうつろふ春のあは雪

同比當座　暮春

花鳥の匂ひも聲もとゝまらすこよひはかりの春のわかれに

曉戀

かへるさの袖をもをくろならひ哉昨まち出し山の端の月

又日當座　海邊晩霞

浦人の衣ほすてふ春の日にうきてはなれぬ夕霞かな

深夜春雨

月影はなを有明の空なから軒はにはれぬ春の村雨

同比當座　霞中聞鶯

家ゐする野への霞も鶯のなくなる聲はへたてさりけり

五月日戀十首　寄雲戀

秋の鴈羽うちかはす白雲のなと中空に誰を待らん

寄風戀

露しけみしたはふ葛の風たにも我身のうへは恨みさりけり

寄雨戀

下萌のけふりは空に跡もなしおもふ思ひの夕くれの雨

寄氷戀

みなせ川した行水のうたかたや岩まに忍ふあはて消なん

寄草戀

おく山のゆふかけ草の露の袖うつらぬよりもつらき色哉

寄松戀

沖津浪梢吹しくはま松の身をうら風の何しほるらん

寄竹戀

竹のはに玉ゐる露の消わひてぬるともなくて過る比哉

寄衣戀

衣手は田子の浦浪たゝぬまも大かた袖のぬれぬ日そなき

寄枕戀

草枕むすふかりねの夢をたにいかにねしよと忍にすもかな

寄簾戀

あふとは玉のをすたれ玉さかの隙こそしられ袖はぬれけり

同七月　夜野虫　當座

夜をさむみ草村ことに鳴虫の聲もや野への色に出らん

長き夜をたへたる秋のけしき哉野原の露も虫の根も

同比當座　七夕

天の川淺瀬しら波立霧のわたりもあへすあけん物かは

夕風

風よりや秋くるからの夕くれをかなしき物と思ひ初けん

妹背山

野薄
ひとりしも誰かいるのゝ初尾花たまくらよりそ露はなれける
田家
明ぬとや小田のかり庵のひまをあらみ鹿のね近く吹嵐哉
暁露
いにしへや我またしらぬ袖の露をたれしのゝめの道のさゝ原
同比當座　旅月
たひ人の袂を霧にしほりして月にそこゆるさやの中山
山雪
かつこほるまきの葉分にふる雪を拂ひもためぬ冬の山かせ
同五月當座　曉得郭公
入月の名殘に出よ時鳥あすよりさきに忘れかたみに
泉邊晩涼
夏ふかき山井の清水むすはすはいか計なる夕ならまし
又當座　秋
秋山の眞柴色とる霜のうへにうたてはけしく行嵐哉
同八月七日歌合　山曉月
月よなを有明の山のしかすかに秋なく蘗の根てそ行
野夕風
ゆふ露は野への花すり衣手のぬれてのまゝに秋風そ吹
川朝霧
はらへたゝ宇治の川霧へたてゝも遠方人の袖の朝霧
同比歌合　野月
宮城野のこのまも色や月影の心つくしに秋風そふく
山鹿
霧ふかきみ山かくれに鳴鹿も聲の色にや顯れぬらん
同十日懸十首　音羽山
吹風の音羽の山は色つけと人の心の秋そつれなき
小鹽山
あくるまもをしほの山の松にこそつらさのことも思ひしりぬれ
藏部山
くらふ山まなくちるてふ花よりも我こふらくの數やまさらん
常磐山
君しのふときはの山は秋くとも色にみゆへき袖のうへかは
葛木山
玉かつら葛城山の秋の色やなれしもつらき人の面かけ
三舟山
みよしのゝみふねの山の峯の雲かゝる思ひに立まよひつゝ
信土山
昔をはやまつちの山の松とてもいくよつれなき色とかはしる
石瀬山
我戀は人にもいまたいはせ山下行水のうちしのひつゝ

妹脊山
いもせ山たかことの葉の秋に又歸りやすきは心成けり
朝香山
水の面にかけさへうつるあさか山あさきは人の契之けり
同八月十五夜　月前露
大かたの草葉に月はやとりけり袖より外も秋の白露
月前風
月すめは何と嵐のふくならんうはの空にそ秋はかなしき
月前祝
忘しなこの比のよの浦の月又もむかしに思ひいつとも
同夜當座　浦月
浦人もしほたれて行袖のうへにいたくなぬれそ浪の月かけ
野鶉
野への露はあたなる物と吹風を身はならはしに鶉なく也
夜戀
今更に思はしとてもいかゝせんくるゝ夜毎の心ならひは
又日當座　朝見紅葉
いつる日も秋とみかさの山のはに光さしそふ峯の紅葉は
山行伴鹿
さをしかのともなふ聲もやゝふけぬ歸る山路に月や出らん
同當座　山風
風吹はむら雲まよふゆふは山まなくみたるゝ秋の色かな
忍戀
しのひつゝ色にや出んあし引のわかみやま木の時雨降比
同比當座　紅葉
紅葉せぬ松葉か霜はさもはらへそをたに山の秋の風
同比當座　夕山鹿
秋といへは都のたつみしかそ鳴名も宇治山の夕くれの空
又當座　秋夕鹿
さをしかの涙も秋はもる山の下葉殘らぬ夕しくれかな
鹿の音になを色さひし正木ちる秋のみ山の夕くれの空
深夜鴈
わきも子かあさのさ衣かりかねの泪もまよふさやの中山
同當座　海濱戀
あかしかたおほろ月夜の浦風も袖の外にはしほれさりけり
曉郭公
時鳥鳴一聲のむら雲にまた宵なから殘る月かけ
水上月
むすふ手の雫も千代の數〳〵に月はにこらぬ山の井の水
同比歌合當座　田家秋夕
かと田より山をかきりに見渡せは稍葉に近き夕附日哉
山家曉風

置まよふあかつきの露の袖のうへをぬれなから吹秋の山かせ

寄草戀

をく露の色には出ぬならひかな夏野の草のむすほゝれつゝ

忍戀

たのめつゝつらきはいとゝ思出もとかむるからに忍ふ比哉

寄海戀

伊勢のあまのたくもの烟空にのみうきは思ひのならひえけり

又當座　曉戀

有明の月ともなにかおしからんこれそかたみの山の端の空

又當座　寒野鹿

夜をさむみかれ行野邊のあさちにも思ひはたえす鹿そ鳴なる

同九月十三日夜歌合　江上月

玉江こくあしかり小舟跡ゝえて木の秋とや月はすむらん

旅宿戀

思ひつゝひとりたひねの夢にたにみゆとは見えぬ人の俤

暮山松

秋の色はとやまの山の夕時雨つれなき名のみ猶やふりなん

同月歌合當座　杜間鹿

秋をおしむときはの杜に鳴鹿の聲にまかせて降時雨哉

寄濱戀

みくまのゝ浦のはまゆふかひもなし契もくつる袖の涙は

寄舟戀

おきつなみ心もしらすゆく舟のたよりの風に何しほるらん

同比當座　川上秋

立田川秋もけふへの山おろしに紅葉をさらぬ浪のしからみ

行秋をしくれし雲に吹かへせけふたにつらきあすか河かせ

同月十九日　寄海旅

難波江やたみのゝ島になく鶴のあしへをさして宿も尋ん

寄野戀

宮木のゝ小萩かもとの露しけみ風を待まも人そ戀しき

寄川雜

すゝか川ふるや時雨の色に出ておもふ心は神に任せん

同比當座

みよしのゝ山下風の故郷を花よりそもる春の夜の月

神まつる比にも今はならの葉の月にもれたるもとつ葉もなし

にほてるやさゝ波白き月のうへに秋ともふかぬひらの山かせ

紅葉する峯の嵐にふる物は月に曇ぬ時雨なりけり

草の原しもよの嵐寒けれは月より庭の跡はたえつゝ

まきの葉の色より出る月影をあらそひかねてふる時雨哉

春秋のいくよの月もなかめきて忘し物を雲の上人

同比當座　述懷

つま木とるそま山人のしほりして道ある程の行末もかな

祝言

君か代に行末かけてしられけり松も千年の契ありとは

同閏九月十九日歌合　深山月

月の色も山のはさむしみよしのゝ故郷人や衣うつらん

寒野虫

あさちふや床は草葉のきり〴〵す鳴音もかるゝ野邊の初しも

寄風雜

立田川なかれもゆくか紅葉はのちらぬかけをも風に任て

同盡日亂歌合

いすゝ川なかれもたえすすむ月に千世のかすかく水の白浪

關紅葉

相坂のゆふつけ鳥の涙にやよもの梢の色かはるらん

朝野霜

宮城のゝ草葉の色も朝日かけさすや木のまの霜のむら消

夕時雨

秋は今夕の草の色もうし時雨をいそく日くらしのこゑ

杜間霧

とゝめあへすしかもつれなく行秋のときはの杜の夕霧のそら

池邊菊

池水に老せぬかけもしら菊の波の花にそ秋はうつろふ

山家草

あはれまた人めも草も枯にけりみ山の庵そ秋はさひしき

聽擣衣

よそにきく人も恨や有明の月にまかせてうつ衣かな

故郷風

宿はあれぬまかきはもとの跡なから秋の野らなる風の音哉

閏九月盡

年のうちに秋くはゝれる暮をたに月日かそへて物や思ん

同比俊成卿女出家すとて申ける

君か代の春は千年と祈をきてそむく道にも猶賴哉

忘るなよとの葉にをく色もあらは苔の袖にも露の哀を

返し

捨はつるこのよなからも故郷のしのふの草にかゝる露哉

いのりをくとの葉よりそ殘りけるいかなる春の露のかたみも

思ひいてんむかしをとはゝこたへなんそむく道にも有明の月

此よをはさてもいかにと故郷のしのふにたえぬ軒の白露

同比當座　潮上臈

あしのねの一夜の枕それなからわするな夢のみつの島人

夜時雨

冬やこん秋やゆかんのいさよひに我衣手もうち時雨つゝ

同比之文字十ある歌とてよめる　當座

春のゝしのゝをすゝきつのくみぬ子日の松の緑のみかは

同日澄書題　當座

櫻はな盛に見えし山の端のあらぬ色なる秋の夕くれ

同日花時鳥月雪を一首に詠　當座

櫻花雪とちりにし木のまより月にやすらふ郭公かな

同十月時雨を　當座

峯の松月のかつらの木枯もたゝ大かたに行しくれかな

同十一月當座　池上冬月

池水にむすふ氷のたえ／＼にひかりをまかふ冬の夜の月

寄松祝言

君か代を何にたとへん高砂の尾上の松の色かはる迄

同霞　當座

此里も霞ふりきぬしからきのとやまの嵐雲さはくらん

同十月八日當座　初冬霰

冬きぬとをとになたてそみ山木の色をあらはす霰降之

曉山風

いまよりの有明の月やしほるらん我かたしきの床の山かせ

後悔戀

忘しは今はたおなし身のうきも人のうきには思たえなて

同比當座　關月

あふ坂の關の清水のこかくれにをのれかけみる秋の夜の月

秋月

露も袖にいたくなぬれそ秋の夜の長き思ひに月はみるとも

寄霜戀

いかゝせん霜かれわたる淺茅生のをのつからたにとはぬ恨を

十一月當座　野徑霜

はらひ行跡まてつらき嵐かな冬もいく野の霜の下草

池時雨

暮かゝる雲まも見えす時雨きて峯をあらそふ池のさゝ波

臨時祭　戀歌

我なからあやしくぬるゝ袂かな思はぬ「比ィ」はかゝる露かは

同十二月當座　江上朝雪

難波江のあしまいさよふ朝日影あまきる雪そ空にうつろふ

建保二年正月十二日　梅契多春

春をへて宿にまつさく花なれは萬代かさせ雲の上人

同四日當座　松添春色

春きては時雨もそめぬかた岡の松のうは葉そ色まさり行

山路梅花

春日山さくやこの花梅かえに春ともわかす雪はふりつゝ

同二月三日詩歌合　川上花

吉野河雪けの水の春の色にさそふともなき花の下風

この比はちりかひくもるかけもあらし花のかゝみの山川の水

野外霞

かへりみる都は野へのあさ霞たてるいつくにわかなつむらん
むさし野や枯にしまゝに下萩のなかはそかすむ雪の村消
同月廿三日自高陽院殿水無瀬殿之梅を御硯ふたに
入て以御隨身秦賴弘給之
水無瀬山ほとは雲井に遠けれと匂ひはかりは君かまに〳〵
御返し
みなせ山程は雲ゐの春なから千代のかさしの色そうれしき
同廿四日於南殿翫花　當座
百敷や花もむかしの香をとめてふるき梢に春風そ吹
けふしもあれ何かはあたの名にたてん花にまれなる雲の上人
春の日はなかめてけふもくれなゐのうす花櫻色に出つゝ
同三月十日會　山落花
初瀬山うつろふ比は春風のたゆむとしらぬ花そ散ける
暮春月
あすか川春さへはやく行水にけふとくらして月を見る哉
曉增戀
これまてはかねて思はぬなけきたに忍ひかねつる有明の空
同日雅經朝臣八重櫻の枝にまりを付て藏人康光か
もとに申つかはしける
春をおしみおる一枝の八重櫻九重にもとおもふあまりに
かへし康光にかはりて
春をおしみおりつる花も九重に思ふあまりの色はそひけり
同比述懷　當座
おく山の柴のした草をのつから道ある世にもあはんとすらん
百千鳥鳴なる春はいにしへにあらたまるとも猶やふりなん
日をへても猶やたのまんつきよみのかはらぬ影にすまん限は
同比四季鳥宛十二月之　當座
しら雪のふるすなからの鳥の音を梅咲宿に春風そ吹
きゝすたつ草のはつかのたひ衣つまもこもれるあさみとり哉
春かすみたつきもしらぬ山人の跡まとはせるよふこ鳥哉
郭公なくや雲まのゆふつくよはつ卯花のかけやしのはん
槇の戸をあけてかひなき人めをは夜半のくゐなを賴なりけり
夏の夜のやみはあやなしうかひ舟さしてそしるき篝火のかけ
秋はなを物おもふ宿の萩かえに鴈の淚の露やそふらん
秋の雨ふるの中道うつろひて尾花かもとに鶉鳴なり
あきの夜は鴫のはねかきいくたひか月の枕に衣うつらん
いかるかやとみのを川の冬の月たえすや千代のかけにすむ覽
沖津風波もたかしの浦千鳥松の末葉に八千代とそなく
はし鷹のとかへる山の松かえにうはけやさむき雪のふれゝは
同比當座　春山
山櫻霞のまよりうつろへは色のちくさに春風そふく
大かたや霞も八重のをしほ山春は緑の色やそふらん

川柳

水無瀬河柳の糸の春風にむすはぬ水もむすほゝれつゝ

春の色やおほ川のへの柳陰しつえは波のもくつ也けり

神祇

すゝか川ふるきなかれのめくみ哉山田のはらの春の村雨

賀茂山やみしは三月の花のかけこそのみゆきに面影そたつ

同五月歌合夏戀　當座

戀をのみしつえか下の忘れ水むすふも人の契なりけり

人しれぬ身はうつせみの木かくれてしのへは袖にあまる露哉

秋戀

おほかたにうき身ひとつの秋ならは誰ゆへにかは物は思はん

忘れぬやいかならんともしらぬまに誰まつ虫の聲そかなしき

同七月歌合當座　初秋露

おき原や末葉の露もしられけりうき身ひとつの秋の夕暮

野草花

萩か花さくらんをのゝ朝露にぬるゝ計の袖のいろかは

夕山風

草葉にはあたに思ひし夕露を衣手ならす秋の山かせ

雨後月

秋の雨のよゐの村雲跡消て拂ふ嵐に殘る月かけ

霧中戀

いのちやはあたのおほのゝ草枕はかなき夢もおしからぬ身を

同比當座　七夕

七夕の星あひの空のぬれ衣まとをに秋のけふを待つゝ

山

鴈か音もいまやこゆらし山しろの岩田のをのに秋風そ吹

海

すみよしの浦より遠に成にけり月みるにしのあはち島山

同比歌合當座　春江月

しめをきしたま江のまこもそれなから緑にかすむ春のよの月

秋野虫

風の音露のかことをうらみても野原は秋の松虫の聲

初冬雪

大江山いく野の草のかれ〳〵に嵐の末につもる初雪

寄螢戀

夏虫の身のいたつらになりぬ之暮まつほとのあすか川風

閑中雜

山かつのよをすみわけるすまひにもありふる程の道は有けり

同比於閑院南殿詠月前松　當座

今はまた世々をかさぬる庭の松ふりてそみゆる秋の夜のしも

同八月十五日　月前竹

竹の葉にみかける玉の秋の月千代もやちよも枝なからみん

同十六日亂合　秋風
夜やさむき衣手うすしかたしきのまたひとへなる秋の思ひも
秋露
小山田のかりほの庵の床とはに我衣手は秋のしら露
秋月
天つ空みちもやとりもしら雲の明るもしらて月を見る哉
秋雨
宮城の〻木の下露やいかならん風に玉まく秋の村雨
秋鴈
たかために來る秋風のとつても涙そおつる初鴈の聲
秋虫
秋の野の尾花ふきちる風のうへにありか定めぬ虫の聲かな
秋鹿
みむろ山下草かけて鳴鹿の聲よりしけき曉の露
秋花
袖の色は露のひまたにと〻まらて薄も萩も秋風そ吹
秋水
人くまぬいた井の清水里遠み昔もいくよ秋そもりける
秋霜
紅葉は〻ふりみふらすみをく霜のさえ行霜に秋風そ吹
秋祝
行末を思へは久し乙女子か袖ふる山の秋の夜の月
秋旅
都たはよそにたにみすさ〻のくまひのくま川の秋の夕暮
秋戀
忘れけや風は昔の秋の露ありしにも似ぬ人の心に
秋懷
秋も秋月も雲井のそれなから昔を今に思ひ兼つ〻
秋雜
高砂の松にすむへきいまよりや尾上の霜の光そふらん
同比當座
かきりあれはきのふにまさる露もなし軒の忍ふの秋の初かせ
月みても秌の哀はある物をしつ心なくうつ衣かな
龍田山よその紅葉や散にけん松の葉もなき峰の風
又當座　冬柳
故鄕の朽木の柳冬くれはしくる〻色もしのかれそする
冬
難波江や靑のかりねは霜かれて秋見しま〻の月そ殘る
述懷
いかならんあすに心をなくさめてきのふもけふも過す比哉
同九月八日名所撰歌合　秋
みまし江の玉江のあしの秋風に夕の霧も立空やなき

さひしさをなにゝたとへん明石かた浦漕舟の跡の月影
みよし野の青根か峰の夕時雨よその紅葉を風さそふ也
かり人のいるのゝ露のしらまゆみ末もとをゝに秋風そ吹
なかれ行紅葉や秋のとなせ川いてこす浪に嵐吹らし
同比戀
さてもいかにおほ川のへのふる柳心の秋に朽てやみぬる
したにのみ思ふ心の峰の雲龍田の山も今しくるゝ
同十二日七條院より内々少將内侍か許に色々の花
をたまふそのうちにくりあり
くりかへし雲のうへにそとゝむへきかさぬる秋の花の色々
返し女房にかはりて　後に聞權大夫歌之
雲の上にかさぬる秋の花ならはくりかへしても君そ見るへき
同十三夜會　月前風
しくれつる村雲なから吹風をしらてや月の山を出らん
暮紅葉
秋にたにしのふの山の下紅葉たかゆふへとは色にいつらん
寄海戀
涙より思ひいりぬるいその松つれなき色は袖のとかゝは
同廿五日月卿雲客歌合　野徑月
山のはゝ月こそかゝれみよしのゝふる道とめて鹿や鳴らん
霧中雁
夕霧やおなしおのへにたつ雁のみゆへき山もなく／＼そ行
寄雲戀
身を秋の過る月日のはてもなし逢を限の空の浮雲
同九月五日始歌合　川落葉
故郷のさほの川水いかならん柞の色は風も殘らす
寄鳥戀
けふもさてむなしき空に飛鳥のあすかとたにも何をたのまん
深山雨
つれ／＼のなかめもいまやまさき散み山の秋のむら雨の空
同日人々歌の試體に難題よみ侍次に　當座出題定家
松浦晩風可淀宗
松浦川なゝせの淀の夕波に心つくしの風の音かな
吉野朝望可相宗
よしの川いはとかしはの初時雨ときはの色はけさもつれなし
紅葉半深
おなしえにわきて時雨や染つらん秋色ふかき西の山端
待友惜秋
思ふとちたのめし人は音もせて秋のみくるゝ入相のかね [illegible]
尋山澤池
さかの山ふるきみゆきの跡とへは袖にそをくる廣澤の月
同比社頭歌　當座

神ち山松も千年の陰しけみふかきたのみを猶かくるかな
いはし水きよきなかれの行水にわする瀬もなき我心哉
くまの川みをはやなから逢あはん音にのみ聞みつからそうき

同冬當座　野雪

此比は野なる草木はめもはるにしられぬ花と雪は降つゝ

歳暮

とゝめあへす終にをくらん年月をけふもくれぬと何急くらん

朝戀

おきあかす我たまくらの袖の霜人の心に消やわたらん

夜戀

面影は見しよなからの月影にかはる心をたれにうらみん

述懐

さのみやはあるにまかせる世ゝとも思ひさためぬ身の行衛哉

自建保二年十月二日。人丸影供始之。毎月旬日詠之。各三首也。滿而號結願了。雖及明年不交他注之。

時雨

冬こもる峰のまさきの顯はれていく秋めくる時雨なるらん

水鳥

かりこものひとへをしける水鳥の青はも白く霜や置覽

寒草

秋風にあへす成にし片岡の草葉をしなみ霰降なり

暮山

夕かけて落葉も白し神なひの山下風に霜やさゆらん

松風

みよし野のきさ山かけの松の風時雨ぬ色の秋そとまれる

曉海

友舟の契あけゆくあまのとをなを休らひの月はさしけり

寄川戀

忍あまり我身しくれの名取川とのはよりも顯れにけり

寄野戀

春日のゝ枯葉の草のはつかにもたれかは雪の跡もはかなし

寄霜戀

霜をたに哀と思へ世の中に我身も人も消ぬはかりそ

寄筆戀

年をへて名のみやつもるとの葉に數かきあへぬ水くきの跡

寄箒戀

けふも猶袖の涙の玉はゝき手にとるまてのならひなりせは

寄笛戀

笛竹もよるへの風はある物をわか身のなみはひくよしもなし

山家

ひたふるに思ひかれぬる人めかはと山さとも雪のした草

羇中

ふしみねに時しらぬ名やふる里の月にも冬の雪はそひけり

旅泊

神津風あら磯波のうき枕月も旅ねとやとる袖かな

冬曉月

をとめ子か雲のかよひち行月の俤をたにしはしとゝめん

山朝風

朝日さす嶺のと山の下風に氷をわくる宇治の川長

江寒蘆

霜は猶おきのふる江の芦の葉にむれゐし鳥の跡やみゆらし

池凍

冬の池のみきはのこほり跡たえて遠さかり行まつのしき波

早梅

雪ふれはとみ山木も吹花を春の物とて匂ふ梅かえ

歳暮

いくかへり我身につもる冬の霜をくりにけりなすまの關守

寄鏡戀

月やとる氷の袖のます鏡みし面影はかきくらしつゝ

寄笠戀

まのゝ浦やこすけのかさの雫にもあまりて誰か袖を頼ん

寄帶戀

いにしへのしつはた帶のいくかへり我かた戀の末にむすはん

方違

暮て行冬をしまのあまのとに春立夜半もかたはさためし

沐浴

夕けふりたみのかまとにたつるゆのかけても誰か身を祈らん

閣護

むつともまた月影の山のはになかき夜契る雲の上人

建保三年正月十五日　山立春

きのふかも時雨ふりにしみ山木のその色なから春は來にけり

夕若菜

若菜つむ大宮人のかり衣日も夕くれの色やみゆらん

初子日

春日野や子日の松の末こにこもれる千世を神そしるらん

初春月

春は來ていくよもあらぬまきもくの檜原にくもる山の端の月

霞中鶯

都出しあさたつ山の白雲に又やとはれん鶯のこゑ

谷殘雪

谷深くたつをたまきのはをしけみいやかたまれるこその白雪

關路霞

杉たてる關の霞のふかみとり猶一しほの松は見えけり

春駒

かけろふのもゆる春日の影なれはなつまぬ駒も今やきぬらん

春雪

春の色のしのふもちすりたか袖にみたれて落る春のあは雪

春野風

かすか野はたゝ春の日の下萠に顯れそむる風の音哉

窓落梅

朝またき明行まとの梅か香に夜のまの風の程は見えけり

夕青柳

夕霞うつもれわたる川なみのたえ〳〵みゆる玉のを柳

夜歸鴈

深にける空もかすみて行鴈の羽風に白き春の夜の月

夕苗代

この比の苗代水は秋かけて夕への風の程もみゆらん

朝菫菜

春といへはすみれ咲野のすり衣秋みし袖はけさの色かは

初山花

花さかぬ櫻かえたもある物をいかなる山の春雨のそら

喚子鳥

里人のましる山路のよふこ鳥にこよひ計の花の陰かは

谷春水

谷川の岩まの浪をけふみれはうち出し色の山の下風

櫻花

さくら色の山分ころも此比の嵐につれて匂ひぬる哉

桃花

夕附日さすや岡への桃の花空もうつろふ色にみえつゝ

老鶯

鶯の聲はかりかはたけくまの松にも春はふるくみえけり

欵冬

河風やいてこす波にちる玉のひかりをむすふ山吹の花

躑躅

つゝし咲山下水も行春のくれなゐふかき風や吹らん

春雨

たをやめの袖のみとりもいたつらに色替り行春雨のそら

惜花

をのゝえも朽木の櫻春か世にちりこぬ時もおしむ宿哉

藤花

あし引の山には春もなきからに今もさかなん池の藤波

三月盡

櫻花ちりのまよひの山風に道こそしらね春や行らん

更衣

白妙のひれふる山の夏衣たつ日よりこそ涼しかりけれ

郭公

神なひの山ちこゆらし時鳥たかねの床に残る月影

卯花

わきも子か初卯花の夏衣たつかとみゆる庭の面哉

瞿麦

百敷や衛士のたく火はほのかにて月にそみかく撫子の花

晩螢

あくかるゝ玉えの水のかけよりも暁かけて飛螢かな

夏草

夏草はしけりもゆくかいにしへの野中の清水かけくもる之

夏雨

さなへとる山田にかへるさは水の音こそまされ夕立の空

夏月

ひさきおふるをのゝ淺茅の夏の霜白きは月の光之けり

夏風

夏かけは青根か峯の苔むしろ敷しのひたる秋の風哉

菖蒲

五月雨やまやのあまりの程過てあやめもしらぬ淀の里人

盧橘

立花の軒はの風のにほふ夜は玉のすたれも昔しりけり

蝉

木のもとになくうつせみのうす衣かたしく露の玉そちるらし

泉

むすふらん岩井の水の夏の月涼しき影は秋なりけり

水鶏

月影は槙のいたとのさしもなと明もしらぬ水鶏なるらん

忘草

忘草露の契をかけてたに思ひのきはの名こそ惜けれ

夏夕

夕日さすむかひの山の木陰より涼しくみゆる六月の空

夏暁

夏山の木葉かくれを行水にむすふ程なき有明の月

鵜川

うかひ舟なをにこり江に漕かへれこよひの月は雲もかゝらし

暮山

涼しやと立よる山の下露に玉ぬきみたるさゝかにの糸

夏朝

あなよりも色こき野への朝露に夏草さそふ蝉のは衣

照射

ともしするはやましけ山露しけみ分いる鹿の跡もなきまて

夕立

かつらきや峯よりくたる天雲のよそにもみえぬ夕立のそら

蚊遣火

大かたの民のかまとの夕烟下に絕せぬ蚊遣火のかけ
見戀
涙にもわりなき物か袖の月みる物からの人のおもかけ
夏露
白露もみたれにけりな山人の袖にはらつる忍もちすり
六月秡
川なみのいくしに夏をせきとめてしはし休らふ六月のかけ
寄雲祝
萬代といはふみむろの山の端や雲ゐはるかに神も守らむ
山初秋
その色とあらしの音やかはるらん松たつ山も秋は來にけり
待七夕
月たにも待なれにけるほし合の空にしめゆふ天の川なみ
野徑萩
明ぬとて出けんかたも白露の道ふみまよふ野への萩はら
池邊蘭
はらの池の岸へにたてる藤はかま色のちくさに浪もかくなり
關路鹿
鹿の音にいくたひ袖をぬらすらん數かきとめよもしの關守
女郎花
白露もおほかる野への女郎花あやなくあたに袖そしほるゝ

薄
色々にたまぬく野への花薄草の袂を秋とはいはん
槿花
神垣やみむろの山の朝かほはゆふかけてとや光そふらん
苅萱
をかのへのかやか下葉の秋の露風よりさきの亂ゝけり
夕尋虫
松虫の聲するかたの草枕こよひも野へに宿やからまし
曉見月
秋ふかき有明の月の山の端に松の葉白く吹嵐かな
野外月
日くるれは野はらの村にかへる人かねて宿もる月やみるらん
夜聞鹿
里人の月みる山のふもとまて心をしるは小男鹿の聲
關路風
月の夜は關の小川の水淸み空すむ風そ光なりける
庭上露
百敷や玉のまかきの白露をわきてそみつる雲の上人
秋曉
空はれて雲もさまれる曉は星のやとりもくもらさりけり
秋夕

秋きては玉敷庭のくれ竹に露しけからぬ夕暮そなき
　秋夜
かきりあれは雲もまかはぬ秋風をいかにふけとかすめる月影
　結願
かきのもと秋色そむるとの葉のかきあへぬまてつもりぬる哉
　同十一月十六日　松間雪
雲のうちにつれなき色はなけれとも冬こもりせぬ庭の松哉
　建保三年正月十六日　鶴伴仙齢
松にすむ鶴のよはひにとりそへてとゝめ置らん春もかはらし
　同三月當座　夕花
歸るへき家ちもしらす山櫻ちりのまかひの夕暮の空
　春雨
春の雨のしつのをたまき幾度か我身よにふるなかめしつらん
　同四月卯花を　當座
神まつる卯月になれは日妙の花の白ゆふかけぬ日そなき
　同春寄松祝　當座
百敷や庭の小松のわか葉にもさしてそ千代の影はみえける
　同日誹諧歌歸鴈を　當座
かへる鴈雲の外なる一聲をいるさの山の弓張の月
　同四月當座　月前卯花
うの花のまかきにましる月影は雪よりうへに雪そ散ける

　同四月比夢に或人のもとよりとありけり初五文字なし
此五字後日付之　さくらあさのおふの浦なし中〱にしたひなかけそ思ふ心を
　同比題不知
さりともと契し事を頼む哉我のみ思ふ心ならひに
　同五月於萩戸當座　夕五月雨
ふく風に萩の下葉や五月雨の名殘におもき庭の夕露
　曉戀
あかつきの涙も袖にあらはれぬちりうちはらふ閨の月影
　同比當座　雨中萩
萩か花うつろふ庭の秋の雨にぬれてをおらんみぬ人のため
　題不知　深夜戀
月まつと人にはいひしよゐのまのやかて有明に成にける哉
　此歌は題不知歌也。今般定家家隆之時相傳歌題を書之。
　已下如此事多、可改之。
　同比戀　當座
月にのみ契をかけてなかむれは夢もむなしきうつの山風
照もせすかすめはかすむ月ゆへはくもりもはてし人の俤
　同六月歌合當座　蟬聲秋近
露の色ももりのしめ縄秋かけてかたへ涼しきせみのは衣
　被返書戀
みつくきのをかぬかたみは玉章のかへるもつらき葛のうら風

寄社頭雜

神ち山たのむかたより吹風に思ひ初にし色やみゆらん

同比歌合當座　夏野風

吹風もむすふ計の夏草に野中の水の跡たとりつゝ

深夜戀

さゝの葉や置ゐる露も夜ころへぬみやまもさやに思みたれて

寄海雜

やをか行はまの眞砂のありかすにかけともつきぬわかの浦波

同比當座　山鹿

鳴聲はしほれさりけりさをしかのふすや草かの山の雫に

社頭

神風や契もくちし五十鈴川たのみをかけしわたらひのしめ

同比當座　寄暮戀

きり〳〵すなくや草葉は色に出ぬ我そつれなき秋の思は

同比以栗下題各詠之當座

曉月入窓

かへるさの人は出ぬるまきの戸にかはるは月の光なりけり

早涼思衣

月たにも雲の衣はある物をまたひとへなる風そ身にしむ

同六月十八日歌合　水邊柳

川なみに風のふきしく白露やつらぬきとめぬ玉のをやなき

江上霞

難波江の鹽干のかたやかすむらん芦まに遠きあまのいさり火

朝落花

久かたやあさ日いさよふ山風のくもらてくもる花の陰哉

夜歸鴈

かりかねは行衞もみえぬ山の端に猶いさよひの春の夜の月

山晩風

風さはき松にもれくる鐘の音は誰住山の夕なるらん

野曉月

さゝ分る野へのかり庵の笘を荒みあはてぬる夜の月そ殘れる

同晦日當座

みそき川なるやあさてのぬれなから露をかけたる秋の初風

同七月七日七夕七首

天川てる月なみなかそへつゝ今宵は秋のほしあひの空

秋はなをあさせしら波たとるまて霧立渡るかさゝきのはし

七夕の行あふ空や更ぬらんかたへ涼しき天の川かせ

年にまつ今宵はさても天河あはんあしたをいかて忍はん

秋來てもあはすはなにを七夕にかしつるいとの玉のをにせん

大かたのとしのをなかき秋のよも思ひそあへぬ星逢のそら

天川もみちの橋のから錦わたれと絕ぬ契とそ思ふ

同月當座　山路夕鴈

かりかねのきこゆる空はみとりにて夕さひしき山の下道

朝草花

萩の露けさもほしあへぬ袖にしもいかなる色や嵐[のイ]なるらん

又當座　秋

秋の日のくれなゐにほふ山のはにうつろふ雲の猶時雨行

同八月海邊眺望　當座

わたの原露吹はらふ鹽風をたよりに過る浦の友船

秋なから木の葉かくれもなかりけりゆらのみさきの有明の月

同比當座　擣衣

時しもあれたか里人のから衣ころも夜寒の月にうつらん

月

萩はらや人にしられて行秋の末こす風に殘る月影

同比江山夜月明といへる詩題にて　當座

あはち嶋かよふ千鳥の聲たけぬ人山のはもすみの江の月

同八月十五夜　月前竹風

天津風みかきの竹の萬代にまつあらはるゝ秋の月かけ

月前擣衣

あらしふくとやまの月は更にけり衣うつなる聲そちかつく

月前眺望

めくり行山の木葉を出ぬめり月は時雨のそむる色かは

同夜當座　禁庭虫

玉敷やみかきの竹の白露に虫のねしけき秋風そふく

雨中戀

いそのかみふるとも雨の夕をも待へき物と猶や頼まん

同廿一日歌合當座　山家月

初瀬山川音さむく成にけり麓の里も月やすむらん

夕紅葉

秋の日のうつろふ山の夕暮は時雨もおしき峯の紅葉ゝ

同比當座　春

鶯の木つたふ枝にちる花は羽白妙の雪かとそみる

夏

すきぬなり淀のわたりの時鳥またふかき夜の月の光に

戀

袖の色をしのふもちすり忍へとも誰ゆへ露のみたれなるらん

雜

山の端にはつかの月も出にけりこれや有明の光なるらん

又待月　當座

山のはに有明の月はまつ物をいつよりすめる心なるらん

同七月廿一日有心無心作者とも歌つかうまつる次に　草花徐開　當座

さをしかの朝たつ野への唐錦枝に一むら秋風そふく

小男鹿の涙ふるのゝ秋かせに萩の下葉も色かはるころ

田家秋鴈
風わたる秋のかり庵のほの〴〵と稻葉をわくるさをしかの聲
門田もるたかいねかての秋風にさそはれ渡る初鴈のこゑ
同八月當座　野亭月
露分ているのゝ薄かり庵のたか手枕に月をみるらん
川曉風
龍田川水上白く明る夜の山もひとつに秋風そふく
野外夏草
露分る夏野の草のぬれ衣なるとはすれと色もかはらす
月色似秋
風の音「もイ」身にしむ色はかはらねと月にいく度秋を待らん
契經年戀
つれなくていく秋風を契きぬきさ山陰のまつとせしまに
同九月九日撰歌合當座　月前菊
久かたの雲ゐの庭に咲菊の月の霜にもあやまたれけり
水邊菊
白菊の花のあたりに行水のわたらぬかけに千代は經ぬへし
寄菊雜
心あてにおりかく（らイ）けふや山かつの垣ほにさける白菊のはな
同十月十六日菊下會菊合後賞末植萩戸前月照菊之
與人々詠三首　奏管絃
うつしうへてみかきの菊の初霜に枝もたはゝの月そうつろふ
天つ星光をうつすみかは水老せぬ菊のかけやせくらん
花みつゝちよまつ時も諸人の袖をかさぬる庭の白菊
同比野雪　當座
はし鷹のかへる山路はうつもれぬみ雪ふりぬる野へのかり人
同九月比當座　杜間露
日くらしの涙やよそにあまるらん秋といはたの杜の下風
深夜虫
虫の音もふけぬる秋の長き夜をゝくりかねたる杜（雲イ）の月哉
月前望
物おもはでそれとなかめぬ秋の夜も月にはぬるゝ袂なりけり
寄海戀
しらすなよ人に心をおきつ浪かく計なる恨ありとも
寄鳥戀
鶯の音になきてたに年へにきぬれにし袖の春雨の空
寄夕戀
わくらはにまつ夜更にし契たにたへて恨る夕暮の空
同十月比雅經朝臣東國のかたへまかるとて道より
女房中に申ける
しくれする程は雲ゐをへたつともぬれ行袖を空にしられん
返し女房にかはりて

歸らこん程は時雨の衣手にへたてゝ[illegible]とも

同十月廿四日各所百首人〳〵つかうまつりしとき

音羽川

音羽川山にや春の越つらんせきいれておとす雪の下水

玉島川

玉島や川瀬の波の音はして霞にうかふ春の月影

高砂

浪まより夕日かゝれる高砂の松のうは葉はかすまさりけり

春日野

春日野やこその弥生の花のかに染し心は神そしるらん

三輪山

花の色になをおりしらぬかさし哉三わの檜原の春の夕暮

葛城山

朝みとりいとよりかくる青柳のかつらき山の春雨のそら

手向山

白妙になひきにけらしゆふたすき手向の山に花やちるらん

伊勢海

いせの海かすむ鹽干のかたをなみかへるや雁の聲そ聞ゆる

志賀浦

さゝ波やしかの浦風吹まゝに氷を出る春のはつはな

三島江

みしま江すなきさにしつむ松の葉の色より深き春の影哉

鹽竈浦

雲のなみ煙の波はそれなからおほろ月夜の鹽かまのうら

宇津山

するかなるうつの山邊にちる花は夢のうちにも誰おしめとて

芦屋里

芦の屋のなたのしほやのあまの戸をも明方そ春はさひしき

吹上濱

夕かすみふきあけのはまの此比は綠になひく沖津白波

湯等三崎

櫻咲山には春もなかりけり由良のみさきの明ほのゝ空

忍山

都にも花ちりあへぬみちのくのしのふの山も春風のこゑ

水無瀬川

ことに出ていはぬ色にやみなせ川かはらし春の山吹のはな

大淀浦

おほ淀の浦ちいとけき春の日に霞そ殘る松のむら立

田籠浦

ぬれつゝもしゐてやおらん田子の浦の底さへにほふ春の藤波

末松山

三月もや末の松山春の色に今一しほの浪に越けり

夏部

大井川

大井川みゆきふりにし色なから入江の松に夏も來にけり

信太杜

風の音も秋の色にやいつみなるしのたの杜は青葉なれとも

猪名野

風わたるゐなのゝをさゝ打なひき露もたまらぬ白雨のそら

御裳濯川

夏の夜も涼しかりけり神風やみもすそ川にすめる月かけ

伊香保沼

まこもかるいかほの沼のいか斗浪越ぬらん五月雨の比

天香久山

白妙に衣ほすてふ夏の日の空にみえたる天のかく山

大江山

大江山しけみかしたにやとりても人にしらるゝほたるえけり

難波江

なには江の芦火の煙立のほり夕日涼しき夏のうら風

美豆御牧

刈てほすみつのみまきの夏草は茂りにけりな駒もすさめす

松浦山

夏山やまつらか沖の西の海そなたの風に秋は見えつゝ

秋部

初瀬山

はつせ山ね覺おとろく鐘の音もめにこそみえね秋は來にけり

立田山

龍田山紅葉吹しく秋風に落て色つく松のした露

須磨浦

すまの浦あまのとわたる雁かねの聲すみのほるいさよひの月

宮城野

みやきのゝ萩の葉よはき朝露を枝なから吹秋の風哉

水莖岡

水莖の岡のあさちのきり〳〵す霜のふりはや夜寒なるらん

小倉山

おくら山峰の木葉にきゝなれて時雨せぬ夜もぬるゝ袖哉

宇治山

秋ふかき八十うち川のはやき瀬に紅葉そくたすあけのそほ舟

常磐山

秋そとも誰かはいひし椎柴のときはの杜に鹿は鳴也

三室山

みむろ山神のいかきにはふ葛のうら吹かへす秋の夕風

高圓山

たかまとの野分の風にけふみれはまたき草木の色そしほるゝ

伊駒山

いこま山雲なへたてそ秋の月あたりの空は時雨ふるとも

生田池

人すまはさらにやとはん津の国のいくたの池の秋の月影

清見関

きよみかた関てにゆる浦風にいや遠さかるあまの釣舟

武蔵野

みとりなる春はひとつのわか草も秋あらはるゝむさしのゝ原

伊吹山

玉かつらいふきの山の秋の露たかおも影を松むしの声

佐良科里

さらしなや夜わたる月の里人もなくさめかねて衣擣ん

白河関

たよりあらは都へつけよ雁かねもけふそ越つる白川のせき

野島崎

をとめこか玉ものすそやしほるらん野島か崎の秋の夕霧

明石浦

明石かたあまの笘屋の網にもしはしそくもる秋の夜の月

阿武隈川

あすはまたあふくま川のしからみに昨日の秋の色や残らん

冬部

清瀧川

清瀧や岩まによとむ冬川のうへは氷にむすふ月影

小鹽山

をしほ山松の葉そへて夕霜に色こそなけれ峯の木からし

住吉浦

住吉の松のあらしやさゆるらん浦の波千鳥声まさるなる

片野

夕かりのかたのゝ落葉むら／＼にまたひとへなる初雪の空

田蓑島

雨によるたみのゝ島のあま衣ほされぬ冬の袖かは

有乳山

冬の夜の峯のあらしや有乳山月よりかゝる野辺のあさちふ

浮嶋原

時しらぬ山は雪けの雲たかみ有明の月の浮嶋の松

安達原

霜はけさあたちのまゆみちり果て残らぬ色は何にそむらん

因幡山

霧のうちに冬はいなはの峯の松つゐにもみちぬ色たにもなし

鏡山

行としをかゝみの山の冬の月みる影さへにくもりなき哉

雜

伏見里

すかはらやふしみの里のさゝ枕夢もいくよの人めよくらん

霞浦

ほのかにもしらせてけりなあつまなる霞の浦の蜑のいさり火

石瀨杜
神なひのいはせの杜の初時雨しのひし色は秋風そふく
筑波山
つくは山しけきまさきの數よりもしらぬは人の心成けり
袖浦
袖の浦の波の花にもしらさりきいかなる秋の色に戀つゝ
益田池
思ひのみます田の池のみかくれにしらぬあやめのねに亂つゝ
高師濱
沖津波たかしのはまの松もなをぬるゝ計の名にこそ有けれ
阿波手杜
わか戀はあはての杜の夏の草人こそしらね茂る比哉
志賀須香渡
かくしつゝ暮ぬる秋はしかすかのわたりもあさき契とそ思ふ
濱名橋
しるらめやはまなのはしの絶すのみ下行水のふかき心を
磯間浦
かみしまや磯まの浦にあまのかるもにすむ虫の身を恨みつゝ
守山
時雨のみもる山影の下葉かは物思ふ袖も色はかはらす
佐野舟橋
かけてたに契し中は程遠し思ひをたえぬさのゝ舟はし
安積沼
人心あさかの沼のうす氷かつみなからに消やわたらん
松嶋
逢にかふる契をのみそまつ嶋やおしまれぬ身のならひ之せは
緒斷橋
あつまちのをたえのはしもある物をいかに朽行袖とかはしる
三熊野浦
みくまのゝ浦より遠に立霧のはれぬ思ひを猶やへたてん
鳴海浦
よそにのみなるみの浦の夕煙うはの空にもいかて賴まん
二見浦
玉くしけふたみの浦の夕つくよ明てもみぬは夢ちなりけり
名取川
をろかなる泪そあたの名取川せきあへぬ袖は顯れすとも
芳野川
吉野川あさき瀨もなく行水の人の心はうへそつれなき
鈴鹿川
底淸きすゝか河原のしき波のまなく時なくたのみてそふる
不盡山
ふしのねに時そともなく立煙遠近人もおもなれぬらん

さゝの葉はさやの中やま吹風にをのれぬよの夢もむすはす

嵯峨野

かり人の草分衣ほしもあへす秋のさかのゝ四方の白露

角田川

こよひ又たれ宿からんいほさきのすみた河原の秋の月かけ

餝摩市

草も木もしくるゝ比やあき人のしかまのかちも色まさるらん

若浦

わかの浦やはねうちかはしはま千鳥浪にかきをく跡や殘らん

會坂關

しるしらす行もかへるも逢坂の關の清水に影は見るらし

三津濱

みつのはま磯こす浪のわすれ貝忘れすみゆる松かねの夢

建保四年正月十九日　松迎春新

庭の松千年のかけの春の雨は下草までもあまねかるらん

前右大臣公繼見此會返上時女房許へ

かしこみも玉のみかとなさゝけみて嬉しさに社つゝみ兼ぬれ

返し女房にかはりて

うれしさを袖につゝまん玉ならはとの葉よりそ光そひける

同比實氏卿かもとへ梅花をつかはしたりしに其夜次兼他行の事ありて以朝兵衛佐範經かいまた六位に侍

澄山

都人かへる山路は跡たえぬさかひもしらぬ秋の夕きり

海橋立

草のはらいくのゝ末にしらるらん秋風そふく天のはし立

飛鳥川

あすか川なゝせの淀に吹風のいたつらにのみ行月日哉

鳥羽

年へぬる松もむかしに山しろのとはにあひみん千世の古道

辰市

たまひめやおほくの民のたつ市にくるれは歸る數も見えけり

吹飯浦

芦へより驪みちくらし天津風ふけゐの浦にたつそ鳴なる

布引瀧

たちぬはぬ紅葉の衣染はてゝ何山姫の布引の瀧

長柄橋

いにしへにあらすなからの橋柱ふりにし跡をしのはすもなし

玉川里

日にみかき風にみかける光かなのとかにすめる玉川の里

生浦

ちる浪は春の色にそ櫻あさのおふの浦風今も吹らし

佐夜中山

けるかもとへ申ける

くやしくも一よや花をへたてけんさそはれ出し月の行衛に

返し

さそひけん月のゆくゑと思ひしをくやしかりける花の色哉

其後又進言。殘而無指事。仍不能注置。

これやさは我身にとまる春ならんけふより後の花は有とも

三月十五日比内々進北野宮之詩歌合　春朝雨

吹しほるあさけの風の花の香にそむるともなき春雨そ降

社頭春

このたひはしらゆふかけて契をきし手向の花も神のまに〳〵

同比春

降雪にいつれを花とわきもこかおる袖にほふ春の梅かえ

春風にちり行かたやはれぬらん花より西の山のはの月

夏

五月雨の雲のはれまを待えてし月みる程の夜半そすくなき

みそき川夏のゆくせの水はやみかけもとまらぬ六月の空

湖上月

志賀の浦や秋しく月のこほりにも遠さかり行浪の音哉

杜間月

神なひのもりの木葉はしくれねとかねてうつろふ秋の夜の月

田家月

秋田もるかりほの笘屋うすからし月にぬれたる夜半のさ莚

同比二百首和歌

[illegible]（春二十四首之）

あら玉の年の明行山かつら霞をかけて春は来にけり

初春のはつねのけふの百千鳥鳴ね空なる朝かすみ哉

さほ姫のそめ行野へはみとり子の袖もあらはに若菜つむらし

春日野やまた霜かれのはる風に青葉すくなき荻の焼原

おく山や物うかるねもまさるらん人もすさめぬ春のうくひす

いつもきく入相の鐘の音までも思ひわかるゝ春のくれかな

（夏二十首之）

かた山のならのはかしは吹風の音こそまされ夏は来にけり

蟬のはのうすくれなゐの遅櫻おるとはすれと花もたまらす

けふのみやかものみあれの葵草心はかりはかけぬまもなし

五月まつ卯花月よ空はれてかけにかくれぬほとゝきす哉

はちす葉や露の玉より池水のにこりにしまぬ夏の夜の月

玉 みよしのゝ青根か峯の時鳥苔のむしろにきく人やなき

夕立のなこり計に庭たつみ日比もきかぬかはつ鳴なり

小山田のさなへもとをき月影にひかりそうすきよひの稲つま

山里のそともの竹を吹風に夕日涼しき日くらしの聲

五月雨のはれまも青き大空にやすらひ出る夏の夜の月

螢とふ野澤のあしのたまゆらも浪のよすかに明るしのゝめ

青柳のかけふむ道のわすれ水やすらふ人は春ならねとも

照射するたかまつ山のしかすかにをのれなかても夏は知らん

以上二首欠
聞さむき有明の月におとろきて衣うつなり遠の里人
秋をたにいつと思ひしあらを山はかりほす程に成そしにける
山風になひくあさちは霜かれて色ことになる岑の紅葉ゝ
しくれ行よもの木の葉の秋風をよそともなき松の色哉
榊とる比とは見えすならの葉のもとつ葉もなき時雨なれ共
とふ人もうけくに秋のおくれは道ふみわけぬ紅葉をそ見る
長月のはつかあまりの山おろしに紅葉はなからよはる虫の音
とにかくになかめし秋もとゝまらす闘のわらやの夕暮の空
敷島ややまとにはあらぬから国の虎ふす野へも冬はきぬらん
冬きてはあらはれぬらん芦の葉にかくれてすみし水江の月
大井川おろす筏のうへにしもぬれぬとうかふ冬の紅葉ゝ
冬こもる尾花かもともあはれ也穂に出し秋の名残はかりは
高砂の尾上の月やふけぬらん川音すみて千鳥鳴也
山里のまかきのすゝき霜かれぬをさゝ計は風もたまらし
よひのまに窓うつ雨ときく程にあられにさむる床の夢
鴫のゐるかり田の面はこほるより残るもさゆる水の音哉
みよしのゝ嵐そ寒くしくるなるあすは雪とやふる里の空
よしの山いりにし人の音つれも絶て久しき雪のかよひち
百敷や霜夜の月の影寒て庭火も白き山あひの袖
草枯の入江のこほりかさぬらしむれゐる鳥の聲そすくなき
ふかき夜の雲ゐの月やさえぬらん霜にわたせるかさゝきの橋

冬の色よそれとも見えぬさゝ島の磯こす浪に千鳥立之
色ふかき庭の木葉をみしよりもつもりてをしき雪のくれ哉
わか戀はこほらぬ水にふる雪のそれともなくて消やわたらん
今朝はしもをきけんかたも白露の玉緒はかりあるはあるかは
みさみゐる荒磯波による玉のありとはみえて手にもかゝらす
あしかものさはく入江の水こもりに身を浮草のぬれつゝそ降
今更に人やはなにとつらゝゐる下にもしのふみつからそうき
人心のきはにすたくかけろふの夕暮ことに何みたるらん
逢事はいなへの沼のおほゐ草よそにやこひん袖はくつとも
奥山のかすみかくれの櫻花またみぬ人に戀やわたらん
さりともと思ふ心になからへてあらは逢夜を身に頼つゝ
思ひやるそなたの空もしくるゝかこちかほなる雲の色哉
思ひ出よ木葉の下の忘水うつりし色に絶ははつとも
僞とおもひなからも頼む哉うきをしらぬは心なりけり
よしさらはたかまの山の秋の雲しくるゝ色をよそにたにみん
今は又思ひたゆへき夕暮をしらすかほにも何なかむらん
我袖や松のかけなる秋草のうへはつれなき色に出なん
鈴鹿川いせほのあまの暇なみいかなる瀬にもかけぬ日そなき
男山むとせの春はかさねきぬ雲ゐの櫻あはれともみよ
里人のとは夏野にかる草のしけきめくみなよに頼みつゝ
月の夜の松のあらしや旅人の千々に物思ふつまと成らん

こよひねて朝たつ袖やまかふらん昨日のくれの峯のしら雲
明わたるしのみやかはら霞はれて遠かた人の袖そみえ行
山かつの竹のあみ戸の隙をあらみおくもあらはにすめる月影
から崎や鳰のうき巣のいかにしてさすらへわたる世を頼らん
あはれなるとを山はたのいほりかな柴の烟のたつにつけても
中〳〵にをちかた人やなかむらんわかすむ山のみねの月かけ
すまの浦やあまの□とをき入汐にうつるも青き山の色哉
明石かた浪ちはるかに成まゝに人こそ見えねあまのつり舟
幾度かしくるゝ空の鐘のをとにけふもくれぬと打なかめつゝ
百敷やふるき軒はのしのふにもなをあまりある昔なりけり
春のたつ民のかまとのけふりにものとけき空を人にしれつゝ
雪のうちに春やこしちにあら玉の年たち歸る山風そふく
朝日山のとけき空のひかりにや春を知らんうちの里人
風吹は峯のときは木露落て空よりきゆる春のあは雪
君かため出る野原のかたみにやしゐても春のわかなつむらん
鶯のなきてうつろふ涙にや香さへこほるゝ梅のした風
かすみ行なにはのあしのうす墨に數かきまよふ春の鴈かね
たかせさすさほの川なみ立にけり山の木のめも春風そふく
いかならん人の心もすみよしのあさかの浦の春の明ほの
櫻咲岡への草の淺みとり花もひとへにかすむ比かな
かはらしなふるき都の家櫻うへけん人のむかしなりとも

春といへは花の盛にかへる鴈あひみん事も人のためかは
春風となにいとふらん鶯のをのかはふきに花もこほるゝ
ほの〳〵と明行山の櫻花かつふりまさる雪かとそみる
こきまつる柳櫻のからにしき都のものと何ならひけん
春雨を峯の櫻に吹ませて嵐にまさる山川の水
大方のあけほのとしもなかりけりみ山のおくの春のけしきは
行水のそこはかとなくうつろひぬ山ふきのせの花のしからみ
夕日さすむかひの岡の岩つゝしうつろふ色は春やくれぬる
山ふかき櫻ふきまく風の音の花のまきれに春や行らん
もろ人の花のたもとは夏くとも衣かへうき物とやはおもふ
夏衣きなれの里の時鳥かはらすそ聞去年のふるこゑ
玉川の里わく夜半の月なれや卯花さける夕やみの空
河なみにねさしとまらぬ草の名のうき身こかれて飛螢哉
時鳥からくれなゐのなく聲や雲のはたての色にみゆらん
夏引の手ひきのいとのおりからや風もさはらぬ蟬の羽衣
かやり火の煙ふき行谷風に絕〳〵くもる宿の月かけ
池水のはすのうき葉にかくろへて夕くれちかく鳴蛙かな
五月雨にかりほすひまも夏草ののしまか崎も浪越る比
月たにも雲のいつくに夏の夜のやみはあやなし曙の空
早苗とるたこのもすそのぬれ衣日も夕風（雲イ）や涼しかるらん
夏山の月をやしたふ時鳥戀しき人にたれとなくとも

夕月夜空も涼しき松かけの浅ちかうへのひくらしのこゑ
わひつゝもさてやねなゝん時鳥こぬよの月はむら雨もなし
秋やいまちかのうら半の夕まくれ浪の花には時もわかねと
けさよりや野なる草木もあた人の露分衣秋風そ立
初鴈も聲ほにあくる秋風をしるへに出るあまの釣舟
吹むすふはつ秋風の葛のはにうらみそめたる松虫の聲
むさし野の萩のうへこす秋風に下葉の露やかすまさり行
わけきつる野原の露の白妙に袖も殘らぬ月の色哉
大空のくまなき月はやとれともみくさそくもる秋の池水
女郎花末もとをゝにしく露の色にしほるゝ野への秋かせ
立田山さえては春の色もなしうす霧かすむ秋の夜の月
露はなを千種なからにあたし野の秋を鶉の聲のみそする
夕つく日さすや岡へのいほりまてなひく田のもの急雨のこゑ
あき山の四方の草木やしほるらん月は色そふ嵐なれとも
急雨のなこりもしはし時雨けりしのたの杜の秋の夕風
故郷の軒の玉水をとつれてしのふにふるゝ秋の月かけ
しくれ行まゆみのおものうす紅葉たまらぬ色に秋風そふく
秋ふかき軒はの木葉散にけり嵐にはるゝねやの月影
秋風は桐のおち葉に音信て袖むなしき村時雨かな
山人の日も夕こりのしもとはふまさきの葛いまやそむらん
紅葉ゝの色こき時はあかねさす峰の朝日もわかれさりけり

音羽川秋せく水のしからみにあまるも山の木葉也けり
紅葉ゝをぬさに手向の山風の行付きたぬ秋の暮哉
冬きては時雨そいたくまさるらし木葉にかはる色はみえねと
置霜もなを白妙の菊の花いかなる色にうつりそ(たイ)めけん
いか計麓の里のしくるらん遠山うすくかゝるむらくも
水鳥のをのか青はや殘るらんゆふ霜かれのあしの下かけ
みやまより時雨はゝるゝ村雲に日影なみよる庭の松風
駒なへてかりはのをのゝ夕風に鳥立の草の色そ寒けき
ふる雪はかつ消ゆけとつの国の芦屋の灘の音はまさらす
都人かつふりまさる庭の雪たつねて後のあとはなくとも
夜やさむきとよのあかりの冬の月をとめの袖は霜に寒つゝ
しくれにしまかきの竹のよとゝもに色も替ぬ冬の月影
影きよき月の鏡の池水にくもりもあへぬ雪は降つゝ
山川の水もうすき氷の面にむら／＼つもる今朝の初雪
降つもる雪のあしたの山里は鳥けたものゝ跡たにもなし
つま木こる宿はけふりのおもなれて雪けもわかぬ冬の夜の月
川なみのいかたしはやくさすさほのとゝめもあへぬ年の暮哉
かり衣萩の葉分の秋の露消ても色に出さらめやは
あた名やは立をたまきのつかねをにせんかたもなき我心かな
いかにしていかにねしよの名殘とて後あぬよひ／＼そなき
忘らるゝうき名やまたき立田姫たかことの葉に思ひそめねと

思ひ侘てもまたれし夕暮のよそなる物に成にける哉
うきたひにそむきても又いかならん此世ひとつの思なられは
あし引の山より月の色に出てあしの山引より三の色
僞とおもふ心もさたまらすたかまことなる夕くれもかな
かちをたえことうら風に行舟のうきせの浪にこかれてそふる
明ぬとて峯にわかるゝ白雲や暮をまつまも消かへりつゝ
あかつきのゆふつけ鳥のから衣たかきぬ〳〵の名殘なるらん
との葉も我身しくれの袖の上に誰をしのふの杜の木枯
曉の名殘を月にとゝめてもいやはかなゝる鐘の音哉
とこの山下ゆく川のいさやまたしらぬあふせに何よとむらん
うし沖も身をはいつくに奥の海の鵜のゐる岩も波はかゝらん
あめかしたふるにかひあるたのみ哉山田の原の神のめくみを
人心みたらし川の清き瀨にすみにこれるも神やわくらん
神さひて昔も遠き住吉の松にかひあるとの葉もなし
家〳〵の思ひや人はかはるらんいつくも秋の月はみるとも
古鄕はすみこし池もみくさゐて月も昔の物とやはみる
萬代を岩井の水にむすひ置てにこらぬかけと思ひける哉
白妙のかへにそむけるともし火の影かすかなる有明の空
今更にとふへき人もあらし吹三輪のひはらの音のみそする
むすふ手のつめたにひちぬ山水に底ふかくすむ月の影かな
都人かりそめなりし草の庵にいつすみなるゝ心なるらん

春秋の花も紅葉も時しもあれつれなき松そ色はそへける
里遠くはやまの道や成ぬらん筧の水の音そまれなる
あきらけきならに出て暮行空部の夜半影もすむ心かな
いく秋もつきしとそ思ふ水無瀨川おひせぬ菊のかけを關つゝ

同八月廿二日歌合當座　朝紅葉

横雲は明はなれゆく山の端に殘る紅葉も秋風そふく

夕擣衣

秋風も夕やさむく成ぬらんうちもすさめぬあさのさ衣

深山霧

槇の葉のつれなき色はなかりけり秋のみ山の夕霧の空

羈中戀

かきりあれはおなし都の空たにもへたてゝ遠き心ならひを

海邊戀

消かへりうはの空なる煙たにと浦風はいふかひもなし

同廿四日當座　夕草花

みしまのや夕露おもく吹風に色の千種の花染の袖

古寺月

をはつせやひはらか月ははれにけり入相の鐘に秋風そ吹

空山鴈

山里のみねの木葉や散ぬらん枕に近き秋のかりかね

寄雨戀

大かたのなかめにまさるたもとかな野のしのふの秋の村雨

寄石戀

わたの原あら磯なみの岩のうへによせくる玉の碎けてそふる

寄草戀

忘草露ふかきよの夢ちにやかよへる袖のひるよしもなし

同日當座歌合　憚老年戀

菊の露ひるは思ひに消なから老をせかるゝみつからそうき

被妨人戀

哀また物や思ふとゝふ程の人にしられぬ夕くれもかな

同比當座　山秋

時雨かとふりそふ秋の木葉にもすこしはくもる山の端の月

寄川戀

哀なを岩きりとをす山水も下の心に流むものかは

寄月述懷

見てもまつ久しく成ぬ百歳や昔も遠き雲の上の月

同九月十三日夜及深更定家家衡等卿なと參て今夜月いかゝむなしくはなとすゝめ申かは於清涼殿東廂詠之　當座　月前竹

秋風は雲はかりをやいとふらん竹ゝをとせぬ庭の月影

月前松

月のすむ玉松かえの夜半の露をみか光も秋そそひける

同十月十六日當座　山時雨

たつた山一村殘る紅葉ゝにあかすしくるゝ峯の木枯

江上月

里のあまのよるやく鹽の烟にや霜にこり江の冬の夜の月

寄夏衣

しのゝめの道のさゝ原露分てぬれ行袖と人にしらせん

同十一月一日會　雪山月

曉の霜ふきはらふ松風にひとりはさえぬ山のはの月

遠村雪

かきくらす野山の末の雪のうちに一村見えて立けふり哉

寄蘆戀

人しれぬ浦半の芦のかれしよりいく夜の浪にむすほゝれなん

同比不廻時日詠七十首其內廿首人失中

長門なる春のあしたの宿ことに人の心もあらたまりけり

下もゆる草葉もみえぬあけの雪に跡ふみつけてわかなつみけり

我宿のまかきの梅の花盛道行人の心をそみる

鶯の羽風ならても匂ひけり軒はの梅の春の夕くれ

さほ姫の柳のかつらいくかへり春はみとりの浪もとくらん

待出しもなに山のはにをいそくらん更れはかすむ春の夜月

はしたてのくらはし山の櫻花雲吹ませて春風そふく

咲にけり遠山もとの櫻花いつれあるしと山はわかねと

かへる鴈曉としはわかねともいく夜ね覺の人か聞らん
櫻花おしまぬ人の心にはのとかにそふく春のゆふかせ
小山田の苗代水に雨過てうき草かくれ蛙なくなり
雨ふれは池の藤なみかけそへて松の葉とにかゝる白露
くれて行春の日數も花の色もうつりはてぬる夕暮の空
きのふかもくれにし春のかたみたに夏の衣に風もいとはす
ゆふつくひ入相のかねの聲くれて初瀨の檜原風そ凉しき
ふしみ山さみたれしけし里人の衣ほすへきひまもなきまて
曉の空しつかなる月影に行かたみゆるほとゝきすかな
夢なれやふかき夜床の郭公たゝ一聲の村雨の空
水無月のはつかあまりの月影に里なれ過る時鳥かな
みそきする川への草の白露も秋をかけたる色にみえつゝ
夏と秋とゆきゝの岡のよるの雨に萩のふるえは色替りけり
秋たちてあしたの原にをく露や我衣手の色やそむらん
けさはまた秋としもなき袖の色を思ひとかむる荻の上風
吹風を空にしれとやあまひこの音羽の山に秋は來にけり
秋はきてなれし扇も置露の色よりつらき風の音かな
をかやはふ山下風に鳴鹿の聲のみたれてをける露哉
大かたの秋のね覺やかこつらんをのれ思ひの松虫のこゑ
山川の岩まの波のはやけれは空行月もやとり兼つゝ
二見かた月すむ浪の玉くしけ明なは秋の色やなからん

ときは山よそにしくるゝ秋風の身にしむ色はまつそみえける
夜半の霜夕の雨も秋ふりてさも色しらぬ軒の松哉
立田姫紅葉の衣しくるれは山風にこそ色まさりけれ
秋の行みちのしるへはなけれともしくるゝかたや冬の山風
しからきのと山の雲の夕時雨冬のけしきに散木葉哉
大井川ふせくいかたも水こえて木葉殘らぬ山おろしの風
やとりこし露のよすかもあれ果て風のみすさふ蓬生の月
ふしのねに冬はそふへき煙たにそれともみえす降る白雪
雪降はをのかれ山やあれぬらん宿の梢につくみ鳴なり
山人のかよふ計の道もなし吉野の奥につもる白雪
芦鴨のすたく野澤の忘水たえ〳〵にこほる比かな
あつさゆみいそへの松のいく世へて時雨もしらぬ色か契し
都にはよそに思ひし山のはのなれける秋の月の影かな
故鄕は露のよすかにあれ果て虫の音しけき淺茅生の月
青陽のいとかの山の櫻花都のにしき立歸りみん
立田山あり明の月の長き夜はゆふつけ鳥も思ひかぬらし
はま荻をいもこひしらにおりしきていく夜かいとふ袖の鹽風
身をしれは賤のをたまき己のみよをふる道はさやはくるしき
世中はとてもかくても過にしをおもひ出たん思出もかな
世にたては人のつらさもうき事も思ふよりこそ思ひえけれ
久かたの空行月に契つゝ猶いくとせの秋もかさ（きら歟）ゝす

・又同比題しらす
しのふ山下はふ葛の下にのみえやは夕の露そうつろふ
同比夏　當座
筑波ねのしけきの木間かけはあれと秋にはかはる夏の夜の月
題不知
いかゝせんあしの八重ふきつゝめともむなしき空に餘る烟を
同十月十日夜夢或人書に此歌かきて送れる
哀なりたえぬ涙のかくはかり色替るまておもふ心は
建保五年三月山花を　當座
山のはや櫻にこめて見えさらん花より出る有明の月
枝折せしは山か峯の櫻花かへさは雲の色そ涼しき
同四月廿日内々北野宮歌合　羇旅時鳥
郭公み山なからのはつ聲を苔の枕にあかつきそきく
川邊夏草
夏（川）草やあさ瀬になひくにこ草のにこらぬ水の色そ涼しき
寄松述懐
今そしる北野の松の陰しけみあまるは神のめくみえけり
同比又進同宮歌
一すちにたのむも神のちかひそと思ふもうれし行末のそら
同六月二日當座會　山春花
しをりする人もまれなるおく山にいたつらにのみ花や散らん
をしなへて花やさかりに過ぬらん春風ならぬ山のはもなし
水夏月
手すさみにむすはんと思ふ池水にかねても月の宿りける哉
見渡せは行せも遠き山水に空も涼しくうつる月影
野秋風
むすひけんたか手枕としらねとも野原の薄秋風そ吹
百草の花ふきしほる秋風にその色となき野への白露
同廿四日歌合　夕風　當座
百敷やみかきの竹の夕風におさまれる代の程やみゆらん
秋風もわきては染ぬ梢より夕日うつろふにしの山のは
くれかゝる夕かけ草の露なからむすほゝれ行秋の初風
おりしもあれ入相の鐘のをとつれて軒はの松に秋風そ吹
野分するをのゝしのはらたれゆへに亂れてをける秋の夕露
曉月五首
草の葉の露のやとりのあたなるに猶おしまるゝ有明の月
かへるさのたか涙とはしられねとも月にみかける道しはの露
寢覺する有明かたの月影を心ならてもなかめつる哉
曉の空もしつかに行鴈のはねうちかはすむら雲の月
しのゝめの夕つけ鳥の鳴聲に猶殘ある秋の夜の月
同廿五日當座　野亭鹿
宿ちかき野への草葉の秋風を鹿の音なからうつしてそきく

行路霧

明ぬとて朝立人の聲す也霧のあなたやとまりなるらん

寄水戀

思川岩まかくれに行水のわきかへるともしる人そなき

同七月一日依日蝕人々參籠して歌合に　關路早秋

夏秋の行きをしのへあふさかのゆふつけ鳥のあかつきの聲

野草露滋

いつまてか道ゆき人の結ひけん露にまかするをのゝ淺ちふ

同八月十五日夜今夜蝕中於殿上人々詠歌出之　當座

世をてらすあまねき空の光にも月をそ千代のかけに頼ん

さよ更て空もしつかに行月の休らふ程の村雲もなし

なかめつゝ月の桂の紅葉はゝ時雨せぬよそ色まさりける

同十月九日於仁和寺殿人々歌つかふまつりしに當座昨日御方違今日逗留也

清水せくかり田の面の冬かれにをのれもうすき山のはの月

嵐山時雨やちかくかよふらん都にも似ぬ庭の紅葉ゝ

同十六日當座歌合　冬空月

山の井のかけみし水のこほるより月もさえたる明方の空

朝落葉

吹しほる四方の紅葉の散はてゝをのれもよはる今朝の風

夕殘菊

あまつ星光をそへよ夕くれの菊は籬にうつろひぬとも

同十七日當座歌合　浦千鳥

月影もたかしのはまのさよ千鳥聲すみのほる浦風そ吹

野初雪

朝氷野澤の水のけぬかうへにまたも降しく初雪の空

寄竹戀

霜さゆるいさゝ村竹いさやまたしみたにつかぬ色もかひなし

同十八日當座歌合　山亭草

秋たにも人めかれにしおく山になを冬こもる道の下草

海上霞

難波かたむれゐる鳥の音つれてあられにさはく夕波の聲

旅松風

旅枕山ちもふかく成まゝにきのふの松の秋の風かは

同十九日當座歌合　春雨

槇もくのひはらの山の朝くもり空もみとりに春雨そ降

夏月

時鳥鳴一聲の程たにも月より後のあかつきそなき

秋露

草の原うつらふからに白露の秋をきてや色増り行

冬風

紅葉ゝをあるかなきかに吹捨て梢にたかき冬の風

變戀
思ひ初し色こそ見えねたけくまの松も昔の秋の夕暮
同廿二日　水鄕冬　當座
立田川なかれやみにし紅葉はの岩まに殘る色そすくなき
風さむみよるやあしろのひをへつゝ衣手うすし宇治の里人
たかしまやあとかは波のあさ霧に身をかくろへて千鳥鳴之
同日探題詠歌　當座
夕暮の露をも露とみゆはかり秋風ならぬ草の葉もなし
むすひあくるたらひの水の程なきに空まてうつる夏の夜の月
同比當座歌合　朝千鳥
伊勢のあまの朝けの烟雲にのみ聲も消行浦千鳥哉
夕川雪
夕日さすとをき山へはしくれつゝ谷の小川にふれる白雪
夜爐火
山かつの柴おりくふる名殘とやわつかに殘す夜半のうつみ火
言出戀
しらせては思ふ計の夏草のふかきみたれは露もかはらす
絶久戀
忘るなよそをたに後のなくさめになかめし月も限こそあれ
齋宮群行事を思いてゝ
行末も照すひかりの長月につけのをくしはさしはなれにき

同十一月四日歌合　冬山霜
敷島やみむろの山の岩こすけそれともみえす霜さゆる比
冬野霰
むさしのゝ草はみなからうつもれて霰に殘るさゝの音かな
冬關月
風さゆる夜半の衣の關守はねられぬまゝの月やみるらん
冬川風
山川の木葉の後のうす氷これもかけたる風のしからみ
冬海雪
風さむみ日數もいたく降雪に人やはおらん伊勢のはま荻
冬夕旅
ぬれきつゝとふへき山の夕暮もおなし時雨の末の白雲
冬夜戀
冬草の枯にし色はかひもなし人の心もなかき夜の霜
同夜當座　深夜氷
ふかき夜の嵐もさえて行舟の跡より氷る冬の池水
寄爐戀
幾夜かはさてもふせやに埋む火の消ぬ思ひはあるかひもなし
同廿一日當座歌合　浦邊雪
明石かた浦風はらふ浪の上につもらてさゆる雪の色かな
川千鳥

ともチ鳥よるへやしらぬものゝふの八十うち川の明くれの空

羇中月

あまさかるみちの山風さゆる夜の衣手うすく月やすむらん

同十二月一日は松尾社行幸之。朝は晴て白路頭雪下。桂河の浮橋渡程樂譜。雪色繽紛。而徐及黃昏。景色面白てよめり

ふしのねを雪のふゝきに吹ませてくるゝも白き瀬々の川波

さて御社にいたりて

けふとてやまれにみゆきのしるしとも松尾山にかゝる白ゆふ

建保六年二月廿一日内々歌合　關路曉霞

春のきる衣手白し東路や霞のせきの明ほのゝ空

野外朝鶯

朝またきすそ野におろす花の香を風のたよりに鶯そなく

山中夕花

夕月夜空ふきはらふ山風に雲もまかはて散櫻かな

旅宿春月

來しかたのさかひやいつこ跡もなしおほろ月よのさやの中山

春夜忍戀

春の夜のはかなき夢もかよふらん忍ふの里は道遠くとも

同三月日吉行幸時

けふそみる立白浪の音にのみありと聞こしから崎の松

志賀の浦や山のはとをく見渡せは波の上より消るしら雲

同四月一日。内々以參議定高卿臣伊勢へ進物之次に。詠十五首和歌進之。於寶前燒之由仰了。仍不注之。

同五月晦日内々歌合　春戀

鶯の鳴や泪のかことにてをのれ染行花のしたつゆ

思ひあまりなかむる空のうき雲にくもり果たる春雨そ降

夏戀

をのつからむすふ契も夏川のうたかた人に消つゝそふる

五月雨によとのわかこもこす波の下のみたれはしる人やなき

秋戀

秋風のするのゝすゝき一かたに思ひさためぬ戀の道かな

白露のをくとは暁くよひ／＼にぬれていかなる袖とかはしる

冬戀

紅葉ゝをみた染はてし夕しくれ人の心になをや殘らん

降雪はしのきもあへぬすかのねのなかきいくよを思ひ消つゝ

旅戀

都にもよそなる人の面影をしたはゝ旅に何うらむらん

しのはしよしらぬ野山の旅枕つゝむ計の人めたになし

同七月七日當座

七夕のうはの空なる契にも秋のこよひをいかて知らん

同十二日當座　雪間月

をしなへて秋の空行村雲も月のあたりの色はわきけり

庭上露

染わたす草葉もしらぬ庭のおもにいたつらに置秋の夕露

又日當座　秋朝風

萩か花下葉うつろふ朝露に袖もほしあへす秋風そ吹

秋夕草

山のはにしくれもまたき秋の色を草葉にそむる夕附日哉

秋夜戀

秋の夜のなかきかたみのかひやなき別れしまゝの山のはの月

同八月十三夜宿於清涼殿詠池月久明々群臣應製臣

上卿今夜　題者右大臣　序同　講師同　讀師定家

朝臣　下讀師信時

池水に汀の松のうつるより月も千年のかけやそふらん

同九月十三日當座　深夜鴈

さ夜ふかき雲ゐの鴈の羽風より山の端はれて出る月かけ

曉秋風

いつかたに明行雲をはらふらんふきも定めぬ秋の木からし

朝紅葉

立田山あさをく霜のけぬかうへに時雨をそへて染る紅葉は

田家霧

我かとのいほしろ小田の朝霧にむれゐる鳥もたまよふらし

旅擣衣

草枕むすひもなれぬ初霜にこの里人は衣うつ也

同比樣々題にて人々歌つかふまつりし次に七夕を

當座

ともしつま行あふ比に成にけり雲井にみゆる天の河波

天川うつろふかたもしられねとまことその渡りに秋風そ吹

ひこ星のけふ待えたるえにしあれはたえかれけれなゝよには衣

天川夜半のむら雨まてしはしかへさの舟に水まさるへく

夕暮の秋風ちかく聞ゆなり天の川霧いまやはるらん

久かたのほしあひの空もくもりなし天のとわたる秋のよの月

いく秋の星あひのかけをうつしてゝ雲ゐに見る宿の池水

同十三日夜會　秋山月

しらかしの葉にをく露におもれとも山ちたとらぬ月の雫哉

秋野月

はし鷹のとかりの末柴ふみならし歸る野頃に出る月影

秋庭月

心あらはゑしのたく火もたゆむらん今宵そ秋の月はみるへき

同廿五日當座歌合　秋歌

霜さゆる籬の花（菊イ）の色なからうつろひよはる松虫のこゑ

瀧のうへの御舟の山やしくるらんくれなゐおろす水の白波

をくら山すそ野の里の夕霧こそみえね衣うつ也

なかむれは衣手さむし長月の有明ちかき山のはの月

同九月盡　雨　當座

暮かゝる秋をおしまぬやとやなきふるは泪に打時雨つゝ

庭菊霜

うつもれぬまかきの菊の匂ひ哉霜より外の色はみえねと

冬山朝

はつせ山明ぬる雲の跡もなし雪にこもれる峯の月かけ

冬海夕

冬の日のなきたる沖の夕千鳥遠さかり行限をそみる

寄風祝

いく千世をあまつ雲ゐに契るとも人にしらする庭の松かせ

一葉にかきて

思ひそめし心の色は時雨にもあらはすほとの言の葉そなき

閑院南庭月を見て

庭の面は松より外のくまもなし眞砂も白くすめる月かけ

あまたよめる中に

我身から人のつらさもありやとて心のとかをもとめわひぬる

よしさらは數かく計なりもせよ思はぬ人をおもふなみたは

侘はつる現のうさやなれにけん思ひねならぬ夢をたにみす

をろかにそ人のつらさに歎きける昔むすへる中のへたてを

身をつみてなけく心を思へかしたれもみるらん夕暮の空

承久元年正月廿七日會　松上霞

見渡せは霞そたてる高砂の松はあらしの音はかりして

翫梅花

あかなくにおれるはかりそ梅の花香を尋てや鶯のなく

同閏二月五日内々八幡宮へ遣歌合　雨中柳

白露のかゝれる枝の玉柳しつくもしけき春雨そ降る

月前霞

あし引の山の端まてはかすめとも空よりはるゝ春の夜の月

寄春雑

八幡山たかき峯よりてらす日の春の光に身をまかせつゝ

同八月鴨社歌合　朝野菫

朝日さす蓰の野へのつほ菫行てにつまん露しけくとも

水邊鶯

浪かくる岸の櫻の花さかりあらぬさまなる鶯の聲

社頭風

榊かきのよもの木陰を頼む哉はけしき比の嵐成とも

賀茂歌合　曉山櫻

山櫻花より外のときは木はありともみえぬ春の明ほの

浦歸鴈

こしの海の浦半の波もある物を花なき里と鴈歸る之

同比當座歌合　春風

やたの野の雪まの草の淺みとりなひかぬ色に春風そふく

春雨

池水の汀の柳露散て浪にしらるゝ春のむら雨

春月

春はなをかすみにけりな久かたの月のかつらも色かはるまて

春雪

かすか野の若菜も白く降雪に春の衣はぬれぬ日もなし

春野

誰しかも野へに心のあくかれてそこともいはぬ花をみるらん

春水

春の田の苗代水にせきかけて谷の小川は行なやむ之

春山

續古 白雲や花よりうへにかゝるらん櫻そ高き葛城の山

春里

山ふきの花のしからみかひもあらしとまらぬ春の井手の里人

春戀

いふき山もゆる思ひの煙をもかすめる比はしる人もなし

春祝

神風やあまてるかけの春の日になかき契を猶たのむらし

同二月廿二日當座續合　深山春

おく山の岩根の櫻いたつらに人もおしまぬ花や散らん

夕歸鴈

夕まくれ空もみとりに行雲の絶まにみゆる春の鴈かね

水邊秋

山川のいは行波のわきかへりしはしはよとむ秋の紅葉は

朝野鹿

色かはる野路の萩原あさな〳〵露分なるゝさをしかの聲

被忘戀

しられてのかひやなくさの浦にほすみるめをよその袖に懸つゝ

曉更戀

おもふともしらてや人のなかむらん我のみぬるゝ有明の月

同十八日題をさくりて讀之當座　遠山櫻

きのふまて雲ゐにみえしあし引の山もあらはに散櫻哉

隔霞戀

しられしな思はぬ中は春霞へたつる野へにもゆる若草

同廿三日當座續合　早春朝

梅かえに今朝ふる雪はかつ消て殘る匂ひを春風そ吹

夏曉更

よひのまはむすひし宿の池水に涼しくすめる有明の月

暮秋夕

草も木も暮ゆく色にさひしきは外山の庵の秋の夕暮

冬深夜

さよふかき峯の嵐におとろけは軒はの松に霰降之
露中月
月影もくるれはやとるさゝのはを幾夜の露にむすひきぬらん
嫌人忍戀
忍へたゝしつのをたまきいやしきにかよふはしたの心たえとも
老後初戀
身を秋のおいその森の夜半の露はしめてそむる色を見せはや
曉時鳥をきゝて
かへるさの有明の空の時鳥いかになかめていかに聞らん
同北當座　春
住よしの松のたえまの夕かすみよすともみえす澳つ白波
誰か又あはれとおもはん鶯のなく山陰の春の夕くれ
秋
まれにきて心そとまる山里の霧のたえまの朝かほの花
嵐吹をのゝしの原音さえて霜にさやけき秋の夜の月
同七月百番歌合　野徑霞
夕月よかすむ末野に行人のすけの小笠に春風そふく
深山花
みよしのゝ山のあなたの櫻花人にしられぬ人や見るらん
暮春雨
花もみな散にし山のふかみとりおしまぬ色に春雨そ降

曉郭公
あかつきと思はてしもや時鳥また中空の月に鳴らん
水邊草
瀬をはやみ岩まもほそき谷川に草のかけたる水のしからみ
秋夕露
さゝ波にてひきのいともたゆむらん草の露吹秋の夕かせ
聞擣衣
秋風はいたらぬ袖もなき物をたか里よりか衣うつらん
庭紅葉
山里はとはぬ人めも紅葉はも枯てうつろふ秋の夕くれ
冬夜月
山風にしくれや遠く成ぬらん雲にたまらぬ有明の月
杜間雪
明わたるけしきの森にたつ鷺のうは毛もふかく雪はふりつゝ
同八月十六日よめる
百敷やけふひく駒のかけそへて雲ゐの月は千世もすむへし
同北當座　田曉月
あけぬるか遠かた人はこえ過て河瀬の霧に月そ残る
聞歸雁
こしちより花の都の旅なれや宿もさためす鳴そ鳴なる
同九月六日當座　寄雲戀

我戀は行のは山に降る霰いくよをすきて露と消なん
題しらす
我ゆへにをのか心をくたきつゝ人のとかにも思ひける哉
同七日內々進日吉歌合　深夜秋月
ふけゆけはくらき軒はのかけもなし庭をさかりの秋の夜の月
遠山曉霧
昨日見し山のいつくにかゝるらん霧のするゑなる有明の月
社頭松風
かはらしな春見しまゝの峰の松音に嵐の秋はありとも
同進十禪師　暮天聞鴈
折しもあれ人まつ宵の夕暮にたか玉札の初鴈の聲
紅葉添雨
秋山のよもの紅葉の夕時雨あすさへふらはまつそ殘らん
湖上眺望
雲霧のおさまる秋のあさなきも猶山遠ししかの浦波
同十月六日よめる多社行幸次日なり　寄社頭祝
いなり山きのふの暮の夕附日さして千年のかけそしられし
同十月十三日。左大臣九條亞相向大井川邊。翫紅葉
之由有風聞。仍以瀧口平貞綱遣之
紅葉ゝは昔の色にかはるともふるきなかれの跡はみゆらん
かへし　左大臣道家
紅葉ゝも入江の松にふりぬれと千世のなかれの跡はみえけり
付使歸參進別一首書一葉
いにしへのみゆきもしるし嵐山木葉ふりしく跡をみるにも
又かへし　歸洛後遣之
嵐山木の葉ふりしく音にのみ聞はかひなき千代をみるにも
題しらす
人も守心のせきをたれすへて又あふ坂に道まよふらん
たえはつるさのゝ中川中〳〵にわたりか初し身をそ恨る
なかめわひぬ見はてぬ夢のさむしろに俤なから殘る月かけ
承久二年二月十三日會　春山月
初瀨山ひはらにくもる月影を霞のとかにたれなかむらん
野外柳
夕附日をちかた野への柳原かすみにあまる色そさひしき
同三月當座　夕櫻
夕附日したてる山の櫻の花ましる靑葉そそれと見ゆらん
待戀
なをさりに契しほともみゆはかり更行かねを心にそ待
同廿三日當座歌合　曉落花
旅衣ね覺て聞は山風のはらひもあへす花や散らん
夕款冬
夕月夜谷かけくらく成まゝに靑葉そまかふ山吹の花

暮春霞
野も山も春のみとりになりはてゝ空の色なる夕霞哉
絶恨戀
人はよも思ふらんとも思ひ出し我身にしらぬ心ならひに
欲忘戀
よしさらは忘れんと思ふ心よりみし俤もおとろかしつゝ
同廿四日始歌合當座　鶯歸谷
山人もくるれはかへる谷の戸に花をともなふ鶯の聲
朝藤花
東路のときはの橋のふしの花あさゆく人は袖匂ふらし
三月盡
をのつから花は梢に殘るとも今日より後の春はとまらし
厭忍戀
忍はすはたのむ心も有なまし逢夜は人のいつならすとも
惜曉戀
一たひはきかすかほなる鐘の音ももよほす袖におき別つゝ
同四月廿八日於仁和寺殿當座會　水邊夏草
夏山の草のしけみのさゝれ水ありと蛙の聲そ聞ゆる
夏夜待月
みしか夜はまつに名こりの程もなし明ての後や山のはの月
同八月十五夜會　待月
出ぬより光はにしに成にけり松のあなたの山の端の月
見月
かそへしる人なき山の山人も月にこよひやおもひ出らん
惜月
おしむらん人の心をなく鴈の聲するかたに月そ殘れる
同比詠百首。題詠。和漢朗詠は多於百。仍少々略之。
緒百首。春秋廿。夏冬十首。雜四十首也。
立春
庭のおもにあふく雲ゐの天つ星空もかとかに春は來にけり
早春
しからきのまきの杣山春くれは道ふみそむる雪の下草
春興
もろこしの春の御舟そ思ひやるやまとしま人花かつらせり
春夜
梅かゝを霞の袖にこきませておほろ月夜に春風そ吹
子日
鶯はまたをともせてひくまのゝ松のはつねに春やみゆらん
若菜
かへるさやちりかふ花にまかふらんわかなつむ野の春の淡雪
三月三日
みちとせの花にうつろふ空はれて行せたとらぬ春の盃

暮春

散すくるみ山かくれの花の枝に又色そむるよもの春雨

三月盡

吹風もいとひし程そ櫻はなあすはありとも春の物かは

閏三月

一年に二たひ春をおしむとや又もやよひの鶯の聲

鶯

うらわかみ春ともみえぬ梅かゝにをのれうつろふ鶯の聲

霞

見渡せはかすめる浪の果もなし春の湊のしほかまのうら

春雨

淺みとり四方の草木に匂て峯にましらぬ春雨そ降

梅

にほひあれとをちかた人もとはす宿の上の梅の初花

柳

さほ姫の手染のいとの玉柳つらぬきとめて歸る旅人

落花

初瀨山かすめる空もくもる日の花の陰なく吹あらしかな

躑躅

さきぬるはとをつのはまの岩つゝし花もこえてや山を行らん

款冬

山ふきの花の影行水さよみふかくもうつる春の色哉

藤

これも又ちりぬる花の名殘とや水なき松にかゝる藤なみ

更衣

櫻色の春の衣はぬきかへて猶よそならぬ庭のうのはな

夏夜

夕立の雲もさなからくるゝ日の更行空に軒の玉水

端午

きのふより軒はにふける草の名のあやめもしらぬ五月雨の空

納涼

山風のふくともなくて涼しきは夕日かくれの森の下水

晩夏

鳥の音をきゝあへぬまに明しよのやゝ殘り行六月の空

盧橘

九重の庭の橋にほふ也むかしの袖は誰としらねと

蓮

風により蓮のうき葉の打なひきとまれる水にやとる月影

郭公

鳴すてよ夕くれかたの時鳥思ひもいれぬ人もこそきけ

螢

夏むしは人をみぬめの涙かはつゝめと袖にかけもたまらす

首夏
峯の松春より後の一しほは四方の梢の色そ添ゆく
立秋
草も木もきのふの露の色そかし人の心に秋は来にけり
早秋
秋きてはけふ三か月のいつのまにそむる一葉の色にみゆらん
七夕
たなはたのあまのは衣まれにのみけふの今宵を思ひける哉
秋興
月たにも休らひいつる山のはを梢もかゝすこゆる鴈かね
秋晩
わか袖にゆふ暮ならぬ秋風は吹もやすらん露ははらはす
秋夜
よのつねの松の嵐のけしきかは秋より外に月は見しかと
月
いほむすふみ山の秋のさひしさもすむ人からの月やみるらん
菊
このねめる霜よの床の朝戸出に秋もうつろふ庭の白きく
九月盡
行秋はこよひはかりの山の端に有明なから月や出らん
女郎花
秋の野のおはなにましる女郎花草の袂に色そわかるゝ
萩
秋風に雲井の鴈のなかぬまも心とをける萩の白露
蘭
やとりせし月の形見も殘けり露にしほるゝ蘭かな
槿
白露もむすふ程なき下ひもをたゝ時のまの朝かほの花
紅葉
三室山木々の紅葉に時雨つゝをのか色なる下草もなし
鴈
みとりなる夕の空の秋風に雲もへたてぬ初鴈の聲
虫
くれなゐのあさはの野らの夕露にふり出てなくすゝむしの聲
鹿
秋になくをしかのつのゝつかのまも涙かゝらぬ草の葉そなき
露
風わたるすかのあら野の夕まくれ露の限もうつら鳴之
霧
山川にはれ行霧やしほれけん朝日にぬるゝまへの棚橋
擣衣
露霜にしつかわらやの隙はあれとたゆまぬ聲に衣擣之

初冬
夢のうちに花も紅葉も散果てきのふと思ひし冬は來にけり
冬夜
神無月しくるゝ比のよな〳〵もつもる木の葉の色にみえけり
歳暮
宿ことによをふる道そいそくなるあすの花をはまつとなけれと
爐火
山かつのうつみ火近きかやむしろ花のあたりやしき忍ふらん
落葉
ちりつもるよもの紅葉の冬の色に音つれよはる岑の凩
霜
あしたつの霜のうは毛のけぬかうへに重ねてさゆる明方の空
雪
枝かはす松をたよりに降雪はあからさまなる谷のかけはし
氷
人の身はならはし物も哀之氷をくたす冬のいかたし
霰
あしへなるおきの枯葉にをとさえてむれゐる鳥に霰降也
佛名
となへつるよもの佛のかす〳〵にみちよもなのれ雲の上人
風
聲たてす治まれる世の風にこそよもの草木はまつなひきけれ
雲
うすくこくかゝれる岑の雲の色にかさなる山の數そみえぬる
晴
風ふかぬみとりの空に飛鳥のあるかなきかに逆きかりつゝ
曉
長夜のみはてぬ夢もおとろきぬまさりておしき山のはの月
松
夕日さす岑のうす雲たなひきてむら〳〵うすき松の色哉
竹
秋は露おつるはかり〻ふかぬよの月になみよる庭のくれ竹
草
をしなへて民の草葉にをく露もめくみありとや秋風のふく
鶴
朝ほらけ風にきほひてきこゆえたか佳宿のたつのもろこゑ
猿
月のよのみ山かくれのさるの聲たかかたしきの袖ぬらすらん
管絃
ふえの音を松の嵐に吹そへておさまれる世の聲をつくゝ
文詞
時雨たに秋より外の色はみす千種にそむる人のことのは

酒

入日さす杉の立えにゆふかけてみわすゑまつる岑の里人

山

神ち山たのむ木陰のしけゝれはふるとも雨にぬれん物かは

水

谷川にをちかた人そわたるなるにこりておつる岑の白波

禁中

かそふれは十年の秋はなれにけりさやかにてらせ雲の上の月

故郷

てもふれて月日やへぬる古郷のしけき草葉に秋風そふく

古宮

みよしのゝ吉野の宮はふりにけり松も昔の松やすくなき

仙家

いにしへに住けん人の跡なれやゆか吹はらふまらの秋かせ

田家

さひしさも思ひなれてやなかむらん田中の庵の秋の夕暮

隣家

うはそくかおこなふ道もきこゆゑ近き籬のへたて計は

山寺

たれかなを心もやとも住なれて横川の水に月をみるらん

佛寺

わしの山かくれし月をうつしもてくらき道にや猶頼むらん

眺望

みるまゝに雲と波とはわかれつゝ明行空の吹上のはま

餞別

別路にしたふ泪をかたみにてあはん日までと契る月かけ

行旅

遠くるゝ山ちの末に宿はあらし夕日に遠き岑の白雲

帝王

大かたにひか（とイ）りある人の朝夕につかふる道は猶もつきせし

親王

くれ竹のそのふの露のしけゝれはやとかる月の影そあまねき

丞相

みかさ山岑の梢にかけなひく星の光はくもらさりけり

無常

扨も又あらましかはと数ふれは手にもたまらぬ人そはかなき

此御集以一品式部卿御本令校合畢。

予時寛永貳暦初冬日　従二位大納言實名判

百首和歌

順德院 朱點 黒點　後鳥羽院 定家卿

〔今黑點以——示之朱點以┃┃示之〕

春

風わたる池の氷のひまをあらみあらはれいつる鴨のしたみち

風渡る池の氷解て鴨の下道あらはるゝよし。首尾相叶。姿詞亮調候歟。

けさの間は光のとかに霞む日を雪けに返す春の夕かせ

朝陽靉靆晴。晩風猶吹雪の由尤宜。但聊存旨候の由先度申候。

ふりつもる松の枯葉のふかけれは雪間もおそき谷の影草

枯葉の松ふかくうつみて。雪間の草遅くみゆる心。溪草は下にうつもれたる景氣あらはにうかひて。感情殊深候。

難波かた月の出しほの夕なきに春のかすみのかきりをそみる

月のてしほなきわたりて。霞のかきり春にみゆるところ。また殊勝候。

夢覺てまたまきあけぬ玉たれの隙をとめても匂ふ梅か香

珠簾未卷。羅幕猶垂。梅氣求隙匂枕席之由。其心妖艶。其詞美麗候。

たか島やあと川柳風ふけはぬれぬしつ枝にかゝる白なみ

此第二句廣忘不覺悟。始末兩凡俗。至愚難覃候。

淺みとり霞の衣ふくかせにはつるゝ糸や玉のをやなき

霞の衣みたれて柳の葉をつらぬく心。見ところ多候哉。

夕霞きえ行鴈やくも鳥のあやをはみたす春の衣手

かすめる鴈の翅。雲鳥のあやををれる詞。心殊に珍しく候。

[illegible]なみたや秋にかはるらん野邊のみとりの色そそめゆく

萩の上の露にかへて緑の野へをそむる由。また古來よみのこして候ける風情。興味無極候。

秋風にまたこそとはめ津の國の生田の森の春のあけほの

生田森の秋の歌。[illegible]か弟子おほく耳に満候へと。春の曙は驚思眼候。誠勝候。

花鳥の外にも春の有かほにかすみてかゝろやまの端の月

[illegible]花の樓閣。[illegible]の山月にあらすとも。朧月の景氣。烟霞の幽趣。見ところまさり候歟。

雪とのみふるの山邊はうつもれて青葉そ花のしるしなりける

心又めつらしくて其興候哉。

ちりまかふ四方の櫻をこきませてぬきもとゝめぬ瀧のしら糸

四方の櫻をこきませてぬきもとゝめぬ瀧の白糸。面影又[illegible]に見ところ多候也。

むすひあへぬ春の夢路の程なきにいく度花の咲てちるらん

須臾夢中開落花色。一生八句之夢。紅紫黃落之悲おもひよそへられて。青陽之[illegible]にあらたまり候。

春よりも花はいくかもなきものをしいてもおしき鶯の聲

かやうにやすらかにもとめ出し。くさりつゝけ候はても。

三代集以上姿は候物を。それに片はら見くるしく好候輩かゝるこゝろの候へかし。

ちくま川春行水はすみにけり消ていくかの峯のしらゆき

西行法師清瀧川うるはしく仕候由。年來おもひ給候。春行みつはすみにけりきえていくかの峯のしら雪。美麗の姿玄陽に候ける事也。誰もつかうまつらす候。面白候。

あし鴨のはかひの山の春の色にひとりましらぬ岩つゝしかな

はかひのやま。青字顯て。紅躑躅のましらぬいろに聞え候。染心肝候。

河の瀬に秋をや殘す紅葉はのうすきいろなる山ふきの花

紅葉薄色。古來冬久殘置。不思議候。

陰しあれはおられぬ浪もをられけり汀の藤の春のかさしに

五句非新造意。風情はしめて出來候。如斯事殊難有令悦目候。

なけやなけ忍ふの杜の呼子鳥終にとまらん春ならすとも

つゐにとまらん春ならすとも。又三月盡に讀殘しける。毎度驚眼候。

夏

山城のときはの森は名のみして下草いそく夏は來にけり

下句又珍重候。

たれしかも松の尾山のあふひ草かつらにちかくちきり初けん

此初五字。亡父の説他門の説相違候。今度出來且面白候。

夏の日の木の間もりくる庭の面に陰までみゆる松の一しほ

風情また興味候。終句其深趣於愚意近年纒頭之子細候間。先度令披露候。

今こむといはぬ計そほとゝきすあり明の月のむらくもの空

景氣また如當限路候。

五月雨の雲井に高きほとゝきす月の桂のかけしたふらん

交霖雨之晴雲。慕桂月之清輝。姿詞高而難及候歟。

五月雨はまやの軒端もくちぬへしさこそうき田の森のしめ縄

五月のまやの軒端。杜のしめ縄。ともにふりたる事に候へとも。おなししめ縄もかく引なされては又めつらしく候。

峯の松入日すゝしき山かけのすそ野の小田に早苗とる也

入日の山陰。すそ野の早苗。是もとりなされ候景氣。色をまし候。

ともしゝてこよひも明ぬ玉くしけ二村やまのみねのよこ雲

五句卅一字秀逸候。如瑞玉光明照耀殊勝候。

蚊遣火のけふりは人のしわさにてなのれくもらぬ夏の夜の月

煙は人のしわさ。新造また珍重候。

あかつきの八峰の鳥もいたつらに鳴ぬはかりに明るしのゝめ

なかぬはかりに明るしのゝめ。これもあたらしきことに候。

夕霞たな引山の花よりも色の千種にさけるなてしこ

春霞かすみていにし跡今。讀上候時以何春故非其興候。色の千くさのなでしこの花。可然候ける。殊勝候。

かきりあれは富士のみゆきの消る日もさゆる氷室の山の下柴
富士の雪もみな月の望に消る心。氷室は猶久優興感候。

むら雨の雲吹むすふ風に一葉つゝ散玉のをやなき
玉の緒柳子細。先度令哉案候。

夕立の雲にさきたつ山風に秋そなひかぬ草の葉そなき
山風雲にさきたち。草葉秋になびく景氣。無限見候。

みそきする賀茂の川浪ゆふかけてたゝすの森に日くらしの聲
此發同前に候。

秋

時しもあれ秋なき色も年波の半こえゆくすゑのまつ山
末のまつ山。年なみの半こへ行こゝろ。又古き物の新しき財となれる哉。

さをしかのつれなきつまも有物をまつをうらみの星合のそら
待を恨の星合殊勝候。

秋風や千種なからにみたれけん花咲かはす宮城野のはら
宮城野の原千種花みたれあへる景氣又美麗候。かはすの御詞。殊勝難存旨候。

人ならぬ石木も更にかなしきはみつのこしまの秋の夕くれ
此卅一字また猶字難抑感淚候。玄之玄哉上候。

つまれこる遠山人にかへるなり帆まてをくる秋の三日月
山越の歸路。繊月の微光。面影殊に優艷に候。

はし鷹のとやのゝあさをふみ分てをのれと歸る秋のかり人
上下の詞相叶。始末の詞相叶之。

秋風の枝吹しほる木の葉よりかす〳〵みゆる山の端の月
落葉うつくしくつゝきて。御歌の詞の景氣。殊かく社あらまほしく候へ。

追風にたゞ引雲のはやければ行ともみえぬ秋の夜の月
たなびく雲の早く過て。晴間の月しづかにすめる心。染心肝候。

月みよと軒端の荻の音せすはさてもねぬへき秋のね覺を
軒端の荻にもよほされて。床の月影不寝深更心。上陽の宮東門百綴の秋の事まで思ひやられ候。

白露も雪の涙もをきながら我袖そむる萩のうはかぜ
もゆる山の露時雨にはあらで。まちかき袖の色は。萩の上吹風の音にそめらるゝ心。殊珍しく耳にきこへ候。

山鳥のうらみも秋やまさるらん八重たつ霧の中のへだてに
遠山鳥の尾をへたてたる根も。秋は八重たつ霧にかさなる心詞のよせ。事はりもかく社候へかりけれ。

ふしわふる窓の竹の長き夜に猶をきあまる秋の白露
まかきの竹のふしわふる長夜に。秋の露猶をきあまるこ

ゝろ園に。殊心肝にそむとも。昔は千世までの同し事にや
候らん。

山里は軒端の松を吹からに鹿のねならぬ秋風そなき
かこつへき野原の露も虫の音も我よりよはき秋の夕くれ
野原の露よりも行宮の月は立かはり。旅の思ひよりも松
竈の風は聲惣て聞候樣。をしなへての人の袂もこゝろつ
よかるましくや候らん。
さらしなの山の嵐も聲すみて岐岨の麻衣月にうつなり
なくさめかぬる山の嵐。月下にうちそひて候らん碪の音。
雁の音の雁の翅よりも飛立ぬへくや候らん。
霧はれてあすもきてみむ鵲なく岩田の小野はもみちしぬらん
風になひく雲の行てに時雨けり村々あをき木々の紅葉ゝ
一日見し十市の村のはしもみちまたも時雨て秋風そふく
谷深き八尾の椿いく秋のしくれにもれて年のへぬらん
以上四首。詞花加光彩。景氣銘心府。毎首催感興候。
いくとせの秋の別にをくれゐてふりそふ雪のきゆるともなし
五句相應。等字殊勝。

冬

もろ人のはなすり衣ぬきかへて紅葉こきいれし形見たになし
櫻色の衣はかへうきならひ耳なれ候へとも。紅葉こきい
れしかたみは。これやはしめにて候らん。

鐘の音も霜と夜行あか月やよもきか露もこほりそめけん
豐嶺の鐘動霜。閑庭の露爲氷。寒夜の景甚久以蕩意染肝候。
冬來ても猶時あれや庭の霜と色そふるよものあらしに
隨紅葉之落。霜添菊之色。また以美麗候。
みむろ山秋の時雨に染かへて霜かれ残る木々のした草
時雨の木葉色をとろえて。霜の下草かへりて顯たるも。冬
の山のけしきおもひやられ候。
吹風やいくたひ道によはるらんみな霜枯のむさし野の原
みな霜枯の野原の風の聲さへよはれる盛衰哀に聞え候。
清見かた雲と（もイ）まかはぬ波のうへに月のくまなるむら千鳥かな
清見かた雲もまかはすさへわたりて。千鳥の月にかける
翅はかりくまとなる面影もうかひて候。
みたれあしの葉末に月のさゆる夜は忍ふにすれる鶴の毛衣
しほれあしのかけに鶴の毛衣の忍ふすり。風情も限りし
られすや候はん。
芦のはにかくれてすまぬ炭かまも冬あらはれて煙たつなり
蘆の葉にかくれぬ術も。冬あらはるゝ煙ふかき跡にもた
ちまさりてや候らん。
山おろしの霰ふきしくさゝの上に友ふみまよふけさのかり人
霰ふき散鎌の上。芹川の行幸の日も思ひやられて。感興深
候。

駒とめてしはしはゆかし八橋のくもてにしろきけさの初雪

八橋のくもて読々多候へとも。古歌にも詠來候。近年白と申候詞。あしかりぬへき事には候はね共。末生初學毎人毎歌詠候之故。あまりに耳にみちて厭却之思候。

吹はらふ雪けの雲のたえ〳〵を待ける月の影のさやけさ

景氣また現形殊勝候。

かひかねは山のすかたもうつもれて雪のなかはにかゝる白雲

雪のなかは。殊めつらしくも。山の姿。建保の比おひ秀歌とて聞え候めり。

なかめやる里たに人の跡たえて野中の松に雪はふりつゝ

野中の松の雪も。面影もあはれもふかく候。

とりかはす日影のかつらくりかへし千代とそ歌ふ神の御前に

日蔭の鬘。千歳の聲。句々其興候。

里わかぬ春の隣となりにけり雪まの梅の花の夕かせ

里わかぬ春の隣。よみ殘し候けり。風情めつらしうつしく候。

戀

しけ山もふかく入てそしほるなる浅茅か露のかゝらすもかな

いかゝせんおくもかくれぬさゝかきのあらはに薄き人の心を

猶ふかきおくとはきけと逢事の忍ふにかきるこひのみちかな

ひるはくる遠山鳥のちきりたに長き思ひにみたれてそぬる

四首妖艶に見え候。　の空

偽のなき世なりともいかゝせんちきらてとはぬ夕暮

此夕猶抜群上候。

ちきらすな人をみる日のよそなから心のうらに袖ぬらせとは

みるめのみよそなから。心の浦にぬるゝ袖。又殊勝候。

すてもみぬ日の浦にやくしほのけふりはそれと人もたのまし

鳥の音の先よりもつらきかなおとせぬ人の夕くれのそら

長雲再唱。征馬頻嘶てゝいきてわかれし時の曉の空よりも道行人も跡たえ。あまとふ雁も音信ぬ雲のはたてのつれなさは、猶色まさりけん薄暮の心。終をせめて染肝候。

あふとみてさむる夢路のなさけたに猶おしまるゝ曉のそら

はか〳〵に袖まきほさん人もかなとひくる月はなみたそふとこ

夢路には通ひてしほる袖にたに人の泪のぬらしやはする

消やらぬならはしものゝ心みよ玉のをはかりいく世へぬらん

雲ゐにも誰か関守のまもるらん通ふこゝろの中のへたては

五首共妖艶。いつれと申かたく候。

月も猶みしおもかけはかはりけりなきふるしてし袖の涙に

不似昭陽花寞香。かはる光もふるきためしに候へとも。なきふるしてし袖の涙。古今向後無比類候。

契をたに猶待わひし有明のふかきわかれに成にけるかな

ふかき別に寞にける哉。又銘肝入骨。甚深無双候。

雜

みよし野の瀧の白あわの落たきりふけとも風の音も聞えす

瀧の白泡の響に山風の聲もけたれ候たるよし。山中氣色亦殊勝候。

夕つく日山のあなたに成まゝに雲のはたてそ色かはり行

夕陽入山曉雲變色のよし。亦如眼見候。

くれすともふもとの里に宿からむ夜やはゆかん山のかけみち

すゝ分るしのにおりはへ旅ころもほす日もしらす山のした露

宿をかる夕。涼にをもむくあした。とり〳〵に染心肝候。

なれにけるあしやのあまも哀也一夜にたにもぬるゝ袂を

とまやかた枕なかれぬうきねにも夢やはみゆるあらき濱へに

あしやの一夜。濱風のとまやか。〔たけしき〕數〻にいつれと申かたく候。

いつて舟をひ風はやくなりぬらんみほのうら半によする白浪。

みをのうらはの五出舟。追風のはやさも及へきなくて候。

たき木つむあまの小船そいそくなる心とたゆむ宿のけふりに

又下句珍重殊勝候。

見る日ほす濱の眞砂の白妙に日影もなひくなみのうら風

白妙の濱にみるめをほして。山藍にすれるをみの浦風。詞の色もならひなく候。本細字書入之。

秋風のうら吹かへすさよところも見はてぬ夢はみるかひもなし

定文か苔の葉。さよ衣にて社色まさり候へ本細字書入之。

かつらきの神や心にわたすらんあけてとたゆる夢の浮橋

又下句殊銘肝候。本書入之

かけろふは命かけたる夕露に玉の緒なかきくものいとすち

聞たひにあはれとはかりいひすてゝ幾世の人の夢をみるらん

陸士衡四十之歎逝。密友半不在。老桑門八旬之懐舊。故人悉凋落心中彌難忍候。

くるゝまもたのむ物とはなけれともしらぬそ人の命なりける

至愚惘然之思。始而覺悟候。

いく千代の影とか神もちきりけむ布留の社の杉の下風

丁酉歳應鐘日以忌白髪老筆候。　沙彌明静上

以篤業卿自筆之本校合之。即書入落字者也。

明應八年己未年三月廿三日　通賢

或本云

壬辰百首。丁酉秋遣明靜。亦進遠島畢。墨法皇御點。朱定家卿注。定家拾五首には諸點を合畢。遠島幷此御百首。以或本書寫之。奥書以下大略如本。然而筆案事に少々以愚推直改訖。

天正十五中夏初八　通勝花押

〔右順德院御集以圖書寮二本及御百首校合畢〕

續群書類從卷第四百廿五

和歌部六十

光嚴院御集

霞

よもの梢かすむを見れはまたきより花の心そはや匂ひぬる

鶯

春をへていかなる聲になくなれは初鶯のいやめつらなる

梅

わかなかめなにゝゆつりて梅の花櫻もまたてちらむとすらん

柳

夕昏の春風ゆるみしたりそむる柳か末はうこくともなし

春

春の日ののとけき空はくれかたみいたつらに聞鶯の音

春雨

あさみとりみしかき草の色ぬれて降としもなき庭の春雨

長閑なるむつきの今日の雨の音に春の心そふかくなりぬる

花も見すとりをもきかぬ雨のうちの今宵の心なにそはる成

夕霞かすみまさると見るまゝに雨になり行入あひのそら

なに事をうれふとなしに長閑なる春の雨夜は物そわひしき

花

散ことははやしと思ふ櫻花ひらくる程のあやに久しき

軒ふかき花のかほりにかすまれてしらみもやらぬ宿の曙

昏かるゝ花の匂ひをしたひかほにさらにうつろふ夕日影哉

夏

郭公

なれも又この夕昏をまちけりなはつね嬉しき山ほとゝきす

思ふことありあけの空のほとゝきす我爲とてや今きなくらん

夏

夏山や木たち涼しきむら雨のゆふへを時となくほとゝきす

夏晝

庭の上の眞砂にみちてゝれる日の影見るなへにあつさ増りぬ

夏夕

蚊遣火の煙まさると見る程にくれぬるならし入あひの聲

夏夜

秋の夜を淋しき物となにか思ふくゐな聲するよひの月影

夏月

ふくるよの庭のまさこは月しろし木陰の軒にくゐな聲して

照射

ともしするほくしの松のつきもあへす葉山か峯は雲あけぬ之

夕立

吹すくる木末の風のひとはらひこゝまて涼しよその夕たち

遠近夕立

とをつ空に夕立雲を見るなへにはやこの里も風きほふ之

螢

とふほたるともしひのともゆれとも光を見れは涼しくも有か

秋

初秋

花もまたき草の笹のあさほらけ露の氣色に秋はきにけり

世の色のあはれは深く成ゆくに秋は幾日もいまたあらなくに

夕日さす木末の色に秋見えて外面の森にひくらしの聲

秋はまた朝けの庭の池の面にはやすさましき水の色哉

秋に成れ覺そいとゝうれはしき物思ふ身にあ日も有すも

いとはやも風すさましみそれとなき虫も笹にやゝ鳴立ぬ

時わかぬ竹のさ枝に吹風の音しも秋になりにけるかな

七夕

めにちかきおもかけなから年もへぬ雲井の庭の星合の空

おほかたの秋てふ秋の長き夜をこよひとも誰星合のそら

萩

身こそあらめ花はむかしを忘るなよ馴れし戸くちの庭の秋萩

荻

あき風の軒はの荻よなにそこのうれへのたねを植置にける

薄

ほにいてゝ我のみみ〔衍歟〕まねく糸すゝきくる人あれな古さとの秋

秋

秋風によはきを花はうこけとも月にのとけみふけすめる夜半

秋夕

物ことに我をいたむるゆへはあらし心なりけりあきのゆふくれ

しつむ日のよはき光はかへにきえて庭すさましき秋風の〔くるゝ歟〕、、

菊

さきやらてしはしもあれな庭の菊待へき花の人もあらなくに

虫

夜を寒みいねすてあれは月影のくたれるかへにきり／＼す鳴

月

くるゝ空に待つるまゝのなかめより簾をろさぬ月の夜すから

てらすらん千里の人の秋の思ひ月にやうつす影のかなしさ

冬

時雨

木葉ぬれてそゝくともなき村時雨さすや夕日の影もさなから

落葉

木の葉よりもろくもならめ夕嵐我なみたさへたらすも有哉

冬

寒からし民のわら屋を思ふにはふすまのうちの我もはつかし

よはさむみ嵐の音はせぬにしもかくてや雪のふらむとすらん

雪はまたきたゝ冬枯の草の色のおもかはりせぬ庭そ淋しき

冬あさみまたこほらねと風さえてさゝ波さむき池の面かな

散まよふ木の葉にもろき音よりも枯木吹とをす風そ淋しき

霜にとをるかねのひゝきを聞なへにねさめの枕さえまさる之

霜のをくねくらの梢さむからしそともの杜に夜からすのなく

雲こほる木末の空のゆふつくよ嵐にみかくかけもさむけし

空はしも曇るとは見えぬ朝あけの霜にかすきる世のけしき哉

この夜半やふけやしぬらん霜深きみねの音して床さえまさる

冬枯の草木の時をあはれとやはなをあまねく降る白ゆき

冬草

それとみえし霜のくちはも猶落てふる枝はかりの庭の萩はら

冬曉

あかしかぬる時雨の間の幾ねさめさすかにかねの聲そ聞ゆる

かけうすき有明の月に鳴鳥の聲さへしつむ霜のおちかた

霜にくもる有明かたの月影にとをちのかねも聲しつむなり

冬曙

響のこるとをちのかねはかすかにて霜のかすきる曙のそら

冬朝

おきて見れとしもふかからし人の聲の寒してふ聞寒き朝明

夜もすから雪やと思ふ風の音に霜たにふらぬけさの寒けさ

冬夕

嵐吹あられこほるゝけふの暮ゆきの心やちかつきぬらし

しもかれのをはなか庭にかせふれて寒き夕日はかけさえぬ之

冬夜

星きよき木末の嵐雲はれて軒のみしろきうすゆきの夜半

冬月

空のうみ雲の波もやこほる覽夜渡る月の影のさむけき

霰

冴くらすあらしに雪やちかゝらしさきたつ霰軒に落なり

雪

雲のゆふへ嵐のこよひ降そめぬあけなは雪の幾重かも見ん

野山みえ草木もわかす花の咲雪こそ冬のかさりなりけれ

朝日さす松のうれより落る雪にきえかてにしもつもる木の下

暁雪

降うつむゆきの野山は夜ふかきにあくるか鳥のとをさとの聲

曙雪

めにちかき軒のうへよりしらみそめて木末かほれるゆきの曙

うつりにほふ雪の梢の朝日かけ今こそ花の春はおほゆれ

風前雪

吹みたしはらひもあへぬ竹の葉の嵐のうへにつもるしら雪

夜雪

軒のうへはうすゆきしろし降はるゝ空には星の影清くして

雨後雪

今朝の雨の名殘の雲やこほるらんくれゆく空の雪になりぬる

山雨

岩も木もすかたはさすか見えなからをのか色なき雪の深山へ

野雪

なかめやるかきりも見えすかすみ行野原か末は雪としもなし

浦雪

波のうへはあまきるゆきにかきくれて松のみしろき浦の遠方

杜雪

ゆきにたにつれなくてやは山しろの常磐の杜も色かはる之

山家雪

人はとはぬみやまのいほにあはれ猶ところもわかす降る白雪

田家雪

末遠きかり田の面の雪のうちにたてるやいほの見も淋しき

閑居雪

軒のまつにかよふ嵐の音たにも絶て幾日のゆきのふるさと

社頭雪

たのむゆへの深き心はへたてぬをいつかみかさの山のしら雪

松雪

ときは木のその色となきゆきの中も松はまつなる姿そみゆる

雪中鳥

降つもるゆきの梢にゐる鳥の羽風もおしき庭の朝あけ

雪中獣

おきいてぬねやなから聞犬の聲の雪におほゆる雪のあさあけ

雪中懐舊

むかしをはうつみやのこすしら雪の降にし世のみうかふ面影

雪中述懐

いたつらに降白雪をあつめもたぬ我光なき世さへくもれる

炭竈

立のほる煙の末をあはれともたにかはとはん小野のすみかま

除夜〔除歳〕

としくると世はいそきたつ今夜しも長閑に物のあはれなる哉

戀

初戀

知さりし詠めや何そよしなしに物思ふみにはならしと思ふを

忍戀

人まなみ唯にはいはぬ底の色を見しらぬにして過むとやする

不逢戀

我は思ひ人にはしゐていとはるゝこれをこの世の契なれとや

待戀

あすのうさも我心から悲しきにこよひよ今夜とへやとそ思ふ

互忍待戀

待もとふもつゝむに更る時の間よあちきなからぬ一夜とも哉

別戀

これ程もまたはいつかの別路をくれよのちよのやすの頼めや

偽戀

今そ思ふたのみしうちの幾あはれかさるかうへの情なりける

誓戀

うきからへになけくそ猶もあはれなる誓し末を人のためとて

恨戀

をしや我も哀かなしのいくふしをひとつ恨の中になしぬる

うきにたえすうらむれは又人も恨契のはてよたゝかくしこそ

絶戀

我やたそあやしや終に絶はてはあらしと思ふけふまての身よ

戀涙

こひあまり我なく涙雨と降やこのくれしもの雲とつるそら

戀契

うしとすつる身を思ふにもさらに猶哀なりける人にちきりよ

戀恨

あさくしもなくさむる哉と聞からに恨のそこそ猶ふろくなる

戀

思ひつくしあはれに物の成たちてすへて涙のたちもとまらぬ

思ひつくすおもひの行衞つく〳〵と涙にをつる灯火のかけ

戀歌

さとの犬の聲を聞にも人しれすつゝみし道のよはそこひしき

寄春戀

いろねにもうれへのすゝむたねとして我に物うき花鳥のこゑ

寄冬戀

とちつもる氷もゆきも冬のみをとけむこもなき我思ひ哉

寄曉戀

いまもこの有明の空に鳥はなけと別しひとに又あはぬかな

寄朝戀

如何になるけさのなかめそ今夜我見るとしもなの夢の名殘に

寄夕戀

西の山にくたる夕日の影見れはけふはたくれぬ妹をみなくに

寄風戀

なにそこのうはの空より吹風の身にあたるさへ物のかなしき

寄雨戀

妹か上に思ひうらふれねすてあかす此夜すからの雨の音はも

寄霜戀

朝しものむすひもはてぬ契ゆへさてこそけなめ知人をなみ

寄煙戀

我戀よけふりもせめてたちななむ靡かぬまても君に見ゆへき

寄山戀

あはれ今はかくて契やつくは山しけきうらみの我もそふころ

寄松戀

人やうきさもいはしろのむすひ松むすはぬ世々の身の契こそ

寄庭戀

いもまつと時そともなきなかめしてよもきか庭も霜枯にけり

寄苔戀

そのまゝにはらはぬ庭の苔の□にたえにし人の跡もみへけり

寄鷄戀

わかれましつらからましと聞もつらし八聲の鳥の明かたの聲

寄烏戀

月になくやもめからすは我ことくひとりねかたみ妻や戀しき

寄犬戀

人しれす我立すまむ宿のあたりとかむる犬もせめてなつかし

寄人戀

思ひこりしその僞のならひゆへ人にもひとの猶たのまれぬ

寄夢戀

行てかよふ夢てふものゝあるならは今夜の心見えさらめやも

寄心戀

うきはさそな哀なるさへくるしきに人に心のなへてならなん

寄言戀

人を思ふ世にふりさらむ言葉の君にはしめていはまほしきを

寄鏡戀

おもふ色のいはれぬきはをうつしみせん鏡もかなや君か心に

寄衣戀

戀しとてかへさんとはたおもほえすかさねしまゝの夜の衣を

寄燈戀

さそやけに我そつれなき待よはる（の歟）明かたのまとにきゆる燈火

寄書戀

見しそかしかゝる言の葉そのふしとさらに涙もふるき玉つさ

戀

戀といふ名のみはなへてふりぬめり我思をはいかゝいはまし
戀しきは忍かたきをいかゝせんうき身をしる（マヽ）なくさめもあり

雜

曉

雲の色星の光も同し空ののとかになるやあかつきになる

竹

もゝしきの庭に見なれし呉竹のみしかきよこそ猶あはれなれ

河

よとみしも又立歸りいすゝ河なかれの末は神のまに〳〵

橋

とまる名はなからの橋のはし〳〵ら朽て後しも猶殘りける

旅

たひにしていもを戀しみなかめをれは都の方に雲棚ひけり

雜

小夜ふくるまとの燈つく〳〵と影もしつけし我もしつけし
心とてよもにうつろよなにそこれたゝこのむかふともし火影
むかひなす心に物やあはれなるあはれにもあらし燈の影
ふくる夜の燈のかけををのつから物の哀にむかひなしぬる
すきにし世いまゆくさきと思うつる心よいつらともし火の下
燈に我もむかはす燈も我にむかはすなのかまに〳〵

雜曉

かねの音に夢はさめぬるのちにしもさらに久しき曉の床

雜夕

鳥かへる外面の杜のかけくれてゆふへの空は雲そ長閑き

山家

聞佗ぬまくらの山の夜の嵐世のうきよりはすみよけれとも
軒につゝくひはらか山に雲をりてくるゝ木末に雨をちそめぬ

田家

伏見山門田の末は明やらて松のこなたの空そしらめる

懷舊

忍ふへきむかしはさそなにとなくすきにしとのなそ哀なる

述懷

たゝしきをうけつとふへき跡にしもうたても迷ふ敷嶋の道
ふねもなく筏も見えぬおほ河に我わたりえぬ道そくるしき

夢

花の中にあそふこてふのもゝ年にさむる現は猶やみちかき

竹

風になひく竹のむら〳〵末見えて夕日にはるゝ遠の山もと

山

山松の木末をわたる夕嵐軒のひはらに聲をちぬなり

あつき

庭の日は木かけもみえすてりみちて風さへぬるみ袂かたき比

はかなき

我もさそあすともなしのけふの世にあれはあるてふ蜘の糸

おもしろき

時にふるゝたさけのうちも心すむは月にしらむるいと竹の聲

物名

紅葉のか

をりみたれよもの山邊に雲もみち野風はけしみ雨になるくれ

ほたる

降うつむ雪に日數は杉のいほたるひそしき(缺字)山かけのみき

ふちはかま

ふるさとや千種か庭の花の秋かきねの霧にまつむしの聲

たけかわ

ことし又はかなく過て秋もたけかはる草木の色もすさまし

やとり木

月影はまたたか空にのとけきをはやとりきこゆ明ぬこのよは

式部卿邦高親王御集

春

立春　文龜四年二月廿五日於　禁裏御月次著到

吹かはる今日にあけても先そ思ふ民の草葉の春の初風

春立日

打はへてけふあら玉の年のをのなかきを春の光にそみる

春立風

吹をくる風そのけとき空のうみ雲の波わけ春や來ぬらむ

早春

春といへとまた一人の色もなし小松か原に雪もけなくに

山早春

吉野山いつくはあれと春來てはまたき霞も花の面影

初春霞

ふる年の雪けの雲路吹とちて霞にかへる春の初風

雪中鶯

春をあさみまつ殘雪の花の枝にうつる匂ひや鶯の聲

木殘雪

春來ても風をさむみ消やらて松はひさしき雪の色かな

谷鶯

鶯の聲打いつる雪間より谷にも春の光をそみる

山霞

あさみとり霞にそめて山の端は雪間もまたぬ春の色哉

澤若菜

澤邊なる芦の下根のいつれともみゆるみとりはの若菜つむ也

江柳

をのつからみとりかはらて幾春をふる江の水になひく青柳

待花

山櫻さかぬたえ間も待わふる心に花のぬかれやはある

見花

春をへておかぬ心のそめますを思へは花やゝしほなるへき

見花

山櫻こゝろをうはの空めより花は雲にやまかひそめけん

花似雲

倚にみれはいつくそ咲しより花のほかなき峰のしら雲

雨後花〔マヽ〕

春雨のなみの名殘かすめる庭の面に花の光は露もくもらす

山路櫻

おく深くみつゝわくへきあらましもくま山口の花にくらさん

夏

待郭公

聞からに思ひもあへすほとゝきす待にたとらむ聲ならすとも

蚊遣火

よそならぬふもとのましは折たきてかやり立そふ山かけの里

螢

誰か袖にいらはとかおもふ玉すたれひまもとめても飛螢哉

夏夜夢

夏の夜はうたゝねなから明行は枕さためてみる夢もなし

新樹朝風　永正元・四月廿五日　禁裏月次

夏来ても柳櫻のわかみとりあらそひかねて朝風そ吹

籬卯花

卯花の咲そふ比か夕月夜よそにかけみぬ庭のまかきは

庭瞿麦

風のみやちりもはらはん古郷のあれ行宿の瞿麦の花

瞿麦

みれとあかぬその名も花のとこ夏や夏やつき／＼咲て久しき

晩夏螢

軒近き荻の葉ならぬ秋風もさなからみえて行螢かな

盧橘

さたかなるゆめみる人に言の葉の花立はなもむかしかたらへ

夏月

冷しさは月の南のはる／＼とこぬ秋風にかさゝきの聲

秋

立秋

聽るとも思ひはいれしなへて世の秋立風に袖のうは露

立秋露

やかてはや秋のつらさの數〳〵を袖に先しる今朝の白露

紅葉色々

野邊にみし花のちくさの色を又木の葉のうへにうつす秋かな

蘭薫風

藤はかま名さへ色さへみし春にかはらす匂ふ庭の夕風

山月

秋の月いつくはあれとなにしあふをは捨山の夜半の俤

七夕橋

天の河紅葉を橋にいつそめてあふせの秋の色にあけゝん

庭月

あるかうちの心の庭もはらはなん月影しほる庭の秋風

女郎花

おなし野ゝ露の光も女郎花花にことなる色やなからん

紅葉映日

露霜のぬれ色みせていつる日の光に匂ふ峯の紅葉は

海邊七夕　文明五年七月七日當座

波こさんうらみはあらし七夕のたえぬ契のすゑの松山

折草花　同

秋風のさそはぬさきに折袖に露もみたすな花のはき原

晴夜月　同

秋よいかにくまなき影のそひぬらんおなしみ空に月優むとも

織女雲爲衣

彥ほしの妻とふよひの秋風や雲の衣のひもとき渡す

梨花

春はまたのとけき波のかさしとやをふのうらなし花の咲らん

七夕瑤琴

手向をくことのしらへや天の河なかるゝ水も聲をそふらん

有明月

みるまゝにつきすも有かな有明のつれても思ふ秋の名殘は

河月

秋の水夜ふかき月にこし船は河瀨に遠のたれをこふらん

秋旅

ねぬる夜を秋になくさめかり枕夢も都の月を殘して

秋植物

うつろふを野への花には惜みても山の紅葉にいそく秋かな

秋夕

人毎のおもひはつきぬならはしも秋にやかきる夕なるらむ

心よりをきける袖の夕露をいつくの秋とまたはらふらん

冬

初冬曉

袖さゆるねさめの床の村しくれ音に立ても冬は來にけり

山雪

日數ふる雪やふもとの塵よりもつもりて高き山とみゆらん

深雪

松かえのつもれはひとり折かへる青葉やふかき雪をみすらん

河上水鳥

さし歸る人をも友とこの川の小船にましるをしかもの聲

〔此間落丁歟〕

稀問戀

とはるゝも絶まかちなる契りこそあやふむ中のはしめ成らん

祈戀

ひくしめのなかき契りを今世まてたえしと人に猶やいのらん

神にさへかこちやそへんつれなきはさてしもおなし人の心に

寄月戀

いたつらに待夜の空は更はてゝねもせぬ月に人のおもかけ

寄花戀

いつかたに身をなくさめん散花の別もつらき衣〱の空

寄風戀

つれもなき心に何と岩ほをも吹もうこかす風もこそあれ

寄山戀

あけぬ夜の思ひを何にくらふ山やとりとるへき道は有とも

寄朽木戀

かひなしや心のねさしいたつらに色にも出ぬかけの朽木は

寄霰戀

ひとりゐるねやの板間の玉霰とはぬつらさの數にとらはや

寄庵戀

おもひやれさらてもつらき雨の夜に人待ふくる草の庵を

寄柱戀

いかにせん月の柱にあられともをよはぬ中はをらぬなさけを

寄衣戀

夜な〱の身のなくさめそ哀なるかへす衣の夢をたのみて

戀地儀

なる神もさけしとおもふ逢夜半の中にほのめく有明の月

尋戀

いつのまに待こし袖の初風も身にしむ秋のつまとなるらん

深夜歸戀

立かへり又やとはまし衣〱の空に夜ふかき月を殘して

歎無名戀

せめてその逢にかへてもなくさまはうき名計そ歎かさらまし

不賴戀

僞にならふ夜ころの秋風は身にさむくともいかゝたのまん

雜

山家雨

淋しさはなれてすみこし山にても猶うき時かふかき雨の夜

砌下有松

かけ高きみぎりの松のふかみどり幾萬代の霜をへぬらん

谷梯

世を渡るうきにかへても山ふかくたれかふみみる谷の梯

瀧水亂絲

瀧つせはかなたこなたに引糸にみだるゝ玉のひゞく岸かな

林下幽閑氣味深

世の中の色にはしらし春の花秋のはやしのふかきこゝろは

雲間初鴈

きつゝなく都もたびの空そとやうきたる雲の衣かりかね

郭公

つれなしと名にこそたてれ時鳥年になくねはたえぬ物から

海邊郭公

行衛なきうきねの波に郭公山をいつくか鳴て過らむ

夏草露

花にこそ色をもわくれ冷しさはひとつみどりの草の上の露

海霧

香のみや立くる波の色ならん霧のうちなる秋の鹽風

田家鹿

秋の田の稲葉かき分なく鹿やひとり庵のね覺問らん

月

出てくる月は有明の秋の山わか世しられて物そかなしき

山秋

立田姫心をつくすからにしきあたにな立そ秋の山風

鹽屋煙

たちのほる煙もさびしもしほ火の影ほのかなる浦のとまやに

籬中女郎花

しめゆひしまかきの外に女郎花うしろめたくもなびく花哉

江上螢

いさやその螢の數はしられ共玉江の芦のみえぬ葉そなき

水邊納冷

鷺のゐる河邊のしらぬ淵末遠み人目をよくる水の冷しき

寄道祝言

家の風ふきつたへきて道〳〵の塵をつきける御代のかしこさ

寄扇戀

名はかりを頼む扇のかたみ哉絹にかく月の影はかすめと

寄笠戀

いさゝらはみ笠といひて心みん雨はかりにはさしもさはらし

寄絲戀

山かつの賤のしけ糸すちよはみとはれはたゆる中そくるしき

寄錦戀

みせはやなうきは我身のから錦心の色を折みたしても

厭戀

忘らるゝ身をうき雲の有果てなきたる雲をなかめわひつゝ

池欵冬

影うつす池の心の庭〔底歟〕まてもいはねは知ぬ山吹の花

河欵冬

日にみかき風にみかける玉川の岸の山ふき露そこほるゝ

島欵冬

橘の小島に匂ふ山吹はたかいにしへの袖の名残そ

浸天秋水白茫々

月そすむよさの浦風はる〳〵と秋なき波に秋をひたして

隣鶏鳴遅知夜長

幾里の秋にかかひつくたかけのなかぬ限はあけやらし夜を

濱湫

よる波や又さそふらん濱ひさき吹うら風に散し落葉ゝ

眺望

雨はるゝ雲をうかへて行水に日かけなかるゝ末の川波

旅行

あはれまたこゆれは跡になりにけりよそに分こし岸のしら雲

軒雨

夜もすから音きく雨のふるともおもふにつきぬ軒の玉水

野遊送年

春の花秋の木かけのかり衣なれこし色もあかぬ野邊かな

松風入琴　永正十一五廿五着到

よしさらはひかてやしはし松風にまかせてをみんつま琴の聲

羇中浦

須磨の門月に越ゆくよるなからあかしの浦を出る友ふね

鳴神

山遠くよるもすくろも鳴神の音にきこゆる夕立の空

三輪

君を守るときはの影に三輪の山杉こそ神のしるしなりけん

峯雲

天津空の物ともみえす谷よりもたちのほり行峯のうき雲

杣山

なに高きをひえの杣木今も世に古きためしをいかてひかまし

祝言

祈をく代は住吉の松かえに言の葉そへて猶やあふかん

同

すなをにと祈る心を神もまたうけてや君のみ代守るらん

雑動物

なくつるも思ひやかはすあか月のこゝろのやみをふかき枕に

竹

さかへ行陰をこそまて竹の園その名も代々の跡をかされて

九月盡夕

惜みても今はの秋の今日の暮鐘もこゝろをつくす聲かな

河霧未晴

飛鳥河あくる夜しろき波のうへに霧のふちせそみえて流るゝ

樹陰夏月

明やすき空たにあるを夏山の木の間の月はもるほともなし

河落葉　歌合

山風の木葉せきくる音羽河秋にもこゆる波の色かな

遠嶺雪

ふりつもる雪は八重たつ雲まよりさゆる夜河の嶺の遠方

忍逢戀

かひなしや逢夜は夢とまきる共うき世かたりのうつゝ成せは

松歷年

君か代の行末とをき思ふには猶も二葉か住よしの松

〔秋〕時夕

うきものとおもはていさや心みん秋をなさけのゆふくれの空

うき秋は草の戸のみかをく露の玉のうてなも同し夕を

あやにくに忘られやらぬさひしさを心にかこつ秋のゆふくれ

淋しさも我身ひとつの秋ならはいかにすむへき宿の夕を

初鴈

秋風も夕暮さむし誰をかもたのむのかりの夜となくらん

夜鹿

そよ更に夜さむやわふるさゝの葉のみ山嵐に鹿そなくなる

河紅葉

立田川水の秋をやいそくらん峯の木の葉に山風そふく

枝なからうつろふかけや山川のそこにちりしく秋の紅葉ゝ

山河や水の心も行やらぬ岩かき紅葉たれかみるらん

九月盡

おしとをもふ心に秋の下かはゝ誰なさけにか今日はとまらん

うしとてもなかめは捨し秋もはやけふの夕にかきる名殘を

行秋の夕の鐘も心してけふの一日よなかき日もかな

積雪

ふるまゝにうつもれ果て吳竹の千尋を雪のうへにみるかな

ふる雪の積り重て庭の面の籬も山と今やみゆらん

浦藤

うき身には花の面てやふせの海の汀の藤をいかゝかさゝん

松藤

いにしへに猶咲まされ昔か世を雪にかゝれる北の藤波

留春不留

したへともさすかにかえぬ命とやつれなく春の暮て行らん

惜花

吉野山青葉にましるをそ櫻夏と春との色はみえけり

卯花似雪

春はまたかきれはかりは消さりし雪そとみせて咲る卯花

曙郭公

一聲にあけぬと告て横雲の外にすき行ほとゝきす哉

尋郭公

待あかす今朝しも來なく時鳥心なかさのほとや知せん

夏月凉

うたゝねは更るもしらす冷しさの月にそ夏を忘れ果ぬる

夕貌

賤か屋のかきほに名のる夕貌の花のゑみある露句ふらし

朝貌

日影をもまたて聽るゝ露の間にいさをりとらん朝かほの花

立秋

風の音の今朝よりかはり秋そとはふしみの里に先しられける

江早秋

みなとこす夕波冷しいせの海の小野ゝふるえの秋の初風

行路萩

分行はかつちる露の玉ほこに道もさりあへす咲る秋萩

崎萩

秋萩はいかて咲らん棹鹿の鳴ともきかぬ礒のすさきに

原薄

かたしきの袖とはみゆる月冴る野原の風になひく尾花は

苅萱

言の葉のいつるわか名をかるかやの乱れはつへき家の風かは

岡苅萱

秋も猶露をへ事は片岡の風にみたる（れて歟）ゝなひくかるかや

蘭露

むつましき色とそみゆる蘭誰ぬきをきし露のかたみそ

原虫

秋の夜は野路の篠原うきふしのあれはそ虫の音にも鳴らん

夜初鴈

歸るさを花に恨し鴈かねの都の月に鳴渡るらむ

雲間初鴈

夕日さす絶間はかりはほの見えて雲にまきるゝ鴈の一つら

駒迎

引かへて關の戸さゝぬ君か代にいつ逢坂の望月の駒

八月十五夜

かそへねと今宵もしるき水の面に光をそへてすめる月影

日のかけにあらそひかねて暮ぬるに出てもをそき空の月かけ

杣月

よるさへにみほの杣人いとま波宮木引之月の夜すから

閑月

なへてすむ円のやかたの月かけも妹とねぬ夜そ哀そひける

擣衣

山鳥の尾上の里の秋風に夜もなかく〳〵しき衣うつなり

はた寒み衣うつらしすか原や夜半にふしみの里の秋風

山菊

名にしほふ山路の菊の花の露千とせの秋を契をくらし

谷菊

谷河のなかれを汲てしらるゝは老せぬ菊の花の下水

河時雨

立よるも袖こそぬるれ夕時雨ふる河野への杉の下道

里時雨

みよし野の山風寒く冬の来てまなく時雨ゝふるさとの空

落葉

木葉ちる夕さひしも窓の内に日影かすかに入逢の鐘

原寒草

冬かれや朝氣の霜も白妙の袖に色なきまのゝ萩原

瀧氷

三吉野やこほりてたゆる瀧の糸よるはすからに冴る山風

冬月冴

冴氷る霜夜の月の有明は秋みしまゝの影も残す（ら脱歟）

柏霰

時雨をは梢に聞し柏木の落葉そよきてふる霰かな

歸雁

小車のとことの花にめくり逢春やうれしき歸るかりかね

雲間雁

これもまた道行方となかむれはうらやましくも歸るかりかね

秋風

荻の葉にふき過て行秋風の又たかさとを驚かすらん

寄浦戀

いかにせん忍ふの浦のもしほ草かきやる波の音つれもなし

我袖にあまる涙の玉章を雁の羽風にことつてなまし

無名立戀

ほしもやらす猶重ねたる草枕あふてはかりの露のぬれ衣

瀧邊月

波にうつる月はいさこの山よりもくたけて落る布引の瀧

田家月

山田もるすこか菴ほはあれにけり竹のとほその奥の月影

山家松

くるそ閑宿のあたりの小松原山の高きにまさるあらしを

水郷

月やとふ里は水野の山風に河音まさる秋のねさめを

江暮

海士小舟島こきめくり雪ふかいの入江のますけ今やからまし

名所市
市人もともに坂越くたり來てあへの田面にさはく鴈かね

山家水
谷ふかみ岩ほをたゝくみつかつらに結ふ夢なき峯の松かえ

山寺
寺の名もいさしら雲の奥のかねふもとの杉の門に聞えて

峻猿叫〔叫歟〕
猿さけふ山あひみれは雨過て岩ほより立雲そ殘れる

野
しとゝなく冬野ゝむはらみもたえて寒き小枝の霜を吹風

關屋煙
關屋にはたく火もみえぬ河口の水の煙やあさけ立らむ

社頭榊
御戸ちかく神のみましや袖ふれて立る榊も香に匂ふらん

暮山雨
いかゝすむ世のうき時の心なき山さへ雨にくもる夕〻〔けに歟〕

嶺松
嶺にあふる松やありとも神や猶こ葉の花の陰にやすまん

田家鳥
庵あらすあらしに夢やかへりさす鷄そおとろく冬の小山田

續群書類從卷第四百廿六

和歌部六十一

等持院殿御集

春部

立春風

春ははや立ける浪の岩小菅それもなひきて川風そふく

早春河

氷とく波こそあらめ早瀬川はやくも春の立にけるかな

早春湖

春のきる霞の袖に成にけり尾花はかれしまのゝ浦浪

野子日

かも山の裙野の葵それならて今も二はの松やひかまし

徑霞

分くらす野原の末の夕かすみ草葉にかねそ驛しつみ行

關霞

鳥の音に霞のこれる相坂や關の外山の春の明ほの

里霞

芦垣やそなたの里の八重霞また吹はらす難波浦風

島霞

なへてみな霞にけりな百島のかすみ行春の明ほの

里鶯

あられすよね覺の里の梅かえに鶯きゐる春の明ほの

寐覺鶯

山里のたくしは鳥のそれならてね覺になるゝ鶯のこゑ

野若菜

まつ消る雪まや有と片岡のあはつのゝへにわかなつむらん

原若菜

よそよりも雪まありけり日影さす朝の原のわかなつみてん

水邊若菜
水落のそはたのわかなをのつからつまぬにかれて顯れにけり
草殘雪
下萌るほとそとそゝく水莖の岡へにうすき春の淡ゆき
梅薰枕
梅かゝはうつりしまゝの袖枕木の下うとき春のうたゝね
折梅
思ひかねいつくの梅のゆくゑそと人のかさしの先とはれつゝ
若木梅
袖ふれていく春なれんうつしても今そ三年の梅の初花
紅梅
心して誰かゝれとからへそへし柳の糸に梅のくれなゐ
門柳
棹姫の柳のかみやみたるらん門の井筒になひく春風
路若草
冬枯のもとのよもきもましりつゝむら〳〵青き道の芝草
岡早蕨
流石また打殘しけり道よりははるかにおくの岡のさはらひ
樵路早蕨
初わらひまつおりそへて山人の歸る爪木やすくなかるらん
關春月
あふ坂の關の杉まを出てたに清水にうとき月そ霞める
江春月
早汐や春の霞のなかれ江に猶影まさる夜半の月哉
春雨
今はまた花のかまへのほともなし雪打きえす春の山もと
春野
紫のねはふ横野はうらわかみゆかりの色にすみれ咲なり
春關
東路やその名も聞し關越て霞を分るむさしのゝ原
春河
水上の雪けの水やまさるらんこほりをこゆる春の河波
春海
いせの海や浪高き浦は名のみして霞日よりの沖のつり舟
谷春雨
水音の增るはかりもなかりけり谷の木くれの春雨の空
庵春雨
たへてすむ心よいかにかやか軒かゝるくすやの夜の春雨
岡雉
燒すして片岡のへの夕霞またや煙ときゝすなくらん
野雲雀
しはしたゝ行人すこす程なれや野へにも落ぬ夕ひはり哉

路雲雀

すき入し野田の芝生や殘るらん行手のつゝみひはり鳴之

嶺歸鴈

天津鴈春やあらぬとおもふ覽雪遠かぬるこしの大やま

夕歸鴈

聞わひぬ友は先たつ春のかりひとつふたつの夕くれの空

栽花

梢こそなか〳〵見えね櫻花まやのあまりに近くうへつゝ

交花

嵐吹尾上のはなは入相も袖におちたる志賀の山越

花衣

木の本の紫すり衣それなから花に亂るゝ春風そ吹

花袂

棹姫の春の袂や霞むらんうす花そめの明ほのゝそら

花鏡

かへるさやはやくれぬらん櫻かり野守のかゝみ月そうつれる

花錦

しはしまた引とめてみるこま錦花なりけりな明ほのゝ山

花匂

そとなくうきたる花の匂ひ哉櫻にたかき春の山風

花使

吹は猶かきりありとや咲花のさかりをつくる使なるらん

花主　百千首ノ内

人すまぬ太山の奥に咲花を我そあるしと春風そ吹

〔題闕〕

つく〳〵と花に心をすます哉人こそとはねやとの夕くれ

花面影

俤そ猶うとみへぬ櫻花ちるはうかりし春のやま風

花形見

誰うへし花そとたにもいはれはやみて忍ふへき人はなくとも

花雪

しはしたゝ風のかしたる程みえて松のは薄き花のしら雪

花枝

枝はみなえたにかゝりて咲おもり庭にうつまぬ花の白雪

花根

鳥はまたよそなる谷の櫻花根にかへりても山風そふく

花色

暮やらぬ遠山本の花の色にをくれてひゝく入相のかね

三月三日

さらはまた三月の三日の月の影はやさ　そへよ桃のさかつき

桃花

しはしたゝ此まゝみはや夕日影殘る色あるはなのもゝ園

梨花
さてははや軒のつまなし吹にけり萑の門をとぢてみえつゝ

野菫
御馬草のかるてになれしつは菫今こそ野へに花吹にけれ

庭菫
野すちある庭にうつして菫草秋まつ花のさすひにそみる

摘菫
露なから庭に菫をつみ入てかへれはしたふ野への月かけ

夕蛙
暮ふかき池のつゝみの下水に聲うちそへて蛙なくなり

田蛙
雨かゝるあら田のさゝめ末ふして水の淺みにかはつ鳴之

山田苗代
種はまつこゝにやひたす小山田のたゝ一町のなはしろの水

路苗代
あせをこす苗代水のほとみえて道のぬかりのかはくまもなし

河苗代
三輪川の水せき入て今やまたふるの山田のなはしろの比

松下躑躅
比そあかぬつゝしは松の下紅葉しくれめきたる風わたるゝ之

躑躅紅
哀たかきぬかさ岡の岩つゝしそれもあかもの色に見えつゝ

池杜若
ちらてたに花とそうかへ杜若水さひをはらふ池のゆふかせ

澤杜若
水よりも遙にうへのかきつはたけに淺澤の程やみゆらん

岸欵冬
朝日山きしの山吹さきにけり花のしたゆく夜半の柴舟

河欵冬
はし姫のきぬの色なる山吹に浪おりかくる宇治の川浪

里欵冬
よしゝはゝさてもいほての里の名を花にみせたる山吹の比

池欵冬
池水のひしの浮はにとちられて影みぬ岸の山ふきの花

路欵冬
行やらて花にしはしそせかれぬる川そひ道の山吹のころ

庭欵冬
春をへて猶所せく成にけりうへし垣ねの山ふきの花

池藤
芹をつむ袖かとみれは紫の藤咲かゝるはしの池みつ

夕藤
さゝ垣の夕はへふかき色そへて線のうへの春のふちなみ

岡藤
立ならふ岡への松の梢にたむる藤のむらさき
江藤
鹽のひく江川の末のそなれ松又越てゆく春の藤浪
浦藤
多古の蜑のこれはかつかぬもくつかと底にも藤の浪や立らん
岸藤
杣川や落す筏にうつる之うちはへさけるきしの藤波
惜春不留
何かたにすてゝか春のくれは鳥あやしきまても行衛とはゝや
春欲暮
花鳥の色香をそへに殘るらん春の日數はかきり有とも
暮春鐘
あちきなくね覺もつくす心哉三月今はのあかつきの鐘

夏歌

朝更衣
袖にこそまつかへてけれ夏きてもまた音にたてぬ蟬の羽衣
更衣惜春
今日の袖立かふるとも花染も猶みそかけよかけやとゝめん
路卯花
炭かまのそのころ分し雪よりも卯花ふかき小のゝ通路
田家卯花
同しくは月をもやとせ卯花のそなたにかゝる雪の下水
卯花似雪
玉川の里の垣ほの袖すりに雪こほれます卯花のころ
人傳郭公
時鳥それこそあらめなきつとはさたかになとかきかせさる覽
樗
花の春紅葉の秋もたゝならすあふち打ちる森の夕風
田家早苗
そゝろにも立ぬ庭田の早苗草ゆひの手まはる程たにもなりし
急早苗
小山田のかさなるあを〔せ歟〕の一町もけふのこさしと早苗とる之
刈菖蒲
かりこむる露の行衛を尋きてあやめに契る軒の月影
池菖蒲
池水に一本すてしあやめ草軒ふくほとはことし成ぬる
沼菖蒲
今ははやかりてつかねんあやめ草沼のぬなはのまつ結ひつゝ
夜五月雨
さすかまた月の夜比の五月雨の明ぬにしらむ軒の玉水
袖五月雨

柚川のおのつからなる山くたし筏にならぬ五月雨の比

橋五月雨

五月雨に下行水もなかりけり橋までおよふ宇治の川浪

故宅五月雨

しのふおふる軒の糸水それなからみたれそへたる五月雨の比

浦五月雨

蜑のすむ磯へにちかく波越て鹽干も見えぬ五月雨の比

瀧五月雨

水上の日比なかりし瀧津せの今をちこちの五月雨の空

渕五月雨

まのゝ浦やまさる汀の五月雨に薄も今は浪のした草

夏月涼

いく夜さてたゝ此まゝに明ぬらんやり水ちかき月のうたゝね

夏月易明

すゝむとてあたりの友を呼たてゝふりさけみれは月の曙

瞿麦露

たくひなや笆に忍ふ姫ゆりのそひふししたる床夏の露

庭瞿麦

露のうへなひかぬ花もうつろひて苔に色つく庭の撫子

庭夏草

花おそきそれこそあらめ月影を隔てしける軒の下草

野夏草

棹鹿のなかぬはかりそ夏深き薄にかやの小野の夕風

夏草露

花さかぬ夏のゝ草に結ひてやこと色ならぬ露とみゆらん

社夏草

あはれたか花に通ひし跡ならむ茂りをくろゝ森の下草

徑夏草

露ふかき夏のゝ草のかたふきて分ぬにみゆるみちの一筋

橋螢

しはしまた川瀬の螢とたへして橋のしたゆく夕やみの空

池螢

夕やみにとにほたるのみたるゝは月にひかりやかるの池水

水上螢

池上にうかふ螢の星月夜水くらからす更にみえつゝ

草螢

小かや原薄にきえてとふ螢またあらはるゝ道芝のうへ

螢似露

とふほたるみたるゝ露もそれなから草の末野に夕風そ吹

螢似玉

草の原玉ぬく露の數そへてほたるもすかる野への夕暮

樹陰蟬

川そひの汀も浪も空蟬の柳にかゝるなつの夕かせ

松蟬

なく蟬の聲一しきり雨かけていつくかいつるまつの下陰

池蓮

池水にもふしの鮒やみたるらん蓮のうきはのゆるき立ぬる

垣夕顔

なをさりの竹のあらかき末越て夕かほうつむ道のへの里

夏野

しけり行野へのたかゝや青つゝらそれさへかゝる露のした道

夕立雲

玉水の音は殘りて夕立のあとすむ軒のうすくもの空

夕立風

風さはく林のとりも立うかれあらくそすくる夕立の空

夕立易過

夕立の水まさ雲のはやすみて涼しくうかふみか月の空

松下泉

松かけやよりゐる岩に先ひえて清水はやかて結ふともなし

夕納涼

山かけやすゝみにきぬる瀧の本花にもかゝる夕なりしを

河夕立

降にけりきふねのおくの夕立に一の瀬まさる賀茂の川浪

六月祓

ふけぬとて河原に出ぬ里人やたゝこゝもとの御祓しつらん

秋歌

立秋朝

さそふらん一葉も見えす朝またき木陰にとをる秋のはつ風

立秋風

荻に吹眞葛に吹て今日ははやいつしかなれや秋のはつ風

立秋天

秋はゝやけふたつ浪の天川星合ちかくなりにける哉

立秋日

朝戸明てめにさやかにも見えてけり日影にむかふはつ秋の空

立秋露

いつしかと淺茅かうへにむすひける秋くるやとの露の手枕

初秋曉

何となくね覺の枕物さひし秋このころのはつ鳥のこゑ

初秋夕

秋よたゝ日數かさねはいかならんいまたになみたそふ暮の空

初秋夜

夕月夜それこそあらめ夢をたに物も見はてぬはつ秋の空

初秋雲

今はまた時雨るゝまてはなけれとも秋のならひの浮雲の空

初秋衣
小夜衣かさねもあへず吹にけりまたき一葉の秋のはつ風
七夕雲
夕雲の立ゐにさこそいそくらめ契しまゝのほしあひの空
七夕霧
忍ひけり霧まをとをるよはひ星天の河原の夕くれの空
夕荻
夕しめり軒端の荻に吹風のみたるゝ程は音なかりけり
江荻
あし邊よりこなたにみゆる荻原も塩のいり江に打なひきつゝ
庭荻
さのみよししけくはうへし月のいるそなたの窓の荻の一むら
庭萩
宮城のゝ秋のさかりもかゝらめや小萩こほるゝ庭のゆふかせ
野萩
をく露の間行鹿も見えぬへし本あらに咲野への萩原
月前萩
あふ人の袖なる露の花すりに末野の萩の比そしらるゝ
川萩
散らぬま萩みたるゝ立田川もみちやまたぬ錦なるらん
崎萩
宮城野の秋のさかりもかゝらめや小萩こほるゝ庭の夕かせ
女郎花露風
招もまたたか秋風に女郎花結ひもとめぬ露こほるらん
野女郎花
をく露のはや落にきや女郎花さかのゝ風に打なひく之
徑女郎花
きぬ〳〵のおもかけみせて女郎花篠わくる野の露に咲之
原薄
こゝまてもまた細浪のおよふかとおはなに見ゆる粟津のゝ原
岡薄
片岡の岩本薄ほにいてゝとふ人まねく秋風そふく
徑薄
わけとまるおはなか袖にうつる日の遠かた野へに秋風そふく
苅萱亂風
里人の所〳〵にかるかやののこるもすこき野へのゆふ風
岡苅萱
岡野邊の松の下かけ晴にけりたかかるかやのあとの夕風
蘭薫風
なをさりの花かと見れは蘭ひと野に匂ふ秋かせそふく
蘭露
濡てたゝほすかとそ見る蘭吹たつかせに露はこほれて

野蘭
蘭天野つゝきにさく萩の花のよそめはいつれともなし
[illegible]花
いかならむ花の千種もよしやたゝまかきにかゝる露の朝かほ
原露
あつまのゝ空には雲の晴ぬれと袖にしくるゝかやか下露
径露
哀たれ錯にかけし跡ならむ露かはき行道の篠原
故郷露
枕にも袖にも月のあひやとり軒はやあれて露の故郷
庵露
雨そひし野分の行衛猶見えて露所せき岡のへのいほ
庭露
みたすへき草はの風もなかりけり露の白すの庭の月影
草露
中垣をこえたる萩のねわたりに一本わくる秋のしら露
苔露
かたしきにあまれる露のさかり苔玉ゆ（衍歟）くらふくな山のした風
袖露
秋はたゝ露もなみたもわかさりき覚えす袖のしつく落けり
枕露
打しほれいとゝ露けき寝覚哉かならす草の枕ならねと
閑虫
むら雨のなひく草はに埋れてしはしはしつむ虫の聲哉
夕虫
夕露のまかきの草に聞ゆなり月のやとりをまつ虫のこゑ
夜虫
露をかぬ軒の下草したひきて笆にうとき夜のむしの音
野虫
小鷹かりそれにはあらて鈴虫の聲ふりたつる野への草村
庭虫
哀なる草の庵のね覚かな雨そほふりてむしの鳴之
閑虫
身をこふるその灯のむしならて枕のうへに聲そきこゆる
径虫
分こゆる露もさなから道もせの草にかけたる機織の聲
夕鹿
月はまた夕の山を出やらて野へに先たつさをしかのこゑ
岡鹿
なほさりに誰か聞らむ夕月夜むかひの岡のさをしかの聲
谷鹿
川浪も鹿の鳴音も更にたゝ深山おろしの底に消つゝ

朝鹿
野分せしそなたの庭や道とぢて朝行鹿のこゑとまる之
原鹿
棹鹿の妻とふ夜半の薄霧に月もこもれる春日のゝはら
海邊鹿
舟いたす磯山本の明ほのにおのれも鹿のかひよとそなく
江鹿（鳥羽殿）
入江なるまのゝ浦舟こく袖と尾花を見てやうつら立らむ
里鹿（鳥羽殿）
かり人のこなたやわくる程ならん末のゝ里に鶉なく之
秋夜長
押かへし夢もね覺もしけきよの猶殘り有明ほのゝ月
夕月
夕日かけ猶色とまる薄雲のそなたにいつるみか月のかけ
嶺月
月ははやこなたのまつにかゝる之かさなる山の嶺をつくして
袖月
さひしさのかきり之けり袖やまのこやさす月のあり明の空
岡月
いつかたにあくかれいつる程ならん里しつかなる岡の月かけ（への月イ）
野月
月ははやいはたの小野にかたふきぬ山路の末や有明の空
關月
月影の須磨の關路にあくかれてなかく人やとまらさるらん
橋月
樂波や打出の濱に月さして一すちくもるせたのなかはし
江月
月影のかたよりしてそやとりける汀にかゝる水のみさひ江
浦月
和田のはら八十の嶋ねも見えてけり波にくもらぬ夜半の月影
礒月
ひく汐の跡そと見えてさゝ嶋の礒へにとまる夜半の月影
崎月
沖津浪ゆらの御崎の霧晴て夜わたる月に秋風そふく
嶋月
まつ嶋や雄島のあまのひまとへは漁にいてぬ月のひと比
潟月
鳴海かた鹽のうき洲にとまる之月をためたる海人の捨舟
古寺月
名にしおふ立花てらはさもなくて河原の松にあり明の月
里月
花の比かならすそれは音信しよしのゝ里を月にとはゝや

庵月
今はまた月見んためとしられけり軒端ふきさす草のかり庵

閑居月
更にたゝ月やとれとの住ゐかなむくらの垣ほよもきふの露

庭月
月にたゝ曲あらせしのためとてや草木もうへぬ白砂成らん

夜月
さのみまた更さりけりな月かけは軒はを過ぬ秋のよの空

杜月
月さゆるもりのこすゑに消る之雪〔霰歟〕の下なる夜鴉のこゑ

原月
水音のいる野のみのゝ秋風に月影なひくをのゝ篠原

澤月
更にけりふしみの澤にうつろひてなかるゝ月のうちの川風

〔沼月
所せき岩かき沼にやとりても同し空なるあり明の月

湊月
入舟のいなの湊にうかふ之しは山いつるあきの夜の月

田月
今はたゝほ波そかけぬかりてたに跡も水田の秋のよの月

都月
白河もかつらもいさや月かけは今中空の程そ澄つゝ

井月
月も猶底にとまれる板井筒袖にも同しかけやとりけり

惜月
更まさる我世はおきて秋の月かたふく空をわひつゝそみる

初聞鴈
珍らしやけふは八月の田のもとやかならす鴈の渡りそむらん

雲間初鴈
天津空をのかは風や拂ふらん雲にわかるゝはつ鴈の聲

山初鴈
やかてはやそはの水田に浮ふ之山の端こゆるかりの一つら

峯初鴈
筑波ねの嶺とひ越て來る鴈やこのもかのもの小田におつらん

近初鴈
もる小田のね覺のまくら夢たえて袖にすかりの明ほのゝ聲

遠初鴈
今はまた渡る小とりのそれなれや遠さかるかりの夕くれの空

浦霧
和田の原島かくれにはならねとも行舟見えぬ浪のゆふきり

山霧
松檜原さのみなかりし山なれや嵐はらはぬみねの夕霧

野霧
分て猶たゝ一むらの夕きりや野中のもりをこめて立らん
遠擣衣
賤の女かときあらひ衣うつなれや川をへたてゝ音のきこゆる
近擣衣
こなたまて音とゝろきて床ちかくあなかまよはの衣うつ聲
曉鴫
鳥はなと八こゑに數を定むらん澤田の鴫は百羽かくなり
澤鴫
あはれをはたゝ夕暮に思ひしを鴫たつ澤の有明のそら
田鴫
水ほしてをしねかりほす跡なれやそなたにやかて鴫のこす覽
野鶉
深草の野へもつゝきてをのつから鶉や床にふしみなるらん
江鶉
入江なるまのゝ浦舟こく袖とおはなを見てやうつら立らん
里鶉
かり人のこなたやわくるほとならん末のゝ里にうつらなくこゑ
葛風
吹かへす風のまゝにや結ふらんうらはにかゝろくすの夕露
垣葛
月をさへ垣ほに今はかけてけり露ほしはてぬ葛の秋風
栽菊
是もまた山路よりこそうつしけめ千代へむやとの白菊の花
山菊
ちりちらすなかるゝ菊のした水に月くみまさる秋の山人
谷菊
たえ〳〵にさゝれとめ行谷川のうは浪さはくきくの夕かせ
柞紅葉
柞原うすきならひを忘れつゝ時雨にかこつ秋の山こえ
槇紅葉
山風のきり吹かくるほとなれやちらぬにはしの色そ消行
蔦紅葉
深山路や秋にさひたる梢かな蔦の紅葉に槇のたて枯
紅葉如錦
山姫の是や錦のたちさしと紅葉うちゝる夕風そふく
瀧紅葉
もみちはや中なるよとにうつるらんおちても染る瀧の白糸
古寺紅葉
泊瀬山もみちにくれぬ色なからさてしもきゝつ入相のかね
遠村紅葉
紅葉ゝの色うつもれてうす霧のそなたにけふる里の夕暮

庭紅葉
村時雨そむるも淺き梢かな山路に遠き峯のもみちは
峯紅葉
くるゝとや思はさるらん日を殘すもみちのかけのみねの山人
谷紅葉
秋ふかき峯の立木のうつろひて紅こゆる谷のしはゝし
岡紅葉
いかにして時雨分ける色ならん松にならひの岡の紅葉は
岸紅葉
立田川み室の岸やうかふらんもみちにしつむ有明の月
里紅葉
そことなき霧の立枝のはし紅葉たか里見えぬ秋の夕暮
垣紅葉
打はへて蔦のもみちのかこふ哉われとあれゆく庭の松垣
軒紅葉
いとゝなを忍ふの末のしたる哉かゝれる軒のつたのもみちは
竹間紅葉
山本のいさゝむら竹うちなひきちらぬ紅葉に夕風そふく
尋紅葉
くれぬとはさても覺えす絶葉の色てる山の入相のかね
紅葉增雨
村しくれ松たつ山の下紅葉迷ぬ木すゑも色をそへけり
紅葉移水
さらにたゝ蔦はふ窓の色なれや垣ねなかるゝ庭の遣水
暮秋風
したはや垣ほにはへる蔦のはのかへるかいまは秋の夕暮
暮秋露
行秋の露の情もとめしとや草はな風のほしてふくらん
暮秋雨
空たにも一時雨とそ見えつるに涙さひしき秋のくれかた

冬歌

河時雨
山崎やむかひの里の一むらは淀の川瀬に時雨来にけり
谷時雨
さゝれ行谷の水音それなから時雨てくたる山風そふく
野時雨
風ませの時雨になひく程なれやぬれて露なき野への萱原
落葉隨風
吹たてゝしつみもやらぬ木のは茂木の下ふかる庭のゆふかせ
曉落葉
さひしさは夕になれしまゝなれや木の葉音なき窓の明かた
落葉混雨

落葉たに聞わひつる哉果はまた時雨に成ぬ軒の木からし

山落葉

日影たにもらすと見えし山路の落葉に晴る木からしの風

谷落葉

梢こそ今はうつらね山かせのおちはにうつむ谷の下水

橋落葉

山人のあとに嵐やをくるらん木のはみたるゝ谷のかけ橋

野霜

吹しほる程よりも猶扨(物イ)淋し風もゆるさぬ野への霜いて

田霜

霜かるゝ山田のくろの村すゝき秋のほ波にまた殘りけり

庭霜

今はまた霜こそうつめ苔にとち落はの軒のまつの下風

原寒草

なく霜の朝の原の草枯に跡もゆく衛も道見えてけり

岡寒草

さしもこそひまなく見えし蔦垣の霜に荒たれ岡のへの宿

野寒草

さらにたゝあまる緑の色もなしみな霜かれの小のゝ篠原

庭寒草

庭にまつあまれるかたに冬かれて風ひとへなる窓の下森

池寒草

ひまもなく汀にめくるあし原のかるれは見ゆるこやの池水

江寒草

をく霜の玉江に見えし芦のはも霜にそ今は結ひかへぬる

湊寒草

湊田のたのほも今は殘らぬに霜をきみたすあしの夕風

田氷

下穂もる山田の氷とちあけて月さへかけそかさなりにける

谷氷

水上の氷にとまるほとも見えてさゝれに成ぬ谷川の水

網代寒

山風はまつ吹落て宇治川のあしろにこほるせゝの白波

冬月冴

野へは霜松には雪をこほらせて更にくまなき冬枯の月

汀千鳥

淀川や水のけふりも明くれに立きえてなくむら鵆かな

河千鳥

みつしほの月のうきすの小夜千とりしはしこかれて浦つたふなり

濱千鳥

大淀のみつの濱への夕千とり松風さへに聲そへてけり

汀水鳥

つかひえぬ浮世なれはやなつみ川なつさひかねて鴨（鴫イ）の鳴らん

竹霰

はをかはす竹の小枝にゆりためてもる程おそき玉霰哉

屋上霰

窓たゝく音はとまりて一しきり檐やのあられ風にちる之

寝覺霰

あられふりあれたるそのゝ行衛とも覺えぬ月のね覺とふらん

關雪

をのつから關をはこえてふる雪のふゝきにとまるふはの中山

古寺雪

降おもる尾上の松は見えわかて雪よりいつる入あひのかね

里雪

雪よとて窓引あくる明ほのにとなりの里に人の音して

閑居雪

夕からす音つれて行それたにも聲うちおもる雪の山里

杉雪

ふる川の外なる杉の雪さけにまた二本となりてみゆらん

峯雪

こなたなる松よりうへに顯れて積らてつもるみねの白雪

杜雪

松ひはらそれもましらぬ柏木の杜の梢そ雪にさひしき

河雪

むら／＼につもるを見るや白雪のふる川野への瀬たへなる覧

湖雪

雪はまたあさつま舟にふりつまてかろけにみゆるうら風そ吹

濱雪

是のみそうつろふ色はなからまし雪の花さく菊のなか濱

嶋雪

雪にさへ過こそやられあま衣田蓑の島はやともなけれは

田雪

鴫のゐし秋より淋しかきたれてふれる田面の雪の明ほの

曙雪

春のみと何おもひけん降雪のはなのみやこの明ほのゝ空

檜雪

雪はまた積り定ぬ程なれやみねのひはらにふゝく山風

年内早梅

今はゝや春のへたてや程ちかき花に成行庭の梅かき

年欲暮

年もはや今はの末のくたりやみまつ火ふり立人いそく之

路歳暮

年のくれさもいそかしとあふ人のたゝ一言に行わかれぬる

河歳暮

としもはや氷にせまる川浪のやすくそ春に立かへらまし

閑居歳暮

さはらすや年はこえまし冬枯の葎のかきのいたくあれつゝ

山家歳暮

これをたゝいとなみそとて山里の年を爪木につみやそへまし

歳暮松

さま〳〵の松つみをきて道のへや子日に似たる年の暮哉

戀歌

寄天戀

空に住枝にならはん語らひのそれもいかてか世にはもりける

寄霧戀

あちきなや人の契りの朝歸り行衛を霧にへたて果つる

寄井戀

涙こそ結はぬ先の契りなれ板井の水のあさきちきりに

寄池戀

いかゝ岡ならひの池のなしの聲我かたらはて明かたの空

寄沼戀

いかにして淺香の沼の草の名のそれしもつまにひかれきぬ覽

寄江戀

今はまたいかなる江にかかゝるらん我身こかるゝとこの浦舟

寄浦戀

かた〳〵にまた思ひ出と成やせん月こゝもとのすまのうら波

寄濱戀

かけて今思ひも出ようと濱の沖のかたほの夕くれの空

寄礒戀

難面きはあまの汐木のこりもせすはてはうらみの礒の松風

寄汀戀

ふしつけし淀の汀の魚の名のこひするみとや人にいはれん

寄嶋戀

その名けににほふかほるに橘の小嶋の浪のうちの河風

寄潟戀

涙なを袖はひかたもなかりけりうらみにいつる蜑の釣舟

寄崎戀

わするなよ由良の三崎を出舟のほのかたらひし浪のうきねを

寄檜戀

秋なやく檜原の山のもみちはの我もこかるゝ色を見せはや

寄桐戀

あちきなや桐の一葉の落初て人の秋こそやかて見えけれ

寄柞戀

いかさまにいはたの小野の柞原あさき色には人はみるとも

寄葵戀

引たかへまたたかかたにあふひ草そのかみかけていひし心も

寄淺茅戀
かけとめよ人の契のあさち原せめては露の情なりとも
寄芝戀
かゝらすは猶きぬ〳〵にうからまし月のしのゝめ道芝の露
寄蓬戀
さすかまた木立わすれぬまへわたり車をとむるよもきふの宿
寄苔戀
いとゝなを涙まされす見えぬへし袖にをよはぬ苔の通路
寄薦戀
契らすよあれ田の澤にかりこもの思ひ亂れて袖ぬらせとは
寄菖蒲戀
のちにしもかゝる契やなからましあやめの枕月にかほりて
寄海松戀
いつまてかあはての浦に浮みるのみるめはかりに袖濡さまし
寄沼繩戀
忘るなよその江におふるねぬ繩のなかき世までといひし契を
寄鶯戀
扨もうきたか心にかならふらん花にうつらふうくひすの聲
寄水鶏戀
これまてにふかしけるよと今更にわか心さへ水鶏鳴之
寄鴈戀
人はたゝ音信たにもかきたえて雲とふかりの夕暮のころ
寄鴫戀
鴫のたつあれ田の澤のわすれ水たか為にかは袖のぬるらん
寄鴛戀
今はまた名残をおしの聲す也たか別路のとこのやまかせ
寄鶏戀
別路の鐘をはいかにそらねそとゆふつけ鳥はまきらはすとも
寄雉戀
我もまた涙にかへるきぬ〳〵のあをのゝきゝすねをや鳴らん
寄鵙戀
聞もうし人の心の秋されに鵙なきおつるやまの下みつ
寄鳩戀
みをしほり物おもへとのわさなれや鳩ふく秋の夕暮の空
寄鴨戀
なかれても末に立名をいかにせん早瀬にうかふ鴨の川淀
寄鵜戀
しるや人鵜舟の手繩くるゝ夜をまつほとをそき思ひありとは
寄鷺戀
遠さかる名残も見はや鷺のたつむつた河原の夕暮の空
寄鵲戀
うき契り身をしる雨と降ぬへしくもる月夜のかさゝきのはし

寄鶏戀

みな鶏のさらしく忍ぶむしろ田に人のかさねぬつるの毛衣

[illegible]

玉ゆらの人の契りはさもあらでいなつまおよぶよびの手枕

[illegible]

よそにのみ見びし物を横雲も袖のわかれのしのゝめの空

[illegible]

[illegible]

寄夕戀

人こまに[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寄砂戀

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寄網戀

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花とみるまがきの露の朝をきと人のあやめはこたへこそせめ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

露ふかき野への[illegible]の下荷てうきにみたるゝ人に知られし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乙女子か玉くしのはのなびかしと祈るに神のそれやうけまし

[illegible]

[illegible]ゆへに頭の袖にたまるらんえしるこそひろふやまの下かけ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寄柚木戀
宮木引いつみの杣のそま人はいつ行あひの契りならまし
寄馬戀
かろき名もさそ立なまし駒とむるうちのわたりの忍ひ通路
寄松虫戀
聞わひぬつらき契のかきくれて軒はしくるゝ松むしのこゑ
寄我柄戀
われからそ人のこゝろの海原やもにすむ虫のたくひならねと
寄織促戀
くりかへし物思ふみにきくもうしたかおた卷のはたおりの聲
寄熊戀
人すまはかよはん物をうつほ木のたつきもしらぬ熊はあり共
寄窓戀
さりともとゝちめぬ窓のそれもはや明方になるしのゝめの空
寄床戀
もしもきて袖をや人のしかすとて枕もそへぬ床のさむしろ
寄菴戀
かりてふく軒端も今はさゝかにのいと戀しきと人にしらせん
寄門戀
あはれたかしつまる程をまちかねてかためぬ門に立忍ふらん
寄庭戀
人やみん庭の淺茅の一とをり分てかへりし庭の行衛を
寄柱戀
あはれとも見つらん物をまき柱すきまにいりし人のとのは
寄本結戀
うき名またおちふれやせん本結のすへり心はきぬにたまらて
寄櫛戀
さし櫛のあかつきかたになるかとよ哀わかれの名殘かなしも
寄席戀
あふとみる夢のそひねの小筵にさも所ある床のうへかな
寄錦戀
からにしき二村山の紅葉ゝに秋のたもとはなみたしくれて
寄筆戀
いくたひかさてもかきやる水くきの哀とたにもいふ人のなき
寄箏戀
物の音をつくすむ月のしらへにも猶そのとやもりてきこえし
寄笠戀
忘れめや今こそ三輪の市女笠たゝなをさりのすかたなれとも
寄蓑戀
をきわかれ出つる方の一夜妻涙か雨かみのゝなかやま
寄注連戀
葛かゝる田中のもりのみしめ繩さてたか秋の行衛なるらん

寄車戀

心なやしはしとおもふきぬ〳〵に車をよせて人そおとなふ

寄帆戀

島かくれはるかの沖に行舟のほかけにたにも見えしとや思ふ

寄檝戀

更にまたまかちしけぬき隙もなし誰まつしまの沖つ舟人

寄碇戀

いかりをろす沖のとまりをしりもせてさそ松島の浪の夜〳〵（うかれ女イ）

寄苫戀

秋更るあしやの沖に浮ねしてとまもる月も袖ぬらしけり

寄澪盡戀

しろや人難波のみつの澪標ぬれてほすまもなき名立とは

寄答簀戀

わかなつみ根芹を入し後もまた人のかたみのみになれにけり

寄衾戀

此まゝに夢をも見はや小夜衾なこやかしたに枕かはして

寄裳戀

しはしまた人のもすそをひかへてもたゝ一聲をいかて聞らん

寄手向戀

宮ゐするいつくはあれと契をや結ふの神に手向しつらん

寄斧戀

うかりける爪木のをのゝ音たえてこりはてにきや夕暮の空

寄筏戀

淺瀬浪なをこえかねて此暮も杉のいかたのさはりきぬらん

寄繩戀

人よたゝあらたつ駒にさすつなのひかれはすると心ゆるさし

寄網戀

いさなとりあみの浦人涙さへめにもたまらぬゆふ暮の空

寄鐘戀

入相もねよとのかねも聞すみて今は心をつくすはかりそ

寄鏡戀

われにうき人の契りの朝かゝみ涙なからにをしのこひつゝ

寄簾戀

つてに見し扨もすこしの俤の涙をさへにかけそふる哉

寄枕戀

しるといふ枕にさらはかこつけてこよひは人の袖をしかはや

寄祓麻戀

扨いかに人のこゝろは大ぬさのとりあへさりしわかれちの空

寄猪戀

うき契我もねられすかるもかくゐなのさゝ原風そよきつゝ

寄貝戀

蜆とるかたのゝ浦の蜑人よこまかにいはゝかひかあるへき

雜歌

田家春

暮ふかき門田の面の苗代にかすみのみおをまつ引てけり

田家夏

かり庵のあれにし跡になつふかみ田中の清水又むすふ之

田家秋

さひしさをとりあつめたるね覺鴫の羽かき鹿の遠聲

田家冬

小山田のひたのかけ繩引たへて殘るひつちはもる人もなし

山家草

さひしさや軒の下草打なひきまつほと風の音はなけれと

山家虫

月をそき山下庵のかや垣のほのめきあかすきり／＼す哉

杣檜

とりつくすあなたの杣のほと見えて檜原くもらぬ峯の曙

杜柏

下草の露やさまたになかるらん雨うけなかす森のかしは木

澗槇

雲はるゝ嶺もさなから移りきて槇のかすそふ谷の下水

江菅

夕鹽の入江にしける眞菅原からぬに見えぬ浪や立らん

野草

野へとほき花のかすこそ猶しけれ道の草はかる人もなし

羇中濱

さき立もをくるゝ友も見えてけり又かけもなき浦の白波

羇中鐘

清見かた霞うつ波も聲そへて遠にたくる入相のかね

羇中島

あまた女有ともさひし雨かゝる田簑の島の夕くれの空

羇中潟

月殘る汐干のあとのあさかかた見せはや人にかゝるなかめを

寄日述懷

曇なき御世そと更にあふくみにやふしをわけぬ日影渡すな

寄星述懷

せめてよし月まつほとの慰みかな空に晴たる夕つゝの影

寄杉祝

いくとせか杉の古枝の是もまた松にやおよふかたを見すらん

寄苔祝

苔むしろ敷て久しき跡ふりぬになみしこれや山路成らん

寄龜祝

更にたゝよもきか島を庭にして汀の龜のよろつ代の聲

萬物自

わたります今此時と君も臣も南の殿にいてつかへつゝ

右等持院殿御集以有賀長收（浪華人）本書寫了

于時文化三丙寅年夏六月初七日

〔右等持院御集以昌平坂學問所本校合〕

續群書類從卷第四百廿七

和歌部六十二

慈照院殿義政公御集

立春

暮て行空にもしるし年なみのうつりて今日や春の立らん

立春日

いつる日の影こそかすめ足引の山のあなたもはるやたつらん

春來ぬとふりさけみれは天の原あかねさし出る光かすめり

早春

天津かせけさはのとかに吹ぬなり乙女の袖も春やしるらん

山早春

行としやよはに越けんあさ霞たつたの山に春は來にけり

河早春

今朝よりは氷打とけよしの河岩なみたかく春とつくなり

山霞

よしの山にほふ霞をはしめにて花待みねに春風そふく

浦霞

浦なみのひゝきのなたものとかにて鷗をはるかに霞春かな

橋霞

たえにしも又たちそへて霞つゝ久米の岩はし日もわたるなり

初鶯

鶯の涙はかりは打とけて聲こそむすふ谷の下水

雪中鶯

降かゝる梢の雪に打はふき鳴鶯のこゑそさむけし

夕鶯

夕附日山の端遠く入かけに心なかけそ園のうくひす

詠若菜

たれかまた尋つけてのみみしのへを雪間ありとて若菜摘らん

摘若菜

春淺みまたそれとても七種にあらぬ草葉をつみやそへまし

谷鶯

聲は猶雪のふるすに埋れて春のよそなる谷のうくひす

戸外梅

折ふしも哀そふかき梅にほふ竹のあみ戸の明かたのそら

梅薫枕〔枕歟〕

家つとにゝき木の梅の花ちりて匂ふ枕のよはのうたゝね

曙梅

よこ雲の別をゝくる春風に袖のゆかりの梅か香そする

夜梅

梅かえのかけさへ袖にうつりけり月も木の間に匂ふ軒はゝ

紅梅

分て先西こそ秋とみへし枝の紅葉にゝたる花の色かな

春雨

庭たつみふかくもみへぬ春雨にまさるみとりは草木なりけり

野春雨

かつもえし草のかたちのをのつから色分ほとのはるの雨かな

春月

あくかるゝ身にはかはりて春の月猶出かてに霞こめつゝ

池柳

池水に波のあや織いとなれや風にはたるゝ岸の青柳

川柳

老にけり雪をいたゝく神なみの河波ちかくたてる柳は

歸鴈

越路にや又しのふらん歸るかり今はみやこをふる郷にして

歸鴈幽

たえ〳〵に消ぬる雲のあとなれや霞のをちのかりの一つら

花漸散

うつろはぬ程とはみへて春風の吹はたえ〳〵ちる櫻かな

春駒

冬かれの野原は春に引かへて駒のけしきやあれ渡るらん

霞

神代よりかすみわたれる春の色を思ふも遠し天のかく山

山霞

仙人のすみかやいつくたちぬはぬ霞の衣をりかけてけり

名所霞

明やらぬよさのうら波をとはして入海くらく立霞かな

浦春

心なきあまのなかめはをしてるや難波江霞浦の明ほの

若菜

なるをかやをちほひろひし跡とめて春は田面にわかなをそ摘

春河

谷川やうち出し波の花も又岩ねにかへる春風そふく

梅

あめつちの開けそめにし時よりや梅はたへたる香に匂ひけん

三月盡

程もなくたかき日影も暮にけり今日のみ春の名殘と思へは

春夜夢

くるゝまて花に遊ひし小蝶もややかてぬるよの夢とみゆらん

花落春月

咲匂ふ花のみやこのよはの月色も光もあかぬはるかな

待花

みれは今朝かつ咲にけりいかにして待し日数を花にかへさん

獨待花

此ころは咲をそいそく山さとの花のたよりに人もとふやと

遠尋花

花とみし雲又雲を分すてゝ山よりやまのをくをとふかな

盛花

吹とふく風にまかせて今日はみんちるへくもあらぬ花の盛を

落花

今は又枝をはなれて散つもる木陰も八重の山さくら哉

花慰老

うつしはつる老の心の花の陰にうきをもしはし忘れぬるかな

名所春曙

心なきあまのなかめはをしてるや難波江霞むうらの明ほの

庭菫菜

いく年の春をかつみしすみれ咲まかきものへもあるゝふる郷

款冬

春風のちらさはつらし山吹の花こそいは〔ね歟〕ぬ色に咲とも

岸款冬

さくら花已こそあかれ住吉の岸のはにふに匂ふ山吹

藤

さきかゝるみきはの藤にうつもるゝ松や入江の波の埋木

松藤

谷水をよそたる山の松かえそ藤咲春は波のむもれ木

苗代

今はまたかけぬなるこの苗代に水引はゆる小田のますらを

澤雲雀

田鶴のあるをなし澤邊に鳴ひはり子を思ふ雉よいつれ成らん

暮春

花もねにかへるふるすのとり〳〵に又思ひたつ春の別路

庭梅

咲みちて匂ふもふかし軒の色にとられぬ庭の梅かゝ

首夏
さためなく別し春の跡とへはけに月の名も夢とみゆらん
旅首夏
たひ衣うすき袂に成にけり古郷人も今日やかふらん
時鳥
郭公こそきゝしにもまさらぬやほのかになのる今の一聲
時鳥聲遅
更に猶五月來てさへ待侘ぬほとゝきすきぬをのか物ねは
雲外時鳥
時鳥名こりをいかゝしからきや明ると山の雲に鳴なり
時鳥稀
山ふかく鳴ていぬめり時鳥なれもうきよの秋近きころ
卯花
久かたの中にすむてふ卯の花の光や月にさそならひけん
隔卯花
心あれや枝をりかこふうつきかき花咲ころのをかのへの宿
社卯花
雪の色に卯花咲る神垣は秋を越てや冬の来ぬらん
早苗
植わたす跡より絶る小山田の水のみとりをとるさなへかな
採早苗
今日いくか袖にみしふもつくはねや裾はの田子の早苗取らん
山葵
二葉なるちきりもあひに葵草松の尾山に誰かうへけん
夏草
名をたにも分こそかぬれ茂りあふ夏のゝ千草花さかぬ間は
濱五月雨
待わふる人もとひこすおほとものみつの濱邊のさみたれの比
夏月
ねぬるよの草にまさりて月影の明すきこそいやはかなけれ
梅雨
五月雨にあさもみるめや迷ふらん鹽干の松は沖のとほしま
峰五月雨
山とりの尾上晴せぬ五月雨のなか〳〵しくもふる日數かな
夕貌
白妙のかさしに成ぬ夕貌の花もてゆへる賤か袖かき
里盧橘
はつかにも月さへにほふ橘の花ちる里のふかきよの空
夕立
遠方やゆふたちむかふ山風に行空はやき雲の一むら
杜蟬
鳴せみの聲そしくるゝ秋たにもそめぬ常盤のもりの梢に

夏草

分かへる夏のゝ草の夕露にぬれて涼しき里のあけまき

夏草滋

庭の面は雪ふりうつむ比よりもふみ分かたくしける夏くさ

夏祓

はらひ捨し心のちりもみな月のけふの川瀨の水の冷しさ

瀧下螢

ぬきとめぬ玉とみたれて瀧の糸のよる〳〵波に飛ほたるかな

舟納涼

風そよく芦分小舟漕とめてみなと入江にすゝむ夕くれ

村夕立

過やらて夕立すゝし河上やふかきゆつはのむら雲の空

杜夏祓

みそきする心も冷し行水の清瀧川の瀨々のゆふかけ

蓮

風そよく蓮のうきはに置露の玉もたよする池のさゝ波

初鴈

古郷に渡らし春のほとならて都にかへる秋のかりかね

籬蘭

みし春は梢に咲し藤はかま秋はまかきの松の下草

鵲羅婆

心ありてうへをきけん人あるゝ（下）住まかきの嶋にゐるなてしこ

山鹿

夕くれは秋かけ寒み鹿そ鳴世をうち山と誰か聞らん

夜露

月はまた山のはにほふむらたけに影をいそきてのほる露哉

近竹霧

春や夢かすみしかりの秋にきて軒はの山に歸る聲かな

澤月

雨過る淺澤沼にすむ月の影もにこらぬ水の下くさ

里擣衣

聞えくる音に心をかはしつゝいくさと人や衣うつらん

關時雨

東路やいつくまてとかめくるらん時雨そこゆる白川の關

谷寒草

谷河や淺も氷にかへるなり霜を花なる草をさなから

篠霰

露ならは結ひそとめんさゝの葉にふるとはすれとちる霰哉

千鳥

千鳥鳴君か御代をは八千代ともなにかさしての磯にこたへよ

行路初秋

袖にちる朝けの露の玉ほこやゆくて涼しき秋の初かせ

故郷萩
今日は又咲殘りけりふる郷のあすかさかりの秋はきの花
閑居
露はらふ袖かと見れは風になひく尾花そ高きよもきふの庭
織女後朝
七夕にかしつるよるの衣をや今朝かへすらん天の川かせ
杣檜
杣山や松はまかれる中にしも直き檜やひはらなるらん
寝覺荻風
聞侘ぬねさめさひしき折しもあれ有明の月に荻の上風
山家夜
山ふかき柴の戸ほそは雲とちて猶明やらぬしのゝめの空
嶺中嵐
麓にはふりさけみぬる嶺ならめ分る山路の松の一むら
叢露
置あまるのもせの草の末葉よりをのれこほるゝ秋の夕露
海霧
あはち島たつや波もて夕霧にかさしの花はそれとしもなし
田家鹿
小男鹿をゝしね守る庵ひまそなき田面あまたの秋のかり庵
杣月
をのつから秋は杣人心あれや月のためにはとし(マヽ)ぬ宮木も
關月
秋風やたゝ八重雲をはらふらし月さやかなる天の關山
林月
いにしへの七のかしこき跡とめて竹のはやしに月やすむらん
待月
哀のみそ出てよをまつ月は又さらぬ軒端の山の夕くれ
見月
數〳〵に昔おほゆる月みてそ更行よはゝ忘れはてぬる
波上月
更行はまきのを山も影晴て月にみかける宇治の川波
葛風
ちかくみるまかきか島や是ならん庭のまくすにかよふ夕風
淺茅月
風そ吹あさちか花の露の上にうつろふ月の落行みれは
松間月
曇なき木の間もり諾ていたつらに光をやつす松の下庵
夕初雁
哀うき夕の空に鳴かりのをのか涙も袖ぬらしせり(マヽ)
聞擣衣
秋の草はしほるゝ比の露霜に花すり衣かれすうつ聲

故郷露
人は猶とはしとやすする草の原風のみすさむ露のふる郷
月
野へはみな千種なからに影やとす月もや露の種をまきけん
野虫
枯初る野原の草の色をわか身にはかなくも虫の鳴らん
雨後虫
村雨の過ぬるあとは露ふかみ虫のねしめる庭の草むら
渡紅葉
柞原木末や色にいつみ川わたりを遠み雲そ時雨るゝ
隣紅葉
我やとにうへぬはかりにかきこして軒まてかゝる蔦の紅葉は
残菊匂
と草はみならかれて紫の一もと菊そ匂ひのこれる
泊暮秋
かひなしや波のしらへの浦とにひきもとゝめぬ秋の別路
〔題闕〕
春の花にかわらぬ色をあはれとは冬の初の日かけをそみる
杜初冬
今日よりはいわたのもりの神無月行かふ人もぬさはたのまし
時雨知時
冬のくる折をたかへぬ初時雨さためなしとはいかでいはまし
河時雨
村雨のふる川野へのふるなと〔マヽ〕になくてそやかて杉の下かせ
橋下落葉
山風や嶺の梢を渡るらん木のはみたるゝ谷のかけはし
籬落葉
色〳〵に秋みし花そ思ひ出るもみち散つもる草のまかきは
落葉埋路
過しみとせ花に迷ひし山道を又木の葉にもたとりつるかな
惜歳暮
いそきつる月日の数は身につみてしたふにはやく年そくれ行
籬霜
かれ残るいなのをさゝのふし原やをともわかれすさやく夕霜
竹雪
ふりうつむ軒端の竹は折ふして雪にはれたる窓の内かな
原雪
とまるへきやとりもみえす分佗ぬうちのゝ原の雪の夕くれ
寒月
冬のよの月にむかふも影さえて寒けき風の音そ更行
沼水
今朝は猶さゆるあさかの沼水にかつみし波も氷はてつゝ

閨霰

片敷の衣手寒みめもあはす閨の板間に霰ふる夜そ

寄空戀

詠てもそなたの空のかひやなき雲さへ我をへたてはてぬる

寄沼戀

あひかたき岩かき沼のかりにたに露はへたてぬ袖の上かな

寄忍草戀

忍草ちきりも夏の時なえて茂らは露やよそにみたれん

寄椎戀

椎の葉にあらましかりし風の音も今宵のうさに増りやはする

寄郭公戀

くらしかね我も妻とふ五月雨にひとりはなかぬほとゝきす哉

寄蛙戀

涙河春のかはつもうたかたや鳴とはりを哀ともきけ

寄鏡戀

われてあふためしを聞は別てもかたみのかゝみ猶や頼ん

寄木綿戀

祈來て神にも何とゆふかつらかゝる思ひはとの葉もなし

寄織戀

思ふ江にいつこきむかふ中ならんまかちしけぬきいそく船人

戀

つれなさのむくひをしらてかこつこそ戀の浮世の迷ひ之けれ

詫戀

ほとへても問はぬ折にやむさし鐙かへしもつらく思ひ侘けん

祈戀

幾年に祈るちきりはかたそきの行あひみんもしらぬ浮身や

契戀

我命人の心もあすしらぬ世に行末をちきるはかなさ

寄枕戀

思ひわひ我涙のみ敷妙の枕のほかにしる人もなし

寄月戀

さやかなる影はそのよの形見かわよしたゝくるれ（る歟）袖の上の月

行路梅

吹送る色をもみせよ春風になれ行袖は梅かゝそする

餘寒月

春のよの月やあらぬとたとるまて霞もやらすさへかへる空

藤

打なひく松はうらはに埋れて風にかゝれる春の藤波

岸柳

立田川きしの柳の糸はへて春はみとりに水くゝる之

［題闕］

志賀浦や氷とけにし波の上に遠さかり行春のかりかね

花

うつし植る庭の一本の花にさへたなふ(マヽ)はかりの袖さなからん

誰か代よりあたなる色に咲初て花に心をつくしきぬらん

水邊花

春の池のかゝみのかけも降雪は汀の花や老木なるらん

散花

散かゝる花のかゝみの山さくらさゝ波くもる浦風そふく

岩根花

岩ねふみ山路は花に埋れて梢そ苔の色になりぬる

寄花述懐

哀身のさかりにかへる春もかな散にし花に又も咲ける

松藤

春をへて藤咲かゝる松かえやあらはれやらぬ波の埋木

首夏

櫻色の袖とや今朝もいひなさんたゝ一重なる花もこそあれ

更衣

名のみして花染ならぬ櫻あさの袖をもけさはたちやかふらん

新樹

花ちりし軒端の櫻も露に猶うとまれぬわかみとりかな

軒橘

身には又ちかきまもりに袖ふれし折忘られぬ軒の橘

初時鳥

まてはらきならひしりてや時鳥妻こふくれにねをもらすらん

時鳥

宿ちかくなけ時鳥我爲にもらす初音と思ふはかりに

菖蒲

けふこそはひきて袖にも隠れぬに生る菖蒲のねなからもみん

沼菖蒲

ま菅生る沼江にましるあやめ草引てやたかき根をくらへまし

五月雨

つきてふる日數や幾日庭の面すゝきをしなみ五月雨の比

川五月雨

山河のせゝ行波も皆こすさ木葉や下にさみたれのころ

水鶏

山かつとそにこたふる聲すみ谷の戸たゝくよはる水鶏に

夏月

夏といへはをふのうら梨とよ中になりもならすも明るよは哉

首夏

雲の上に卯月の今日の衣のためしそたへ初ぬる時はきにけり

澤杜若

かきつはた色にみたるゝたゝ五月まつ澤邊のあやめ引そ別れん

江螢

夏かりの蘆の若ももゆる江に夜とにへみて飛螢かな

秋夕

なかめつる夕は山の奥もなし秋にうき身のかくれかもかな

閑居虫

鳴虫のさせもか露や寒からし枕の壁に聲のうらむる

藤袴

紫のねすりならねと藤袴寄れは露をくたく袖かな

女郎花

咲花はさなからむせるあはつのゝ露にたかはすみゆる色かな

鹿

またぬとは思はぬ物か棹鹿のこぬよあまたの妻こひの聲

田家鹿

心あらはもるや山田のひたすらにいとひはしてし棹鹿のこゑ

浦月

あま人の袖師の浦のうつせかひひろふはかりにすめる月かな

名所月

八重立し雲はあらしに消果て横川のみねの月そさやけき

月

朽まさる軒の板間もさもあらはあれ荒すは月の陰ももらしを

擣衣

あま人はよな〳〵こそはそゝはまの波かけ衣打あかすらん

宿擣衣

見し花の色を殘して白妙の衣うつこゑ夕かほのやと

秋山

常磐木も下葉色つく秋山の時雨にもるゝ一本もなし

色葉

露霜の色とる木々は紅の筆のはやしとよそにみえけり

擣衣怨

秋寒くなるをのうらの夕暮にしほやき衣うたぬまそなき

祝

更に今和歌のうら波おさまりて玉ひろふ世に立そかへらん

うこきなきやまとしまねの外まても猶しつかなる四方の浪風

東求堂に閑居八月十五夜人々来て歌よみ侍るに

くやしくそ過しうき世を今日そ思ふ心くまなき月を詠て

庵しむる山のかひある月に猶秋の最中も空にこそしれ

旅人渡橋 文明十三年六十六

行くれぬうちの橋邊猶かさは衣かたしき我そいさねん

草花

色みせて花は千種の品々を分る夕の庭のつゆけさ

虫の聲枕にちかく聞なれて秋は野もせのよもきふのやと

飛鳥井入道のもとへよみてつかはし侍る十五首之内

和歌の浦に光あらはす玉の名のなみ／＼ならぬ風の便に
人しれぬ身は捨小船吹かたにつなきとめけん和歌の浦波

江月

玉津島江も浅からす〔み脱〕思ふとそいさみにゆかんふかきよの月
いつくにかむれぬしとりもいなさ江に月かけほそき水の秋風

山江葉

たか爲にをる山姫そから錦霜と露とをたてぬきにして

水邊月

曇るなよ月のかつらの河風にちらすひかりを花のかゝみに

七夕人事

ありかほに何をたむけん世に侘てわれこそからめ星合の空

七夕雲

くるゝ間のちきり待わひ物や思ふ雲のはたての星合の空

殘菊

冬來てもまたうつろはぬ庭の菊もとの雲井の秋をこふらん

初冬

したひこし昨日の秋や冬ならん春の名にたつ神無月哉

紅葉

吹風もはけしくなれは山櫻花よりもろくちるもみちかな

霜

日かけさす庭の草葉はかつとけて霜の花にも露は置けり

冬枯

をく霜をはらふとみゆる袖もなし野への尾花の冬かれの比

氷

山の井のあかつきかけて結ふ手に雫もやかて氷る比かな

河水

水上は猶なかれけり谷川の氷のうへをこゆるしらなみ

千鳥

月殘る浦はの浪のしのゝめに面かけみえてたつ千鳥かな

名所千鳥

夕霧に友まとはしていもか島かたみに千鳥聲そうらむる

竹雪

越路にはしるしにさせる棹ならて竹の末葉もみえぬ雪哉

網代木

下くゝるひをもあるらし鳰鳥の名にあふうみの末の網代木

路氷

山かけや曉いつかすみくるま氷にきしるをとのさやけき

山雪

今朝はゝやいつくの山も埋れてめつらしけなきふしの白雪

月前時雨

此頃の夜をへて色にまさり行時雨はそめぬ月のかつらも

水鳥

霜はらふ鴨の羽かひのいかならんあしへの水も氷りぬるよに

松雪

下をれのひゝきに雪や落つらん又音たつる軒の松かせ

野雪

ふみ分しさかのゝみゆき跡ふりて哀いく世かつもりきぬらん

残菊

をしなへて庭のまかきの霜枯に残るともなき菊の一もと

深雪

色わかぬ草木のみかわふりそひて雪さへ雪に埋れにけり

湖水鳥

まのゝうらやうつらの床はあれ果てうきねの波に鴨そ鳴なる

湊千鳥

海士小舟よするみなとに立千鳥をのかとまりやいつく成らん

炭竈煙

明ぬるかわかろゝ雲のよこ山や煙もしらむ嶺のすみかま

歳暮近

いたつらになすともなく月見てそとしも又や暮ぬとすらん

寛正五年十二月五日仙洞三席御會の席歌

君かへん千年のかけもかれてよりはこやの山の松にみゆらん

惜花

たか世よりあたなる色に咲初て花に心をつくし來ぬらん

野遊

あくかるゝ野へに此ころつみてけり咲やすみれも春の日數を

社頭花

咲花も幾代の春そすみよしの松のよはひをあひおひのかけ

花便

さひしさも忘るゝ花の詠こそなかき日くらす便成けれ

洞松

老にけるひはらにあらぬ松かせも所からにや聞はかなしき

洲鶴

松陰にむれゐる田鶴そさはくなる澳のしらすに鹽みちくらし

巖苔

うこきなき山の岩ほにむす苔やこれも撫てふ衣成らん

釣漁

出やらすしはしはつりのいとまあれや波風あるゝ浦の海士人

狩獵

隱るへきくまもこそあれ草深きすかのあらのは猶やからまし

樵夫

賤のおか薪をおひの坂越て歸る山路はさそなくるしき

樵夫飯

山人のをくるましはの紅葉ゝは家つととてや手折こしつる

遊女

哀にもうきて世わたる契り哉たゝよふ船をすみかにはして

曉鐘

何となく聞は哀もこもり江の初瀬のかねの夕くれの聲

曉夢

袖ぬれぬ忍ふむかしを思ひねの夢の名殘の明かたの空

眺望

雲の波けふりの波もみへわかて鹽やく浦の里の遠かた

七夕衣

七夕にかふる〔マヽ〕よるの衣をや今朝かへすらん天の河かせ

七夕

契りこそ同しためしに天の川うき木は龜のうき木ならすや

七夕橋

天の川渡れとにしき中たへぬ紅葉のはしの幾世かけゝん

七夕車

七夕のめくり逢夜は七車年をつむともつきしとそ思ふ

古郷萩

今日は又咲殘りけり古郷のあすかさかりの秋はきの花

庭萩

小車のにしきとそみる古郷の庭のよもきか本あらの萩

萩

露をかぬ本あらの小萩夏ふかみ風にはあらて花をこそまて

尾花

置まよふ野原の露にみたれあひて尾花か袖も萩か花すり

初戀　文明十三九八家々會

今日はまつ思ふはかりの色みせて心の奥をいひはつくさし

待戀

待人は思ひたえたる雨の音のをやむもさすかねられさりけり

契戀

我命人の心も明日しらぬ世に行末をちきるはかなき〔マヽ〕

契戀衣

いかにせん身をうきかたにいひしほる袖は綠のあさき契を

ト戀

とはゝやなあふとみえつる夢のうら人も心のかよひけるかと

寄夢戀

かさねても猶夢とのみたとる哉かへしなれにしよるの衣は

寄草戀

つらき哉そかの河原にかる草のつかのまもなく思ひみたれて

寄袖戀

とはゝやないせをの蜑もかく計からぬみるめに袖はぬるやと

久戀

年をへてつらき心の種しあれは岩に生てふ松かひもなし

戀

我かたに忘るゝ草の種もかな人のつらさもしらぬはかりに

戀形見

忘られぬうき身はなれぬ面かけや人の殘さぬかたみ成らん

初戀

今こそはおもひ入ぬれ行衛なくはてなき物と聞し戀路に

忍戀

つゝみえぬ思ひよいかに涙をは世のうたかたにいひはなす共

聞戀

いかにせんみぬめのうらによる波の音はかりにやぬるゝ袂を

寄浦戀

つらかりし人の心の秋風に袖のうら波かけぬまそなき

見戀

玉簾のこすのひまよりほのかにも野分の風のたよりにやみし

別戀

かたふくをいかにまかへん告渡る鳥は空ねもあり明の月

頼戀

さすかよもかはりはせしと思ふこそ我ならはしの契なりけれ

遇戀

戀〳〵て今夜まくらをかはしまの水ももらさぬ中と契らん

恨戀

せめてたゝうらみの程を思ひしれさこそはつらき心なりとも

増戀

つらきかなそかの川原にかる草のつかのまもなく思ひ亂て

顯戀

涙川いつもれぬらん隙もなく心にかけし袖のしからみ

變戀

いつはりと思ひなからに待たれ〔て脱カ〕もかはるとなれはうき契哉

人傳戀

時鳥しのふ初音も中〳〵に人つてにこそさたかにはきけ

祈戀

幾年の祈る契はかたそきのゆきあひみぬもしらぬ浮身に

隱戀

はしたかの狩はの草にふすとりの行衛もしらす戀わふる比

厭戀

それをたに厭ひもやせん存命へて同世にふる身ともしられし

別戀

つれもなくあはてこしよに較へてそうきわかれ路も思ひ慰む

逢戀

逢事そかきりしられぬ年月をたへて忍ふのみたれ侘ても

月前戀

さやかなる影はそのよの形見かはよしたゝくもれ袖の上の月

寄鹽木戀

身をうらにたへぬ歎なこりつみて焼やも塩のこかれ侘ぬる

寄枕戀

人はまた誰とゝもにか〔た脱歟〕はすらんふるき枕はこけ生にけり

杜柏

柏木のかけしめはへてこゝにしもすむやはもりの神なみの杜

曉夢

きぬ〳〵のつらきのみかは鳥の音に昔をみつる夢もわかれぬ

鶴

白つるの歸るふる巢やたとるらん雪折かはる高砂のまつ

神祇

神代より三種の寳つたへきて今もうけつゝ君かかしこさ

さほ川のなかれにはあらぬ三笠山深くそたのむ神のちかひを

社頭松

住吉の松に神代のとゝへはふるき木の葉も風そこたふる

釋教

いつかさてたえぬねかひもみつ船のよるへ待みん宿の池水

とのはの外に出たる法の道たれにかとはん誰かこたへん

無常

行末をかねて定むる人は皆あすしらぬよをしらぬとそみる

程もなく煙の末は立消て雲をかたみのそらそ悲しき

法の道まよふへしやは二なく三なきのみか一つたになし

述懐

わか思ひ神さふるまてつゝみこしそのかひなくて老にける哉

何にさて心とまりてかく計うき世を猶もそむきかぬらん

あひそふる親のまもりもなき身には關もる人も哀とをみよ

寄雲述懐

身そあらぬうきたつ雲も春毎の花にひらくるかつらきの山

往事

日にそへて過こしかたははるかにもいやはかなしか夢の世中

神祇吉田

神もさそ心ひくらん語〔跡歟〕たれてこゝをよしたのもりのしめなは

釋教

まよひ行心の雲のはれてこそむねなる月はさやかにもみれ

東求堂銀閣ニ而人々會せしに尋餘花

春風にをくれてひとり咲花やいつくにかへす青葉なるらん

岸柳

をそくとき色こそみゆれ春秋のくるかたかはる岸の青柳

花園と云所の花を見てむかしをおもひ出て哀もよほしけれはよめる

朽殘る老木のさくら誰うへてあはれ幾世の春をへぬらん

飛鳥井雅親のもとへ獨吟百首の點をこひにつかはしけるに五十二首に點印をつけて一巻の奥に

雅親

百草に匂はぬ色はなけれとも花あるをこそ猶あかすみれ

返し

百草の數はかりなるとの葉にすさめぬ花はあらしと思ふ

月前露 家之歌合五首之內

久かたの月のかつらやおもるらん光におつるつゆのしら玉

小鷹狩

野へ遠き都のつとか萩かえに小とり取つけ歸るかり人

夕稻妻

花すゝき人は分行夕露ののほれは下る庭のいなつま

江船

舟人そ心かしこきみしま江にまこもかるなる世をはらみす

古寺

高ねより雲をとそひて小初瀨や入逢の鐘をしく嵐哉

寄松祝

けふひかん御前の山の小松原千世の子日も君か爲とて

祝言

幾代まて下葉のちりのつもりけんあま雲かゝる岸(峯歟)の松かえ

公方慈照院殿義政公。(號東山殿)延德二年正月七日。前征夷大將軍從一位左大臣准三宮源義政薨。歲五十六。法名喜山道慶。贈大政大臣。號慈照院。自嘉吉三年至延德二年。治世四十九年也。東山東求金閑居。銀閣ヲ造。古器古ヽ等集もてあそひ給。世間流布也。御百首引合見侍るに。御詠とも露顯也。尤不可出窓外重寶。穴賢々々。

不慮自由令到來。一日之內令書寫畢。本書之手跡室町殿公方義昭(義尙歟)公筆也。記本不可有料貽者也。

寛永十年己酉八月三日　水無瀨三品氏成在判

此元本在栖川一品宮御本自富士谷成章傳寫後以他本一校奧書同前也

義政公詠散在他集者隨見聞補入之

憐夜 文明九十廿一住吉社法樂和歌

ふかき夜のおほろ月夜もなにならすかすむ外山の春の明ほの

若菜

氷とくるあさ澤小野のをのつからいまや里人ねせり摘らん

待月

いてぬへき月の光やうつるとてなかめやらるゝ西の山の端

契戀

なをさりに人の契りし言の葉をまことになしていかゝ頼まん

野亭

清水くむたよりならてはさとゝをき野中の庵はとふ人やなき

七夕寛正三年七月十六日禁中御月次

たなはたのおるや衣のおさをあらみ逢夜まとをになと契けん

暁戀

こぬ夜半も聞こそあふ(わ賊)れ鳥の音のうきはわかれと何思ひけん

鷗

わかの浦や波ものとけき夕なきに松原遠く田鶴わたる見ゆ

依花待人文明九年十二月十日

ちらぬまをとふ人もかな今幾日花のさかりはあらし吹ころ

積雪

下をれの音するみをの杣川は雲やこの比みや木とるらん

寄星戀

哀にそうらやまれける一年に一夜はかりの星のちきりも

霧中船

こきわかれゆけはかなしきしかの浦やわか古郷にあらぬ都も

石清水

たのもしとあふかさらめや男山ひとの人よりまもるちかひを

寄獣祝

かしこくも今こそかへれ花の山桃の林のためしある世に

聞初秋文明五年九月九日春日社法楽

もる人も身にやしむらんまた薄き衣のせきの秋のはつかせ

水郷秋夕

所から哀もふかし水無瀬川すみこし里のあきの夕くれ

旅虫

山こゆる麓の野邊にふりはへて鳴やむまやの鈴虫のこゑ

暮秋懐

行秋の名残もかなし霜まよふおはなかもとの草のうらかれ

半出月同年八月十五日石清水

てりそはむ影そまたるゝ山のはにかた枝さしおほふ月の桂は

禁中月

曇りなき影をあけぬとすむ月の雲やはらはんともゝみやつこ

杜間月

影やとす月もみたれてちる露のしのたの森に秋かせそふく

月前鶉

身にそしむ野ませの露に月深く鳴やうつらの床の秋かせ

商人耽月

わかれをはおしまぬ人やすさましき入江の浪の月はなかめし

寄月見戀

つれなさをかねてそなけく俤をほのみる月の末の有明

宿百首続

このねぬる夜半に嵐の吹なへに霜のあさけのいとゝ寒けき

三輪山文明十二年三月三日

咲花をいかに待みん春なから猶かせさゆる三輪の山かけ

水莖岡

玉章の便ありとや水莖のおか邊に鴈のむれて來ぬらん

安達原

みし秋のいろもあたちか原まゆみさそふ嵐に散はてにけり

緒絶橋

かけてたに思ひやはせしみちのくのをたえの橋を身の契とは

三津濱

おほとものみつ野いふへき夢もなし濱松かねの浪のまくらは

以上三十首。續撰吟集中抄出。

後水尾院御撰千首之中

晴夜月

てりもせす曇らぬよりも秋の月さけやき影そしく物もなき

不逢戀

ひたすらに契たのまん僞の有世をしらぬわか身ともかな

山家雨

いにしへを思ひ殘さぬ山陰によるの雨聞草のいほりは

常德院義尙公家集中

文明十四年九月三日家君長谷より茸かりの松たけを硯のふたに入てをくられたりけるを句の上にお

きて

ふたかへす
ふみわけむたか通路もかひそなきへたてゝ遠きすみかそせは

かへし

ふたはさ
吹風に玉とみたれ散はきの露きしの小すゝきぬきもとゝめて

室町殿行幸記

鶴有遐齡文明九年十月廿二日行幸室町殿御會

萬代を千たひかされて君にさはよはひあらそへ鶴の毛衣

松色映池

みゆきにも相生の松のかけとゝもに池の心もさそな嬉しき

寛正五年三席御會記

冬日侍　太上皇倚洞同詠松爲久友應　製和歌一首幷序

征夷大將軍從一位行左大臣臣源朝臣義政上

一陽來復之後。三冬嘉平之前。玉燭四分泰階明。仁風翔兮玄澤遍。上享烏鶚之樂。下歌鴻鴈之詩。

太上皇尊臨八維。則天之大明。見萬里似月之升。功成不居。德篤克禪。雖占姑射山之深洞。猶翫難波津之古風。催歡遊。而一宵勅喚非廣。設　宸宴。而三席至德比蹤。詞伯歌仙之揮毫述雅頌。以誇　聖化。三槐九棘之連袂奏絃管。以備　叡聽。人已酔恩。誰不飽德。觀夫松是長生友。千囘之色映珠簾。雪亦豐稔祥。六出之花翻玉砌。天降喜瑞。地出吉符。遂令率土之臣盡識治世之理。義政無才無藝。早傳將相之名。曰漢曰和。謾授俊英之座。剩居唱首。聊呈序詞。其詞曰。

二行
君かへむ千年のかけはかねてよりはこやの山の松に見ゆらし

詠松爲久友和歌

三行五字 仙人のよはひともなふ松をうえてみとりの洞にいく世契らん

公卿補任。後花園院文安六年。

從四位下源義成。十五才。八月七日任。同日兼任中將。叙從四位下。被行小除目并叙位。上卿權大納言通秀卿。參議左大辨俊秀朝臣。

永享七年乙卯正月二日御誕生。文安三年四月廿六日御讀書始。同廿九日乘馬始。同十二月十三日御名字被定之。被染宸筆。自右府被傳之。同十五日從五位上。於陣宣下。同四年二月七日正五位下。同日侍從。同五年十二月廿六日左馬頭。同六年三月十一日。移從北小路萬里小路亭。同年四月十六日御元服。十五才。加冠細川武藏守勝元朝臣。理髪同陸奥守教經。同廿七日評定始。同廿九日爲征夷大將軍。同日禁色宣下。今日御判始。寶徳元年八月廿五日御弓始。同廿八日御參內。御衣冠。同二年三月廿九日任權大納言。六月廿七日從二位。七月五日直衣始。享徳二年三月廿六日從一位。六月廿三日改義政。十九才。同四年八月廿七日兼任右大將。康正二年正月五日右馬寮御監。同三年淳和獎學兩院別當。長祿二年七月廿五日內大臣。兼官如元。同四年八月廿七日轉左大臣。寛正二年八月九日辭大將。餘如元。同五年八月十九日兵仗宣下。十一月廿八日准后宣下。三十才。

後土御門院寛正六年左大臣。從一位准三后征夷大將軍兩院別當殿上別當執事兵仗。三十一才。文正二年諸官辭退。三十三才。文明十七年六月十五日出家。

續群書類從卷第四百廿八

和歌部六十三

後福照院殿持基公御詠艸

首闕

山吹

負
春深みあれゆく花の宿を又さきてやつさぬ庭の山吹

三月盡

持
かきりとてかすむなこりもみるへきを月たにもなし春の別路

更衣

持
けふといへは霞の衣花の袖たちかへてけるはるのいろ哉

卯花

持
卯花の月はくもらぬ夜の雨を浪かとそきく玉川のさと

葵

持
あふひ草神の宮居にまかせてや二葉のたねをうへはしめけん

郭公

勝
ほとゝきすしのひもあへすしかそ鳴よな宇治山のむら雨の空

菖蒲

負
あやめふく菴の宿の軒をあらみさはらすけふも雨はもりつゝ

早苗

負
おひぬれと忩かすとるや小山田のをくてにのこすさ苗成らん

照射

持
心なきともしのさつお奥山の岩木のかけに鹿やまつらむ

五月雨

持
雲間もるかけをたにみす晴やらぬひのくま川の五月雨の比

盧橘

勝○
香をとめて宿かる鳥の一こゑに袖なつかしき軒の立花

螢

勝
なるさはの水かれもせてふしのねのもえつゝとはに行螢かな

蚊遣火

持 夏の夜はしはのとほそにをくかひの烟にとつる山かつのいほ

蓮

勝 玉かとも中〳〵とはし蓮葉にをくより露のそれとなければは

氷室

勝 けふいく日夏のてる日の長坂にとけぬ氷のためしをそみる

泉

勝 空蟬の鳴ねからにや中川のやとにせきいるゝ水もすゝしき

荒和秡

持○ あさの葉をなかしもあへす御秡川ゆくとし浪そ秋にかゝれる

立秋

持 おきのはにけさ吹風やとし又なかは過ぬとおとろかすらん

七夕

勝 天雲のよそに思し月日へてさすかこよひはほし合の空

萩

勝○ 住の江や浪の花さく松風に遠さと小野はまはきちる之

女郎花

持 をみなへしなひくは風の心そとみれとも花の名にやたてまし

薄

勝 はし鷹のとや野ゝ尾花まねく也かりにもとまる人はあらしを

刈萱

勝 露にたに下折そめしかるかやのみたれはてぬる秋のはつ霜

蘭

持 ふち袴たかかたみとてあれはてし門のにほひも猶のこすらむ

荻

持 露かゝる軒のしのはに音信て心みたるゝ荻のうはかせ

鴈

持 時雨ゆく雲間の夕日もる小田のをしねかりかね鳴ておつ之

鹿

勝 この里は山田のひたも音そへてをのゝあきつに鹿そ鳴なる

露

持 松もふるあさちもたかき庭の面は秋風のみや露はらふらん

霧

持 さらてたに光きえゆくしのゝめの霧にこもれる在明の月

槿花

負 朝戸あけてなかめさりせは露のまのさかりもしらし朝顔の花

駒迎

持 逢坂や関路たちいつる月影も松間にくらしきり原の駒

月

勝 山さとの石間の清水すみなれてかくこそはみめ秋夜の月

擣衣

勝 たれか猶秋のさよの身にしみてふりにし里に衣うつらん

虫
持 もろくちる庭の木葉の露の下に哀しられてむしや鳴らん
菊
持 露しくれそめぬは松にかはらねと霜にうつろふしら菊の花
紅葉
小くら山ふもとの野風霧晴て尾花か末に紅葉をそみる
九月盡
勝 けふくれぬ冬の立日はあすか井のみま草かくれ秋そすくなき
初冬
勝 秋の色はならの枯葉の夕嵐をとにたてゝや冬はきぬらん
時雨
持 冬枯の外山のこすゑしくるなり色とる秋のおもかはりして
霜
持 月さえし夜をのこすかとみゆるまて朝霜ふかき野へのさゝ原
霰
負 音むせふ山下水のうす氷かつくたけつゝちるあられ哉
雪
負 山鳥の尾上の雪やつもるらん松をへたてゝ雪のかゝれる
寒蘆
勝 冬枯のいりえの芦まあらはれてよする小舟そまほにみえゆく
千鳥
勝○ こく舟のさほの川浪さはくらしみなれても猶立ちとり哉
氷
持 うす氷とちはてぬまと柚川やまたこの暮も槙なかすゑ
水鳥
負 池水のうき草かくれこほる夜は月をへたつるにほのかよひち
網代
持 よる氷魚の行末しられすたなかみや木葉いさよふ瀬々の網代木
神樂
勝 外山なるまさきのかつら永代をかけてたえせぬ神あそひ哉
鷹狩
持○ はしたかのおふさのすゝの音すこいかになり行鳥のこゝろそ
炭竈
勝 あさまたき雪ふみ分てやくすみの煙もさむきをのゝ山里
爐火
勝○ 閨のうへによな〳〵雪も埋火のしたこかれてや春をまつらん
除夜
勝 いそくへき春さへそうき行年をおしと思ふ夜のあくる名殘に
初戀
持 玉にとひいつふみなれし戀ちとて行ゑもしらすまよひ入らん
不被知人戀〔身を脱歟〕
勝 さのみなとうきにしてつゝむらんしらせは靡く心もそある

不逢恋

持 つれなさの限までとてなからへは哀や人のうきにまさらん

初逢恋

負 かきりあれは眞木の戸口の月もみつよそにあかしの恨殘すな

後朝恋

持 かきたえんのちをはしらすけさは先またれぬ程にみる文も哉

逢不逢恋

同 又もこぬつらさにそへて思ふ哉あひみしほとの忘れかたさを

旅恋

勝 恋わふる面影そはゝかゝみ山いさたちよりて旅をわすれん

思

持 恋すてふひとつ思ひの煙ゆへ身はいたつらにもえわたりつゝ

片思

負 報あらはしる世もあらん思へとも思はれぬ身はいかゝ苦しき

恨

勝 今ははやかひなき中と恨ぬを涙やしらて袖ぬらすらむ

暁

勝 月のこる有明の空をみさりせは身のつれなさを何にたとへん

松

持 いかにしてへにける年そ岩かねに根さす小松の老となるまて

竹

同 くれ竹のめくれる宿に住しより猶いてかたき世とはしられ

苔

勝 人すまていくとせ杉の板ひさし久しくなりぬ苔のむすまて

鶴

勝 山人のすむ山かとよ松たかきいはほかくれにつるの一こゑ

山

持 月日たに半をめくる山もあれはふしのたかねを高しとはせし

川

勝 いつかわれ浮世をよそに三輪川やすゝきし袖のあとを尋ん

野

勝 世中をあき津の小野の草の露はかなや我身をくかたもなし

関

勝 露ふかき竹の下道いかならんふりくる雨のあしからの関

橋

勝 たきゝとる山のかけちの一橋あやうからても世をわたれかし

海路

勝 思ふかたの浪より月の出るまてもろこし舟や夜をかさぬ覧

旅

勝 故郷の恋しき夢を松かねの枕の嵐こゝろしてふけ

別

持 命あらは又あふさかとたのみても涙せきあへぬけさの別ち

勝 山家

山かせに庭のおち椎散そひぬこすゑの猿やなれんとすらん

田家

勝 ひつちおふる冬田のかりほふりにけり雲ゐの鴈の霜にふす迄

懐舊

勝 たらちねのいさめし道を傳へてもあらましかはと先そ戀しき

夢

同 花をおもひ紅葉をあたにみる時そまさる我身の夢もかなしき

無常

勝つ 思ひやるも袖こそぬるれをそくとくつゐに行なる道しはの露

述懐

勝 いつはりのある世を厭ふあらましに我心さへうたかはれつゝ

祝

勝 梓弓やまともろこしおさむへき君とや神もこゝろひきけむ

勝五十　持四十一（藍藏方葉）　負九　點卅一　丸十二

正長元年六月十六日始之。同廿一日事終了。

衆議判

人數

予　中納言　中院　右大臣 通助法師

左衛門督 法眼　光春法橋　快讃　紹奇

教園　愛童

正長元五廿日会 野外霞

勝 あかすみるこせの春のゝ玉つはきたてるやいつこ霞こめつゝ

橋春月

持 月にのみかたしき衣春のよはかすめるかけや宇治の橋姫

獨對花

持 ひとりすむ山陰にしも櫻花又ひとめみぬ春をうらみて

名所時鳥

勝 時鳥きゝふりぬとも富士のねのめつらしけなくたれか思はん

浦五月雨

持 すまの蜑のこりつむ鹽木ほさぬまに朽はてぬへき五月雨の比

鵜川篝火

勝 さしのほるうふねの數や大井川七瀬のよとにつゝくかゝり火

草花露

持 きてみれはうつる心も八千くさの花野の露はをきもさためす

月前獸

勝 をちこちにやともる犬のこゑはして人は音せす月深にけり

夕紅葉

負 夕日かけもらぬ木のまの下紅葉しくれしまゝに色はまさらし

舟中時雨

舟とめてなるゝ[illegible]への松風にあらてとまもるむら時雨哉

　深山冬松

霜にとち雪にこほる音すゝ深山かくれの松の夕風

　閑庭雪深

人とはゝおれしおきちの庭の雪跡なきまゝにふりかさねつゝ

　忍待戀

もらさしな扨もとはれぬよな〳〵をしゐて頼むと人も[illegible]しれ

　暁更戀

思ひいつる有明の月のおもかけに別し鳥のねこそなかるれ

　絶久戀

問[illegible]しこも昔にこあるをうらむる我いのち哉

　山家送年

庵しめてわかふみそめし山ちさへ苔むすはかり年そへにける

　隠家聞雨

あすこえん山こそあらめ故郷の夢路もさはる雨の音かな

　寄身述懐

思出のあるともなしになからへてうき交に身こそふりぬれ

　暁露

はらへたゝ月のやとかるねさめかは暁やみの手枕のつゆ

　海邊鹿

あまのすむ磯山かけてなく鹿や里のしるへにつまをこふらん

　時々述懐

なにかせん音はまれなるみなの川とはぬ夜比の戀はつもりて

　旅行夕

暮ぬれは鳥もねくらにかへる山ひとりこしちに宿はなくして

　寄草述懐

[illegible]たえし心にと秋をうらへをききては身にそふ鬼のしこ草

　廿日月

おすはなを深てそまたむ今夜はや山のはつかの秋の月影

　月前時雨

久方のかつらをそむる時雨かと雲まとなる月のいろかな

　林月

雲こそはさえの林の秋の風露をはらふと出月のやとゝに

　野月

あはれ我身ふるのゝ小萩ゝ原月にやのこる代々の面かけ

　河月

秋のよは山吹の瀬の浪のうへに光を花と月そうつろふ

　瀧月

松ふかき瀬の水上ふき分て嵐とともにおつる月かけ

　江月

[illegible]かゝる人はかへりてふかき夜の月にさひ江の浪そ音する

　曉月

勝 松ひゝく夜はのしほかせあら磯にしき浪たてゝ月そ深行

湊月

負 心あらは月のよるまてあま人の袖のみなとにもしほたれまし

渡月

勝 あけすともはや舟わたせ影きよく深行月のよとの川長

古寺月

勝 あらたなる法のひかりを添てみん此ふる寺の秋のよの月

山家月

持 爪木とる山路くらして我庵に先すむ月をあるしとそみる

月前檜

持 秋風のひはらにすさむ音なから月そみにしむおはつせの山

月前柞

勝 はゝそちるよさむの嵐秋たけていはたの小のは月深にけり

月前鶉

深草の野へのうつらにとゝはんすみこし里の月のむかしを

月前鶴

持 今夜たに子をおもふ鶴のこゑすゝ月を心のやみやへたつる

月前松虫

持 まくすはの月のよさむにうらむゝ霜やをかへの松むしの聲

月前衣

勝 月のみそわすれぬかけにすみ染のころも浮世の秋のもなかを 去月廿日普光院前御

月前扇

持 たとふへき閨の扇もわすられぬこよひくまなき月をみるとて

寄月述懐

勝 なをくもる心しあれはあきらけき月にむかひて身をはつる哉 同月十六日[illegible]

曉秋

勝 月影も枕の壁にかたふきてねさめもよをすきり／＼すかな

中勝負未定 かきりあれはかけのたれ尾の長夜も明かたなれや聲しきるゝ

朝秋

図勝中負 霧くらき竹のかり戸の朝戸あけに月はのこらて夜そ残りける

図勝中負 月にをく夜寒の秋の霜きえて野への露そふ朝つくひかな

夕秋

持 雲まよひ夕風たちて山さとゝや身にしむはかり秋そさひしき

中持図負 夕くれは秋に心やならの葉のそよく風にも涙おちけり

夜秋

負 露はらふ袖より霜をしきたへの床の夜寒に秋風そふく

図勝中負 をのつから月にねぬよと成にけり夢さめやすき秋のならひも

山家秋

持 木のもとの柴の軒はに露おちて松のうれこすみねの秋風

持 山風に木葉のおつる秋のいほ月みてしもそ袖はぬれける

田家秋

負 月にねていほもる小田のいな筵露しきほさぬ秋はいく夜そ

暁のわかれの門田もる夜の明るまていねてふひまもなるこ引なり

故郷秋

人はゝやすまていく秋故郷の庭のまはきにをしかなくなり
故郷は庭のあさちふの露しけみとほそにかゝるつたの紅葉は

河上秋

秋の色は月にもみえすときは木に木かくれてゆく山川の水
吉野川花に流し色かへて秋ゆく浪はもみちなりけり

海邊秋

淡路かたせとのしほあひ霧こめて月まちわたる夜はの舟人
さらてたにたゝぬ日もなき浪の音のいとゝ秋なるたこの浦風

寄秋雨戀

月にたにほされやはせし秋の雨を獨きく夜の袖をみせはや
おもへたゝとはてふりゆく契ゆへ身さへ秋なる袖のむら雨

寄秋鳥戀

まちわひてこぬ夜の數はおほえねと涙をそふる鴫のはねかき
契しも秋なる床に獨ねて人をうつらのなかぬよもなし

寄秋夢戀

いかにせん秋のいく夜もあかなくにみる人からの夢の短さ
又もみぬ夢の面かけ身にそへて袖とふ月もなみたとそなる

秋旅行

秋山を夕こえくれてやとゝへは霧にこもれるいりあひのかね
露分てあさ立野へのまくす原かへるさいそけ秋の旅人

秋旅宿

草なかのをさゝかりしく松かねに雨をなそへそ夜はの秋風
きぬたうつしつかふせ屋は草枕ゆめをゆるさぬ關路なりけり

秋旅泊

月にこく舟かときけはうきねする此うらちかくわたる雁かね
ほにいつるあしまの舟のかち枕うきも一夜のえに社ありけれ

寄秋風述懐

うき事をきゝしに似たる夕嵐世を秋風や山にさへふく
秋きても色なき松のことの葉を世にちらすなよ和歌の浦風

寄秋野述懐

露の身のきゆるまてまきあたしのにひとり浮よと虫の鳴らん
西に行心の月をやとすなとうき世のさかの野へのしら露

寄秋木述懐

わひ人のすむ山陰の初紅葉身をしる雨やわきて染けん
槇檜原しけき深山に身を置て秋ともしらぬ世にすくさはや

春雪

なをさえてこその雫さへけぬか上にかされてつもる春の山里

澤若菜

氷とけ雪間になりぬ里人の野澤のねせりけふやつまゝし

餘寒

落つる山風寒し谷川になかれし水もまた氷らし

梅薫風

にほひくる風のやとりはつらからて梅さく里のしるへにそ待

若草

霜かれしなこりもみえすもえ出て春なる野への草のいろ哉

惜花

又のちとたのむ春の遠けれはうきこそ花のわかれなりけれ

松上藤

紫のいろにそかゝる松のはも水もみとりの池の藤なみ

首夏

しのへともかたみにのこる春もなし袖あへ花の色をかふれは

聞郭公

きけは又猶あかなくに時鳥待こゝろこそたゆまさりけれ

夕立

いりひかけのこる山へにくもりきてそのまゝすゝし夕立の跡

六月祓

身のうさもけふはなこしの御祓川こゝは嬉しきせに祓有けれ

乞巧奠

ひこほしの會夜の影をうつすらし雲井にならふ庭のともし火

荻風

荻のはの風はたえぬをいつのまにむすへは露の又こほるらん

初鴈

わきていまみにしむ暮の秋風にうきたつ雲の初鴈の聲

秋田

あら雨のいなはを過る音はして雲に露ちる小田の秋風

庭月

庭の面に月のやとりやしけからし人も分こぬ露の故郷

杜紅葉

木枯のもりのうきなを山姫のしらてやそめし秋のもみち葉

九月盡

くれぬなり夜も長月とたのめともけふにきはまる秋の別路

寒草

日にそへてふかき野原の霜の下に秋をしのはぬ草のはもなし

冬月

雲の浪たちもさためぬ山風にとはりもなくこほる月かな

淺雪

このねぬる衣手さえてけさはまつたゝ一重ふる庭の初雪

歳暮

かくしつゝつもれは老のくる年をたれ等閑にけふくらすらん

寄月戀

獨ぬる涙はかりにやとりきて會夜やしらぬ手枕の月

寄木戀

いかにせん袖の時雨の色にいてゝうきな立枝のはしの紅葉ゝ

寄鳥戀

いそかぬは或身一の別路につらくも鳥の八こゑなくらん

寄虫戀

又もこぬ露の契りのはかなきになをたのめとや松むしの聲

寄衣戀

かへしつゝ夢を待さへかへそなきねぬよかさぬる戀の衣は

寄弓戀

しるらめやうらみても猶君にのみあつさのま弓引心とは

曉鶏

鳥のねをまちてきくまて今は我年たけにけりねさめせらるゝ

道松

みねの庵のよすかは松の陰なれはいとひなからも嵐をそきく

里竹

さとみえぬ遠山本の夕暮に煙たちそふ竹の一むら

磯嚴

しほ風は磯の松原ふきしほりいはほに浪の音くたけつゝ

嶋鶴

雨ふれはいつらたみのゝ嶋のなにぬれてそたてる鶴の毛衣

岡篠

いつくにも露のみはよし岡邊やしのゝ小篠のかりの世そかし

旅泊

旅衣しきつの浦は過ぬれと浪のうきねそ夜をかさねゆく

海眺望

雲もなく遠山うかふ浪のうへに潮も月もおつる明かた

寄社祝

わきて此なかれそきよき石清水萬代すめと神やさためし

同年九月十一日　頓作之間殊ニ古道々々。

閑庭栽花

人はこすやとはあれゆく庭もせにうへても花の友やなからん

雨夜思花

あけは又みるへき花のあらましをいかにせよとて夜はの村雨

山家曙花

山陰に朝ゐる雲のふかき茂軒はの櫻夜のまにやさく

河邊夕花

山の名の朝日や花にのこるらん木隣暮ぬ宇治の川上

橋上落花

又かよふ道なけれはや山人の花の雪ふむそはのかけはし

未聞時鳥

時鳥なかぬはかりそわすられぬ去年のふる聲きく心して

山家時鳥

都いてゝきなく比そと松の戸の明かたしるき山ほとゝきす

九月十三夜

負 名にしおはゝ明る空までのこるらん夜は長月の比の月影

樵夫歸月

持 ひとりけさ薪とりにも入にしをかへる山路は月そ友なふ

山家見月

勝 山水に心すますはふかき夜の窓にかたふく月をみましや

田上月冷

勝 秋ふかき小田のいなくき霜さえて月そ猶もるもらぬ庵を

海邊殘月

持 夜もすからなかめ明石のうらさひてあはしま遠く月そ殘れる

枯野初雪

持 みたれゆく野風を寒み霜にたに枯し小萱の初雪そふる

山家松雪

勝 問人の庭のかよひちふき分よ松の雪のみはらふ山風

寄月不逢戀

持 涙川あふ瀬にやとす夜はも哉つれなき中の袖の月影

寄月待戀

勝 人目もるやすらひにもや深ぬらん月のよすから（いるまてイ）待はよはらし

寄月絶戀

勝 ともに見し秋はいつそとたとるまに涙くもりて月そ深行

月前羇旅

勝 まはらなる柴のかりほのかり枕月のやとゝやわきて問けん

月前眺望

持 武さしのゝ末は浦（空イ）にやつゝくらん尾花の浪をいつる月影

月前述懐

持 身のゆく衞おもふ涙にくもる夜や月のためさへ浮世なるらん

同年同月十五日當座

早春霞

山のはにかすみの衣立そめて空にそきたる春の光は

溪卯花

かきりあれは消にし雪の谷陰を又うつむかとさける卯花

名所擣衣

夜をさむみしくるゝをのゝ里人やまなくきぬたの音を添らん

故郷雪

いとゝまたあれやまさらんふる郷のかたふく軒に深雪ふるゝ

稀戀

よもきふの庭のしら露玉さかに問るゝしもそ袖はぬれける

増戀

日にそへてふかき思ひもしられまし心木葉のいろにみえなは

旅行

故郷の山をみつゝもなくさまむさのみなかけそ跡のしら雲

山家松

ふかゝらぬ山や中々さひしきと猶おくゆかし軒の松風

寄水懐舊

すみそめし昔をきけは石清水にこりゆく世にぬるゝ袖哉

同二月十八日影供

橋邊霞

春霞たちなかくしそ橋柱なからへてもやくちのこるらん

旅春雨

わくる野の草葉いろそふ春雨にけふ故郷も花やさくらん

關花

さくらさく關の杉村すきかてにたれもやすらふ逢坂の山

川山吹

春深くさくたにおしき山吹の花ちりかゝる井出の川浪

夜宿橘

夜もすから閨もる風に匂ひきて枕なつかしのきのたちはな

江螢

とふ螢をみか光やあしのはのしける玉江に玉をなすらん

萩露

けさみれは萩ちりにけりさは鹿のしからむのへの露の名殘に

野徑月

草深き野原の露を分くれはみたれてそゆく袖の月かけ

川霧

夕まくれふる川のへは霧こめてたつかたしらぬ二もとの杉

擣衣聞

里みえぬ雲間のをちの霧間より音もほのかに打衣哉

島千鳥

友千とり松をへたてゝみちのくのまかきの島の浪に鳴之

湖雪

さゝ浪やひら山おろし袖さえて雪にこき出るまのゝうら舟

寄雲戀

誰ゆへとかけてもしらし天雲のまよふ心のよそにみえねは

閑中灯

かくてこそ身をもてらさめ閑なる山にかゝけん法のともし火（イ）

山旅

岩かねの枕の嵐たかし山さらてもゆめはなれぬ旅ねを

同年閏二月廿二日合衆手歌合

早春

勝　山さとの庭も雪まになりぬめり都の春はいつか立けん

春雪

負　風寒みこそよりつきてふる雪に春ともわかぬ山陰のさと

松鶯

負　おりしもあれけふひきうふる松か枝にきゐる鶯初音なく之

今日引うふる程の小まつに鶯きなかんといかゝと。衆議不審有之。負有其詞。

春月

勝　かすむをも根さらなん春の夜の月計かはなへてうきよを

尋花

持 尋みん花のありかはしらねとも猶すゑのこる春の山みち

閑暮春

勝 やすらはぬ春の別のみちもせにあはれなこその關守も哉

卯花廻庵

持 卯花に道こそなけれ草の庵の庭もそともゝ雪を分つゝ

磯郭公

勝 いそ山のまつよもなしに郭公あまのとまやを過かてになく

峯五月雨

勝 ふきはらふ雲間やいつこかさこしの峯のかひなき五月雨の比

叢螢

持 夏ふかみ一むらすゝきしける野にいとみたれても飛螢哉

松秋風

負 時わかぬ松にも秋のをとつれて身にしみまさる山風そふく

苔露

勝 露にぬれし深山の秋のこけ莚しきしのひつゝぬるゝ袖哉

浦月

勝 とまやかた浪をしきつの浦人は月のよるさへ袖やしほるゝ

在明月

あり明のかけになるまて秋ふけぬ宿やさゆらんあさちふの月

小鷹狩

持 かり人のをはなふみわけあさる野に床あらはれて鶉なく之

寒月

あさちふやをく霜ふかき明かたに氷はてたる庭の月かけ

寄雨戀

たのめてもさはる契となりやせんまちくちしゝもむら雨の空

山家

さひしさはとふ人からに忘られぬいとはてきかん軒のまつ風

神祇

石清水なかれたゆなといのる哉世を思ふにも君か行末

同年十一月十八日於八幡當

山冬月

おとこ山又もきてみん松のはの霜八たひまてなれしよの月

氷留流

岩間にはたつ浪もなし谷川のこほる瀬ゝに音よはりつゝ

風前雪

春はかりいとふならひとなさしとや雪の花ちる庭の松風

曉述懐

今さらにおもひつゝけて世中の夢もおとろくねさめ成けり

社頭祝

呉竹に松根さしそふ石清水いく千代まもる君かなかれそ

同年同月廿三日合判者中

湖霞

勝 しつかなる浦のあさけの浪のうへにいくえか霞むおきつ島山

梅風
負 つゐにはや花ちる梅の嵐哉匂ひはかりはいとはさりしを
径落花
勝 山さくらちりしく木々を分ゆけは花の雪間の松の下道
夕郭公
勝 夕つくよほのかにすくる郭公こゑのうちにやかけもかたむく
水邊螢
勝 すむ夜なき月にかへたる光哉螢とひかふ谷の下水
雲間雁
持 月のこる雲間をわたるあまつかり影もろともにや峯もおつらん
山路月
勝 ゆきくるゝ山ちのこけの秋の露はらはて月のやとやとはまし
閑庭紅葉
持 まつ人は木すゑの秋の夕嵐さそひなはてそ庭のもみちは
曉時雨
持 この比のしくるゝ袖を思やれいつもねさめは涙なれとも
野冬月
負 冬枯の小野のしの原霜ふかみあさりさへたる夜の月哉
閑雪
勝 關の戸も雪に閉ぬとなくとりの聲さへさむし合坂の山
夢逢戀
さめて又むすにつれなく心哉ゆめにとけつる夜はの下紐
惜別戀
持 わかれちをいそかすとてもいかゝせんしたふ心の限なけれは
絶久戀
いたつらにその一ふしそ忘られぬ篠分し庭のふりはつるまて
霧中聞鐘
勝 やとゝひし夕のかねのおなしねに明ぬと夢をおとろかしつゝ
湖舟
わかの浦やたゆたふ舟のつなて繩みしかきき心ひくかひもなし
述懐
いにしへに及はぬ跡をしたふとてたつぬる法の道そくるしき
正長三正十七於
梅有佳色
ときなしる春のあくみもあらはれてかへぬ色そふ梅の一しほ
庭梅
色も香もすさめぬ春をかさねきてことしおりしる宿の梅かえ
春月
はれまなき月にそしるきさほ姫の袖ゆたかなる春の空とは
神祇
石清水みなもときよく流てや末もにこらぬ代をまもるらん
山霞
ふりつみし雪のあさけの色かへて霞に明る山のはのそら

[illegible]風

おきのはりありとやしはしそよくらん風は千くさな過る宿に

時雨過

ふきまよふ山風なから時雨つゝかたもさためすはるゝ雲哉

逢久恋

同世にありともしらしらせても思いてめや年のへぬれは

名所松

青の葉もみたれる御代の春にあひて風おさまれる住吉の松

同[illegible]

山[illegible]花

しら雲のたえまもおなし色なからさすかとなる山櫻哉

夕花

くれぬれと暮らぬ花の陰なれは入相の鐘をしつかにそきく

森花

花ちれはいつらときはの杜の名もうつもれはつる雪の下蔭

山居花

花ゆへに住とはなくて山櫻なれゆく春そあまたへにける

旅宿花

おなしくは花にあかさん木の本の旅ねをゆるせ春の山守

寄花釈教

此寺の春の色にやのこるらんわしの高ねに散し櫻は

同年三月十七[illegible]

名所花

ふきまよふたかねの嵐雪散てさくらにくもるみよしのゝ里

花留客

かへるさを花にわすれてくらす哉暮しつへき山ならねとも

寄花恋

さらてたにあふ程もなき春の夜の花に明ゆくきぬ／＼の空

同[illegible]

暁見花

さき残る枝とりやかて春風の先ふきちらす花の朝露

庭落花

青葉そふ軒はは花の雲間にてかきねの草にふれる白雪

寄煙恋

いくさとのあまのしはさをあつめても煙の[illegible]は立そまさらん

暁更雞

なれきりし鳥の八こゑに袖ぬれて近つく花のねさめをそしる

同[illegible]

とはさりし青葉の陰もくやしきは過ぬる花の春の山里

郭公こゑきくまてとやすらはゝ此山里に住やなれまし

帰さの心をきこそとゝまるを雨ふりいてゝ山風そふく

返し

あかさりし花よりも猶なくさみぬとはるゝかけは青葉なれ共

いたつらにかへらはつらし郭公声きくまては程もあらしを

とまるへき心ともみぬ帰さにふるをたのみし雨そかひなき

同[illegible]

心[illegible]公

ほとゝきすおり／＼きなく山里もあかぬ心になをまたれつゝ

雲まよふ夕とゝへ郭公心にかけぬ時はなけれと

一聲にあくかれそめし我心わくるかたなき郭公かな

恨戀

身のうさのおもひしられて恨ぬを中／＼人や心をくらん

いかにせんうき哀そといとへとも此よにかきる恨ならすは

海士のすむ里のしほ木こりすまの恨やいとゝ身をこかすらん

羈中思

雲かゝる（くすイ）都の山をかへりみて袖に涙のあめそゝく（かゝるイ）なり

せめてはと寐る夜をたのむ故郷の夢こそなけれ松風の聲

こよひしもむくらの宿の草枕思あれとやむすひそめけん

同年四月廿二日[illegible]

杜間卯花

しけりあふ杜の木のまもみえなくに月とそ咲る陰の卯花

雨後時鳥

郭公夕の雨ははれにしを又袖ぬらすさよの一聲

山路日暮

忘れすよいはのかけ道ふみまよひ雲にくれゆく三よしのゝ山

同當座廿首

野郭公

こよひはや山ほとゝきす聞そめて限しらるゝむさしのゝ原

浦秋風

まはらなる浦のとまやの秋されに夜さむそひゆくしほ風そ吹

井氷

逢坂や山風さむみ走井の水こそはやく氷ゐにけれ

寄水懷舊

しのへともへたてのみ行古にいはかきしみつ袖ぬらしつゝ

同年五月十六月次懷紙題受讀

渡郭公

なにはとを鳴てすくゝ時鳥ことうら人もいまやきくらん

五月雨

雨ふれは雲まもみえす五月山落そふ瀧つ音計して

通書戀

荻のはの露のかともはかなきに涙をそふる風の音哉

同當座廿首

花埋路

いつのまに雪とふりてはうつむらん雲をそ分し花の下道

關紅葉

心をそとめてやすらふ會坂や紅葉を山の關守にして

朝霞望

ひま見えてあさゐる雲そまよひゆく遠山松に嵐ふくらし

同年六月廿七日[illegible]

江雲

雅雲おもひはそれと難波江のみをつくしてやもえわたるらん

晩夏

夏もいまはするこす風の音信て秋にそかよふ庭の荻原

述懷

四十あまり多くの夢にまよひきてのこる我世も現とはなし
同當座卅内
春野
もとかしは木のめも今や春の雨のふるからをのゝ草の緑に
秋里
草の名に月のよな〳〵うき秋を忘れてたれか住よしの里
冬市
みわの山朝吹風に雪散て衣手寒くいつる市人
寄中風
逢坂はけさこそこゆれいつしかに嵐の風の都にもにぬ
同年七十月次當紙頭中院
山家初秋
をきそむる山路のこけの露のまに秋とつけくる庭の松風
草花帯露
夕暮そ涙はおつるあさまたき尾花の袖の露けかるらん
旅宿逢戀
小篠しくかりそめふしの新枕わするなこれもよゝの契を
同當座卅首
湖月
しかの浦や山かけくらく成にけりかたふく月を浪にのこして
寄瀧戀
うきたひに涙の瀧はたゆまぬを中なるよとやあふせなるらん
寄衣戀
かひなしやみをうつせみのから衣ねにのみなきて恨きぬれと

嶺松
こけむしろあをねか嶺の色なから松のときはにしく物はなし
寄社祝
おさまれるくにつ社の數〳〵に神のまもりや世にあまるらん
同年八十五日百首内
八月十五夜
あたら夜のもなかの空とおしまれてくもるしも猶月そ名高き
不知夜月
いてぬとはうつろふ空もみえなから外山の松にいさよひの月
臥待月
くれ竹の葉分の風のふくる夜に猶ふしまちの月そつれなき
弓張月
引とめてまた中空にかへさなんいる山ちかき弓張の月
月前霧
木の間もる月のかけなをもみるへきに霧立くもる松の下庵
月前雨
誰さとに又くもるらん村雨の晴ままちいつる夜はの月影
谷月
光なき谷とはいはし秋の月いてゝとくいるらうみ計そ
森月
下草の露のやとりはしけゝれと杜のひまもる月そ少き
原月

霜しら山霜のよすかとはゆる夜寒しの頃やとる月影

澤月

草しけきあさ澤水のひまとめてたえ〳〵すめる深きよの月

濱月

いく秋を雲に澄りてさゝ浪やしかの濱へをてらす月影

潟月

かしゐかた秋もこよひのときつ風深行なへに月そくまなき

崎月

この比はえしまかさきのもしほ草浪のよるさへ月にかくらし

禁中月

一代こそへたてし夜居の影ならめ我さへうとき雲の上の月

古寺月

あれはてし寺に昔はみとられぬと猶すむ三井の水の月影

社頭月

今夜なをいけるをはなつ川の瀬に影やはしくる山のはの月

閑居月

月そとふ人は分こぬよもきふの露吹のこせ庭の秋風

月前女郎花

をみなへし今宵は月のなにめてゝ露なからこそ折てかさゝめ

月前松

秋風の松ふく音しかはられは雨に晴たる月かとそおもふ

月前楓

露さそふはしの立枝の秋風に月かけなからちる紅葉哉

月前鴫

露にふす門田の鴫の聲す之あけぬとみてや月に立らん

月前鶉

明方のとこや夜寒に成ぬらん月かたふけはうつら鳴之

月前猿

ましらなく夜や明方になりぬらん木のまをつたふ深山への月

月前鈴虫

きけは猶月のよすからすゝ虫のふりゆく我身ねこそなかるれ

月前枕

寝覚されさめにみれは明夜をかたふく月やつけの小枕

月前席

月にねぬ昔のさむしろしきしのふ秋にも成ぬみよしのゝ山

月前舟

浦遠くかち音す之松陰につなきし舟や月に出けん

月前筏

はやき瀬をくたす筏にこす棹のしつくも月の影そさしくる

寄月述懐

よな〳〵の月にもにたる我世哉すみもさてめす山を出れは（た歟）

寄月無常

夜をかさねなきか數そふ野への露のきえし跡とふ淺茅生の月

月前釋教

同しくはにこらぬ江にし宿さなん月はよろつの水にてるとも

同年同月廿六合

松露

勝 松のはの露のやとりはしけゝれとをけはかつちる秋風そ吹

田上鴈

勝 いな葉ふく麓の小田の山おろしになれも落くる鴈の一つら

雨中虫

持 よるの雨の音にまきれて蛬よはちぬ聲をかすかにそきく

海邊月

勝 みつしほにあまの磯屋のあしかきもまちかくよする浪の月影

閑居月

勝 露しけみ月のやとゝはみえなから淋しくもあるか淺茅生の庭

忍待戀

持 深ゆかはねにたてつへしたのみつゝまつよひ迄はつゝむ涙も

逢戀

勝 つれなさのうき瀬過にしあふくまに立川きりに夜をな隔そ

夢戀

勝 袖ぬるゝうつゝのうさは數そひて涙ほすまのゆめそすくなき

曉更鐘

勝 鐘の音におとろかされてみし月も昔になりぬ在明の空

名所山

持 隠家とたつねもいらし三吉野の山のあなたもこゝろひとつを

同年九十三合手具家ゝゝ今時ゝ愚詠二首遂篇了

暮山月

勝 風すさむ外山の暮のさひしきに槇の葉つたひ出る月かけ

負 山人の月をしるへの歸さもなを道たとる松のゆふかけ

河上月

持 秋さむき影に氷をしかま川海いかならん浪のうへの月

持 おはなちる秋の野川の水の月袖よりかけをなかすとそみる

負 月うつる瀬々の岩浪大井川よるさへくたせ秋のいかたし

月前木

持 時雨てそ秋よりこほる軒の松にあらし吹夜の窓の月影

持 露にたに深山の秋をしらかしの枝にもはにも宿る月かけ

月前鹿

持 さをしかの小野の草ふしあれぬらし霜のよさむの月に鳴之

持 深にけり妻まちよはり鳴鹿の聲もさやかにすめるよの月

老惜月

勝 あかてこそ月もかたふけ秋のよはそをたに老のうき數にして

負 したふそよ我老らくのよはひさへかたふく月の空にまかへて

故郷秋風

持 故郷はとはれし庭も跡たえて梧のくち葉に秋風そふく

持 松の露はあへすこほれて故郷にしのふ色つく軒の秋風

海邊秋雨

持 浪にこそ秋のたもともしほれしを雨におりしくいせの濱荻

持 とまやかたもる露なくは秋の雨を風とやきかん磯の松かけ

閑栖擣衣

持 風すさむかやか軒はの秋の露袖にみたれてうつ衣かな

持 庭さむきあさちかおくのあさ衣枯なて床の霜にうつたり

紅葉交松

持 立ならふ紅葉やしけき松の色のまはらにみゆる秋の山のは

持 松の色をへたてにけりなおく山のいはかき紅葉そむる時雨に

野外秋霜

持 色そへしいつら花のゝ露もなしうら枯てゆく草のはつ霜

持 秋ふかくなるみの野風さえ〳〵てまさこの霜を草はにそみる

寄秋月戀

持 ひとりぬる夜寒をたにも思やれ契し月のかけにむかはゝ

持 身の秋の涙のとこやかはるらん月はそのよもおなしおもかけ

寄秋田戀

持 をくてもる田面のかりほかりそめの契もたえぬ秋はつるみは

持 しるらめやほに出る小田の鳴子なはうちはへ人に心ひくとは

寄秋草戀

負 ま葛はのうら吹風のつてにたにおとろかめやは秋のこゝろは

勝 契しはもとあらの小萩あらぬ世のわれか人かと秋風そふく

寄秋虫戀

負 たか中に秋をもしらてたのむらん契らぬ里の日くらしの聲

勝 秋の虫のをるはた糸のよるは猶あやに戀しきれこそなかるれ

寄秋枕戀

勝 うしとたになれこし秋を思いてよあらぬ枕の露はらふとも

負 秋の夜のなかきかたみと忍へともふるき枕はうつりかもなし

勝 契をきし露の枕にきえわひぬ命まつまの秋をうらみて

山家曉

持 山風の杉の窓ふく明かたにねやすさましくのこる月影

持 山陰やまた住なれぬかりの庵いつくの鐘にねさめしつらん

名所旅

負 草枕いく〳〵むすひしてむさしのや山のはつかに月をみるらん

勝 かつこえておもへはくるし歸こんのちせの山の遠き日かすに

海眺望

持 なかめやる木の原のゝ草の上に露より出るあさつく日哉

持 あさほらけまた陰くらき磯の松の木のまにみゆるうらの遠山

述懐涙

持 うきをしる心はさすかみえなからいとはてもよにふる泪哉

負 よにかくてなをすみ染の袖の上にかゝる涙そすてしかひなき

勝 きゝねたゝすみはて難へき我みかは袖ゆく水のあはれ世の中

釋教月

わしの山入にし空をたつぬれは我みをさらぬむねの月影

替 月にくむ三井のあか水にこらめや其曉のかけやとすまて

替 山陰は四方のあらしもさむけきにたつねよいかゝすまの浦浪

同、同月廿二百首當座作仍右道々々

初春

春のたつ浪に氷のひま見えて池のこゝろもけささそとけゆく

摘若菜

比きぬと若なつむらし春の野にけふ諸人の雪またつねて

歸雁聞

春のかりぬしさたまらぬ別ちも遠さかりゆくこゑそかなしき

見花

春をへてさきまされはや花にそむる心の色の深くなりゆく

庭菫

あれはてゝ春をもしらぬ庭もせのあさちかくれに菫さく之

籬卯花

夏の夜の雲まはこゝからの花のまかきを分て庭の月影

時鳥一聲

郭公又もかたらへ一こゑにあくるときゝし夜はのこるなり

樹下納涼

すゝしさにむへこそ夏を忘けれ山風かよふときはきの陰

曉鹿

聲たえすおしか鳴之在明のつれなきつまを月にこふとて

嶺月

みねの庵も猶空たかくすむ月をたれか軒はの松にみるらん

秋夕

身のうさも時こそありけれ夕くれの秋にひとしき涙なけれは

初紅葉

いく千たひそめてしくるゝ色をみん先初しほの四方の紅葉は

時雨易過

むら時雨ふるもあらしのつてなから又さそはれてはるゝ空哉

冬月

たちならふ松も冬木も陰しけみむら／＼はるゝ深山への月

嶋雪

つもりては浪まの山とみゆはかりまかきのしまにふれる白雪

寄露戀

又わけん心もしらす道芝の露をいのちにかけてまつ哉

寄山戀

思へたゝ富士のしは山しは／＼もとはゝやけたんむねの煙を

寄關戀

白川の關や戀ちの末ならん契し中も秋風そふく

寄草戀

戀すてふ心からなるねをそなく人も我身もうつせみのよに

寄衣戀

まとをなる袂はあきの衣手に恨の色そふかくなりゆく

山家草

いほしめて入山みちのくすかつらくる跡みえてかへらすも哉

田家露

いな葉もる山田のかりほふく風になひく雲より露そこほるゝ

旅宿

たひ衣秋の夜ころをかさねきて野にも山にも袖そ露けき

寄夢懐舊

いにしへにおり〳〵かへる心哉さめて又みる夢にまかせて

釋教

徒にたとすくすらん四十あまりあらはれきりし法にあひつゝ

[illegible]暮秋山

持　雲の浪まなくもこすか風寒みしくるゝ秋のすゑの松山

暮秋原

持　いまははや露ある草も片岡のあしたの原にくるゝ秋かな

暮秋浦

勝　なにをさて秋のかたみのうら千鳥跡もとゝめぬけふの別に

暮秋江

持　すみの江や秋くれかゝる浪の音もさむく日ことに松風そふく

暮秋里

勝　雲かゝる外山の木すゑうち時雨またき暮行秋しのゝ里

暮秋井

負　山の井のあかてわかるゝ比しもあれ月の影さへみえぬ秋哉

暮秋關

負　別ゆく秋をはとめていそかれぬ冬は名こその關もりも哉

暮秋橋

持　われもまたあはれとそ思くれかゝる秋の名こりやうちの橋守

後妙華寺殿冬良公御詠草

永正元年正月快筆月次

瀧邊霞[illegible]

瀧河も浪も氷の八重間にかすみをなかす春の山風

月次の發句に

雪やのこるかすみもしろき[illegible]かな

快筆月次[illegible]

柳風

春風のよはきすかたも青柳の糸よりやたゝ吹初〈習イ〉けん

春月

月はわか光を秋にのこしてや春は山邊に影かすむらん

光をは秋にやのこす月はいま影かすみぬる春の山のは

浮戀

このまゝにせめてはあれなうき思ひうきになしてそ増る心は

〔題闕〕

うなはらのかきりもとをき山かつらかゝる浪路や船[　　]

秋朝

軒ちかき峯の朝霧影しろくあくる行ゑのさむき秋風

餘寒風

いつまてと空さむからし春は猶吹や嵐の聲もたゆます

澤春駒

雪に見し末野の草も陰あをくもゆる澤邊にあさる駒哉

初逢戀

にゐ枕かはすこよひの床のうへや涙のくまもはしめなるらん

三月三日人の許より桃と櫻とを送るとて

三千年の昔をいまにさくもゝのためしは余所の上にあらすや

返事に申遣

三千年のよはいは君をためしにてなるてふ桃も幾かへり見ん

又

大かたになかめん花の色香かはその宿しるくさける櫻を

冬神祇（軍上吉より題を給て日吉法楽）

神かきや霜のしらゆふ影ふけてましらの聲もさむき夜は哉

水邊萩（同月次）

玉川やした下行水も色そこき眞萩咲野の陰をうつして

玉川もこゝとやいはんま萩さく野邊に色こき水の行ゑは

終夜月

秋といへはわかものからと照月のあくる光もしらぬ山のは

寄衣戀

〔歌闕〕

曉更水鶏（奉仕（澤イ）勧之）

たか枕たれかねさめを曉の月にしれとて水鶏なくらん

松風夏忘

きけはいま秋やたちぬと岩代の松に夏なき風の音かな

遇不會戀

一度の後はあふ夜と見る夢の來る事もなくあかす床（宵イ）哉

夕月夜とる手すゝしき扇かな

大かたの秋になしてもいかゝ見ん草木の露を袖の上[　　]

誰ゆへとかこちもやらんさらてたに秋はかなしき[　　]

岡邊や松とて人にとはれなん身にしあられはうき暮もなし

春あめのふりける日人の許よりせうそこの次に

いかにしてなかめくらさむ山里の庵さひしき春雨の主（イ）

返事に申をくりし

君すめはこゝこそあらめ春雨のふるやとゝても淋しからしな

見し秋の名こりしくるゝ落葉哉

梅花薫風

あまつ風かすむ空にも暁梅の匂はあまる春のそて哉

雨中聞鶯

けふも猶やとりを尋ヘにたゝのあとや夕陰告て鶯のなく

海邊曉雲

「歌闕」

「題闕」

戀しやと夜の衣を返してもなをたのまれぬ夢のはかなさ

八月十三夜ニ

わきて猶こよひの影やなかめまし秋さへいへは長月の頃

深螢

一村の野へのさは水暮はてゝ螢は夜の影そすゝしき

隠戀

かくるゝをうしといひても今更に思ひやみなん心ともなし

月前薄

しのすゝきむすふ葉末の露まても野もせにはるゝ月の影哉

松多寺不見

ならひぬる陰もしけ木の山松は寺をもよそにつくる入あひ

正月七日次の發句

むれてつむ野へや七草七車

又

梅か香にいとはてまつはあらしかな

[illegible]方品[illegible]

たえなりし法の道をたつ人も佛の道にまよひはてめや

[illegible]前波

「歌闕」

[illegible]

さしそひぬ嶺の灯あきらけくてらす日よしの影をならへて

[illegible]

軒端とへこゝも太山の時鳥 八代ニ相續

深て行秋のすゑ野のかたうつらふす床さむくなく夕へかな

菊

をきわたす霜の籬にさく菊のうつろふ色もあはれとは見る

忍

うちつけにえやはいふへき思ひそと猶下もえにたへそ忍ぬる

庭上露

草漸青

更衣惜春

けふまてもためしならすは花染の衣をやすくいかゝかへなん

河邊卯花

浪もいまたちそふ岸の花うつ木くもらぬ月の影かとそ見る

寄埋木戀

つれなさの名にこそたゝぬむもれ木のむもるゝ身にて□□

郭公頻
またれこしその忍音を時鳥をのかさ月と鳴そふりぬる
夏草滋
さは水のゆくゑもほそく遠近の草葉ひとつに茂る夏野は
古寺鐘
風こそは鐘そ告らめ古寺の夕へは松をあるしなる陰
松間月出當勸進
秋かせもはらはぬくまや山松の木のまにほそき夜半の月影
野遊當座出題二奥
野へ見れは袖うちむれてたつかすみあそふ往來のしけき春哉
三月々次
馴花出題二奥
なれにしはいく春ならし我までも老ぬるほとの花の木たかさ
喚子鳥
關の名はなこそといふによふこ鳥誰れか行ゑを山にかもなく
橋苔
世をいとふ岸はこゝにも路たえて苔のみふかき前のいたはし
夜花當座出題同前
色こそはあらめにほひは夜も猶手枕ふかき花のみ山邊
卯花廻庵四月々次
めくりぬるかきほの陰も白妙の雪にさきなす花卯木哉

郭公何方
おとろきぬ我も滝野の曉に鳴はいつちの山ほとゝきす
依戀祈身
かきりありて人もなひかは我命又なかゝれといのりこそせめ
採早苗五月
おさまれる時代をいまと千里にもとるらし早苗ふし立て□
水邊螢
蘆ま行夕川小舟静にてほたる夜をしる影そなかるゝ
寄繪戀
ゑにかけるたくひならなん徒に見てのみつらき人の心は
人つて當座
あちきなやあふ夜を契中も有にまつ人傳もとをきわか我身は
菖蒲當座
枕かる澤邊の村の菖蒲草ひかぬ袖にもしるきうつり香
六月
扇
秋ならは猶いかはかり夕月夜あふき取ての風のすゝしさ
蟬
雲霧の影にはあらてなく蟬の太山隠の聲そしくるゝ
戀
我ならす人めもつらきうき思ひ思ひかへしておもひなくさむ

夏笠當座

[　　]とみるほとこそなけれ遠近や笠もとりあへぬ夕[　　]

七月

荻

遠山に吹てふ秋の嵐をもやとしそへぬる庭の荻はら

露

夕陰や露おき渡す秋の野にかねて夜さむを虫そ恨る

市

朝またきたちにし人もをのかしゝ歸る市路の庵のさひしさ

八月

秋夕傷心

うき秋となかめすてゝも更に猶夕はたへん心ともなし

月前扁舟

月はいまかくる影なき遠島に行ゑも浪の舟のあはれさ

寄鶴戀當座

我はたゝあまつ雲井にすむ鶴の遠き音にのみ鳴そふりぬる

九月

遠郷擣衣

[　　]かく里暮わたり遠かたは嵐もそれと聞そまか[　　]

池邊紅葉

江にあらふにしきとやいはん朝との紅葉ははるゝ[　　]池水

挿頭菊當座

露までも袖こそにほへかさしにと手折山路の菊のひともと

十月

初冬

朝またき冬來にけらし空もはやかはる深山のさむき霜(雲イ)風

霜

秋に見し色は枯野の草村にまかふや霜のしろき夕陰

老戀

はかなしと世をも出南老の身の人をつらしといふさへもうき

隣里鷄當座〔本闕歟〕

ふかき夜おとろけとてや鷄の隣の里のあかつきの聲

十二月

題闕

しら雲と見し遠山の雪もはや都のそらにさむきあけほの

奥書云。

墨付紙數拾八枚。

冬良公御詠御筆ニ無紛者歟。此卷中の歌ニ。

我はたゝ天つ雲井にすむ靏の

遠き音にのみ鳴そふりぬる

〔右後妙華寺殿御詠草以陽鷹拾葉校合〕

和歌部六十四

洞院公賢公家集

春

年中立春

しら雪のふりつむやとの年のうちも春立けふは風そのとけき

初春元日

はつ春のけふ九重の庭の面に雪のうへ人たちゐすらしも

ひたりみきをのかつかさをさきたてゝみはしの前を渡る靑馬

子日

初春のねのひの松をひきつゝそ君かちとせをいはひそめぬる（ためしにそひきつゝ君をイ）

けふよりそちとせの春を契りをくはつねの松を野邊に引つゝ

のへにとるねのひの松を移しうへて又こん春は庭にひかなん

若菜

さすかはやもゆともなしに萌にけり雪消やらぬのへの若菜も

殘雪

降つみしこその白雪むらきえてやとのかきねに冬そのこれる

立かへり春きてのちも猶さゆるあらしに殘る雪のむらきえ

霞

朝とあけていつしかみれは春のくるそなたの空に立霞かな

あまの原霞にこめて朝日影みえぬにみゆる春の色かな

春といへは空もひとつに霞つゝ同しみとりのよもの山の端

津の國やなにはのうらの朝なきに霞にうかふ興のつりふね

朝な〳〵とをさかりゆく山の端はいくへ霞のたちかさぬらん

水上はいつくなるらんみえわかてかすみよりひく瀧の白糸

鶯

啼ねにて春をやつくるうくひすのきゐるは風は猶さゆれとも

あつさ弓春きにけらし朝あけのたにのといつる鶯のこゑ

こほりゐしたにはふるすはいてぬれと猶さえやらぬ鶯のこゑ

いつしかと花のおもかけすゝむるはまたき木末にきゐる鶯

きのふけふこゑしきるなり鶯もさすかに春のなかすをやしる

春とにねくらさためて我宿のそのふの竹にきゐるうくひす

雪中梅

咲そめて日數たにへぬ梅の花散かとみえてあは雪そふる

梅風

吹風の誘ふともなきかきほにも有とや梅のかににほふらん

やみにさへ風吹またはしられけりぬるよの床の梅のにほひに

里つゝきいつれの軒の匂ひとも風はわかねとむめのかそする

我宿ののきはの梅の盛りにはたのめぬ人そゝらにまたるゝ

春雨

春雨の心細くもふるゆふへ打しめりたるうくひすの聲

閑居春雨

さらぬたに人の稀なる草の庵に淋しさそへて（そふるイ）春雨そふる（こころイ）

蓬春雨

春の夜の草のいほりの雨のうちそこはかとなく袖そぬれける

行路柳

行人の袖にをくれぬ春風に靡くもしるき青柳のいと

池柳家會

影うつす柳のいとも打亂風になみよる庭の池水

春月

をくれに霞とわたる山の端にあるかなきかに殘る三日月

春霞かすみてくるゝ山の端にほの三日月のかけそすくなき

匂ふへきものならなくに有明の月さへかほる梅のしたかけ

歸雁

きくからになみた曇てかりかねの歸雲路に春雨そふる

雁金の泪や空にくもるらん霞にくるゝはるさめのうち

たまつさはかけてもみえし朝ほらけ霞を分るかりのひとつら

時しあれはあはれもふかき夕へかなかすめる空に雁の聲して

ぬしやたれ如何にしのへは春の夜のあけぬに歸る雁の玉章

いとせめて華をや惜む歸る雁ちらぬさきにと急く心は

花

芳野山花の盛に成ぬらん嶺の白雲はるゝまもなし

花の色はかつみよしのゝ山櫻霞に消ぬみねのしら雲

はなにのみ心をそめて徒に春は山ちにひかすをそふる

庭のおもに雨しつかなる夕暮は花のにほひもそふ心ちする

咲そめていくよにほひぬいそのかみふるの山邊の花のした風

このころは山の端ことにゐるくものたえぬやはなの盛なるらん

花ならし四方の山邊を見渡せはかきらぬ春にあはんと思へは

なにはえや霞をわけてとふかりの春と共にも立かへるかな

いのちあらはまたもあふへき春そとは思へ共猶おしきけふ哉

殘花

行春はたちもとまらてあすはまた形見なるへき花の色かな

暮春藤

よろつとせ見るへき池のふちなみはけふ立返はるもかきらし

潤三月

花とりにそめし心のあかなくに又くはゝれる春そ嬉しき

夏

更衣

かきねにはまた卯花も咲ねともしらかさねなる雲のうへひと

首夏

夏のきて衣手の杜はうすみとりたゝひとへなる木陰之けり

新樹

はな散し庭のこすゑのみとりにそ又ふかゝらぬ夏は見えける

卯花

卯の花の盛のころの庭のおもはやみにも月のかけかとそ思ふ

待郭公

ひとつてにせめてきかはや郭公いつくの里にはやなきぬとも

をちかへりなけや五月の郭公いつをまてとてねを惜むらん

郭公まつとせしまにまちもせぬ（有明の月社やまをまついてにけりイ）有明の月そ山をいてぬる

郭公またぬ人こそ有明の月をつれなきものとしりけれ

ほとゝきすまたれし山のたかねより有明の月そまつ出にける

一聲とうらみしもせし郭公そをたにきかぬさともあるらし

待かねてうちまとろめはほとゝきす唯一聲は夢かとそおもふ

ほとゝきすはつね（か聲）のみかは里馴て後の夕へもまたれすやある

はつねにはききらさりけりほとゝきす鳴とし聞はまつそ驚く

夏夜の月とともにやほとゝきすみやまをいつる夕暮の聲

うき身にはあまるはかりの情かな有明の月になくほとゝきす

高砂のまつよをへつる郭公なくは木すゑのよこ雲の空

啼渡る聲はくもゐのほとゝきすみはしのもとにま近くそきく

たち馴て我袖ふるゝたちはなのありか尋てなく郭公

明やすき夜半の名殘をれにたてゝをちかへり啼ほとゝきす哉

みやま出る初ねのみかは郭公なきふるしたる程もなつかし

菖蒲

忍ひつゝ浮世をなけく袖の上にまたねを添つけふのあやめに

五月雨

けふいくか同し詠に雲とちて晴せぬ空の五月雨のころ

五月雨の晴ぬひかすのふるまゝに浪こそこゆれ沼のいはかき

五月雨のたま〳〵をやむほとたにもふるかとそ聞軒のたま水

廬橘

むかし見る夢の名殘をのこしてもねさめのとこに匂ふ橘

夏河

夕やみはうかはにともす篝火のかけかと見えてとふほたる哉

夏草

山里の庭の夏草しけりあひてたつねし人は跡たにもなし

夏草のしけるおもひを分ゆけは秋よりさきも露そみたるゝ

瞿麦

さきぬれは哀とそ思ふあさとに露もうつろふとこ夏の花

夕立

ゆふたちの雨よりさきに吹そめて庭の木草に風譟くなり

夕たちは一村すきて晴にけり草葉に殘る露そすゝしき

夏月

夕たちのすき行そらのうき雲をもりて涼しくいつる月かけ

夏の夜のあけやすけ(れ脱)は天のとをさしいつるよりをしき月影

あまのとのあけやすけれは夏のよゝ月のなこりそしつ心なき

ちえしけき杜のこかけは夏なからよそにはれたる月そ涼しき

またきより空にや秋のかよふらん月の桂のかけそすゝしき

螢

星のかけ螢の光をしなへてわかちかねたる水のうへかな

夕暮はたまえのあしに風すきていとゝほたるのかけそ亂るゝ

いたつらにみさわにもゆる螢哉なと我まとをてらさゝるらん

夜終風にみたるゝ螢哉草葉の露にかけもとゝめて

通夜燼螢の名殘故明るは惜き夏のそらかな

久方の空にしられぬ光もていかて螢のよを照すらむ

さはへなる草の下葉や朽ぬらん螢とふなり夏の暮かた

蓮露

風わたる庭の池水なみたてははすのうき葉に露の玉ちる

納涼

秋風やかつかよふらんうら人のたちよるなみに袖そすゝしき

秋

初秋

秋のひかすまたいりたゝぬ朝とより思ふにすきて風そ涼しき

まとちかきたけの葉風のひとよにも涼敷かはる秋はきにけり

秋風のふきとふきぬる袖の上はのへよりもけに露そみたるゝ

いとはやも秋のけしきになりにけりおきふく風の音に付ても

秋枕

おきに吹風ならねとも秋來ぬといつしかわれにつけのを枕

七夕

天のとのあけはなれゆく(ゆくまゝにいつしかやイ)ほとよりや棚機つめのくるゝ待らん

朝露をたまにつらぬくいと薄我たなはたにたむけてそかす

ちよをふることゝち計やたなはたのけふのくれ(を待なるもイ)ゝも久しかる覽

待すきし月ころよりもたなはたはこの夕風やみにはしむらん

ほのかなる今宵の月やあまの川わたせもとむるひかり成らむ

ふけすみて風靜なる池の面にほしあひの影をうつしてそみる

時のまの契りなりけりひこほしのあふかとすれは鐘の聲〳〵

秋露

おほかたの秋のうれへのなみたより草葉の露や亂そむらん

庭露

朝またきおきいてゝみれは庭の面に露のむすはぬ草葉そなき

草露

夕暮は秋の野風にみたれつゝむすひそあへぬ草のうへの露

花咲ぬをかやかうへに置露のひかりにやとるあきはきの色

をしなへてをくしら露も秋のゝのちくさの花の色にみえけり

秋風

いつとても同し空より吹風のあきしもなとかみにはしむらん

吹風の草葉をわたる夕暮は我袂さへ露そみたるゝ

風わたる荻のうはをなかむれはそこはかとなく露そ亂るゝ

籬萩

たくひなき色こそ見ゆれ庭のおもの籬の萩に露むすふほと

内裏京極殿へ行幸文保二六

あさな〳〵さきそふ庭の萩か枝にをくしら露も色そうつろふ

薄

ほに出る庭のすゝきのかたよりにふくかたしるき秋の夕くれ（風イ）

苅萱

それしもそなさけおほかる白露のしところにをける庭のかる萱

女郎花

雨をやむ夕露おもみをみなへし風吹ぬまもうちなひきつゝ

蘭

蘭いかなる人のたねならうへてあやしきまてのかに匂ふらん

秋夢

武藏野をわけつるよはの旅ねには夢もちくさの色そ見えける

蓬思蟬聲

秋はたゝゆかのほとりのきり〳〵す軒はの山のひくらしの聲

機織

つゆやぬき風やたてなる秋のゝにはたをる虫の夕暮の聲

雨夜虫

秋の夜の雨靜なる草むらにをのかあはれをそふるむしかな

山家秋夕（家督）

山里はおのへのをしか庭のむしこゑ〳〵かなし秋のゆふくれ

古渡秋夕（常磐井前）

人とはゝ秋の夕のわひしさをいかゝいはせのわたりなるらん

秋夕雨

身の秋をおもひつらぬる暮の雨我涙よりふりやそむらん

露染葉

あたしのゝまた霜をかぬこはきはら下葉の色は露のまに〳〵

爲月不寢

くるゝより空になり行こゝろ哉よすから月とともにみる（すねイ）へく

對山待月

我いほの軒はは山のちかけれは月をまつこそひさしかりけれ

いてゝしも心つきけり夕やまの松にやすらふ秋の月かけ

月出山

おのへなる松のひまよりもりそめてやゝ立のほる山のはの月

夕山月

續千載集入 夕しくれすき行山のたかねよりむら雲わけていつる月かけ

月契秋

月も秋あきも月とや契るらんおりえてみゆるよはの空かな

夜半月

宵のまはしはし見えつるうき雲もきえてさやけき夜半の月影

桂月

もみちする月のかつらもおりをえて秋のけしきの杜の下かけ

野月

むさしのゝ尾花かすゑを吹風に月のかけさへうち靡つゝ

野庵月

かりそめに草ひきむすふのへの庵さなから月そねやの友なる

浦月

新續古今集 秋の月こゝをあかしと思へともこうらにすむ人もみるらん

きよみかたちかくなたかきふしのねの烟をよそにすめる月影

嶋月

からさきや松の木のまをもる月のかけそくたくるにほの浦波

竹月

呉竹の枝もたはゝに置露に月かけをもくやとるよはかな

九月十三夜遊大井河連歌

今宵こそ空行月もおほゐ川名になかれたる影をみせけれ

もみちするあらしの山の紅も月にやふかき色をそふらん

ほとゝをく都の空をへたてきてあらしの山のつきを社みれ

こほりかとみえこそわたれ大井河せゝにくたくる秋の月かけ

月前旅行

更になをかへらん方そ急かれぬ月を見つゝやこゝにあかさん

月前旅

旅の空くまなき月にあくかれていまたよふかき宿をいてぬる

ふるさとをこふる涙の露むすふくさのまくらに月そやとれる

月影そまたことゝひてやとりける我もかりねの露のまくらに

依月客來

今宵しも君かとふにそいとゝしく月のなさけは思ひしらるゝ

秋池

千々の秋すむへき池のなみの上にやとれる月も影そのとけき

月浮山水

しけりあひし梢のひまもみえそめてもりくる月を宿すいけ水（たに無）

對月忘戀

我ならて月もうき世にすみけりと慰めてこそみをはうれへね

山家月

我はかり尋いりぬるやま里とおもへは月のかけもすみけり

山里はのきはの松の木のまよりたかねをいつる月をこそみれ

閑見月

いつくにか我思ふ程こゝろとめて今宵の月をまたなかむらん

照月の光をみてもおもふかなこゝろのやみのはれぬなけきを

田家月

露むすふかとたのいな葉白妙にやとりわたせる月のかけかな

をやまたやかりねの庵をもる月の影をともにてあかすよは哉

暁月 文保二七禁宮御會

明ぬるかおなし雲井にすむ月のかたふくまゝに影そしらめる

暁惜月

見るもおし明かたちかくなるまゝにかたふく月のあかぬ光は

ほの〳〵とあり明の月の山のはをのほると見れはあとの横雲

暁擣衣

暁そ哀をそへてきこへトるをちかた人のころもうつをと

鴈

かりとなくれをきく時そ今さらにあたなるよとも驚かれぬる

うちそよきのきはのおきな吹風にかりかねさむき秋のゆふ暮

雲外鴈

くれかゝる夕への雲をたえ〳〵に見えかくれとふ雁のつら哉

風前鴈

風の儘に聲はかすかにきえゆけとつらはみたれす見ゆる鴈金

霧中鴈

ことつてんみやこにつけよ天つ鴈こしの白山けふこえぬと（若脱歟）

鹿

秋されはよもの野山になく鹿もおなし思ひにねを（たつイ）やなくらん

野亭鹿 家會

夕暮はすそのゝいほの秋風におのへのをしかこゑをくるなり

鹿聲何方

いつ方ときゝもさためぬさを鹿のなくねあまたにくるゝ空哉

暮秋鹿

つまこひに秋の名殘を取添てひとかたならす鹿やなくらむ

夕鹿

行秋のなこりうちそへいりあひの鐘にたくふ（聲や鳴まさるらんイ）さをしかの聲

菊未開

花はまた咲やられねとも庭の菊のあたりは風そかつかほりける

菊露

咲そむるまかきの菊にをく露はいくよろつ代の秋契るらん

菊叢多露光 重陽日當座

けふといへはおりえてみゆる庭の菊に千代の數とる露の白玉

月照菊花

咲ぬれはやみにもしろき白菊のかゝやくまてにてらす月かな

水邊菊

夕まくれ池のみきはの白菊を風によりくるなみかとそ見る

菊

にほひつる風をしるへにしら菊のさける山路に我はきにけり
うつろはぬ色のこれとそたをりぬる霜よりさきの庭の白菊
惜共ならひはかなしつゐの色にうつろひそむる庭のしらきく
庭の面に霜まつきくの色迄もうつろひはてん秋そかなしき

尋紅葉

この山はまた色あさしこえすきてふかき紅葉を猶たつねみん

紅葉處々

うすくこくさま〲みゆる紅葉哉山もはやしも皆にしきにて

紅葉遍

そめわたすきゝの紅葉の移ろひてすこしの松は残るともなし

紅葉誰家

をちのさとに一むらみゆる薄紅葉たかすむ宿の木末成らん

紅葉

時雨には色こそ見えねいかにしてそむれは深き紅葉なるらん
ひにそへて紅葉の色やまさるらん昨日のしくれけさの朝しも

秋客

そめつくす軒はの山の紅葉ゆへとひくる人のなさけをそみる

紅葉映水

さま〲にみゆる木末のいかなれは水の上にはひとつ色なる
露霜のそむるもみちの色迄も秋とともにそふかくなりゆく
たかねなる松に嵐のをとはしてちりくるものは紅葉なりけり

暮秋

むしのねも草葉もかゝるあさち原あれこそまされ霜を重て
秋よ哀心つよくもかへるかなおしまぬ人もあらしとおもふに
行すへのちとせの秋を契る共けふをは昔かくらさすゝかな

鐘聲送秋

入相のかねの音こそかなしけれけふにかきれる秋とおもへは

冬

時雨

はるかなるたかねにみつる浮雲はいつこの里にしくれきぬ覧
吹はらふ嵐のをとをさきたてゝ雲の一むらしくれてそ行

落葉不待風

はらふへき嵐をたにもまちつけてしくれに錦ふ庭の紅葉は

落葉

さそはれて雲の跡なきあらし山残しくれは木の葉成けり

夕落葉

神無月木の葉ちりかふ夕暮はとふ人なしにさひしさそそふ

落葉如雨

とふ人もあらしにあるゝ冬の庭雨にまさりてふる木の葉かな

木の葉ちる音を時雨ときく程に物おもふ袖はやかてぬれぬる

落葉隨風

吹まよふ嶺の嵐にさそはれてさももろくのみ散木の葉かな

殘菊

しもをかむさきにとおりし菊も猶秋の色をはのこさゝりけり

霜

いろ〳〵に秋見し草はかはれともお花ひとつの霜そつれなき

椎柴 家會

いつとても葉かへぬ峯の椎柴はしゐて春をもまたすや在らん

衾 同

獨ぬるよはのふすまのしたさえてしもをく程そ空にしらるゝ

水氷無音

みなかみはこほりやすらん山里のかけひの水の音つれもせぬ

深夜霰

いつ程にふりそめつらんうたゝ寢のさむる枕に霰をそきく

冬夜難曙

のきのあられ窓の嵐に夢さめて（ねられねはあかしかねたるよはのさむしろイ）冬のよはこそいとゝなかけれ

冬月

冬かれのしはふの庭にやとる月のしもにみかける影そ淋しき

さよふけてはたれしもふる庭の面にすさましけなる月の影哉

風さむみ雪けの空の雲まよりもりくる月もかけそこほれる

海冬月

ふけゐかたなみちはるかに空晴て月すみわたるあまの橋立

川千鳥

なき渡るかはせの千鳥聲さむみよやふけぬらん月そかたふく

水鳥

さむしろのさゆるよころは水鳥のうきねのとこそまつ哀なる

社頭神樂

みたらしや川風ふくるしものよにあさくらかへす聲そ寒けき

十一月

こゝのへの庭につらなるもろ人はをみの衣にひかれてそたつ

暮雲欲雪

くれかゝる日影もさむき山風に雪降ぬへき雲の色かな

朝雪

通夜さへつる風の名殘とやあくる雲井（あさ戸イ）につもる白雪

淺雪

ふかゝらし草の枯葉のすゑ見えてうつみもはてぬ野邊の白雲

遠山雪

やまへには雪降りけりなよもすから都の空はさえしくれつる

をしなへて皆しろたへのなかめ　月と雪とのとをやまの色

羇中雲同

さらぬたにみちはへたゝるふる郷をなをたちかくす嶺の白雲

羇中夕

蚊やり火のけふりを里のしるへにてそこまて急く旅の夕くれ

羇中日暮

同しくは思ふあたりに宿からんなを道遠く行はくるとも

旅

草枕たゝかりそめのたひねしていくよになりぬ都こひしみ

いまいくかゆきぬとまりぬ朝夕に定ぬ宿のたひのこゝろそ

旅泊

行とまるいりえの波に舟うけて枕にちかき月のかけかな

かち枕おなしうらはにうきねして月そなれぬるよはゝとも経

山家雲

ま柴たくみやまのさとの夕けふりたちこそまかへみねの白雲

窓竹

たえす吹外面の竹の秋風を我まとちかくうつしてそきく

名所川霞

つるのすむいつぬき川に立波はちとせすむへき色やみゆらん

月前懐旧

なにとを忍とはなきみなれとも昔こひしきつきのかけかな

懐旧

返りこぬならひと思ふあやにくに過にし方はかくや戀しき

今更にわかれし人そしたはるゝつらさを月日はこそにかはらて

なにとのかはるとなしにいかなれは過にし方の戀しかるらん

雨

あたならぬ軒のあの雲かけて月影のまたふくかたに心をそしる

月

夏さむみ山のたかねに雪降はとえこそまされしかのね

雑題

思寝すことそなきこれねさめするよをかる月のあかしかたさに

大宮

ゆふたちの名残の庭の露おほみ顔てくも昨はにはるゝものゆへ

澤田川

昨日みしくきの露も深くとてけさはたかはる色をそふらん

鹿

須磨のうらやもしほのけふり立そひて夕霧くらき秋の空哉

備前前司内彈正

いとゝまた虫やうらむるあさち原をきそふしもの夜さむ重て

高砂

獨ねのあはれをしるて重れつゝたかさこのもをさめのみ将らん

三川

山里はしくれのみかはもろくちる木の葉のをとも夢は覺けり

高部
たかへなゝ池の汀のさむけさを我ぬるとこのしもにこそしれ
韓神
折からかみるにあはれのおほき哉かれのゝうへにむすふ朝霜
老鼠
なかきよをいねす身にしむ風のをとに明しかねたる床のさ莚
散手
山里のふゆの夕暮風さむしゆきけのくもはみねにそひきて
宮人
おもはしよさのみや獨歎へきかはかりつらきなかのちきりを
綾覽
したひかね身にあまりぬるおもひかな袖は涙の隙もなくして
簡會舍人
戀しさを忍あまれとねり糸のむすほゝれつゝとけんこやなき
簡會氏子
別つるおもかけはなをありあけの月をそかこつしのゝめの空
詠史
大公望圖畫
いたつらに七とせまでの秋風につりする（さしイ）人のあとそ賢き
張良圖
いかなれは鳥のねとしも契りつゝそのひと巻を人にうけゝむ
李夫人圖
おなしくはけふりにかよふ面影に心のうちをはるけましかは
二月
年をいのる今日のまつりを神もうけてよろつの國そ豐成へき
寄國々
まつりとすなをなる世はよもの海よろつの國の民そたのしむ
南殿花宴歌
こゝのへ（もゝしきやイ）に今日時にあふ櫻はな猶いくちよの春のかさしそ
とはゝやなみはしの櫻いつの代かかゝるためしの春に逢けん
君か代におりえてみゆる櫻花けふを千とせのはしめとやみん
けふしこそ雲井の櫻時にあひて代々にこえたるいろに咲らめ
松契春
ちとせともかきらぬ春のみとりかな我きみか代にあふの松原
いくたひの花をか君にちきるらん千世ともさゝぬ春の松かへ
松爲久友
うこきなきいはねの松はちとせともかきらて君に契り置らし
千年ともさしてはいはしうこきなき岩ねの松も君にちきらは
けふよりそ君にちとせを契りをくときはの松を庭にうつして
禁庭松久
玉しきのみきりの松のちとせをもけに久しとも君そかそへむ
千年ともかきらさらまし君か代のめくみひさしき庭の松か枝
もゝしきに色もかはらぬたま松はちとせを過て猶そさかへん

昔か代はちとせを松の色かへて久しかるへきもゝしきの庭

寄松祝

すみなれて千世を重ねん宿なれはみきりの松の色もかはらし

ちきりをく心はしるやみきはなる玉まつかえの千代の行すゑ

竹契齢

うつしうふるみきりの竹のちよこめて契りも久しきみか春秋

萬代をかねてそきみに契るらんうへてともなる庭のくれ竹

君に父かけをならへて契るなりみきりのたけのよろつ代の春

君にまたかけをならへて千代まてのともとそ契る庭の呉竹

けふよりそ君に契てうつしうふる砌のたけも萬代をへん

色かへてひさに見るへき呉竹のちよともさゝしゆくすゑの春

神祇

ひさかたの月日とともにやはらくる光そ世によをてらすへき（らむイ）

かしこまる豊みてくらのゆふしての靡くとしるき神風もかな

さかき葉にかくるゆふして一すちにたのむ心に靡けとそ思ふ

ちはやふる神もあはれとみしめ縄うちはへたのむ深き心を

代々をへて君につかへん道もなを神の恵みのほかにあらしを

社頭氷

いさきよき神の心はみたらしの川瀬の水をくみてこそしれ

神風やみたらし川のうはこほりしたに流るゝこゝろをはしれ

しるらめやみたらし川のうは氷をとにはたてぬしたの流れを

おもふことかきたにやらすみたらしやきはたの水も氷へたてゝ

めくみ宿をろかなりとも誠有心をたゝす神ならはかみ

ひとすちにたのむ心をみかさやま神も哀とめくまさらめや

いかさまに我身を神もみかさ山のほりて後もまよはすもかな

みかさ山のほりて猶朝日影これより上のみちまよはすな

あまつ神いかにちかひてみやこより北には松のたねを植けん

あとたれて後こそ神もすみよしと思ひしりぬるみやこ成らめ

まつとのしるしあらは世跡たれてよにすみよしの神ならは神

やすみしる君の心も（とともにやイ）すみよしの名にをふ神はさそ守るらし（神もたゝしくさそまもるらんイ）

すみよしや神風きよき昔か代にわかのうら波たちまさるらし

元應二年十月卅日會

閑庭霜

おちつもる朽葉かうへに霜ふりてはらはぬ庭そいとゝ淋しき

冬曉月

よひのまのしくれの雲のあともなく明かたちかくさゆる月哉

旅宿雨

行すゑは雪やはらはんたひころもあさたつ袖は雨にしほれと

元亨元年四月四日毗沙門堂當座

時雨

もろくちる木の葉も音はかはらねと軒のしつくにわく時雨哉

後朝戀

きぬ〳〵の床にきえなは露のみのなからへて猶うさは嘆かし

山家

嶺の松谷のあらしは〔と歟〕吹風をやとのともとはきゝそなれぬる

元亨二年七夕左衛門督勸進

天つそら〔マヽ〕たのめせぬ契ゆへ我さへよそにけふそまたれし

たちまよふあまの川霧晴れすともたとらすわたせ鵲の橋

秋をへてしらめなれぬるとのねに二のほしもあはれしらなん

七夕のあふせかはらすあきとにけふさしわたせ天の川ふね

我のみそなをたくひなき七夕のあふせも雲のよそに聞つゝ

人は皆いむてふけふの星あひをたえぬためしに我はならはん

七夕はかきらぬ秋をたのむらんわか別ちそせんかたもなき

元亨二年七月廿二日毗沙門堂當座

曉鴈

ねさめする袖そ露けきなきて行雲井のかりや泪かすらん

野鹿

をちこちの鹿の鳴音をゝしなへてひとつにさそふゆへの秋風

里紅葉

物おもふ涙の雨のいくしくれみやまにまさる色をそむらん

待戀

我涙はらひそあへぬ待よはりねなんと思ふとこのさむしろ

絶戀

思ひいつや忘れやすると疑ひしそのころさへそ今はこひしき

山家

稀にきく人や淋しきなれぬれはやゝなつかしき嶺の松風

田家

穗に出るかとたの稲の露をもみ風をもまた好〔スイ〕うちなひきつゝ

正中二年後正月七日權大納言〔祥小字〕

梅香薫袖

たちよれは袖こそにほへ春の夜の闇にもしるき梅の下風

河上春月

影やとす月はいはまにかすめ共又春あさきやま川の水

忍不逢戀

思共洩したにせて人しれぬ袖の涙をいつかほすへき

正中二年二月獨詠

曉霞

たち渡る霞の底に埋もれてあかつき深き鐘のをとかな

浦歸鴈

いかなれは我すむかたのはるのかりとうらなみに立歸るらん

初花

春とのならひに今は思ふ哉花迄おしき命なりとは

池藤

紫にうつろふ池の藤なみをくれゆく春の色とこそみれ

新戀

いのれとも神も請すやいたつらに逢瀨もしらぬみたらしの水

出言戀

よしさらは洩しやせましせきかへす胸にあまりておもふ心を

近戀

かひなしや同しみかきの内なからあまりにうとき中の契りは

書をたかふる戀

あさからす心をつくすとの葉を人のうへには見るさへもうし

夢戀

おほつかなかよふ心の時のまもありてや夢のうちにみえつる

夜枕

草枕むすひ重ぬるよな／＼の夢のたゝちにかよふふる里

正中二年二月廿五日權大納言會

歸鴈

春のかりいつくをつゐのすみかとて越路の旅を又いそくらん

待花

またさかぬ花に心をつくはねの嶺のしら雪あやなまかひそ

契戀

なをさりの契なり共きくまゝを賴みてこそはかはゝをも見め

庭款冬

我宿のやまふきさける池水にかはつもなきて春したふなり

暮春花

行春のあすのかたみの山櫻風も一木やよきてふきけん

惜別戀

くれて行春の名殘をとりそへてつねよりぬるゝきぬ／＼の袖

山新樹

しら雲にまかひし花の色もみなあを葉にかはるみよしのゝ山

待郭公

我にこそ語らはすともほとゝきす雲井のよその聲なゝたてそ

逢不過戀

たち歸又へたつへきせきとたにしらはこえめやあふ坂のやま

正中二年四月廿七日權大納言會兩月分也。

實任卿家にて藤花見し時當座歌

春雨

さほ姫の霞のころもうちしめりふるともみえぬゆふ暮の雨

郭公

ほとゝきすはやきなかなん我宿のかきほのうつき花盛なり

恨戀

戀しなはつらき心の恨をもみはてぬかたや嬉しかるへき

嘉曆三年三月廿六日德大寺にて當座

花

尋入このやまさとのはなさかりよしや吉野もさもあはらあれ

ふるきあと吹つたへたる家の風にひらくる花の春はかきらし

戀

餘所にのみみるめ計はありそ海の波のたちゐに袖はぬれつゝ

かきりなき心の内のおもひより燃る煙やふしの根にたつ

雜

歸へき空もおほえすくれわたる霞を漏る入あひのかね

同四年三月十五日同所にて

山花

春ならぬ時は名たかきかひやなき花にそ人はみよしのゝやま

花交松

高砂の尾上の雲のたえまには花にもれたる松そみえける

雜花

櫻花ゐしまかさきにかきとめてちるとしらぬ色を見る哉

たおりつるたゝ一ふさの花をもて三世の佛にたむけつるかな

山櫻しつかつま木に折添て花のおもてをいかてふすへん

元應元年六月十九日小倉中納言入道勸進

夏日陪北野社壇同詠三首和歌

夏月

夏木たちよその木末はしけれ共月のかつらのかけそさはらぬ

螢

はかなくも風にみたるゝ螢かな草葉の露にかけもとゝめて

神祇

あまつ神いかにちかひて宮柱宮このきたにたてはしめけん

元應二年十一月廿日日吉別當桓寺僧正勸進歌合

冬日於日吉社壇同詠三首和謌

冬月

かれ殘るしのゝをさゝのよもすからをきそふ霜にさゆる月影

山雪

見渡せはをちの山のはしろたへに雪よりあくるしのゝめの空

神祇

ちはやふる神もひよしのくもらねは我君か代をさそ照すらん

元亨二年七月廿四日侍從中納言勸進

詠法華經序品和歌　山王講歌初度

法の花今日吹風にほころひて色をも香をも世にしらすらん

初秋祝

きみかよのくもらぬかけを久堅の月にもしるく秋はきにけり

元亨二年十一月廿四日遣之。前藤大納言勸進五社歌合。住吉分。玉津島先日披講了。不詠之

江月

みしまえやあしまの浪のよるとたにみえぬまてすむ秋の月影

擣衣

遙なるとた里をのにころもうつ聲をもちかくさそふ秋風

神祇
おとたれて世にすみよしの神ならは我まつことを哀とはみよ
日吉分
千鳥
さよちとりなかなく峯も神さひてうら風さむき志賀の唐崎
山雪
さきちりし花の面影それなからにほはぬ雪をわくるやまこえ
神祇
ちはやふるならのやしろのみつかきに久しき御代と猶祈る哉
元亨二年十二月十五日遣之　春日分
冬月
冬かれのあさちか庭の霜のうへにおなし影なる月そさむけき
野雪
かすかのや春をはいつとしら雪もうつまてみせよ行末のみち
神祇
みかさ山峯のあさひをあふきてもくもりなきよを猶いのる哉（みてそにみをらおかせてそふイ）
元亨三年十二月廿五日遣之　賀茂社分
川氷
冬ふかみかもの川風さゆるよは汀の波そまつこほりける
松雪
しくれには色もかはらぬ神やまの松の葉しろく雪ふりにけり

神祇
千早ふるかものみつかき行末も久しかれとそ世をいのりぬる（けるイ）
住吉社御歌合元亨四年五月廿五日依召進仙洞了
松間霞
春かなるうらちのすゑはあけそめて霞にたてるすみの江の松
海邊花
ふねとめてしはしたにみむなみかくる礒山櫻いまさかりなり
神祇
ちはやふる神代にかよふ道なれやたちもまよはぬわかの浦波
嘉慶元年九月日宰相典侍勸進
春日社奉納歌合先日遣短册
郭公
ほとゝきす我方になけたちなるゝはなたちはなのありか尋て
夏月
夏衣たゝひとへなる袖のうへにやとるほとなき月の影かな
神祇
あはれとも神はみかさの山ならは猶のほるへき道もまよはし
正和五年五月廿三日衣笠殿少將局勸進
前大納言可詠之旨有命、遣之
檀紙二枚女房召事之
人記品

行末をほとけときくからへに又すきし世をさへしるそ嬉しき

懐舊涙

思ひいてゝ今さらに又をきそふはむかしにかへる袖のしら露

文保三年二月十一日公貫卿女勸進歌

法花經序に

待花

まつといひて花に心はつくはねの嶺のしら雲にほはましかは

懐舊

あはれ〳〵昔ならはと思ふとのその數〳〵にぬるゝ袖かな

祝

君か代はちとせ重ねてみかはみつ十度すむへき色そみえける

同時當座卅首續歌中に

浦歸鴈

はる〳〵と霞む浦ちに聲はしてつらをはみせぬ夜のかりかね

川上月

晴夜はきよたきかはのはやせにもやとれる月そをそく流るゝ

野徑雪

誰しかも我よりさきに朝たちていくのゝ雪にあとのこすらん

元亨元年八月十五夜内裏當座

月前露

秋をへて光やそはんたましきの露の臺をみかく月かけ

浦月

もしほやく烟もみえす須磨の浦の波のちさとにはるゝ月影

月前旅

露ならて涙も月をやとしけりむすひ重ぬる草の枕に

元亨元年十月十二日内裏御歌合當座

雪中若菜

かきくらし袖にみたるゝあは雪をはらひもあへすわかな摘之

款冬移水

はるふかみ八重咲きしの山ふきのいはぬ色なるいての川水

木間夏月

夏木たちこすへのしけくなるまゝに庭なる月の影そすくなき（稀なるイ）

螢火知夜

とふ螢晝は思ひをいかにしてくれてはもゆる程を見すらむ

荻風驚夢

夢といへは見はてゝたにもあたなるを荻吹風のなを殘すらん

氷上冬月

いつれをかかゝみといはん冬の池の氷にしける夜半の月影

雪朝眺望

あさとあけてみれは殘れるあともなし山のはとに雪積りつゝ

逐日増戀

昨日にはけふのせかはるあすか川あすの淵とも賴むへき身か

折句　ゆいまゐ
よをさむみ磯の松風きこゆいまゐしまかさきのなみの枕に
沓冠　まつたけ
ますかゝみくもらぬ御代もしられつゝ玉のみきりを照す月影
元亨三年三月八日内裏當座
池邊花
咲そむるきしの櫻をうつしもてはなのかゝみとすめる池水
後朝戀
わかれつる心まよひにかきくれてかく玉章もあとそ亂るゝ
文保二年九月
夕鹿
秋もくれ時も夕の野邊の露になみたをきそへ鹿そ鳴なる
曉月
松風の音はしくるゝたかねよりくもらていつる有明の月
暮秋
契をく君かちとせの秋そとはしれともおしきけふのくれ哉
忍戀
いかにせむしのふのうらに引網の人めをよくる程そくるしき
恨戀
身のうさも人のつらさもさきの世にいかてかゝれと契置けん
此五首題文保二年九月卅日自東宮被下之十月三日詠進之

元應元年七月七日依召進東宮歌
くるゝまをまちわたるらしたなはたの契りもなかき鵲のはし
けふといへはたむくるとに七夕のつまゝつ風も聲やそふらん
見るまゝに庭のともし火かけふけぬいまや星あひの秋風の空
水の面にうつす影たにとゝまらてみまく星合の空もあけなん
あけゆかはあまの川風吹まされかへさの舟のよるへなきまて
天川たえぬわたりはそれなからせめてふたよのあふせとも哉
かきりなきとしの一夜の星合をけにたえすとは借そ見るへき
元應元年八月廿三日春宮御歌合當座
川月
清たきや石まにむせふ川波にくたけてやとる秋の夜の月
夜虫
宵のまは稀にきゝつる虫のねもふくれはしけきよもきふの庭
寄涙戀
せきとめむかたこそなけれ戀わふる涙おちそふ袖のたきつせ
元應二年正月十九日東宮當座
羈路鷄
たひ衣あさたちなれて鳥のねをおきてこそきけしら川の關
名所松
しるやいかにみのゝおやまのひとつ松君にちよまつ契る心を
忍不逢戀

思ひかねつゝむ人めや許さましさりとてなかの逢せなけれは

後朝戀

したへともかひこそなけれ別れつるおもかけとめぬ有明の月

庭草花

をしなへて籬をわたる秋風にあやなく靡くをみなへしかな

元亨元年端五御會東宮

梅遠薫

いつくより風は吹らんこの里にありともしらぬ梅か香そする

雲間鴈

ほの〳〵と明行そらのよこ雲にたえ〳〵のこる鴈の一つら

岡雪

みつくきの岡のやかたの道もなししものふり葉も雪埋みつゝ

寄雨戀

はかなくもふらすは人やとはましと雨につらさを慰むるかな

寄竹戀

せきあへすおつる涙のかはたけのうきふしことにぬるゝ袖哉

寄虫戀

夏虫はもえてそ人にしらすなる下にこかるゝ身そたくひなき

旅行夕

とまるへき宿こそいとゝいそかるれ行さきとをき入あひの鐘

元亨元年九月九日春宮御會

籬菊

時そとてけふの籬に咲ぬれはちとせもかねてしら菊の花

待戀

よしいまはまたしと思ふゆふ暮の入あひの鐘そ人たのめなる

元亨元年八月十五夜春宮にて人々歌合し侍ける時

月出山

風はらふまつの木末をもりそめていつるよりすむ山のはの月

川上月

名もしるき秋の最中の月かけをうつしてみかく玉川の水

田家月

をやまたやかりね淋しき賤かいほにまたもるものは秋の月影

寄月戀

いたつらになるゝもつらしまつ人のこぬよかさなる袖の月影

月前旅

たひ衣よふかき月にたちいてゝ行すゑいそくむさしのゝ原

盧橘

いつか我袖にうつさん橘のかほる御はしの花のした風

暁鵜川

あけぬるか有明の月のかつら川浪まにしらむかゝり火のかけ

六月祓

みそき川けふ夏はつる夕すゝみなみのうへより秋かよふらし

祝

くもりなき昔のこゝろは久堅の月日とゝもに代をてらすなり

元亨四年五月十二日内裏三首歌

郭公

ほとゝきす誰にかたらふ聲なれはうはの空にも啼てゆくらん

五月雨

かきくらしふらぬ程たにくもとちて猶晴かたき五月雨の空

曉戀

人しれぬ我あらましの行末も（なくさめイ）思よはれと鳥やなくらん

同日當座歌

暮冬

行春をおしともいはぬやまふきの色にいてゝもなくかはつ哉

忘戀

わすれしといひし契もかはるやと今一たひやおとろかさまし

夜螢

螢にやかへて見るへきまなふれと猶かけくらき窓のともし火

元亨四年五月十九日内裡當座

卯花

玉河のきしの卯花ちるころは風をもまたてまさる白波

夕郭公

夕立のくも吹はらふ風の音にきこえてなのる山ほとゝきす

逢不逢戀

つれなきに歸るはいまの現にて見しよは夢になるそはかなき

正中二年三月九日内裏當座

初花

さきそむる御階の花のこすゑより昔のめくみや色にいつらん

待郭公

郭公またきかぬまはうたゝねの夢の内にも猶またれけり

庭雪

ほかよりはさそふかからしこゝのへの庭に重て積るしら雪

契戀

あたにのみ思ひ聞にし言の葉はいつよりとさへ定めかねつゝ

正中二年七月廿七日内裏當座百首

岸柳

吉野川きしの柳のいとそめてなみにあやをる春雨そふる

落花

ちりぬれはこのもかのもに見る花を梢にのみとしたひける哉

郭公稀

立歸りまたそまたるゝ郭公をのかさつきのゝちのしのひね

夕立

こゝはまたくもりはてねと夕立のふるかたしるき雲の一むら

同紅葉

つれもなき岡への松のこのまにもさすか紅葉の色そみえける

寄露戀

あたにをく涙の露をたまのをのこゝろなかきはおもひ成けり

寄虫戀

誰をしかしたひてのへの松虫の我なみたとふねをつくすらん

寄枕戀

舟よする袖のみなとのかち枕うきねのとこは夢たにもみす

窓竹

うつしうへてけに我友といまそしる心むなしきまとのくれ竹

神祇

くもりなき神の鏡にうつしても背にかへる御代はみゆらむ

正中二年八月十七日内裏當座歌合

〔此間落丁歟〕

——瀬々の埋木くちははつとも

旅夢

行すゑはみえて夢ちのいかなれは故郷にのみたちかへるらん

正中二年十二月十六日内裡三首歌

冬月

つかふとていくとせ袖にやとすらん霜ふかきよの雲の上の月

禁庭雪

今宵よりちよを篭てやつもるらんみかきの竹にふれる白雪

忍戀

心より外にもらさぬおもひをはしのふとたにも誰かしるへき

同日續歌

五月雨

はれすなを雲のいくへをへたつらん月にはらとき五月雨の比

浦松

君か代はなをも千年をまつか枝のみとりをうつすしかの浦波

正中三年正月十三日内裏御會

松契春

君かへん千とせの春をまつかえにけふより契る末そはるけき

松延齢友

庭能満津以久十廻加蓉那佐加舞千登勢遠美井千起里賀佐舗亭

内裏御會

浦春月

春のよはみしかき蘆のふしもあへす月になにはの裏をそみる

花のさかり久

九重のみかきのうちに咲はなはちるとしらて日数をそふる

七夕別

たちかへるあまの川なみいかはかり二のほしの袖ぬらすらむ

草花露

咲花の色をうつしてむさしのゝ露もおくさにむすひかへけり

寄河戀

いかにせむ人になき名をたつた川しらぬ逢瀨に袖はぬれつゝ

寄枕戀

せきかねて世にもらん名はいかゝせん我た枕に落るたきつせ

嘉曆二年七月七日內裏當座百首探中に

行路柳

たかせ舟いそくつなてのなひ風になひくもしるききしの靑柳

待郭公

今こゝになかてはすきしほとゝきすまつちのやまの夕暮の空

嘉曆四年七夕內裏當座

七夕霧

たちこむる天の河霧深くともけふほしあひのわたせまとふな

七夕松

とのねにたくへてまたやたむけましたなはたまつる庭の松風

七夕恨戀

限なき身こそつらけれ年にまつ星合のけふも猶よそにして

正和四年八月十八日一宮御會

朝初鴈

吹わたすあさけの風を便りにてほのかにつたふ初鴈の聲

野外月

さはるへき木陰たになし武藏野のおほたから一秋の夜の月

不逢戀

あふとにかふる習のよにしあらは絕ぬうき身こ惜まれなまし

文保二年八月十一日春宮當座御會

雪中鶯

いかにして雪ふる里に鶯の春をたとらす今きなくらん

籬菊久

君そ見ん籬のきくのしろたへにちとせの秋の霜を重て

契戀

今宵にてつらき心をしりぬれはあすの契りもいかゝ賴まん

月前初戀

三日月のさやかにも見ぬ俤にあやなく我そ迷ひそめぬる

寄月增戀

見るまゝになくさみはせていとゝ猶ぬれそふ袖にやとる月影

寄月不會戀

あるとみてとるにとられぬ月影や我物おもふたくひなるらん

寄月待戀

あくかるゝ心ひとつをしるへにて月にそ人のやとをとひける

寄月別戀

きぬ〳〵の袖にやとれる秋の月又めくりあふよはそ待るゝ

寄月被厭戀

いまこへけに世に有明のかひなくて逢夜もしらぬ月もうらめし

寄月悔戀

かゝるへき契とかねてしらませはなかめはそめし山のはの月

寄月片思

有明の月をしるへにしのふともせめては人にしられましかは

月下歌仙

夜の月になにはの風を朝（本ノ）しく袖をつらぬる雲のうへ人

月下伶倫

くまもなき月のよすからいと竹の聲を友にてまとひをそする

月下樵夫

くれぬとてかへるさいそく山人のつま木のみちに月出にけり

月下義

たらちねのをしふるみちに行すゑも我まとはすな庭の月影

元亨四年正月廿五日内裏御會始

松爲久友

君か代はうこきなかれと巖のうへの松に契りて千年をそへん

元亨四年正月廿七日内裏當座歌合

折梅

我ならて花のかゝみの水の面にうつろふ影はなみもおりけり

川螢

大井河うふねのかゝりそれならてもえて螢のかけそなかるゝ

冬月

名にたかき秋もをよはししら雪のひかりをそふる山のはの月

忍戀

くれなゐに花咲のへのいはつゝじいはゝや深き色にいてゝも

旅

けふいくかひかすかされて旅衣たちわかれにし宿そ戀しき

廿八日御始歌合當座皆同題

梅

いつくよりさそひかきつる梅の花らへぬ軒はにゝほふ春風

春月

霞ますはいかてか春とわきてみむ月にはかはる影もあらしを

戀

あふまてをかきりと思ふ命さへたへすやならんつらき餘に

元亨四年二月五日内裡右點八詠大點也 左點八大臣殿御計也

朝霞

あさなきのうらはの松のすゑとをく霞につゝくあまの橋立

聞鶯

けふいくか春きてのちはあさとにそらたのめせぬ鶯の聲

若菜

霜かれの野邊のおき原やきすてしあとよりもゆる若菜をそ摘

殘雪

たちかへり嵐や春をへたつらんかきねに冬をのこすしら雪

梅風

あかなくのにほひを袖にふきとめてよそにすきぬる梅の下風

歸鴈

しはし猶こゝにやすらへ歸る鴈こしちの雪はまたきえもせし

春月

おほろなるならひとおもふ心よりかすみやそむる春の月かけ（よの月イ）

待花

雨露のめくみあまねき春たにもいかなる花のつれなかるらん

不逢戀

あふまてとなをもつれなく存命へてうきをしらぬは命成けり

恨戀

から衣袖ふきかへす秋風にこほるゝつゆをなみたとは見よ

元亨四年二月八日内裏當座

春月

くれはとりあやなくかすむ山のはをいつるもしるき月の影哉

新樹

山櫻ちりにし花はあともなしたゝあを葉のみ枝にしけりて

初鴈

玉つさをたれにかつゝむうすゝみにきりたつ空の初鴈の聲

關雪　々

かくはかり道ある御代にあふ坂の關をは雪もらつまさらなん

忍戀

おほかたの秋の露とやまかへましをさふる袖に涙あまらは（あまるなみたイ）

元亨四年五月十日内裏内々

待郭公

さすかはや鳴らんものを郭公なと我ためにさのみつれなき

元亨二年正月廿日春宮御會

初春鶯

鶯のちとせをかけてなく聲に春しりそむるはるの宮ひと

雪中梅

猶さゆる風にもしるくにほひけり雪にこもれる庭のむめかえ

寄松祝

うつしうふるみきりの松は萬代も君を久しきためしとそみむ

元亨二年二月廿七日春宮御詩歌合

行幸即ヽ

春の明ほの

をしなへてかすみこめたる山のはもあくるはしるき横雲の空

花

移春踰杪迎春色。　却月親梅映月粧。

不會戀

しゐてのみ思ふもかなしあふまてと惜む命もあすしらぬよに

元亨二年七月七日春宮御會

初秋風

おきの葉をわきてきかねと大かたの風の響そ秋にとなる（かはれるイ）

七夕衣

になはたのとしに一よのこひ衣うらみぬつまや今かさぬらん

寄露戀

秋にあふ草葉のうへものおもふ袂の露よをきはまさらし

同當座歌

九月盡

けふのひのくれなは秋もとまらしと哀をつくるいりあひの鐘

待戀

まつよひをかさねし人の僞に思ひもこりぬみさへつれなき

元亨三年五月十八日春宮當座

靄梅

のきちかき我袖ふるゝむめか香をあやなくさそふよはの春風

五月雨久

朽ぬへしよとのゝま菰かりにたにはれてひをふる五月雨の比

初秋露

さきやらて花にはまたき秋の色をむすひてみする萩の下露

浮夜月（暮秋）

時雨つるよひのむら雲あともなく月しつかなる秋の空かな

初雪

ふりそむるその名はかりを白雪の積らぬさきに人やとはまし

寄衣戀

ほしあへすいくよ重ぬるから衣つれなき床にくちやはてなん

寄鏡戀

見るまゝにおつるなみたはます鏡もしやと思ふおも影はたし

元亨四年正月廿四日春宮御會

竹契齡

吳竹は君かよはひに契りてそやほよろつよの春もさかへん

正中二年七月廿五日東宮

曉月

待いつる有明の月のつきかけにやこゑの鳥もはつねなくらし

逢戀

あふよさへ猶そかなしきこれや我むすふ契りの限とおもへは

觀

空にすむ月をくもらぬためしにて君か御影そ猶もそふへき

元亨元年九月廿五日龜山殿仙洞當座御會

暮山鹿

山の名のあらしや誘ふくれはつるをのへに高きさをしかの聲

河曉月

大井河波々のゐせきのかひもなしうきてよとまぬ有明の月

雨後紅葉

そめまさる程こそみゆれはゝそ原けさの時雨のあとの一しほ

忍久戀

かゝらすはいかてけふまてなからへん忍ふそ戀の命なりけり

見絶戀

つらしともうしともいひし古へはなをも情のある世成けり

元亨三年九月十三夜仙洞三首應製和歌

月前鹿

ふけぬるか空行月は靜におりおりしかのこゑそきこゆる

月前擣衣

わきて猶ことひねしとや長月の名におふ月に衣うつらん

月前戀

せきかへす涙もよそにあらはればやとさし袖のありあけの月

同日當座歌

湖霞

めにかゝる山のはもなしたちわたる霞につゝくにほのうら波

見月

かきりなく秋をかさねて君そみむはこやの山のよはの月かけ

夢戀

時のまの夢のかよひちさめぬればもとのつらさに立歸りつゝ

元亨三年九月十七日依召進仙洞十三夜歌會遲進歌合作也

月前鹿

すむ月のかけをはよそに宮城野のこのしたかくれ鹿そ鳴なる（歌會遲進入）

月前擣衣

さえまさるきぬたの音を友としてねぬよの床に月をみるかな

月前戀

戀わふる人のなかめもかよふやとうはの空なる月もなつかし

元亨四年四月四日龜山殿當座

餘花

おそきなき昔かたみくさに咲花や春よりのちもなをにほふらん

待郭公

我のみとよしやうらみし郭公きえぬとかたる人もたけれは

同日續當座歌

落花

昔如代也風流佐末留留春奈良波花能千留左邊留登十加利介利〔衍己〕

正慶元年依人道殿御命之

九月盡日同詠暮秋十首和歌

露

くれて行秋のゝはらをきてみればおはなか袖に露そ亂るゝ

霧

夕きりにはれぬなかめの日數へて秋の名殘はけふそつきぬる

鴫

とゝめえぬ秋の別れはけふとてや雲井の鴈もなきてゆくらん

紅葉

秋の日はけふにかきりてくれぬれと紅葉そあすは形見成へき

曉月

有明のかすかにのこる面影もいまはまたこん秋そ見るへき

菊

庭のをもに霜まつきくの色までもうつろひはてん秋そ悲しき

鹿

妻こひに秋の名殘をとりそへてひとかたならす鹿や啼らん

戀

戀侘てしなんいのちよ同しくは秋のわかれにあはてきえはや

夢

夢にてもとゝまる秋とみるへくはねなましものを心つくさて

述懷

なにとをこれより外に思せ〔ま歟〕んうたてくれぬる秋のわかれち

正和三年十月十一日中御門宰相冬定勸進女房懷帋之由にて遣之

朝初雪

よもすからさえつる風やさそひけんあさけの空に初雪そふる

庭落葉

吹拂ふ嵐に雲は晴ぬれと庭は木の葉そ猶しくれける

依忍絶戀

忍ひてもさすか通ひしなかゝはのたゆるはあさき心なるらん

正和四年十二月十八日前大納言短册

歲暮寒芦

雪にふし霜にしほれてみしま江のあしの末迄としそくれぬる

歲暮水鳥

水鳥のうきみなからの同し江に又としなみのこえんとすらん

歲暮初戀

思そむる心のすゑのかひもなくいたつらにてや年のくれなん

歲暮逢不會戀

年をさへへたてはいとゝうつゝとも思あはせし一よ見しゆめ

歲暮夕

けふにのみかきれる年の夕へそとつきおとろかす入あひの鐘

歲暮懷舊

こよひをものちは昔としのはなんくれ行年をまた重なは

除夜祝

限なくをくりむかへん思ふにはくれぬる年のよはゝ惜まし

三十首歌合當座

山家秋陰〔深歟〕

秋ふかくなりにけらしなやま里の庭は紅葉のにしきをそしく

庭菊秋暮

くれて行秋のひかすはしら菊のうつろふ庭の色にみえけり

逐日增戀

こひしさの思ひの畑日にそへてたちまされとも人はなひかす

文保二年正月廿四日家會和歌幷小序

霞

いとはやも春しりかほにみゆる哉かすみ染たるあけほのゝ山

梅

春くれは花のかゝみの池水にかけをそうつすきしの梅か枝

竹

色かへてひさにみるへき庭の竹千代ともさゝし行すゑのはる

文保二年九月十三夜詩歌合

山人見月

つまきとるしつもくれぬとかへる山月の光そともとなりける

漁客翫月

今宵こそ釣する蜑も伊勢の海はまへの月にたまひろふらめ

寡婦愁月

秋のよは懷やまさる月かけをひとりかたしく袖にやとして

文保三年正月十八日家會和歌付小序

華色春久

行すゑを今日より契春なれは花にそ見ゆるよろつよの色

文保三年四月廿日

雨後新樹

花ならはしほれやせまし夜の雨にけさは色そふ夏木立哉

夕待郭公

けふも又いさよふ月はたかねよりいつれといてぬ郭公かな

羇中夢

さゝまくら苔の莚のよを重ねふるさとにのみかよふゆめかな

有馬旅舘にて當座續歌元亨元年二月五日

羇中霞

さらぬたにとをさかり行ふるさとをへたてはてぬる春霞哉

羇中春曙

たひの空かすみとゝもに立いてゝなかめなれぬる春の明ほの

羇中鴈

日數ふるたひのあはれをなきそへて雲路はるかにすくる鴈金

羇中月

秋の月物かたりせはとひなましみやこにひとや我をしのふと

羇中雪

行すゑのみちをはのこせわけきつる我入山をうつむしら雪

羇中炭竈

すみかまのけふりの末をしるへにてこよひやとかる大原の里

羇中忍戀

我心しのふのうらにまとふなりなみのまくらに夢もむすはて

羇中恨戀
たひころも恨みはてにし人に又たちかへれとや戀しかるらん
羇中風
ふるさとをこふる心はありま山をとつれくるはみねの松風
羇中水
ふるさとは戀しなからもなくさめてすめはすまるゝ谷川の水
羇中鳥
しなか鳥ゐなのふしはらうちすきて有馬の里に旅ねをそする
羇中述懐
あたし世に終のやとりのあらはこそ古里とても忍はれもせめ
〔應脫〕元广元年二月七日
立春
新催青帝祀郊禮。始聴東風解凍聲。
春雨
たゝしはし霞むとみつるけさの空にくもりつゝきて春雨そ降
花
よしの山みねのかすみのたえまよりこほれてにほふ花の白雲
待戀
憂身にはまつはかりこそ命なれよしいつはりと恨みしもせし
別戀
歸るさをいそきし袖の露よりもとまる枕そうくはかりなる

絶戀
こひしともうしとも人をうらみしは猶との葉のある世成けり
川
聖人德顯十清水。漁父功成七載川。
松
嵆康姿舊雪中性。丁固夢呈霜後榮。
懐舊
北寨路間靑黛客。上陽宮裏白頭人。
神祇
かすか山みねのあさひのくもらぬは花に光をそふるふちなみ
元广元年五月二十九日詠三首和歌
夏月
月をみる心もすゝし山の非のあかてあけ行みしか夜の空
盧橘
吹風はたかさとよりか誘ふらんうへぬのきはにかほるたち花
述懐
とにかくに思ふことをもひとすちに心にこめて世をすくすかな
元广元年六月廿三日詠三首和歌
蚊遣火
さとつゝき賤かふすふる蚊遣火のけふりと見れはくるゝ空哉
鵜川

うかひふね川瀬はみえぬ夕やみのなみまにしるき篝火のかけ

旅泊

ふねとめてこよひあかしのうらなみの枕にちかき聲を聞哉

(脱歟)元亨元年七月廿日月次和歌

庭草露滋

くれぬまはちくさの花に移ろへとよはのまかきは露のひと色（をのか色なるよはの白露イ）

暁聞虫怨

おもふとなきにはあらぬ我とこのねさめおりしる虫の聲かな

夕待戀

扨も又いつはりならはいかゝせんまたれしけふの入あひの鐘

元亨元年閏七月七日月次實八日講之幷小序

閏七月七夕

二たひやあふせまつらん天の川としくはゝる今日をむかへて

野徑秋風

たれ人の分行袖を吹すきて野邊のをさゝにさわく秋風

恨不逢戀

よしやたゝなにはの蘆のうきふしにうらみはてぬる中の契は

元亨元年八月十八日詠三首和歌歌合

月前雲

すむ月はゆくともみえぬ秋の空にひとむらいそくよはの浮雲

月前鴈

我身のみ月にはもろき涙かとおもへはかりもなきてゆくなり

寄月戀

あはれ我月みん程はこひしさのわすれてはるゝ涙ともかな

元亨元年八月廿四日歌合十五番

夕待月

有明のころとおもへと待なれし夕への空の月のおもかけ

恨戀

つらしともうしともいひしとの葉のなくさむ方もなくそ成行

鶏

我宿にまつなきそむる鳥のねに此さとあけていつるたひ人

山鳥

世をうしとゆふ山鳥のをのれのみみの數ならぬ歎をそする

當座うたあはせ十五番

草華

華とにむすひもらさぬ夕露にひかりさへそふをみなへし哉

夕月

いてゝしも心そつくるゆふやまの松にやすらふ秋の月かけ

絶戀

我のみはたえすしのへとあふとのあはれ昔のゆめとなるらん

窓竹

たえす吹そともの竹の秋風を我まとちかくうつしてそきく

元亨元年十月詠三首和歌

田家時雨

秋もいぬうへしかとたもかりはてゝいほもる物は時雨成けり

閑庭殘菊

獨みるまかきの霜のしたの菊うつろひはつる色そ淋しき

絶後忍戀

あふとのむかしかたりになるにしも忍心はなをそひ行

元亨二年六月十六日

短夜月

さらぬたにみる程なきに夏のよの月をはよけよ空のうき雲

螢秋近

螢飛すゝしきやとはあしかきのへたてはかりに秋や成ぬる

夢遇戀

我身のみなくさむ夢の時のまの心のなかを人はしらしな

詠三首和歌

川上月

かけきよくうつれる月のかつら川またき秋なる波のうへ哉

草上螢

夕たちの名殘の露のたまさゝにひかりをそへてとふ螢哉

聞久戀

戀わたる人はなからの橋なれや名をのみきゝて年のへぬらん

八月十五夜同詠三首和歌

山月

我いほのきはの山をさしのほる月そみやこの光なるらん

野月

わけ行は虫のねしけきあたしのに哀をそへてすめる月かけ

浦月

とうらによころの月はなれぬとも秋のも中はあかしにて見む

詠三首和歌

月夜鹿

風さそふ野邊のを鹿のねをそへてすみこそまされ秋のよの月

月夜擣衣

さらぬたに月みるよはゝねられぬに猶おとろけとうつ衣かな

月夜紅葉

ほしあへぬ時雨のあとのもみち葉に月の光をやとしてそみる

八月十五夜

里月

數ふれはこよひは秋のもなかにてなのか時なる雲の上の月

池月

かけやとす月やみかきていとゝしくなをなかすらん玉川の里

浪月

千々の秋すむへき庭の池水に行すゑとをくやとる月哉

通夜あやめもしらすみつるかなあさかのぬまにやとる月影

海月

よさの海や浪のよるさへこく舟のとまりは月の入さをそまつ

浦月

はりま潟あかしのおきに舟とめて浦はの月のかきりをそみる

崎月

うつすとも筆もを〔よ歟〕はし月やとるゑ島かさきの夜半の景色は

山月

我いほの軒はをのほるかけよりや都のひとは月をみるらん

社頭月

おほかたの秋のひかりにそへて猶世をてらすらし月よみの宮

月前紅葉

うすくこき色そわかれぬをしなへて月影うつすよはの紅葉は

正和四年六月廿六日内裡當座

夏曙

山のはのしらむ程より庭のおものほたるのかけそうすく成行

きくまゝにすゝしかりけり軒近きまつふく風のあけほのゝ聲

まはらなる閨のひまよりしられけりやゝしらみゆく短夜の程

文保二年正月廿日新院御位時當座

朧月

ならひとは思ひしれとも月影のあまりかすめる春の夜のそら

初戀

いかはかり戀はさかしきみちなれは思入るよりくるしかる覽

文保三年六月内裏代始御會

禁庭松久

きみのみそかそへしるへき百敷のたまのみきりの松の千年は

元亨元年四月廿七日内裏御會

新樹

うすくこく色こそかはれをしなへて同し青葉のこすゑなれ共

郭公

ほとゝきすすきかてになけ九重のはた立花のかほるみはしを

九月

重陽宴

しらきくにと葉の花の色かへて君そ千とせの秋もみるへき

十月

旬

けふのためうちのあしろによる氷魚をうくる袂も白重せり

十一月

五節

少女子か五たひかへす袖の月とよのあかりはけにそくもらぬ

十二月

佛名

となへつる佛の御名やつもるらし宿直まうしも聲ふけにけり

元亨四年二月五日内裡十首

朝霞

あまのはら霞にこめて朝日影みえぬにみゆる春の色かな

聞鶯

こほりゐし谷のふるすはいてぬれとなをとけやらぬ鶯の聲

若菜

しもかれの野邊のおき原やきすてし跡よりもゆる若菜をそ摘

殘雪

なをさゆるあらしや春を忘らんかきねにふゆをのこすしら雪

梅風

あかなくのにほひを袖に吹とめてよそにすきゆく梅のした風

歸鴈

ぬしやたれいかにしのへは春のよのあけぬにかへる雁の玉章

春月

おほろなるならひと思ふ心よりかすむとや見るはるの月影

待花

あめ露のめくみあまねき春も猶いかなる花のつれなかるらむ

不逢戀

あふまてと猶もつれなくなからへてうきをしらぬは命成けり

恨戀

からころも袖ふきかへす秋風にこほるゝ露を涙とは見よ

文保二年正月新院御位時當座御續歌

春月

ならひとも思ひしれとも月かけのあまりかすめる春の空かな

鶯

いかにして雪ふる里に鶯の春をたとらす今きなくらん

螢

山の端のしらむ程より庭の面に螢のかけそうすくなりゆく

暮秋夢

夢にてもとゝまる秋とみるへくはねなまし物を心つくさて

建武元年二月廿七日小倉前大納言送梅華一枝狀之

次

誰かきて哀ともみんこのやとのあるしにたる花のおい木を

かへし

花ゆへにいとふときゝし風をまたみにさへづゝむ春も在けり

花ゆへも行てみるへき身のためも老木のかせをよく風もかな

年をへて花もいろそふ心ちしてきてはおとろくやとの梅かえ

以上中園相國御集古筆了作藏本(公賢公御自筆)ヲ以テ一校了

嘉永三年夏五月　小野忠寶

詠百首和歌

春二十首

立春

君かため結ふつかさの若水にけふや氷のとけはしむらん

霞

春のくるふしのたかねはいつもたつけふりよりこそ霞染けれ

ひれふりしあとさへみえす松浦潟もろこしかけてかすむ春哉

鶯

花咲ぬ老木に春をなをつけていつしかきなくやとのうくひす

若菜

かすみしく野邊のみとりに白妙の袖を重てわかなつむなり

春雪

空にのみあまきるまてはみえなからさてつもらぬや春の淡雪

梅

色かにも心そめしとおもふ身の袖にあやなき梅のした風

夢覺る間のひまもる春風に梅のにほひも床なれにけり

柳

棹姫のはつはなかつらかけそへて春の色なる青柳のいと

春雨

いとゝしくはれぬ詠をすかのねのなかき春日に暮しかねつゝ

歸鴈

かへる鴈雲のいつくにみちありと春はかすめる空をゆくらん

春月

山のははそことはかりの心あてにいつるもかすむ春のよの月

花

そことなき花のところも山たかみ空にしられてにほふ春風

あけわたるとやまの櫻咲にけりよこ雲ふかき空と見るまて

吹風も空にそにほふ山櫻さきてたかねの花のしら雲

さきぬれは影をうつしてよしの河ちらぬよりたつ花のしら浪

ちれは雪ちらねは雲の色見えて花のよそめに春や過なん

欵冬

とふ人のなきやとよりや山ふきの心といはぬいろはみゆらん

藤

つかふとて身にもたのみをかけてみし北の藤浪花もさくらん

暮春

等閑にいかゝしたはん行春のとまるならひはなきよなりとも

夏十五首

更衣

立かふるならひもおなし白妙にわく色もなき花の衣手

時鳥

時鳥忍ふる比と知なから待つれなさやなれにまされる

郭公をのかはつ音を手向てやけふかみなひの杜になくらん
郭公なこりの空をしたふまにまたてそみつるいさよいの月

早苗

雨風もおりたかふなとうへそむるわさ田をいはふ田子か諸聲

盧橘

袖ふれしちかきまもりの五年もあはれむかしと匂ふたちはな

五月雨

みくさおし宿の板井も水たえて庭になかるゝ五月雨の比
はれぬ月空かとみるも五月雨にかさなる雲のたえま成けり

夏月

日くらしのなく山陰の松のとにまたき秋なる月そさし入

夏草

移しうへて秋の花まつ草のうへにむすふも涼しむらさめの露

鵜川

うたてなとこむよをかけて鵜飼舟月のかつらの闇をまつらん

螢

後のよの光に今やあつめましまなふとなれしまとの螢を

夕立

心してかためまもれや夕たちの雲井にたかしなるかみの音

納涼

たちよれは袂すゝしく吹風に秋かとたとる衣手のもり

夏祓

年波のなかはを今宵こゆるわにすか貫きかけて七十かへぬ

秋二十首

早秋

みそきするあさちか末にふきしより風に秋しるきのふけふ哉

七夕

わすれすよ手向の庭の露とをく玉の緒との代々のしらへは

荻

まとろめは荻吹風そおとろかすうき世の夢のつれなかるらん

萩

秋萩の下葉はまたきそめあへてひとりある人も花やみるらん

鴈

秋風にをかへのわさ田かりそなく聲もいなはの色に出つゝ

鹿

いつくにか鹿は啼らん秋風の吹方にのみ聲そきこゆる

秋夕

なかめわひ露よりは猶もろきかな老のなみたは秋の夕暮

秋田

しら鳥のとはたのほなみ吹たてゝもる庵さむき秋の山風

月

浦風の松吹よはゝ雲きえてところからなるすみの江の月

伊勢海やきよきなきさによる浪の玉と砕けてしける月影
村雲のゆきゝへたつる時のまも心つくしの月のかけかな
秋の月詠めすとても〔に歟〕身積るわか老らくの影やしられん
夕つくよなかめし方はかはれともほのかにかよふあり明の影

虫

なへてよの秋の心を身ひとつのうれへになして虫やなくらん

霧

山ふかみへたつる霧そこもり江のはつせの鐘の聲そ暮ぬる

擣衣

うつ音や千里の外にきこゆらしとを山かつの朝のさころも

菊

かきりなき秋とやちきる宮人のかさしにさける庭のしら菊

紅葉

をのつからありとは見えてときは山松の緑にもるゝもみちは
いくめくり時雨てけふも紅のやしほに本ノかくそむる紅葉ゝ

九月盡

長月もかひこそなけれかきりある日数にすくるけふの別れは

冬十五首

時雨

さためなき雲まの空の夕日かけさすかとみれは又しくるなり

落葉

雨とふる嵐にをとをまかへてもつもるは庭の木のは成けり

霜

花に見し色の千草も冬かれのまかきは同し霜の下草

寒草

冬かれの霜の下草はるをまつたのみたになく身はふりにけり

氷

谷川の深きにむかふみちよりそうすき氷のあやうきもしる

冬月

しくれつる雲はあとなくふくるよの嵐にはるゝ月そさむけき

千鳥

老てよに年ふるわかの浦千鳥つけし三たひのあとや重ねん

水鳥

村鳥のむれて立ゐる同しえにいかなるなしのつかはさるらむ

霰

袖かけてふるやあられの玉すたれふきまく風に亂れてそちる

雪

さえくれしきのふの雲の空なからけさふる雪も積るとはなし
かすかのやおとろの道にふる雪の深きは袖のめくみなりけり
徒によにふるものはしら雪のつもりて老となる身成けり

鷹狩

はし鷹のおふさのすゝの音にきくかりはのみ雪跡はふりつゝ

炭竈
降雪もけたぬけふりやをの山にやく炭かまのなには立らん
歳暮
あやなくて又くらしぬと身の上に重なる年のおとろかるらん

戀二十首

寄風戀
習はねはめに見ぬ風の身にしみて人をまつには吹としもなし
寄雲戀
わか中はやへにかさなるしら雲のしらすいつまて心へたてん
寄煙戀
あまのたくもしほの煙たつ空もなく／＼からき身の思ひ哉
寄杜戀
つれもなき人のけしさのもりの露ふかくは何か思ひそめけん
寄關戀
わくらはにわか逢坂のゆきゝをは關もる神もいさめさらなん
寄橋戀
おなし世にふるのかけ橋かけてたに思ふ心をしるみちやなき
寄藻戀
心をは誰によすらんしら浪の庭の玉ものわれになひかぬ
寄篠戀
あはてぬるよ床の泪あはれけにさゝわけし袖はぬれし數かは
寄杉戀
はつせ河又あひみんとたのめてししるしやいつら二もとの杉
寄鳰戀
鳰鳥の下のかよひもしらぬ身にうき世も外のおもひやはある
寄猪戀
とひとはす思ひ乱れてかるもかく床にふすゐのよを重ぬらん
寄蛛戀
さゝかにの風にまかせてひく糸の結ふ契りのあるはあるかは
寄鏡戀
面影のうつすかゝみにとゝまらは戀しき人をさてもみましを
寄枕戀
おもひやる方なき戀をすか枕なかきよすからねのみなかれて
寄莚戀
ひとりねをいくよ重てさむしろにかたしく涙袖くたすらん
寄衣戀
すまのあまのきてたになるゝ程もなくまとをの衣立歸るらむ
寄紐戀
むすひけん契りもしらすわか中のとけぬそつらきよはの下紐
寄弓戀
我にひく契りなりともたのまれしあたちのま弓あたし心は
寄船戀

もかみ川しはし計とたのむたになをいな舟のこかれわひつゝ

寄鐘戀

待にふけ別にあくる鐘のをとをうらみしころの心ともかな

雜十首

曉鷄

つかへてはあしたをまつといそきしに長閑に鳥のねをも聞哉

夜燈

かゝけてもいく程かみんふくるよのかけかすかなる窓の燈火

浦松

にほてるやしかの浦浪よゝかけてさそふりぬらんから崎の松

庭竹

かはたけに又吳竹のちよこめて玉しく庭にこの君そ見ん

山家

新拾遺 あらましの心はゆきてすみなからよそにみやまの雲そ隔つる

田家

吳竹のふしみの小田のかりの庵かりそめならて幾夜もるらん

羇旅

たひ衣かたしく野への草枕むすへは歸るふるさとのゆめ

眺望

はる〳〵となかむる浦の朝なきに雲と波とのはてもしられす

述懷

今は身に殘る思ひもなかりけりこのよの後ののそみはかりそ

祝言

神代よりさためをきてし久方の天つひつきそかきりしられぬ

和歌部六十五

權中納言定賴卿集 異本

右衛門のあまの家の花のおもしろしときゝて人のもとにやりけれはかく侍

櫻さくさかりになへてなりぬとも花なき宿はしらすや有らん

その返し

我やとにおとらぬ花はありやとも今はたつねしなき名立けり

おなしころ殿にまいりたるに庭のさくらのいみしくおもしろきをおりて歌よみ給しに

この宿にとまりぬる哉はな櫻あくかれやすきはるの心の

かくなんありしと中將のもとにいひやりたりしかは

數〳〵にあらぬ我身も花さかり心はかりはゆかぬ日そなき

返し

物おもひのいやまさりなるはな盛いかなる人のこゝろ行らん

つこもりの日殿上の花見に

花もみなまた盛りにて行春はゆくとやいはんすきすとやみん

四月一日中宮御方にて人々歌よむに

あたにちる花の夏まてにほふ哉そらふく風そのとけかるらし

女のかたかく侍りし

九重のうちをは春のすきかてにのこれる花をのとけくそみる

その返し

花の色猶にほひけり春すくと心のかきり何おしみけむ

おなし月のつこもりのおほんものいみにこもりてつれ〳〵なりしかはてうのかたをつくりてなてしこの花にすへて小式部内侍のもとに

こちこてふ事をきかはやとこ夏の匂ひとなるあたりにもゐん

月見れは無しきまさる心地してねにける事そけさはくやしき
春よりふみやる人のもとに九月つこもりに
玉春雨に花さきしより秋かせにもみちちるまて物をこそ思へ
おなしころおほゐにおはしたるに紅葉といふ題を
玉拾水もなく見えこそわたれ大井川きしのもみちは雨とふれとも
そのよ道まゝに人のかとをたゝかするにをともせ
ねは
本マヽ月も見てねにける宿の暁の戸を
九月つこもりの日式部卿の宮にてもみちは秋をま
つといふたいを
新拾ふりつもる紅葉の色をみる時そくれゆく秋はまつしられける
十月ついたちの日ある人のもとに
ちはやふる神無月とかけふよりはおもふ心をいかていのらん
左衛門督九條にすむよし人のいひしかは
二六本マヽすゝむなる近きわたりをかはへの風のをとにきくかな
内佛名の夜人にものいひてつとめて
心あてにおりてけるかなころも手のうつりかしるき白菊の花
人のもとに
かの見ゆるをちの山田のうち返し君かこゝろのさもしるき哉
大殿しらかはにおはしたるに
おる枝のちらはしのはむ色もかもうつりぬはかり匂ふ梅かな

三月殿上にて雨中のはなをおもふといふ題を
玉雨のうちにちりもこそすれ花櫻おりてかさゝん袖はぬるとも
といひしにすこしよろしくなりて
きえぬへき露の命の玉さかにとふことの葉にかゝりぬるかな
玉葉題よみにくしと人に
この國にかをたにしらぬ蓮なれは菊もろこしの種かとそみる
七月七日によめる
たなはたの雲の衣にさゝかにのかくにいとをやおりてきる覧
七夕のわかれて露けき衣手はわかれて後そほしわかぬへき
久かたのあまの川なるわたしもりいく度けふの舟よそひしつ
なゝつありしかとわすれにき
秋きてはつゝむおもひもわすられて音にそたつる荻のうは風
たるみする軒にしけれるあやめ草しのふ心のとけすもある哉
たいよまれねはかへす
別てはふたとせ三とせあはさらん箱根の山の程のはるけさ
題あるへし
秋の、にしはかるおのこ柴からは花のあたりはよきて柴かれ
八月廿日いみしき大かせにまへなるむめの木たふ
れふしたるを見て
春風にちりし花さへおしかりきねさへのこらぬ秋もありけり
ある人子にをくれてなけくに

打返しおもひかへしてなくさめよ世は常なきそよのつれのと
みたけより返たるに人のもとより
(マヽ)きみしゆかねはこの春は誰やまさとに花をみるらん
返し
花さかり山邊をおもふ心をはやへむくらにもさはらしとしれ
(不審)おなし事
ありふれはうき世の中のすみうきに我もゆかはや三吉野の山
となんおほえしといひけれは
なにめてゝ思ひなたちそ吉野山いき返へきこゝちやはせし
三月三日ひめ君のおほんことありしに人の御もと
より
思ひやる人の袖たにかはかねはつきはてぬらん君か涙は
服ぬく日
ふち衣たもとにかゝるなつそきるむへもう月と人はいふらん
ある人のさいつころ清水にありしにはな見る人々
にいひやりたりしかはなれたつきものかなかゝる
ものはならさぬとなんいひける人けなくなんおほ
えしといひたれは
ならさしと思はぬ人もあらましをなと春駒のさはなつきけん
ひめ君〔[illegible]〕の御事にこそありけめ數御たゝうかみにか
いたさへる

たくひなくかなしき物は世中に老てわかるゝ別なりけり
四月十八日あまうへのまついふへき事あるよろつ
をすてゝことめしたりしかはいそきまいりたりし
かはこひめきみのすゝのうせたりしかはこゝにあ
りしなんたてまつりたりしをかくなり給てのち
法師なとにとらせんなとおもひてもとめしかとな
かりしをけふ見てゝおこせたまふて女御との ゝ御
文にてなんあるこれをみせむとてなんとそのたま
ふやよしなきことにもいそきける哉とおもへと見
れは
女御
しるくしも見えぬ成けりひまもなくおつる涙の玉にまかひて
返し
別にし人をかくても見てしかなほとへてかへる玉もありけり
おなしころ或僧のゆめにいときよけなる僧三人いきあ
ひてよみける一人は
あはれなりつきのこよひは暮かたに成ぬれと
又つきのそう
にしへゆくへき人のなきかな
まつりの日
(新後拾)ちはやふる神のしるしとたのむ哉思ひもかけぬけふの葵を

六月十六日月のいみしうあかけれは夜ふくるまで
あるとてむかし見し人のもとへやる
戀まさる心ちこそすれいそのかみ見しにかはらぬ夏のよの月
返し
おなしくとなかめそしつる今はとて出し有明の月に似たれは
ありし朝露の歌をきゝ給てあまうへ
このもとに立よる人ときくにこそよそなる袖も露けかりけれ
上のおほん
世中のそのはかなさはみゝなれてぬるらん袖を聞そかなしき
又
つねならぬこの比はかり戀しさをおなし心になすよしもかな
かくありしかはこれよりきこゆる
うちはへて戀しき物をときわきてたれか心のたかふなるらん
あまうへの御かへし
このもとを戀しきものと聞からに賴みすくなき身とそ知ぬる
またあれより
露の身のもりおほさはそたのむきもこたかき陰と枝はさす覽
又の日うへの御もとより
あふ事のたえまを見れはよとゝもに何かはこふる驗なけれは
返し
心みしこゝろもしるくたまさかに戀けりとたに絕てこそしれ

ある人のもとより
もしほ草くゆる煙と成にけりよゝにうらみてかひやなからむ
道命阿闍梨あひてかたらはんなといひて中〳〵な
るはいとむつかしさりとさらはいみしくむつまし
くなといひてまた
後拾 たえやせん命そしらぬみな世川よしなかれてもこゝろみよ君
人のあふきにもりつる月といふ事をかけるを見て
秋をしも心つくしといふなるはもの思ふときやすくなかる覽
七月一日に右衞門督すゝみて山ふきのさきたりし
かは
時ならぬ花の匂ひをみつるより春すききたる身をたのむ哉
おなしころ宮にとのゐしたるにはやく思はんとい
ひし人にあひてかくいふ
契をきしとの葉かはるよをみれは秋といふなのうらめしき哉
かへり
色かはる秋をもしらすちきりてし人の心をまつのみとりか
おなしころ人のもとに
秋風もまたしるしなき心地してあつさそまさる人しれぬこひ
返し
ふきそめし日より身にしむ秋風も荻の葉ならぬ人はしらしな
七月二日道命阿闍梨きていてたりしかはえあはて

いへる

彦星に今ひとひたにまさらんと思ひしかひもなくてやみにき

かへし

ひこ星にまさる事こそ難からめひとしくたにも待そかねつる

人のかたゝかへんところにてあはむといひしかさ
あらすなりにしかは又の日いひやる

逢事のかたの便りとたのめしにたかはん物とかねてしりにき

しりきれをはきて人のくるまにのりて忘れたりし
ををこすとて

しるく社跡さへみゆれたつのゐる蘆のうらはに波もよせぬに

返し

ふむあとも見せしとそ思ふよとゝもに鳴のみ渡るたつの村鳥

大殿かつらにおはしたるに題ふたついたして歌よ
み給しに山さとに田かるといふたい

山里にほとへぬる哉秋の田のかりそめとこそおもひつれとも

もみちをもてあそふ

秋はまた深からねともきりまよりむら／＼みゆる嶺の紅葉ゝ

九月十日のほとに人のもとよりかくいへる

秋ふかくなり行まゝに時雨のみふるさと人はなかめをそする

返し

いとはるゝ袂はつねにしくるれと秋てふ事はしらすそ有ける

おなし日ある人のもとにはしめてやる

秋風の身にしみまさる心地して荻の上葉をほのめかす哉

おもはんといひし人のもとより

思はんといひしはかりのことのはをうちたのむ哉露もしられす

その人のつらけれは

ひとはさはかくこそ人を思ひけれ身のうきからに習ひぬる哉

ある人に式部卿の宮あひ給ときゝていひやる

かよひすむ人にとはゝや玉敷の宮とわらやといつれねよしと

返し

とはす共ふす人あらは聞えなん宮もわらやもかくれなけれは

おなし事あるひとに

時雨ふる嶺のもみちにならひてや人のことのは色かはるらむ

九月つこもりの日権大納言の御もとよりある

のこりなく秋はとまらす山風に木末あらはに紅葉ちりつゝ

返し

紅葉ゝのかきりの色を初時雨ふるさと人のみぬそかひなき

或人のものいひてあしたに

としをへてしのひかねたる花薄ほにてゝ後そいとゝ露けき

後のよいきたるにかとをあけていひいてたる

さ夜なかに猶たちかへれ天の戸は明てくやしき物としりにき

かへし

ほとなしとなけきし物を猶ねてあけかたきにも袖はぬれけり

又あしたに

人はいさわれは涙のしほらるゝ袖の露にはつゆもあたらす

おなし人のいまつほねいてきてみつからはといへは

たくみ鳥すつくるほとのをそけれは猶獨ねの音をのみそなく

八月つこもりかた左大將しら川におはしたるに心秋の野にありといふ題

花の色をきて見る時はまれなれと心は秋の野守成けり

おなしころ人のもとに

續後
秋の野にあさたつ鹿のねにたてゝなきぬ計も戀らるゝ哉

人と物いひあかしてまたのあしたに

なにたかき秋の長夜も明にしをとちてやみぬる天のとそうき

十一月うたよむに

うちはへてのこれるきくは初霜の秋のかたみにをける成けり

月ころ式部卿宮にて月のまへのもみちといふ題を

紅葉ゝをてらす月よは常よりもかたふくかけのおしまるゝ哉

寛仁二年二月雪のいみしくふるに大將白川におはして馬にのりて山つらをゝふにたるひのつたにかゝりてはたのやうなるをとりて藤中將にいふ

しら糸のはたのかゝると見えつるはきしの氷のむすふ成けり

おなしころおとこかすかへいきたる人に

吉野山雪ふるほとの旅もなくおほつかなくやなかめやるらん

春の花秋のもみちも忘られぬからなてしこのにほふさかりは

ものいふ女のもとに或人のなのりて

あやしくも我なのりそをいつの海のあまたの人にかゝれける哉

一條の院御時中宮御方に人々まいりたりしに

野へことに行て見れとも花の色の秋のみやのはとにもある哉

殿上人のはな見る

此ころはさかりなりける櫻花けふしもいかてたつねきつらん

四條の宮つり殿にすみしころむかひなる女房に

夏ふかみ水たにみえぬうき草のまなくも物をおもふころかな

たいあれともよみかたし

おもふ事ありとあれともいかなれは獨とのみは人のいふらん

梅の花おりて返らんやまさとのきたりけりとも人のいふへく

うくひすもなかてやちらん梅の花心してふけ春の初かせ

山櫻ちるに心もくらされてみやこへゆかむかたもしられす

鶯はけさもなくなり春すくと心のかきりなにおしみけむ

夏草はみちもなきまて生にけり花さかりにそ人もとひける

本マヽ、[illegible]
かくたにいはん人のなけれは

なつのよのくもりかちなる月かけは

四月はかりかはらの院にて

卯花をおもてそ見つる玉ほこのゆきすりともや人のみるとて〔リ歌〕
いつかとそあやまたれける宿ことに軒の菖蒲のかゝるかきりは
軒ちかくうへてしみれはたち花のかはかり匂ふ花なかりけり
よとともに秋まてにほふ常夏のひとよもみねは戀しかるらん
郭公まれにきゝてしよひよりは待人さへそねかたかりける
足引の山田つくると閑なへにひきうふるたそいとなかりける
ひかりこそともしけれとも吹かせにきえぬ螢を今はたのまむ
さ月山鹿をたつぬとする程にをのかたちともかくれさりけり
〔玉〕つれ〳〵と詠むる比の戀しさはなくさめかたき物にさりける

ある人にものいひたるつとめて

君みねは程なくあくる夏のよも一夜もちよにをとらさりけり

女のいまなとなをさりけにいひしかいまはさらに
といひしかは

さりとてもかひなけれとも頼みこしとの葉さへもかはり行哉

をんなのもとに

神無月しくるゝ空もかたくもりかたおもひなる戀もする哉

うちにて九日に

君か代に枝もうこかぬしら菊につもらんふちの露そゆかしき
おもひきやこちくのこゑもはるかにて風の便にきかん物とは
青柳のいとのあはにもみゆる哉たゝ白浪のよるにまかせて
もろともに見るへき物を青柳の枝もたはゝにをけるしら露
秋はきの枝にかゝれるしら露のきえ返りても戀らるゝかな

題おほかりき

鶴雛のすたつはしめにをくれゐて雲井はるかに思ひこそやれ

返事せさりし女に

吹かへす風しなけれはうき雲のはるゝ空なき心地こそすれ
尋つるかひもある哉やまさくら柳のいとのはるを待ける
あきのよの虫も物をやおもふらんおなし心になきあかしつゝ

本ノマヽ、女のかへり事せぬに

八月なかの十日はかりにさか野にいきて月のいと
あかゝりしにその夜やかて野にとまりて

露しけみ明ゆく野への花薄ほのかにそ聞すゝ虫のこゑ

まくらのうへといふ所によるとまりて

いつこかは旅のやとりにあらねともいとゝ露けき草枕かな
山寺のあか月かたの鐘のをとをわかおもふ事なるときかはや

ひさしくあはぬ女に

おほつかないつそあひみて歎つゝかそふはかりに成にける哉
打とけてぬる夜はいつもなけれ共いとゝいりうき秋のよの月

權大納言おほ井におはしたるに

けふまてはちらてまちつる紅葉ゝを嵐の山のうしろめたさよ
大井川みきはのあしのちる時は波の花にもたちまさりけり
匂ひうすき花には露やふかゝらぬうつる計にほとの見えぬは

花の色は白きしもこそたのまるれうつりかたしと聞に付ても
おもふ事なき身ともかな冬のよの月の光をさやかにもみむ
白妙のかきねの梅をあちきなくともまつ雪とおもひける哉
やをよろつそこらの神をふりかけて祈る驗のならさらめやは
いなり山つもれる雪に跡たえてきたつ人のなかりける哉
祈ることみつの社のしるしにはむら／＼たてる杉をこそみれ
かすむへき春をそ待し下にのみむすふ氷もかけやみゆると

女のもとに

とふきのくちにまかせて祈つるとのしるしはけふこそはみめ

返事なけれは又やる

春きても跡こそみえね吉野山すくるひかすのゆきつもりつゝ

くれにとたのめたる女のもとに

玉 ほともなくあくるてころも有物をけふは年ふる心ちこそすれ
年ふれとかはらぬ物は鶯の春しりそむるこゑにそ有ける
うくひすの初音きかすは白雪の春のくるれといかてしらまし

そちの宮にてうくひすのなくをいさ歌よまむとの
たまうて

春霞わけてやきつる鶯のまた打とけぬ今朝の初こゑ
玉 はな櫻木末はかりをしるへにて山里ことに尋つるかな
同 色／＼のにしきとみつる花さくらはるの霞そたちかさねらん
くもりなくさやけきよりは中／＼に霞める空の月をこそ思へ

このもとになかめくらしつ櫻花ちりての後もはてゆかしまに
うへしより見れともあかす岸ちかみみな底にほふ山吹の花

ある人のもとに

わひつゝも春の花にはなくさみき夏のなかめをいかゝ忍はん
ちる花のかはかりをたにから衣うつりてみすの夏はたゝなん
心して風もふかなん山吹のこほれてにほふ花のあたりは
軒ちかくこのはやちかくまさるらんよことにおとる夏の月影
ふか綠雨にもえつゝみそきのゝ木のした草はしけりあひけり

三月つもりかた人のもとにいきたるにいま四月み
あれの日とたのめしに

月のうちに雄も人を見てしかなあふひまつまも遠からすとも

う月のついたちころ人のもとに

卯花の身を恨つゝほとゝきすしのひねをやはなきわたるらむ

うちにさふらふにほとゝきすのうたよみてたてま
つれとありしかは

聞そめて今はねられしほとゝきすなか／＼なりや夜はの一聲
さ月やみおほつかなきに卯花のむかし戀しき匂ひすらしも
思ふ人ある身そせはつれ／＼と詠めくらすをとひもしてまし
年ことにきくとはすれと郭公とこめつらなるよはの一こゑ

五日よゆきて人にものいひしに六日にいりにしか
はそりし

あやめ草引しそめすはかくれぬの底しらぬねも流れさらまし
　五月五日人のもとに
菖蒲草いつかとまちしかひありていかなる人のつまとみる覧
　中宮御方に五月八日よ人々ものいひしになかにこ
　れをと思人の入にしかはつとめて
心にもあらぬ空をそなかめつるいりにし月の影こひしさに
もゆるみをさます扇の風もかなたゝ夏の日にまかせてはみし
夏深みあつさのほともおもほえす人しれぬ身の戀にもえつゝ
　祇園御會見るによろしき女くるまのある所にたて
　るにものなといひしほとにあふきをおとしたりし
　かはとらせて書つけてやりし
誰とたにしらぬおもひのくるしきに扇の風のたのもしき哉
　ひさしくあはぬ人を夢にみてやる
獨のみ戀わたる身は秋のよのゆめはかりをやあふとたのまん
　ふみやりしにところたかへといへる人に
あたならぬ心をしらてしもつけの花には人をよそへさらなむ
淺からすおもひそめてしから衣身にちかゝらぬ事をこそ思へ
　人のもとにいきたりしにあはさりしかはやる
身は返り心はそこにとゝめてき思ふおもひはかたらひやする
露しけみつれなさまさる女郎花しめのうちにも入ておらはや
　九月つこもりかた人もろともにねたるにかたたかせ
　のすきてさむかりしかは
秋はてゝ冬こそちかく成ぬらし身のかたさむにおもほゆる哉
　といひたりしにふとひきゝせたりしこそをかしか
　りしか
　人のもとにひさしく文やらてやるとて
ほとふとも人のつらさはかはらしを積れる戀のたゆまるゝ哉
　ひとのもとにつらき事なといひやりたりしかはか
　くいへり
池水のいひたえねかしうきぬなはくれはそつらき筋もみゆ覧
　とありしかは
つゝめ共せきたにあへす池水のいひたゆへくもおもほえぬ哉
　人の返事をこせてちりもこそすれといひたるに
諸共にもえのみそする水莖のあとのこひにはかひなかりけり
　神無月のついたちころ白川にて題ふたつよむに
くれにける空もしられす山里にこゝろとまらぬとしなけれは
いへはうしいはねはくるしつれもなき人の心をいかに定めむ
ふち衣うすゝみ染もわすられぬ紅葉の錦身にしきたれは
　また人のもとに
うしとたにいへはつれなき人にしもなとて心を深くそめけん
　もみちやるとて
神無月もみちの色もかひそなきうきとのはのしけさまされは

よるものいひあかしてあくるまゝにいひやる

終夜いねぬあさかほ今朝みれはあかぬ別におもやせにけり

ほのみえし影そ戀しき山里になくさむやとてきつるかひなく

十一月つこもりのよやま里にて杉を

一村のすきを尋てきつれともむかしの人のあとたにもなし

さはかしき事ありし人のもとに

はやくふく草葉にかゝる露の身のさても消なて何とまるらむ

しら雪に色はまかへとむめの花みなみの枝のかこそしるけれ

いひたえにし人のもとに

雪ふかみふしの高根に跡たえてしられぬ戀にもえわたるかな

返事もなけれは又の日

恨てもかひこそなけれもしほ草かきつむ袖のぬれまさりつゝ

ゆきいみしくふりたる日

ふみふれん〔玉葉〕跡たにおしき雪なれはとふ人なきも嬉しかりけり

おなし日宮より

とゝこほるほとをそなけく雪積りとくるたよりの跡を待まに

むけにひくれてとりもあへすせむれはたゝかく

つれ〳〵と雪ふる程は積れともかつきえかへる物をこそ思へ

いひたえにし人のもとに

新續 つれなさにいひ絶にしを池水のつゝみあへぬは涙なりけり

返事なけれは又のひ

あまひこかさすや門への雪きえてありし跡たに見えすも有哉

又の日

さえまさる心地こそすれかたしきの袂の氷うちとけぬまは

或人けふ文をこせよひともしにてもといひしかは

なにもしをといへはおもしをといひしかはおをと

りわきて

おもふ人おもはすとのみ思ふ人おもふはおもふかひなかり鳧

雪のいみしくふりたる日人のもとよりかくあり

降つもる庭のおもにもゆき返りとしそあとなき物には有ける

返し

鶯のしのふひかすもゆきふれはまた春とたにしらすそ有ける

三月十日のほとに權大納言源宰相なと雲林院にお
はしたりときゝてをくれていきたるにいととくか
へり給ふと人のいひしかはおほきにさきたる枝を
おりてこれをしるしに御覽せよとて宰相のもとに
やりし

しはしたにまたぬをなにか恨むへき花にとまらぬ人の心を

返し

ちりぬへき花のにほひをかたりにと偏に君を尋かねつる

十八日なかたにへいくとて見やるにまたちらぬ花
ともの見ゆれは

たつねつるかひもある哉よそなからさかりにみゆる山里の花

四月ついたちころに四條の宮よりめしありしかは
まいりたれは御前の藤のいとおもしろくさきたる
を見はやせとてなむとおほせらるなにことをうち
いてんにもはしたなきこゝちせしかはまかてにし
すなはちかくあり

おれとこそ花のけしきをみせつるをたちもとらせて歸る藤浪

これよりかくきこえさせつるほとになむとて

藤のはな君か衣によそふれはいとゝ露けき心地のみして

なむまかりいてぬるときこえさすおほんにてあり

十日の程にすさひうたいつゝをよめる

みかさ山かすみし春の戀しさにいとゝさひしきやへ葎かな

ふか綠もりのこかけをけさみれは花さきしよとみえすも有哉

夏たちて駒のたちとの水を淺み淀のまこもはつのくみにけり

春過て岸の山吹ちりにけりみな底なりし影たにもなし

いけ水にかゝれる藤をむらさきのくもの波とや人のみつらん

人のかみこへるにかきつく

咲匂ふうつきのうちにちはやふる神なき宿はあらしとそ思ふ

十日のほと人のもとにいひやる

本ノマヽ但達欧歟
まちかねて尋そきつる郭公

といひたりしにやゝひさしく返事のなかりしかは

又

忍ひにもかたらふやとて郭公たつぬるかひのなくてやみぬる

返おほかり

山里にまつ人あらは卯花の月よゝしともつくへき物を

松風やこのしたやみにかよふらん夏の衣のけふはたちうき

みそきの日左衛門督ひとつくるまにて物見給しに
人のもとよりいみしくおもふことなとのたまへる
なるへし

岩波のくたくはかりに思ふやとけふのみそきの神にとはゝや

その返しせよとありけれは

いは浪のふかきおもひはみそきする神の心もくまんものかは

又の日ほとゝきすたつねにいくをきゝてしのひて
ものいひし人

こゝにてもきけかしをなし忍ひねを山時鳥こゑもかはらし

ものをとあり

郭公うちとけぬねはくるしくてよもの山へのものをこそ思へ

またしらぬ人に物いはんといひたりしに人ありけ
るおりにてえともかくもいはてのちに

ほとゝきすその一聲をなに事ときかぬはいける心地やはする

返し

時鳥きく人からにありけれは忍ひのこゑを待そかねてし

おなし日雲林院にて紅葉といふ題を
くるゝ秋をおしみにきつる山里にもみちの色はかきりなき哉
長和五年四月廿七日雨のいとのとかにふるに大納
言の御もとに文やるとて
やへ葎しけれる宿につれ〴〵ととふ人もなきなかめをそする
かへし
とふ人もなきつれ〴〵の詠めにはわかやくとのみ思ひける哉
二月廿七日右衛門督のさむの七夜
ときはなる二葉の松の君代をいのるしるしのふかくも有かな
三月四日中宮のさくら
おる袖のかをなつかしみ花櫻にほひはいつの春かわすれむ
五日殿上のはなを
吹風ののとけき春はさきてちる花の匂ひもときはなら南
又日雲林院へいてにくるまにをひてやる
見るとてもいくかもあらす花盛ちらん程まていかてかへらし
藤宰相おなし人
あたなりし人やみつらん花ことにところもわかす尋つるかな
とあれは頭中將
けふしまれ散つる花にゆきおひて人やりならぬ物をこそ思へ
權中納言
櫻花いかにおしむそ心見んこゝろもくるしとめぬものから
又の日雪あり
ゆきのこす所なきまてたつぬれとあかぬは花のにほひ成けり
入道殿にたきものましたまへりけるにたてまつり
たまはせりけれは
いつかたの風さそふらん梅の花なとこのもとに匂ひたにせぬ
四月一日しのひたる女房のもとに
今日よりもきそめてしかな夏衣ほとへて人のこゝろ見るへく
返し
うちつけにいそきたちつる夏衣まつしるきかな人の心の
またをこせたる
なつ衣またひとへなる心とはかさねぬおりにみゆる成らん
又そのかへし
かさねての後をしまたは夏衣けにと見るへきほとのはるけさ
天王寺あとにこんといひてみえさりしかは
夜もすからたゝく水鷄の音とにこむとたのめし君かとそとふ
返し
打たゝく水鷄をあやなわれとてや天の岩戸にしめをかくらん
みたけさうしせし時にかのあさりのをこせる
よしの山さかしきみねをたひらかに行かへるへき祈をそする
返し
祈らんとにしかなふ名にしおはゝ吉野の山のあしからめやは

八月つこもりうちのとのゐにさふらふよおにのまにゐたれは兵衛の内侍といふ人ものいはんといふ頭中將の物いはんといひつるをきゝてそれと思ひつるとは□れとてなに事にかととひたれはあらさりけりとおもひて入にしかは御前の薄をおりて書つけてやるその人のわらは名すゝきといふ

新千 さためなくまねきつる哉花薄ほにいてゝむすふ人もこそあれ

返し

同 をしなへて醒かぬ野への花すゝきほにはいつとも誰か結はん

八月つこもりの夜とのゐして皇太后宮女房人とものいふほとにやのしたにせさいのあるに人まてきて水そゝくを見て女房

草枕またゝひたてる花のうへに空にしられぬ露そをきつる

返し

そらしらぬ露のをきける花の上を我袖とのみきゝをはれつゝ

又女房

たもとしもわかれぬものをゝしなへて露の深さは秋のさよ之(ま歟)

また返し

よと共に物思ふ袖はかはかねと秋のさるともしらすそ有ける

又いまひとりある女房

草村の露にはあらぬつゆけさはたれにかけたる袂なるらん

といふほとにしものつほねにおり給へはみな入ぬ

九月ふつかの日人のもとにすゝき

なひかすとことさかしなる花薄風にみたるゝおりそおほかる

かへし

花すゝき吹くる風はそむきつゝしとろもとろにまたそ亂れぬ

一夜の女房に硯をかりてかへすとて

おほかたにいひなす袖の露けきをよしかされても心みよ君

返し

重ねては露こそいとゝをきそはめぬるゝたもとにぬるゝ袂を

人のもとに

隱れたるしるし計はあひみてきぬるまゝことはたかへはて南

戀わひぬ思ひそめてし後よりはかたしく袖のかはくよもかな

かへし

秋のよはあたなる露にをくといへはかたしく袖もぬるゝ成覽

九日

いつしかとけふなりそむる菊の花よのすきものと人のいふ覽

いたくかれたる女郎花につけて

女郎花枯ゆく野へのきり／＼すきく人もなきれをのみそなく

ひさしくいひたえたる女のもとに

風をいたみ空にうきたる白雲のゆくとはす共あはてはやまし

十一月廿六日左衛門督の九條の家にて

千世ふへき君か家ゐにさそはれておほくの年の春をまつ哉

見わたせはふりつむ雪に埋もれてまたきも花のさけるけさ哉

十二月十一日明神前にて

ゆく〳〵といのる心のなりならすなこの社の神やしるらん

また

續後 つれなきをなけくもくるし白露のきゆるにたくふ命ともかな

又いきてあはてあしたに

つらさのみ益田の池のうきぬなはふるかひもなき物を社思へ

昨日返事して人にものいひしをやき〻けんたみた

〻に見のこすはなはあらしなとあれは

なへてをくと人はみるとも白露のわきて深くそ思ひそめてし

はつせにまうて〻かへるみわの山のほとにて道の

いみしくあしけれはたはふれに

津の國の難波わたりにあらねともあしかりけりな三輪の山道

けさみれは松のいた〻き老にけり雪ふる年のしるしなるらん

正月一日源宰相かくいへる

春た〻はなひきやすると青柳のいとしも人をなとかまつらん

返し

續後 今よりはなひきしもせし青柳のいとくるしきをとはぬ人には

續後 梅のはなおりつる袖のうつりかにあやなむかしの人そ戀しき

十四日夜の月いみしくあかきに人のか〻るにはな

とおろしこめてねたるといへは

しとみ山へたてたれとも月影はあかきあまりにもりてみえ鬼

或人をとらへてものいふにおはなる人の立き〻て

せいすれはかへりてあしたにはき〻の

は〻き〻はちかなとりすといふなるを姥捨山の道にいはなん

霞たつ遠山さくらさきにけり今夜の雨はあまねかるらし

三月はかりに人のもとに

うちとけてこゑき〻かたき郭公われひとりのみ鳴やわたらん

八月ついたちに人のもとにはしめて

春はもえ夏はしけりし花薄ほにいて〻秋そしのひかねつる

みちの日

たつのゐるあしの浦浪のとけくはみるへき物をふみつくる跡

返し又の日あり

跡見ては戀こそまされ水鳥のうきたりしたにありし心を

又

影たにもみえぬかきりは山の井のみつからとのみ思ほゆる哉

けからひにてとまりてそのひ院の御事にいく

あふひ草人のうへとも見つる哉よそにはかけて思はさりしを

かへさの日もゐみくるまに

まちかけし神の葵にことよせておなし心におもひし物を

もてくるを□見つけてそのおのこをとらへ

てとらせし
日数へてなくね尋しほとゝきすあふひゝさしき心地こそすれ
正月五日雪のふりて松にたるひのしたるを見給て
いつしかとたれひきつらむ雪分て子日の松の氷とけぬを
返たれにか
冬こもりまたしかりける松ゆへに子日をとくと何いそきけん
右大殿右衛門督と申し時によまれし
白雪のつもる木末にむめの花またふる年の心地こそすれ
三月風にしたかひて花をたつぬといふ題
（落後）吹風をいとひもはてしちりのこる花のしるへとけふは成けり
三月つくる日あめをゝかしてちりぬといふ事を
限有て雨にもさはらぬ春なれはちる花かさをきてや行らん
とうの辨
すきぬめる春にをくれて残るらん花ゆへはるの雨をしそ思ふ
ひめきみ
過ぬめる春をおしめはあやにくにほとなく暮るゝけふの空哉
九月九日ひねもすにきくをもてあそふといふこと
を
夕露のをくまて菊をみつる哉おもてのしわをのこひつるより
庭のおもに秋くれぬといふ事を
いつとなく淋しき宿の庭なれと秋のけしきはしるくみえけり

にはのもみちをみたまふて
紅葉はのちりつむ時そ打はへてはらはぬ庭のおもかくしなる
ゑにたなはたにことひきなとしてかしたるところ
に
とのねはかさすもあらなむ彦星の牛の前にはひかすもあら南
松の木の下に人々ゐてことひきたる處に
引人はこと〳〵なれと松風にかよふしらへはかはらさりけり
〔左二行據流布本補之〕
月よにたひゆく人ある處に
人しれす出たつ道の旅なれと空行月はをくれさりけり
紅葉の木の下にて酒のむ人ある所
風にいたくちらぬさきにと紅葉ゝを君か爲にそ折とゝめてし
てはこのゑに櫻のいみしくさきたる所に
よとゝもにちる事もなき櫻花ゑにこそ風はかゝれさりけれ
きゝしらぬとりのなきけれはまへなる人
またしらぬ鳥そなくなるさ夜ふけて
といふに
いまはしめたる名のりたにせよ
うちよりまかてたまてゆつけとのたまふ程にほと
ゝきすのなきけれは
ゆつけのゆ待によふけてをのつから山時鳥なくをきくかな
頭辨ちこにおはしけるに右大殿のうへくす玉たて

まつり給とて
宿わかぬ軒のあやめを見てたにもひまなき戀の程はしらなん
御返し
すきたもてふくいとまたに有物を軒のあやめの程をしそ思ふ
中宮の御七日夜
かすか山わかえにさける藤の花まつにかけてや千世を祈らん
しらかはとのにて
限なき匂ひをそへてしら川の里のしるへはしり(る歟)にそありける
子日に
千世こめて生つる野への姫小松引てそちよのねもしられける
花をゝしむといふ事を
(後拾)年をへて花に心をくたく哉おしむにとまる春はなけれと
のこりのきくをおしむ
別にし秋のとまりはきくの花にほふまかきのしまにさりける
頭　辨
過ぬとておしみしきくはさきのこる籬のしまにとまる成けり
ことひと
一枝の菊につけてもしられける秋はまかきにとまるなりけり
いそきて御そぬひけるにおほむせあはせむといひ
けるに
衣川とをきわたりにあらねとも誰にあふせをわきてとふらん

すたれに雨のたまのやうに見えけるを
雨にいとゝあれのみまさる故郷におもひもかけぬ玉すたれ哉
九月はかりにとのゝなかゐといふ所にしほゆあみ
におはしたりけるに姫君の御もとに
住吉のなかゐのうらもわすられて都へとのみいそかるゝかな
御返事
立返る心のふれはすみよしのなをなかゐする浦とこそみれ
おなしところにて
ふねはぬれともなみはたちけり
とひとりこちたまうけるを
ゆふされは伏見のさとの戀しくて
見る人の心や空になりぬらんくまなくてらす秋のよの月
きくの色へんすといふたいを
昨日みし色もかへりてあさことにおもかはりする庭の菊かな
うすさくらといふを人のもてまいりたりけれは
これやこの音にきゝつるうす櫻くらまの山にさけるなりけり
三井寺に入道大納言いり給けるにこしらかはによ
りたまたりけるに花みなちりはてにけれは
故郷の花はまたてそちりにける春よりさきにかへると思へは
かへし
うへをきし人たにもこぬ山さとにかへりて花を恨むるやたれ

春のころほひ人々題してうたよませ給ふ
をとつるゝ人しなけれは鶯のともよふこゑになくさむるかた
春過はうとくやならんつれ〳〵をたえすをとなふ鶯のこゑ
おく山のたき
後拾 くる人もなきおく山の瀧の糸は水のわくにそまかせたりける
つれ〳〵におほされけるにこめたいにすたれかは
を
千 跡たえてとふへき人もおもほえす誰かはけさの雪ま分こん
わかくりを
勅 たちかはりたれならすらん年を經てわかくり返しゆきし古道
なつめ
都人けふもそきますかた岡の雪かき分てなつめ我せこ
もちゐ
かつきける蚕のしわさも千尋なるみるめしなくはかひあらしやは
あはしかき
水のあはしかき消やすくみゆれとも露のみよりは久しかり鳧
やいこめ
あなうやいこめてそ只にやみなましかくつらか覧物と知せは
いたくわつらひ給ころ殿なかたによりところをた
てまつり給へるにおきあかりて御返なと申給ふて
かくましたまうける

人の命なかたに山にほるといはゝしぬる所はあらしとそ思ふ
辨のきみ人のむこになりたまうてひさしくまうて
たまはさりけれは
谷水のうへはひとつにこほれともしたの心はのとけからすや
返し
こほれともうちたにとけは谷水のふかき心はかくれやはする
なにのおりにかありけん頭弁の御もとに
いにしへの春わすれすは梅のはなもとの主のおるなとかめそ
御返し
いにしへのあるしならねと梅の花折くる人をいかゝとかめむ
弁のきみ花ましたまへるたてまつり給とて
春くれて散はてにける花の上はこのもとに社とまらさりけれ
筑前の入道の四十九日の經の外題かゝせたてまつ
りけるかきてかへしやりたまふとて
極樂のはちすの花のひものうへに露のひかりをそふるけふ哉
御返事
ひもの上に蓮の露をむすひをけはみかける玉の光こそませ
三月三日はらへし給てかへりたまけるに車ともの
さはかしうてきほひけるに御心のうちに
ときなはのとくも急かしみ祓にはゆふかけたるそ神はうく覧
ほとゝきすの三月つこもりのほとになきけれはお

ほんてならひに
（後拾）時鳥おもひもかけぬおりなけはことしそまたて初音きゝける
いとあかくしもあらぬ月のおりにきくのいみしく
さきたれは女房なといてゐて見るとて或人のさゝ
めきける
またきふりぬる雪かとそみる
とあれは
神無月おほろ月夜のしら菊は
四月はかりまゆみのもみちのしたりけるを見たま
うて
すむ人もかれゆく宿は時わかす草木も秋の色にさりける
御返事中將殿のうへ
綠なる松のこ末を思はすに紅葉の色のこくみゆるかな
八幡にまうて給てきのもと〔行歟〕にとまりたまうてこさ
むといふくゝつまはしよしよひにやり給けるにを
そくまいりけれは
たかせ舟つれてこさむをまつほとに
とあれは弁きみ
やかてきしにもかくれぬるかな
おさなき人のおやにをくれたるかおもひもいれて
あるを見たまうて
もりおほす露はきえぬるませのうちに獨にほへる撫子の花
はりまのかみの左大弁おさなくおはしけるほとに
わたり給て一夜ありきてかへり給けるにめのとの
かたはらなるに
ねたえぬる心ちこそすれ笛竹の一よやふしのかきりなりけん
うへのおほんをはのあまうへときこえける人のせ
さいのなかにまめをうへたまたりけるをみたまう
て
はかなくてうふと見しかとまめやかにおりおほせはやみの結ふらむ
御前なる人のにはかにゑを〔こ歟〕たかくわらひたりけれ
は
ふりたてゝわらふこゑをは秋過てまた鈴虫の鳴かとそきく
しきふやすまさかめになりてたこになりたるにく
たりやせましいかにせんとやすらふときゝ給て
行ゆかすきかまほしきをいつ方にふみさたむらん足柄の山
あまうへの御もとに五條にひめきみたちのわたり
給へるにわかきみはきくのうつろひひめ君はたゝ
ひと〔ひとはつき歟〕へきたるもみちをきたまひたりけれはあまう
への御もとに
（後拾）我のみやかゝると思へは故郷のまかきの菊もうつろひにけり
ひめ君の御返しは

このもとを思ひこそやれ紅葉はの枝にすくなき色をみるには
みつなりかさぬきへいきけるにつかはしける
後拾 松山にまつのうら風吹よせはひろひてしのへこひわすれ貝
御返し
拾後 たゝぬよりしほりもあへぬ衣手にまたきなかけそ松のうら波
とをきところのなありける人のかゝみとくものこ
ひたりけるやるとて
君かゝけ見えもやするとます鏡とけと涙に猶くもりつゝ
といひたりし人のなをおなしこゝろを見たまて
ます鏡とけと涙にくもるらん影をならへて見るはうれしや
女房のちこをおとこおやのとはさりけれは
ふる郷のこ萩からうへの露けさをとはぬつらさは秋そまつしる
こうりを人のたてまつりたるに
朝夕にたつをやくにてうりふ山ふもとの霧のはるゝよそなき
(やとに風雅)
こうりを人のやりたりけれは
爪つくり今はつらさも忘られてよそになれるそ戀しかりける
とある返し
山城のとはのわたりの爪つくりこまほしと思ふ折そおほかる
殿上にて
今日よりは衣の色もほしからすもみちの錦身にしきたれは
大納言殿もろともにはつせへまうてたまていつみ
川のほとふねまちたまけるほと春みたけにまてた
まけるにこのわたりにてひめ宮の御事きゝ給ける
をおほしいてゝ
見ることに袖こそぬるれいつみ川うき事きゝし渡りと思へは
はしめてうへの女御とのにおほんたいめんありて
後これよりさくらにきこえたまける
あかさりしよひの名こりの面影をやとの櫻によそへてそ見る
御返
詠むらん花とひとへの匂ひをそをりても我はゆかしかりける
おなし女御とのこうへのおほんかはりにおほせな
とのたまうて
我を君むかしの人と思はなむこゝろはさらにかよはし物を
かへし
かはらしといへは昔の人よりもこはまさりてもたのむへき哉
しほゆにおはしてあか月に波のたつを
新古 おきつ風夜はに吹らし難波かたあか月かけてなみそ立める
うへのおほんおとうとの三のきみのもとにいよの
入道のむすめくすたまにつけて
ひくよりそしるくみえけるあやめ草君か袂にかくる千とせは
とあるかへし
みかくれておふる菖蒲はけふことに誰にひかれてふへき千年そ

五月五日はりまのうへのひさしくたいめしたまは
てうへの御もとにきこえたまへる
あはぬまのうきに生たるあやめ草袂にかゝるねをたにもみよ
御返
あはぬまを我からうきとは菖蒲草袂にかけていはすもあらなむ
山寺におはして九月つくる日
つれよりものとけき秋とおもひしを旅の空にもわかれぬる哉
十月よるなゐのいみしくふりけるに
梢にはのこりもあらし神無月なへてふりつるよはのくれなゐ
ものへおはしたりけるにそとはをはしにわたしした
りけるに
せを渡すちかひの方にいひなしてそとはみなからこえて行哉
うへのおほんをはのうせたまへりしいみにてより
みつの卿
しての山しほりしてたにこえよかしこに後れたる親の為には
とあるをきゝたまひて
浮世にはとゝまるみ社悲しけれかくいふ人もあらしと思へは
おなし人の御てのあるを見たまうて
みることに涙はよすれと濱千鳥むかしの跡はかへらさりけり
おなし人のみのにおはしけるころおほんいのりよ
くせさせ給へよの中のさはかしく侍なる比にとき
こえたりけれは
永かれと人をたにこそ思ひけれなとか我身を教へさりけん
みつなりか女房をたゝかたらひて十月になさてま
いりつゝまさむといひけるか一月はかり見えてき
たるをいかにいはむといひけれは
とを〱と契し事はとりのこをかさぬる程にいふにさりける
返し
とを〱と答むる人も有ぬへしみそかにと社いふへかりけれ
梓弓をしひきしつゝよもすからやゝといへともいる人もなし
この比の木葉をみてもなくさめよ常ならぬよそ常ならぬこと
返事
定めなき世はうきみこそ悲しけれ常ならぬよを常にみるへき
ひめきみのおほん
心にはおもひいてしと忍へとも枕にてこそまつはみえけれ
敷妙の枕のちりをうちはらひまつかひありてみるおりもかな
古のかたみにつめる若菜ゆへみつかためにもみつなみた哉
今までもなからふる身のなかりせは何にか袖の露けからまし
みるからに人は煙となりはてぬこそひのいへは悲しかりけり
おいて社うつへかりけれよゝへてもとこめつゝみの是有やと
返事
聞ゆふにたへなるのりをよむ君はよゝのちよをも何か待へき

ほとゝきすのよもすからなきあかしたるあかつき
大貳三位のもとより
新古 いく聲か君はきゝつる郭公いもねぬわれは數もしられす
ときこえたれは
二よ三夜またせ〳〵てほとゝきすほのかにのみそ我宿になく
ひさしくをとつれたまはさりけるになをなし人しら
きくにさして
後拾 つらからん方こそあらめ君ならて誰にかみせんしら菊の花
大皇太后宮の七日夜
同 君か世は限もあらしはまつはきふたゝひ影はあらたまるとも
雖有撰集不見家集間集之。
つゝしむへきとしなれはあるくましきよしの給け
れと三月はかりに白河にまかりけるを聞て相摸か
もとよりかくもありけるはといひにをこせけれは
後拾 さくら花さかりになれは故鄕のむくらの門もさゝれさりけり
宇治殿の三十講のゝち歌合に
同 とこ夏のにほへる庭はからくにゝをれる錦もしかしとそ思ふ
月のよ彈正尹淸仁のみこより
同 板まあらみあれたる宿のさひしきは心にもあらぬ月をみる哉
そのよ御返しはなくて二三日ありて雨のふるに
同 雨ふれは閨の板まもふきつらんもりくる月はうれしかりしを

十月はかりにはつせにまうて給けるにあか月きり
のたちたるを御覽して大納言殿
同 ゆく道の紅葉の色もみるへきを霧とゝもにやいそき立へき
御かへし
同 霧分ていそきたちなん紅葉はの色しみえれは道もゆかれし
橘則光みちのくにゝくたりしにいひやる
同 かりそめの別とおもへとしら川の關とゝめぬはなみた成けり
兼房朝臣女のもとにおはして物かたりし給をかく
ときゝてうたてとのたまひける御返事にものこし
にてと女のいひけれは
後拾 古しへのきならし衣今更にそのものこしのとけすしもあらし
木の葉のいたうちりける日さかみかもとよりかく
同 との葉につけてもなとかとはさらんよもきの宿もわかぬ嵐を
かへし
同 やへふきの隙たにあらは芦のやに音せぬ風はあらしとをしれ
世中さはかしかりける夕暮に堀川のをとゝの御も
とより
同 常よりもはかなき比の夕くれはなくなる人そかそへられける
返し
同 草の葉にをかぬはかりの露の身はいつ其數にいらんとすらん
うちにおはして

千 朝ぼらけ宇治の川霧たえ／＼にあらはれ渡る瀬々のあじろ木

梅花につけて大貳三位のもとへ

新古 見ぬ人によそへてみつる梅花なりなむ後のなくさめそなき

返し

春ことに心をしむる花のえにたかなをさりの袖かふれつる

おもふ事あるころ

五月雨の軒の雫にあらはれぬともうき世にふれは袖そぬれける

女のもとよりかへりて

心にもあらぬたかねのまとろみにほのみし夢を人にかたるな

宇治殿歌合に滝水といふたいを

年をへてすむへき君か宿なれはいけの水さへにとらさりけり

南都興福寺明王院家藏本、延寶庚申歳寫。

［右權中納言定頼卿集參照正續所收定頼卿集加一校了］

明治四十三年九月十一日印刷
明治四十三年九月十五日發行
大正十三年二月廿九日再版發行

發行者　東京府西巢鴨町宮仲二千五百七拾番地
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京市神田區三河町三丁目四番地
武木勝治郎

印刷所　東京市神田區三河町三丁目四番地
武木凸版印刷所

發行所　東京府西巢鴨町宮仲二千五百七拾番地
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七　電話小石川一三〇八